

## II 資料

## 資料 1. 海外研究動向調査

### ○ ヨーロッパにおけるグローバルヘルスの人類学の動向調査

浜田明範

#### 【背景と目的】

一昨年度及び昨年度に実施した海外研究動向調査において明らかになった成果として、いわゆる開発途上国においてはグローバルヘルスに関わる研究が増加していること、その際に科学人類学的な視点が用いられる傾向が強いことがあった。本年度の海外研究動向調査では、9月9日から11日にサセックスで行われる MAGic 2015 に参加し、これまでの動向調査のフォローアップを行うとともに、ヨーロッパにおけるグローバルヘルスの人類学の研究動向を調査することを目的とした。

#### 【調査期間】

・9月6日から9月16日までの11日間（内、9月9日～11日まで MAGic2015 に出席）

#### 【対象機関 1】 MAGic 2015

MAGic は、ヨーロッパ社会人類学会医療人類学ネットワーク（EASA Medical Anthropology Network）と英国王立人類学教会医療人類学委員会（RAI Medical Anthropology Committee）の共催で行われている隔年の研究大会で、今回が3回目の開催となる。MAGic2015 のテーマは「人類学とグローバルヘルス：理論、政策、実践を問う」であり、文字通り、ヨーロッパにおけるグローバルヘルスの人類学の最新の研究が発表される場となっていた。グローバルヘルスの人類学は、2000年代後半以降アメリカを中心に盛んになってきたが、ヨーロッパにおいてもグローバルヘルスの人類学に対する注目が高まっていることが伺える。

今回の調査では、17の個人発表、1つのキーノート、6つの全体講演を聞くことができた。ここでは、（1）応用とエボラウイルス病、（2）グローバルヘルス、（3）医療研究と時間性の3つのテーマに沿って、報告者が垣間見た MAGic2015 の状況について報告したい。

#### 1-1 応用とエボラウイルス病

まず、今回の動向調査の大きな発見のひとつとして、応用的な議論の高まりを挙げることができる。その背景として、大きく二つのことを挙げることができる。第一に、これは前回の報告でも指摘したことではあるが、2000年代以降のグローバルヘルスの高まりとともに、人類学者の需要が高まっていることがある。イギリスでは、公衆衛生や母子保健を行っている医療系の研究所や学部に多くの医療人類学者が雇用されている（ただし、その状況については後述するようになかなか厳しいものがあるようである）。そして、もうひと

つの背景となっているのが、2014年3月に発覚し、現在も完全に収束してはいない、西アフリカにおけるエボラウイルス病の流行である。日本ではほとんど話題にのぼらなくなって久しいが、西アフリカの国々と関係の深いヨーロッパにおいては、現在でも重大な関心事であり続けている。特に、今回の流行に際しては、報道や国際機関、NGOの発表といった様々な場面で流行地域の「文化」について議論されたこともあり、文化の専門家として多くの人類学者がエボラウイルス病対策（Ebola response）に参加してきた。MAGic2015では、医師やコーディネーターとして現場で活動した者や Ebola Response Anthropology Platform (<http://www.ebola-anthropology.net/>)を立ち上げた者など、様々な方法でエボラウイルス病への対応に参加した多くの人類学者がそれぞれの経験に基づいた発表を行っていた。2014年のエボラウイルス病の流行は、より実践的・応用的な人類学の活用が大規模に行われただけでなく、誰もがそれについて考えたことがあり、また、発言すべきことを持っているという意味で、広くグローバルヘルスの人類学の状況を一変させている。

エボラについての議論で論点になっていたのは、（1）エボラ対策と現地コミュニティの関係、（2）人類学者の果たすべき役割のフェイズによる変化についての2つである。

### 1-1-1 エボラ対策と現地コミュニティの関係

まず、背景として共有しておくべきなのは、エボラ対策において介入の対象として現地で暮らす人びとへの働きかけに焦点が当たっていたということである。特に重視されたのは、（1）感染予防トレーニングを受けたチームにより遺体を適切に処理することと（2）感染者が過去に接触した者を特定し、潜伏期間である21日間監視または隔離すること、の2つである。これらは、特効薬もワクチンもない中で、新規感染者を減らすために必須だと考えられている。しかし、この2つの方法を円滑に実施できなかったことが、エボラ対策への現地コミュニティによる「抵抗」として、一般に議論されてきた。それに対して人類学者は、いわゆる現地からの「抵抗」は決して単なる抵抗ではなく、その背後には様々な論理があることをあぶり出し、交渉によってより受け入れやすい方法を提案することが求められていた。

この点について、全体会で発表したダカール大学（UCAD Senegal）のシルヴァン・フェイ（Sylvain Faye）さんは、（1）人類学が現地の文化を物象化できることに積極的な意義を認め、（2）対象となるコミュニティとエボラ対策プロジェクトの両方を人類学的探究の対象とすることで、エボラ対策の問題点を指摘できると述べ、人々の「抵抗」の背景を指摘していた。

まず、遺体の処理に関してだが、これについては当初より、人々が葬式の際に素手で遺体を水洗いするという「風習」がエボラの感染拡大の一因として指摘されてきた。これに対し、フェイさんは遺体を水で清めることが死後の世界の平穏と結びつくという人々の死生観があることをまず指摘したうえで、エボラ対策プロジェクトによる遺体の処理方法が過剰にトップダウン的・権威主義的であったことを指摘していた。医学的に正しいとされ

る遺体の処理方法と現地の人々に許容可能な葬式の方法を架橋しようという試みがなされなかったことがエボラ対策への人々の「抵抗」を引き起こしたのだという。

次に、フェイさんが指摘したのが、患者と接触した人の追跡がなぜそんなに難しかったのかということである。フェイさんによると、これは端的にエボラ患者が「嘘」をついていたからだという。エボラ治療センターに隔離された患者は、自分の住所について正確な情報を提供することがほとんどなかったという。住所が分からなかったため、その患者が発症後に誰と接触したのかを確認することができず、そのことにより、新たな患者の発症に気づくことができないうちに、更なる感染者が発生するという悪循環が何度も繰り返された。このような「嘘」の背景には、エボラの原因に関する人々の考え方があるという。これも、幾度も指摘されてきたことではあるが、エボラとエボラ対策プロジェクトの因果関係については、2つの理解が生じうる。通常の医学モデルでは、エボラウイルスがまず存在し、それに対応するための様々な処置が講じられると考えられる。しかし、エボラ流行時には、往々にしてこの関係が逆転し、エボラ対策プロジェクトが入ってきたためにエボラという新奇で致死的な病気が流行したと理解されることがある。これは、エボラ対策プロジェクトが、エボラの存在を確認するために各地を回って、病者から血液を採取する必要に迫られるためである。また、流行が本格化する前や流行地から離れたところにエボラ治療施設を作る必要があることもあるという。これらのケースでは、エボラが流行する以前にエボラ対策プロジェクトが現われることになる。これを見た人々は、エボラ対策プロジェクトによって奇病が発生したように考える。今回のエボラの流行ではこのような認識があまりに一般化されたために、治療施設にいる者でさえ、施設に収容されることが自分が接触した知人や親族の死につながると考え、正確な情報を提供することを拒んでいたのだという。

このようにフェイさんの議論は、生物医学的に正しいやり方がなぜ当該地域のコミュニティの協力を得られないのかについて指摘するものであり、この問いの立て方自体は医療人類学では古典的なものであると言っていいが、同様の関心はエボラに関連するパネルにおいても繰り返し話題となっていた。例えば、フロリダ大学 (University of Florida) のシャロン・アブラモビッツ (Sharon Abramowitz) さんやジョン・ホプキンス大学 (Johns Hopkins University) のナジメ・モダレス (Najmeh Modarres) さんは、現地コミュニティは思いのほか、流行の蔓延を防ぐのに役にたったり、プロジェクトの働きかけによって理解を深めているという発表を行っていた。流行を食い止めたコミュニティの内部では、特に宗教者や首長、若者組織や女性組織が重要な役割を果たしたという。ただし、この点に関しては、コミュニティへの働きかけと言いながら、エボラ対策プロジェクトは結局、コミュニティではなく特定の属性を持った個人に選択的に働きかけ、利益を供与しているという批判もなされていた。また、コミュニティをバラ色に描くべきではないという指摘も繰り返された。実際に、コミュニティがエボラ対策に「抵抗」した事例もあるからだ。

## 1-1-2 人類学者の果たすべき役割とフェイズ

先述のように、今回のエボラのアウトブレイクに際しては、多くの人類学者がエボラ対策プロジェクトに参加している。そのもっともわかりやすいものとして、Ebola Response Anthropology Platform (<http://www.ebola-anthropology.net/>)の立ち上げがある。



図1：エボラ対策人類学プラットフォーム

このエボラ対策人類学プラットフォームの特徴はすでに日本文化人類学会の学会誌にも報告されているように[杉田 2015]、72時間以内に質問に回答するという機能を備えていることにある。このように、緊急事態への人道的援助においては、人類学の即応性に対する要求がかなり高い水準で求められている。

グローバルヘルスに関わる応用人類学の可能性と危険性については、バーゼル大学 (Basel University) のブリジット・オブリスト (Brigit Obrist) さんによる全体講演の主題でもあった。グローバルヘルスに対する関心の高まりは、特に欧米において、明らかに医療人類学者のポストと活躍の場を拡大している。しかし、文化の物象化・単純化を良しとするかどうか、求められる即応性にどれだけ対処できるか、批判性を保つことができるかといったジレンマも存在している。これらのジレンマが存在することは、開発の人類学や医療人類学で長い間議論されてきたことではあるが、エボラウイルス病の流行によって改めて人類学の応用可能性と、それに付随する問題に注目が集まったことで、新たな解決

方法も提示されてきている。

例えば、サセックス大学 (Sussex University) のメリッサ・リーチ (Melissa Leach) さんは、同じく全体講演において、エボラウイルス病の流行のような危機に対して人類学者がすぐに対応できる準備をしておくことは重要だと述べる。その一方で、人道主義的な介入に対する批判性も持ち合わせておく必要があると主張していた。リーチさんによると、この矛盾は時間性を導入することで解決可能であり、初期段階においては人類学と道具として動員することが重要であり、時がたち状況が好転するとともに反省的な視点の重要性が高まっていくという。このようなフェイズによって果たすべき役割を変えるべきだという議論は、様々な場面に適用可能な有益な視点であるように思われる。

## 1-2 グローバルヘルス

それでは、グローバルヘルスに対する批判的な検討というのは、具体的にどのような議論を指しているのだろうか。前回報告した、LSE のティム・アレン (Tim Allen) さんによる北ウガンダにおける人道主義的プロジェクトに対する批判もそのようなものであるし、次項で説明するような医学研究についての議論もそのようなものとして挙げることができる。だが、おそらく、現在最も注目すべきなのは、グローバルヘルスの成立や特徴に関する研究である。

MAGic2015 においては、2013 年の海外研究動向調査でお会いした、カルフォルニア大学サンフランシスコ校 (UCSF) のヴィンセーヌ・アダムスさん (Vincanne Adams) の全体講演が圧巻だった。アダムスさんによると、グローバルヘルスの特徴は人道主義に成果主義を導入したことにあるという。各プロジェクトを支援する一方で説明責任を求めたことで、プロジェクトは自身の成果を明確にするために様々な指標を開発した。この中には、障害調整生命年数 (DALYs) や健康寿命 (Health expectancy) も含まれるという。ひとたび、このような指標が開発されると、今度はこの指標を改善させることに最適化したプロジェクトが立ち上がるようになる。ゲイツ財団による研究支援と説明責任の要求は、グローバルヘルスの現場にこのような変化をもたらしている。これは、まさに新しい形の生政治であり、統治なのだが、注目すべきなのは、それがかつてのように国家によって行われているのではなく、人道主義的な組織によって担われているという点にある。アダムスさんは、このようなグローバルヘルスの特徴をネグリとハートがいう意味での帝国に当たると指摘していた。このようなグローバルヘルスから国家を捉えかえずという方向性はひとつの潮流となりつつある。

## 1-3 医学研究と時間性

MAGic2015 では、エボラ対策や応用に焦点を当てた研究が多く見られた一方で、より理論的、民族誌的に厚みをもった研究発表はそれほど多く行われていなかった印象がある。どちらかという、生煮えの研究発表が多く、研究歴の浅い院生の発表も多く見られた。

そんな中、医学研究と時間性について組まれたパネル「グローバルヘルスを思い出す Remembering Global Health」は興味深いパネルとなっていた。

アフリカにおける医学研究についての議論のおもしろさのひとつは、科学研究と治療実践の境界が常に曖昧になるという指摘にある。これは現在においてもそうであるが、今回のパネルの中では、ジャン・ポール・ゴードィリエ (Jean-Paul Gaudilliere) とクリストファー・グラッドマン (Christoph Gradmann) による DOTS (Direct Observed Treatment Short course) の歴史についての議論のなかで顕著に表れていた。現在、結核の治療法として世界的に標準化されている DOTS は、半年に渡る投薬期間の間、患者が薬剤を服用したことを医療従事者が直接目で見確認するという方法で、薬剤の飲み忘れを防ぐことで治療の失敗や耐性菌の発生を防ぐために用いられている。この DOTS が開発されたケニアの医療施設とインドにおける先行例について議論する中で、新しい治療方法の普及にはその効果が確かめられる必要があり、治療実践が科学研究の一環となっていることが示されていた。

また、ジョン・マントンさん (John Manton)、ルース・プリンスさん (Ruth Prince)、ウェンゼル・ガイスラーさん (Wenzel Geissler) は、アフリカの医療施設や研究施設に焦点を当てることで、そこに見られる複数の時間性や医療の与え手である国家の提示する希望とそれが実現されないままに留まることへの絶望の感覚に光を当てるという方向性を打ち出していた。これは、過去にその施設で行われた研究や、それに参与していた人のインタビュー、当時の未来についてのイメージと現在の姿のギャップ、現在の施設に残される過去の痕跡を重層的に記述していくことで、ひとつの医療施設に宿る複数の時間性と、それがどのように喚起されるのかを明らかにするという方向性である。このような方向性は様々な施設に適用可能であり、アフリカの生物医療のあり方を探求していく上で、ひとつの興味深い試みであるように思える。

## 【対象機関2】 ロンドン大学

MAGic2015 に出席した後は、これまでの調査のフォローアップを兼ねてロンドン大学の UCL のマリー・ラストさん (Murray Last) とオードリー・プロストさん (Audrey Prost) と面会し、お話を伺うことができた。

マリー・ラストさんは、コペンハーゲン大学のスーザン・ホワイトさん (Susan Whyte) とともに、ヨーロッパにおけるアフリカを対象とする医療人類学を牽引されてきた大御所で、アラビア語文献を用いて西アフリカ史にアプローチした初期の研究者のひとりとしても知られている。近年は、ナイジェリア北東部を対象にボコハラムに関する調査研究を継続されており、このテーマに関しても日本を含めた世界各地で公演を行っている。

ラストさんによると、最近のイギリスの医療人類学は、生物医療の研究や応用的な研究に傾いており、彼が好む当該地域の人々についての研究からは乖離する傾向が強いという。ラストさんはこの新しい傾向にそれほど魅力を感じておらず、MAGic にも出席せず、近年

はより歴史的な研究に関心が傾いているという。また、最新の情報として、ボコハラムの活動地域では、中世の都市国家さながらに、町の周囲に空堀を掘ることで町の内部にテロリストの侵入を防ごうという試みが始まっているという話を伺うことができた。

オードリー・プロストさんは、ロンドン大学の小児保健研究所に勤務している医療人類学者で、大学院生時代はインドにおけるチベット難民の医療実践についての研究をしていたことで知られている。その後は、インドのトライブに対する小児保健支援プロジェクトにたずさわっているという。現在の仕事は、学術的な人類学というよりは応用的なもので、グローバルヘルスの隆盛に伴って増加した医療人類学のポストについているといえる。

プロストさんによると、近年は人類学の論文を書くことはできず、同じプロジェクトに従事している他分野の研究者と共に医学系の雑誌に投稿することが多いという。これは、すべてがインパクトファクターによって決まるためだという。研究予算だけでなく、研究室やその電気代などもすべてインパクトファクターに伴って配分されるため、できる限り多くのポイントを稼ぐしかないという。人類学の論文は一本書いてもインパクトファクターは1に満たないため、医学系の研究者とは勝負にならないという。唯一の可能性は、本を出すことなのだが、そんなに簡単に本を書けるわけではない。実際の業務内容は、プロジェクト内の分野間の調整を行うコーディネーターのような仕事が多いという。

ラストさんの近年の流行に対する嫌気やプロストさんの仕事内容についてのお話から、MAGicの表舞台で議論されているのとは異なる、必ずしもバラ色とは言えないヨーロッパの医療人類学の状況をうかがい知ることができた。

### 【対象機関3】ホーニマン博物館

ホーニマン博物館はロンドン郊外にある小奇麗な博物館で、アフリカ展示を行っていることで知られている。常設展は、アフリカ展示、水族館、中央ギャラリー、音楽展示、自然史展示から成り立っており、企画展と水族館以外はすべて無料で利用することができる。また、器物を箱の中から探し出すとボランティアのスタッフが解説してくれるという子供向けのスペースがあり、整備された庭園の中にあることもあり、アットホームな雰囲気の博物館となっている。

ホーニマン博物館の収蔵品は、もともとフレデリック・ジョン・ホーニマンのコレクションに由来するが、アフリカ展示や中央ギャラリーの展示物のなかには、人類学者の協力により入手されているものもあるという。

アフリカ展示は、古代エジプトの棺やナイジェリアの仮面、マミウォタの図層やベニン王国の青銅、アカン椅子といった器物が展示されており、大英博物館のアフリカ展示と似通った構成になっていた。ただし、現代アフリカ美術やテキスタイルの展示が行われていない点が大英博物館とは異なっていた。

### 参照文献



杉田 映理

2015 「エボラ熱流行への人類学の対応——アメリカとイギリスの人類学者の取組み」、  
『文化人類学』79号4巻、pp. 429-432。

## ○ オランダにおける医療人類学の動向調査

浜田明範

### 【背景と目的】

オランダのアムステルダム大学の人類学部は、43名のスタッフ（教授13、准教授6、助教24）を抱えるオランダにおける人類学研究の拠点のひとつである。なかでも、'Globalizing Culture and the Quest for Belonging: Ethnographies of the Everyday' と 'Moving Matters: People, Goods, Power and Ideas' とともに3つの研究グループを構成している 'Health, Care and the Body' には、多くの著名な医療人類学者が在籍している。そこで、今回の動向調査では、アムステルダム大学の人類学部を訪問し、科学技術論、薬剤、グローバルヘルスの3つに特に焦点を当てながら、オランダにおける医療人類学の動向を調査することを目的とした。

### 【調査期間】

・2月26日から3月7日までの11日間

### 【対象機関】：アムステルダム大学

アムステルダム大学は、オランダにおける人類学研究の拠点のひとつである。今回の動向調査では、いずれも著名な医療人類学者である、アネマリー・モルさん (Annemarie Mol)、アニータ・ハードンさん (Anita Hardon)、ロバート・プールさん (Robert Pool) と面会し、また、研究会での報告者自身の研究について発表した。

#### (1) アネマリー・モルとの面会

アネマリー・モルは、ANTの主要な論者の1人であり、科学技術論と医療人類学を架橋する先端的な研究を行ってきたことでも知られている。今回の調査では、彼女のこれまでの研究と、現在執筆中の近著の内容についてお話を伺うことができた。

モルが2002年に英語で出版した、*the Body Multiple* は、オランダの大学病院における調査をもとに、実践としての生物医療における存在論がどのようなものであるのかを探求した本である。通常ひとつの病気であると考えられる動脈硬化は、実際にはひとつではない。動脈硬化の存在を確かめるための作業は複数存在しているのだが、それぞれの方法で確かめられた動脈硬化が同一の存在であるという保証はどこにもないからである。このようにして、動脈硬化に複数のヴァージョンが存在していることを確認したうえで、モルは、動脈硬化の諸ヴァージョンのあいだには齟齬やギャップが存在するにもかかわらず、それが病院のなかで明らかになることはめったにないと指摘する。モルは、その理由として、あるヴァージョンの動脈硬化の重症度が他のヴァージョンの動脈硬化の重症度に翻訳されることで両者を取りまとめられること、複数のヴァージョンが異なる場所に分配されるこ

とで差異が顕在化することが避けられること、別々のヴァージョンの動脈硬化が互いにそれが発見される際の前提として受け入れられていること、といったメカニズムがあることを指摘している。

実践やプロセスに注目することによって、通常ひとつだと考えられている疾病に複数のヴァージョンがあることを暴き出し、更に、それらがどのような関係を伴いながら共存しているのかをマリリン・ストラザーンの部分的つながりという概念を用いながら記述する『多としての身体』は、その後、いわゆる人類学における「存在論的転回」の嚆矢のひとつとされてきた。

しかし、モルさん自身は、近年の流行に対しどこか居心地の悪さを感じているようだった。それは近年の存在論的転回においては、彼女が批判していた単数の存在論が温存される傾向にあり、複数の実践に伴う複数の存在論については議論されていないからだという。そのため、彼女は、自身の立場を存在論ではなく、実践やプロセスに注目するものとして再提示した方がいいのかもしれないと話してくれた。

『多としての身体』のなかで、モルさんは臨床医学と疫学に対立がありうることを指摘したうえで、より複雑でごちゃごちゃしている臨床医学に肩入れをしている。この論点をより明示的に取り上げ、臨床医学について議論したのが英語で出版された二冊目の本である『ケアの論理 *the logic of care*』なのだという。『ケアの論理』は、臨床医学における「ケアの論理」を「市場の論理」と対比しながら記述し、前者を擁護する内容となっている。『多としての身体』が人類学者や哲学者を読者として想定したものだったのに対し、『ケアの論理』は、むしろ医療者を対象に書いたものだという。

この『ケアの論理』で糖尿病を扱ったことが、モルさんの現在のテーマである「食べる身体 *eating body*」につながっている。「食べる身体」は、7人ほどの博士課程の院生やポスドクとともに進められているプロジェクトでその関心は多岐にわたるのだが、もっとも重要な関心として二つのテーマを紹介していただいた。

まず、食べることへの注目、西洋の「個人」という人間観を掘り崩すことにつながるという。通常、西洋では、人間は他の要素や人から切り離された個人として想定されるが、食べるという行為に注目することで、人間がいかにか他のモノや人間に支えられているのかが明らかになるという。これが、食べることに注目することの一つ目の意義である。もうひとつの注目点は、翻訳にあるという。食べることに伴う様々な表現と味の関係に注目することで、身体や感覚と言葉の関係を追及しているという。これらのテーマを含め、現在、「食べる身体」に関する本を執筆中であるとのことだった。

なお、この面会は、『多としての身体』の共訳者である日本学術振興会の田口陽子と共同で行った。この面会の内容は、同書の邦訳を出版する際の訳者あとがきの執筆に活かされる予定である。

## (2) アニータ・ハードンとの面会

アニータ・ハードンは、シャーク・ファン・デル・ヘースト (Sjaak van der Geest) やスーザン・レイノルズ・ホワイト (Susan Reynolds Whyte) とともに、薬剤の人類学 (anthropology of pharmaceuticals) を立ち上げ、いわゆる「第三世界」における薬剤や化学物質に関する人類学的研究を 1980 年代から行ってきたことで知られている。また、医療関連分野との共同研究を積極的に行ってきたことで知られ、ランセットやネイチャーに論文を投稿しており、それらの論文は 2800 回以上も引用されているという。

ハードンさんは、今回の調査期間中に海外出張から帰国されたということもあり、大変忙しくされていたが、お互いの関心について話し合うことができた。ハードンさんの最新のプロジェクトは 2012 年からはじまった「若者の化学物質 Chemical Youth」で、これは、いわゆる非合法の薬物を含めた、化学物質や薬剤が人々の生活にどのような影響を与えているのかを問う幅広いプロジェクトで、7 名程度の博士課程の学生が従事しているという。2014 年に行った「北米における医療人類学に関する研究動向調査」で報告した、フィリピンとインドネシアにおいて、美白製品がどのようにジェンダーを媒介しているのかについての研究は、このプロジェクトの一環として行われたものだという。

また、ハードンさんからは薬剤の人類学において注目すべき研究者として、フィリピン大学総長のマイケル・タンさん (Micheal Tan)、エジンバラ大学のステファン・エックスさん (Stefan Ecks) を挙げていただいた。また、ハードンさんのプロジェクトに参加している博士課程の院生からは、カルフォルニア大学デイビス校のジョセフ・ドゥミット (Joseph Dumit) さんや『バイオ・キャピタル』の著者であるカウシック・ラジャンさんの名前が挙げられた。カウシックさんは、現在、薬剤についての新著を準備しているとのことであった。

### (3) ロバート・プールとの面会

ロバート・プールさんは、アフリカ地域における実践的なプロジェクトに参加しながら、当該地域の疾病概念に関する優れた著作 (*Dialogue and the Interpretation of Illness, Berg 1994 etc.*) を発表してきた医療人類学者である。これまでの研究動向調査で明らかにしてきたように、現在、北米やヨーロッパではグローバルヘルスの人類学がひとつのブームとなっているが、プールさんはこの分野に古くから関わっている研究者のひとりでもある。

プールさんは、現在のグローバルヘルスの人類学の流行については、概ね肯定的な評価を下しているという。人類学者がより真剣に応用的なことに関わるのはいいことであるし、貢献もできているという。また、プールさんからは、ご自身が携わっている妊婦や乳幼児に対するマラリア薬の治験についての研究についても伺うことができた。妊婦のマラリア患者に対しては、薬剤が胎児に影響を与える可能性があることから SP (sulfadoxine-pyrimethamine) という特定の薬剤のみが使用されているが、現在、多くの地域でマラリアは SP に対する抵抗を持っているため、安全で効果的な新たな薬剤が求められており、ガーナをはじめとして、ケニアやマラウイ、パプアニューギニアなどで治験が

行われているという。

また、感染症についての人類学研究に興味を持っているという私に対しては、マラリアやエボラといった多くの人が注目している感染症だけでなく、他の感染症について研究することやシンデミック (syndemic) と呼ばれる二つ以上の感染症の同時発生やその関係性に注目することを提案された。

現在、プールさんは自殺に対するプロジェクトを行っており、特に、病気などの理由ではなく、人生がつまらないという理由で命を絶つ人に注目しているという。この研究プロジェクトはまだ始まったばかりであるが、医療が必死に延命を行う一方で、「つまらない」という理由で命を絶つ人がいるという現象にみられる捻じれに注目しているという。日本にも自殺者が多いということはご存知で、このテーマに関する日本の研究者を紹介して欲しいとのことだった。

#### (4) 民族誌映画：Swamp Dialogue の鑑賞

3月3日には、アムステルダム大学の人類学部で行われた Swamp Dialogue の上映会に参加することができた。この映画は、Ildikó Zonga Plájás によって撮られたもので、ルーマニアの湖沼における自然保護活動が、当該地域で暮らす漁民の生活に大きな影を及ぼしていることに焦点を当てたものである。冬の厳しい寒さのなかで撮られた湖沼の映像の美しさには目を見張るものがある。同時に、人々の生活の厳しさが淡々と映しだされ、また、環境保護局に対する人々の怨嗟の聲がときにユーモアを交えながら発信される。

ライデン大学の修士論文の一部として制作されたこの映画は、ルーマニアの ASTRA Film Festival Sibiu の学生部門で最優秀賞を受賞している。とはいえ、この映画にはやや不満に思える点もあった。一時間弱という上映時間はやや冗長に思えたし、また、環境保護を批判的に取り上げる一方で、それに従事している人たちについての描写が極度に少ないため、あまりにも一方的な批判になっているようにも思えた。

#### (5) ワークショップでの発表

2月29日には、同時期に滞在していた日本学術振興会特別研究員の田口陽子、鈴木和歌奈とともに、アネマリー・モルさん主催のワークショップにて研究発表を行った。参加者は20名弱だったが、全体としては非常に活発な議論が行われ、アムステルダム大学の人類学部の活発さを知ることができた。また、報告者自身の発表についても、英語での発表の際に気をつけるべきポイントやきっちりと詰めておくべきポイント等を知る機会となった。日本からの発表者が並んでいたこともあり、日本の人類学の特徴についての議論が行われた際には少々戸惑ったが、私たちが日本の人類学を代表し得ないことや日本らしさに対する違和感を説明することもできた。

#### 【その他の訪問先】

・熱帯博物館 (Tropenmuseum)

アムステルダム市にある熱帯博物館は、熱帯地域の器物を展示している。調査者が来館した際には、平日にもかかわらず多くの来館者が入り口で列をなしており、特に子供の姿がよく見られた。熱帯博物館が子供に配慮した展示を行っていることは、2013年度の海外動向調査で同館を訪れている吉田ゆか子が指摘しているとおりである。

常設展示のアフリカ展示場は、地位 (Status)、信仰 (Faith)、仮装 (masquerade)、形態 (form)、接触 (contact) という五つのテーマごとに器物が展示されている。地位のセクションには、椅子や帽子の他、ガーナのアシャンティ王国がフューチャーされ、日傘や杖など王の地位を象徴する器物やアシャンティ王家の歴史がまとめられたブックレットが展示されていた。また、信仰のセクションではセネガルのムスリムの肖像画や、ベナンにある虹蛇の祠の写真、それに魚の形をしたガーナの棺桶などが展示されていた。仮装のセクションでは仮面と衣服がセットで展示が行われており、とくにそれらのものがどのように纏われ、また、現地ではどのようなダンスや音楽とともに現れるのかが分かるように、映像とセットで展示されていた。形態のセクションでは、金属器や彫像、布などが展示されていた。接触のセクションでは、ストリートアートや銃を再利用して作られた金属彫刻などアフリカ現代美術の代表するような作品が展示されていた。アフリカ展示は、他の展示場と同様、それほど多くの器物が展示されているわけではないが、大英博物館のアフリカ展示を彷彿とさせるような形で、全体としてバランスのよい展示がなされているように思えた。

また、訪問時に行われていた企画展「60年代 The Sixties」は、1960年代がどのような時代であったのかを、世界中を取り上げながら展示するものであった。この企画展では特に、ホールの中央に並べられた世界各地の60年代の写真が印象的であり、イバダンやカノ、バマコやラゴスといった西アフリカの大都市の写真も展示されていた。また、この企画展のイメージ写真は1929年にゴールドコーストで生まれた写真家のジェームズ・バーナー (James Barnor) の手によるものであり、彼について知ることができたのも大きな収穫であった。

なお、今回の研究動向調査の成果はこれまでのものと合わせて『国立民族学博物館研究報告』に投稿するほか、今夏に出版予定のアネマリー・モル著『多としての身体』の訳文および、訳者あとがきに反映される予定である。また、日本学術振興会特別研究員の田口陽子さんと鈴木和歌奈さん、それにアムステルダム大学のアネマリー・モル教授と博士課程のスワスティ・ミシュラ (Swasti Mishra) さんに大変にお世話になった。ここに記して謝意を示したい。

## ○ オーストリアにおける東アジア・東南アジア・日本研究に関する動向調査報告

永田貴聖

### 1 背景と目的

本調査では、オーストリアにおける東アジア・東南アジア・日本研究に関連する地域研究について、近年の研究の特徴、地域教育研究と専門分野教育研究の枠組みを検討した。既によく知られているようにウィーン大学における日本研究は戦前に始まり、1960年代以降活発になる日本の村落などを対象とする日本とウィーン大学の研究者による共同研究がある。近年では、文化人類学アプローチから、社会学アプローチと形を変えながらも継続している。また、80年代、90年代と時代が経過するにつれて、日本研究の枠組みは、「東アジア」という枠組みに広がり、中国研究、朝鮮半島研究が活発に行われるようになった。現在、ウィーン大学では、東アジア経済社会課程内にオーストリア東南アジア研究会が置かれるなど東アジアと東南アジア研究は特徴的な位置づけが形成されている。報告者はオーストリア、特にウィーン大学周辺におけるこの様な東アジア地域研究に隣接する研究動向を考察することを目的とする。

さらに、上記の動きと関連づけて、報告者が研究発表を実施した2015年8月11日～14日に開催されたヨーロッパ東南アジア学会研究大会 (European Association for Southeast Asian Studies Conference) におけるフィリピン地域研究及び、移住移動に関連する研究、新しいコミュニケーション技術を用いた社会ネットワークに関する研究の最新動向、オーストリア科学アカデミー社会人類学研究所での最近の動向に注目する。

### 2 滞在期間、訪問先

2015年8月10日～8月21日 (日本到着は22日) 合計12日

- ・ European Association for Southeast Asian Studies Conference (ヨーロッパ東南アジア学会研究大会)
- ・ University of Vienna (ウィーン大学)
  - ・ Faculty of Philological and Cultural Studies (言語文化学部) Department of East Asian Studies (東アジア研究学科)
    - ・ Chair of East Asian Economy and Society (東アジア経済社会課程)
    - ・ Japanese Studies (日本研究課程)
- ・ Austrian Academy of Sciences in Vienna (オーストリア科学アカデミー)
  - ・ Institute for Social Anthropology (社会人類学研究所)
- ・ Museum Judenplatz (ユダヤ博物館)
- ・ Jüdisches Museum Wien (ウィーン・ユダヤ人博物館)

### 3 European Association for Southeast Asian Studies Conference (ヨーロッパ東南アジア学会研究大会)

1992年設立され、Leiden (1995)、Hamburg (1998)、London (2001)、Paris (2004)、Naples (2007)、Gothenburg (2010)、Lisbon (2013)の各都市の大学で国際研究大会が開催された。第7回となる2015年は、オーストリア・ウィーン (Vienna) にある Austrian Academy of Sciences in Vienna、University of Vienna にて開催された。ヨーロッパ東南アジア学会は、世界の東南アジア研究の学会の中では大きな規模がある。14のテーマに84のパネルが行われた。

【開催されたパネル (15のテーマ、パネル数80、発表) ※印は参加もしくは報告したパネル】

- I. Southeast Asian Studies Past and Present (東南アジア研究の過去と現在) パネル数1
- II. Early and (Post)Colonial Histories (植民地主義以前と以後 (ポスト) の歴史) パネル数7
- III. (Trans)Regional Politics ((トランス) 地域の政治) パネル数5
- IV. Democratization, Local Politics, and Ethnicity (民主主義、ローカル政治、エスニシティ) パネル数5
- V. Mobilities, Migration and Translocal Networking (移動、移住とトランスナショナルネットワークワーキング) パネル5
  - Wheels of Change? Development and Cultures of Mobility in Southeast Asia
- ※
  - Transnational Mobilities into and out of Thailand II ※
  - Recent Developments in Philippine Migration within Asia ※
- VI. (New) Media and Modernities (メディアと近代性) パネル数5
  - Islamic (Inter)Faces of the Internet in Southeast Asia ※
- VII. Gender, Youth and the Body (ジェンダー、若者と身体) パネル数6
- VIII. Societal Challenges, Inequality and Conflicts (社会的変革と不平等とコンフリクト) パネル数8
- IX. Urban, Rural and Border Dynamics (都市、地域と境界のダイナミクス) パネル数8
  - How is Migrant Labour Changing Rural Southeast Asia? Translocality, Hybridity, and Emerging Categories II ※
  - Cross-Border Livelihoods in Southeast Asia ※
- X. Religions in Focus (争点としての宗教) パネル数6
  - Southeast Asian Religions on the Periphery II ※



- XI. Art, Literature and Music (文学と音楽) パネル数6  
XII. Cultural Heritage and Museum Representations (文化的遺産と博物館表象) パネル数7  
XIII. Natural Resources, the Environment and Customary Governance (自然資源、環境、慣習的統治) パネル数8  
XIV. Mixed Panels (ミックスパネル) パネル数2  
XV. Round Tables (ラウンドテーブル) パネル数4

報告対象国別(ラウンドテーブル除く) 複数地域比較・理論など 134、インドネシア 125、フィリピン 32、タイ 31、ベトナム 26、マレーシア 20、ラオス 18、ミャンマー18、カンボジア 11、東チモール 4、パプアニューギニア 3、シンガポール 3、合計 407 報告

※参加報告した講演、パネル、報告の内容(注目するもの)

①Wheels of Change? Development and Cultures of Mobility in Southeast Asia

このパネルでは、東南アジア地域の急激な経済発展の自動車やバイクの普及の拡大に伴う社会的な変化や環境汚染や交通渋滞、階層化に伴う主に都市部における富裕層と貧困層の交通手段の変化の違いなどに関して議論が行われた。調査者の中でも、フィリピン人の移住移動とも深く関連している Simone Christ (University of Bonn)の報告に注目した。報告題 Jeepneys and More-Cultures of Mobility beyond Transport の中で、Christ は、フィリピン大衆の交通手段である乗合ジープである Jeepney に装飾されている文字に注目した。ジプニーは経済的には中流階層の人びとがオーナーになることが多く、その多くが家族に海外移住者や移住労働者を抱え、それら家族構成員の仕送りなどにより、購入されている。そのため車体の装飾には、移住先の都市や国家の名称が明記されている場合が多い、報告者やこれらの20近い事例を丹念に調査し、主に家族により経営されている形態や、海外移住労働者がリタイア後、ジプニーを複数台保有し、経営を行い生計としていることなどを報告した。しかし、ジプニーは、国の交通政策によって新規登録が大きく制限されつつあり、今後の海外移住者を抱える家族が生計の糧としてジプニーでの小ビジネスから転換する可能性なども指摘された。

②Transnational Mobilities into and out of Thailand II

このパネルでは特にタイとヨーロッパ間の移住移動に関する分析が行われた。特に、70年代以降の国際結婚、労働移民、退職移民、ツーリズムなどに注目している。この中では、特に、タイ人が様々な不平等を抱えながら、個人やコミュニティが社会的境界を形成し、変容させていることに焦点を当てている。まず、調査者は、Kosita Butratana (University of Vienna)による、報告題 Thai Marriage Migrants in Austria に注目した。まだ研究が多く行われていないオーストリアのタイ人女性国際結婚移民についての報告である。オー

オーストリアにおけるタイ人居住者の80%が女性であり、うち60%が国際結婚によるものである。女性たちの中には社会上昇を期待して、結婚する場合があるが、オーストリア移住後、それを実現できないことが多くの葛藤要因となっていることなどが指摘された。また、他国からの移住者が信仰の拠点である教会などで自助グループを組織するなどで連帯することと比較すると、タイ人の場合、仏教行事などを行うということが集まること、また、二世にタイの文化を継承することで集まることなどが中心であり、相互扶助などの自助活動にまで発展していない。また、ウィーンなどの都市部と比較し、農村部に住むタイ人は同国人同士で集まる機会が非常に少ないことなどが統計調査から指摘された。

また、近年多くの移民受け入れ国が結婚移民に対して、一定の語学力を課しているという視点から、Thanakon Tiwawong (University of Constance) による *The impacts of Language Test Requirement for Thai Marriage Migration in Germany* にも注目した。2007年にドイツにおいて実施された非EU諸国の移民ビザ申請者に対して、基本的なドイツ語の試験に合格しなければならない「A1言語政策」導入後の影響について報告した。

報告の中では、多くの学者や活動家が非EU圏移住者への差別的政策であり、移住当事者の申請費用増大にもつながるといった批判を念頭に置き、ベルリンにおけるタイ人移民女性（その多くが結婚移民）への調査結果が明らかにされた。内容としては、新規入国者の多くが試験を通過していることなど悪影響と言えるまでの状況には至っていないことが報告された。今後、タイでの調査などを含めて検討を深めることも言及された。

### ③Recent Developments in Philippine Migration within Asia

このパネルでは、1970年以降に始まるフィリピン人移住移動の世界化が人々の日々の経験だけではなく、様々な機関やフィリピン人移住者たちによって組織化される自助グループなどが関係を構築し、新たなフィリピン人移住者たちの空間を形成していることについて、近年のシンガポール、日本、韓国に存在するフィリピン人移住者の動向に焦点を当てて検討した。

Dina DELIAS は報告題 *Intractable Citizenship: History, Politics and Filipino Professionals in Singapore* において、政治や結社活動が規制されているという制約があるシンガポールに焦点を当て、コンピュータープログラマーや、企業の従業員として働くフィリピン人たちが結成するフィリピン人グループが家事労働者などの現状をサポートする役割を果たしていることを検討した。このようなフィリピン人グループは、フィリピン大使館やフィリピンにある移住労働者支援 NGO などと直接的に関わることにより、フィリピン人ネットワークを構築しつつあることを明らかにした。

原めぐみは、報告題 *The Storied Lives of Youth Migrants, Applying the Concept of "Wayfaring"* において、日本人となんらかの家族関係があり、日本国籍もしくは日本での在留資格取得が可能な20代の若者たちが、日本もしくはフィリピンどちらかに定住するのではなく、状況に応じて生活拠点を選択する *Wayfaring* な状況にあることを複数の事例から

分析した。このような事例は両親の移動に付随して起こる移動である。また、多元的なアイデンティティ形成の文脈で議論される傾向にある。その「アイデンティティ」が NGO の活動家や研究者、さらに当事者の共同作業のような形で解釈されたものであり、今後も変化するものであることが指摘された。

Fiona SEIGER は、報告題 *Consanguinity as capital: Japanese-Filipinos and the mobilization of Japaneseness in processes of rights assertion* において、フィリピンにおいて多く存在する日本人とフィリピン人の間に生まれながら、日本人の父親から法的な認知などをされずに母親とフィリピン人で育った Japanese-Filipinos と呼ばれる子どもや青年たちは、支援 NGO での活動などに参加することにより日常ではほとんど触れる機会がない「日本」と血縁関係があるという意識を形成することが論じられた。フィリピンにあるこのような青年やフィリピン人の母親を支援する NGO は日本の関連 NGO とも連携している。このような連携は、父親探しや父親からの認知や法的権利の獲得だけではなく、青年たちが日本の情報や日本人と交流する機会となり、日本に移動することなく「日本人」と血縁関係があるという意識を形成していると分析した。

永田貴聖は、報告題 *Spaces in consociation of Filipino Migrants in Seoul of Korea* において、韓国ソウル近郊に移住したフィリピン人たちが毎週日曜日へファカトリック教会周辺に週千人規模で集まる現象について報告した。この現象は単に韓国における最大級のタガログ語ミサによるものだけではない。教会前のフィリピン系露店、周辺の日曜日だけ限定して開く店舗など人間関係、集まる人々の日曜日限定の関係など複数の関係がつながり大きな動きとなって表象化されている。さらに、教会を拠点とする自助グループ、そのグループの活動に連携しようとする国際結婚女性グループや留学生グループ、また、同国人支援の目的からそれらのグループをネットワーク組織化しようとする大使館関係者がヘファに集まっている。そこに複数の関係が集合し、フィリピン人移住者の社会空間が形成されていることが明かにされた。

これらの報告に対して、ディスカッサントである、東南アジアの中のフィリピンを主なテーマとして現代史を研究している Rommel Curaming 講師・博士 (University of Brunei Darussalam) は、いずれの個別事例もフィリピン人移住者への研究の余地がある 90 年代以降の移住に派生した新しい現象で興味深いものであること、世界のフィリピン人移住者が教会の自助組織や NGO などを介在させ、移住移動を基盤とする空間を形成していることを示しているということの評価した。しかし、一方、複数の地域で展開されるフィリピン人の実践をどのような視点にたち、比較研究するのかを再検討しなければならないということが指摘された。例えば、他のナショナルリティとの比較などをどのような枠組みで実現するのかを課題とする必要があるのではないかと指摘があった。

#### ④Islamic (Inter)Faces of the Internet in Southeast Asia

このパネルは、パネルの取りまとめ役 (Convener) である文化人類学者 Martin Slama 研

究員・博士 が所属先である Austrian Academy of Sciences において実施している Islamic (Inter)Faces of the Internet, Emerging Socialities and Forms of Piety in Indonesia プロジェクトの一環でもある。このプロジェクトは 2017 年 5 月まで実施される。Slama 研究員は、19 世紀から現在に至り、ムスリムの周辺地域や東南アジアからの移住者が集まるイエメンのハドラミ (Hadhrami) 地域とジャワ島を中心とする還流移民の現象を、歴史、また、現在の視点から研究している (Slama 2011 など)。

パネルでは、それぞれの報告において、東南アジア、特にインドネシアの人びとによるイスラムの信仰実践におけるソーシャルメディアとコミュニケーション技術の日常的な利用について注目していた。様々な SNS (ソーシャルネットワークシステム) が、様々な地域に散在する人びと同士との定期的な信仰に関する情報交換、行事の告知などにとどまるだけでなく、イスラムの日常の信心深さ (piousness) の共有やイスラムの伝搬、若者世代の新たな活動の拡大などにも活用されている。オンラインとオフラインレベルで形成される信仰実践と拡大と共有、それによる地域的な枠組みにとらわれない社会関係の拡大に注目していた。例えば、Fatimah Husein (State Islamic University Yogyakarta) の報告では、SNS の活用により、ムスリム・ウスタッド (ustad) と人びとがつながり、イスラム法学に関わる個人的な問題の議論がオンラインで可能になった事例が報告された。例えば、香港で家事労働者として働く女性の夫の不倫の問題に対処する方法などが議論され、すでにイスラム・ウスタッドと海外移住信者がつながりイスラム信仰を通じた脱領域的な関係を構築している可能性が示された。今後増加することが予想される非ムスリム地域に居住するインドネシア人海外移住労働者が信仰を継続させることを想定した研究につながる可能性を備えている

#### ⑤Cross-Border Livelihoods in Southeast Asia

このパネルでは国境周辺で起こるローカルな動きを民族誌学的調査の新たなパターンとしてとらえ注目していた。主には、国民性や地域性を維持しつつ行われているクロスボーダーな経済活動などへの分析である。中でも、調査者が注目したのは、フィリピン・ルソン島北部の服飾や手芸の流通について文化人類学視点から調査している Lynne Milgram 教授・博士 (OCAD University, カナダ) による Negotiating “Extralegality” across Borders: The Secondhand Clothing Trade between the Philippines and Hong Kong の報告である。香港でのフィリピン人女性家事労働者の受け入れと就労がはじまったのは 1970 年代ごろからとかなり時間が経過している。移住者を対象とするインフォーマルな小ビジネスに関する研究はこれまでそれほど多くない。Milgram 教授は、この報告において、ルソン島北部の都市バギオを拠点とする女性起業家がフィリピンの古着をインフォーマルな経路により香港へ移送し、販売するまでの過程に注目している。このような過程を注目することは、世界中にフィリピン人移民・移住労働者が存在することを考えると、小ビジネスの域を越える世界規模のインフォーマルなモノの動きに関する研究につながるものである。報告にお

いて注目しているクロスボーダーな商取引、現地での販売などにパキスタン人ビジネスネットワークなどによる物流ルートの活用、現地で就労するフィリピン人労働者の親戚などが行う在庫の保管や、販売ルートの確保などさまざまな人びとが小ビジネスを支えている。現在、フォーマルの貿易ルートではフィリピンの古着を香港に輸入することは非常に難しい。モノが多様な経路や人びとを通じてインフォーマルに流通する過程が過程を明らかになった。

### 【小括】

#### ・移住移動に関連する研究（特にフィリピンに関連するもの）

フィリピンについての移動移住に関する報告では、調査者も関わったパネル Recent Developments in Philippine Migration within Asia 以外では、移住者や移住ネットワークに関する研究よりも、移住ネットワークを活用したモノの流れなどに関する研究がいくつかあった。また、ヨーロッパ在住東南アジア出身者に関する研究はパネル Transnational Mobilities into and out of Thailand のパネルにおいていくつかあったものの、決して多くはなかった。むしろ東南アジア域内移動や境界線上の生業に関する研究などが多数を占めた。また、宗教、人の移動、新しい通信技術の利用により遠隔地間において社会関係が構築されるという複合的な課題が交差するテーマに焦点を当てている点ではパネル Islamic (Inter)Faces of the Internet in Southeast Asia における調査対象、実際のフィールドワークと新しい通信技術を活用した調査などが特徴的であった。

#### ・フィリピン地域研究者の動向と構成

フィリピン地域研究及びフィリピンに関連する研究報告の多くは、ヨーロッパに留学中、もしくはフィリピンの大学に所属するフィリピン人の博士課程相当もしくは、PD レベルの研究者が大半であった。准教授以上のキャリアを備える研究者に関してもフィリピンの大学に所属しているものが大半を占めていた。また、研究テーマとしては、例えば、パネル After EDSA and People's Power in the Philippines のようにマルコス大統領が失脚したエドサ革命、そして、その後の社会運動に変容に焦点を当てているものが特徴的であった。

## 4 University of Vienna (ウィーン大学)

まず、University of Vienna (ウィーン大学) における東アジア研究は1938年に創設された日本学研究所(第二次世界大戦により廃止を経て、1945年民族学研究所内の日本研究として復活)にはじまる。1965年に日本研究所が設置された。その後、1970年に中国語課程の開設により日本中国研究所と改組された。さらに、2000年には、韓国研究課程の新設に伴い、東アジア研究所(Institut für Ostasienwissenschaften)となり、現在の枠組みとなった。現在では、言語文化学部(Faculty of Philological and Cultural Studies)に東アジア研究学科(Department of East Asian Studies)があり、その下に日本研究課

程 Japanese Studies (学部、修士、博士)、中国研究課程 Chinese Studies (学部、修士、博士)、韓国研究課程 Korean Studies (学部、修士、博士)、さらに、東アジア経済社会課程 Chair of East Asian Economy and Society (修士、博士) から構成されている。総学生数 (学部) 1400 名規模である。修士課程以上では日本研究には修士 80 名前後、博士 10 名前後が在籍している。東アジア経済社会課程 (2008 年開設) には修士 20 名程度、博士 5 名程度が在籍している。2010 年から Vienna Journal of East Asian Studies が既に 7 巻刊行されている。

①Chair of East Asian Economy and Society (東アジア経済社会課程)

訪問先 Dr. Alfred Gerstl 講師 (国際関係学、ASEAN 地域の安全保障)

Dr. Fiona Seiger 講師 (移民研究)

ウィーン大学における東南アジア地域研究は、Faculty of Philological and Cultural Studies (言語文化学部) Department of East Asian Studies に位置づけられている。この課程は数回の改組を得て 2008 年から現在の形となった。現在、5 名のスタッフが在籍している。東アジア地域研究学科長でもある Rudiger Frank 教授・博士は、北朝鮮・韓国についての国際関係学の専門家であり、最近では北朝鮮の経済特別区での IT 技術開発などに関する研究を行っている。また、1991 年から半年間、金日成大学で研究員を経験して以来、北朝鮮に関する研究を行っている (Frank 2015)。また、ヨーロッパ・コリアン研究学 (の Association for Korean Studies in Europe) の副会長であり、European Journal of East Asian Studies など著名な学術誌の編集委員を担っている。

さらに、いくつかの韓国の研究機関と提携している。韓国学大学院 (The Academy of Korean Studies)、韓国国際交流財団 (Korea Foundation)、高麗大学大学院国際学研究所、延世大学大学院国際学研究所などである。また、訪問者の一人である Fiona 講師の後任として 2016 年からは、韓国人の若手民族音楽研究者である Sang-Yeon Sung 氏を招請している。Sung 講師は、韓国のポピュラー音楽の拡大について、台湾の事例を当て、台湾人のアイデンティティ形成と他のアジアからの文化流入の関連について研究している。東アジア経済社会課程では、Mapping K-Pop Around Eurasia: Transnational Cultural Flow, Promotion, and Reception という科目を担当している。

【東南アジア研究の状況】

Alfred Gerstl 講師、Fiona Seiger 講師が東南アジア地域の研究者である。2008 年から東南アジア研究会 (Society for South-East Asian Studies) が置かれ、Austrian Journal of South-East Asian Studies (以下、ASEAS) が年 2 回刊行されている。Alfred Gerstl 講師・博士 (国際関係学、ASEAN 地域の安全保障) は 2008 年と 2010 年に編集委員長を務めた。Gerstl 氏は、主に、ASEAN 地域と北東アジアまでを含んだ諸国間の人間の安全保障構築のための政治的プロセスについて研究している (Gerstl&Helmke 2014)。

Alfred 氏によるとウィーン大学における東南アジア研究は、決して大きくはないものの、例えば、東アジア経済社会課程の大学院修士課程の中にもテーマとしては増えていること、さらに、ASEAS に論文を掲載した若手学者たちがある程度順調にキャリアを積んでいること（例えば、2015 年ヨーロッパ東南アジア学会研究大会で Islamic (Inter)Faces of the Internet in Southeast Asia を組織した Martin Slama 研究員など）、また、この学術誌への投稿件数が増加傾向にあると説明した。多くの大学院生たちは東南アジア経済社会課程で修士相当を修了し、次のステップとして、奨学金などを取得し、他国の博士課程に進学する 경우가ほとんどである。2015 年に修士を通過した 15 人のうち 8 人のテーマが東南アジア地域（比較研究を含む）であった。また、15 人のうち 4 人が文化人類学とも関連するテーマであった<sup>1</sup>。

Seiger 講師は、修士時代より、フィリピン側の日比二世を支援する NGO 団体が当事者である二世たちに及ぼすアイデンティティの形成問題について調査している。University of Vienna の Development Studies において修士号を取得した後に、2014 年 National University of Singapore において博士号を取得した（社会学、博士論文タイトル Claiming Birthright: Japanese-Filipino Children and The Mobilization of Descent）。2015 年東アジア経済社会課程において、Migration in Asia という科目を担当した。この科目では、社会学におけるアジア域内の移民研究を中心にしながらも、ウィーン在住の亡命チベット人運動家を招いたワークショップなども開催された。Seiger 講師は、2015 年のヨーロッパ東南アジア学会研究大会報告後、2015 年 9 月から 2016 年 8 月まで、京都大学東南アジア研究所に Guest Research Associate として在籍する予定である。

## ② Japanese Studies（日本研究課程）

訪問先 Dr. Wolfram Manzenreiter 教授（現在 東アジア研究所・共同所長）

現在、日本研究課程では、教授 3 名、准教授 1 名、講師・PD 研究員 13 名、非常勤講師 10 名のスタッフが在籍している。学部生約 800 名、修士 80 名程度、博士 10 名程度が在籍している（東アジア研究では最も大きい規模）。

訪問先である Manzenreiter 教授は、社会学を専門としており、近年では、社会現象としての J リーグ結成から日韓ワールドカップまでフットボールが日本社会に与えた影響に関する研究、娯楽としてのパチンコの研究、さらには、多くの日本人研究者、日本地域研究者

---

<sup>1</sup> 例えば 2015 年修士論文のタイトルとしては 2015 年修士論文のタイトル "Economic Transformation in Vietnam- Which norms are used by state and non-state actors for the realisation of individual needs and wants?", "Ethnic Policies Toward People of Chinese Descent in Indonesia and Malaysia", "Drinking Cultures in East Asia. A Comparison between China, Japan and Vietnam", "Mythology, Ritual and Female Empowerment. A Comparative Study of Shamanism in Korea and Japan" などであった。

との共同による「幸福」研究などに取り組んでいる (Manzenreiter 2015)。また、2010 年には立命館大学の客員教授として日本に滞在した。

教育カリキュラムとしては、修士レベルにおいて日本語上級になることを目標として、言語、文化研究、社会学の 3 つの分野を向上させることを重点課題としている。また、東アジア研究所附属図書館には約 11 万の書籍が蔵書されている。約 55%が日本研究関連の書籍である (中国研究関連 35%、韓国研究関連 15%)。

#### ・日本研究組織の変遷

1938 年 日本研究所設立 (所長：岡正雄、後に村田豊文)

1945 年 敗戦とともに廃止。

1965 年 9 月 民族学研究所から分離し、日本学研究所が開設

(所長：Alexander Slawik アレクサンダー・スラヴィック<sup>2</sup>、1971 年まで)

1970 年 日本中国研究所に改組 (所長 Josef Kreiner ヨーゼフ・クライナー・民族学、  
～77 年まで)

(Sepp Linhart ゼップ・リンハルト・社会学、78～2012 年まで)

2000 年 東アジア研究所に改組 (所長 Wolfram Manzenreiter ヴォルフラーム・マンツェ  
ンライター・社会学、2013 年～2015 年 ※現在も副所長)

(Rudiger Frank、国際政治学、2015 年～)

#### 【日本研究の動向】

石田英一郎が Robert J. Smith, Ella Wiswell (Smith and Beardsley (eds.) 1962, Smith and Wiswell 1982) など Embree (1939) の研究を基とするアメリカ人類学の日本研究 (特に熊本県須恵村の歴史民俗・村落研究) に関与していたことに派生して、1968～69 年に行われたウィーン大学日本研究による「阿蘇プロジェクト」につながっている。クライナーや門下生である Linhart などが、「北部阿蘇溪谷における定住の歴史」、「阿蘇神社の歴史と文化構造」、「農業史・農機具」、「社会構造・土地改革・村落合併」に関する調査を実施した (クライナー 2005 ほか)。

そして、70 年代後半から 80 年代、現在にかけて、社会学者である Linhart がウィーン大学日本研究の文化人類学的視点を社会的視点に転換させた。この転換が現在の社会学を基盤とする「幸福」研究につながっている<sup>3</sup>。「幸福」研究では、現在、Manzenreiter 教授が中心となり、主に家族社会学が焦点を当てている家族形態の変容、パートナーの選択条件、ジェンダー役割の変化と不変化、少子高齢化、介護などが中心の課題となっている。

---

<sup>2</sup> 岡正雄、石田英一郎、住谷一彦 (経済社会学者) らと深く親交、オーストリアにおける日本研究の基礎を作ったとされている。金子エリカ、ゼップ・リンハルト、ヨーゼフ・クライナーなどを指導した。スラヴィック (1984) を参照。

<sup>3</sup> 例えば Linhart (1976) など。



2014年4月には、国際会議「幸福の社会的DNAの解読—日本のライフコースの視点」(Deciphering the Social DNA of Happiness: Life Course Perspectives from Japan)が開催された。この国際会議は、国際交流基金、ドイツ日本研究所(German Institute for Japanese Studies Tokyo)の協力により開催された。

この会議では3つの基調講演、17の報告が実施された。「こども／青年」、「結婚／家族」、「仕事と家庭の中の男性」、「コミュニティの形成」、「高齢と終末」などのセクションが設けられた。また、2016年10月には第3回国際社会学会フォーラム(Third ISA Forum of Sociology)が開催される予定である。

## 5 Austrian Academy of Sciences in Vienna (オーストリア科学アカデミー)

Institute for Social Anthropology (社会人類学研究所)

訪問 Dr. Martin Slama 研究員 ※ヨーロッパ東南アジア学会理事

現在、35名の専任スタッフが在籍している。イスラム中東研究、仏教中央アジア研究、東南アジアとインド洋諸島研究、複合領域テーマ研究をテーマとするプロジェクト群から構成されている。「東南アジアとインド洋研究」群には5つの研究プロジェクトがある。本報告書3④において取り上げたヨーロッパ東南アジア学会研究大会でのパネル報告は、研究課題である Islamic (Inter)Faces of the Internet, islamic interfaces slama thumbEmerging Socialities and Forms of Piety in Indonesia の1つである。

## 6 その他

主に第二次世界大戦中のユダヤ人虐殺についての展示がおこなわれている Museum Judenplatz と、オーストリア帝国から現在にかけてのユダヤ人の生活や社会運動についての展示やアート活動などが行われている Jüdisches Museum Wien を訪問した。

特に、Jüdisches Museum Wien では、調査者のテーマである移民問題にもつながる部分があった。迫害や虐殺、抑圧を受けた移動する民の被害だけではなく、その後の生活の変化はマジョリティーとの関係の変化など多様性をいかにして表象するかの大きなヒントとなった。

## 7 まとめ

特にウィーン大学日本研究に関しては、歴史の古さと蓄積の多さはすでによく知られている。しかし、文化人類学から社会学への視点が転換した後に関してはそれがどのように行われたのかはさらに考察する必要があるだろう。また、東アジア研究という枠組みから、日本、中国、韓国の比較研究が今後どのように展開されるのかに注目したい。特に、東アジア経済社会課程は、北朝鮮・韓国研究、さらには、東アジア諸国と東南アジア諸国の国際的、人的交流や関係などを地域研究の枠組みを超える地域・複数国家の問題として今後どのように取り組んでいくかに注目する必要があるだろう。現在、東アジア地域が直面し

ている人口の減少と移民・移住労働者受け入れ問題など、共通の課題をどの程度関連付けながら比較研究していくのかが注目すべき部分である。

(参考文献)

Slama, Martin. 2011 “Translocal Networks and Globalisation within Indonesia. Exploring the Hadhrami Diaspora from the Archipelago’ s North-East” , *Asian Journal of Social Science* 39 -3: 238-57.

Rudiger Frank. 2015 “Socio-Economic Change in the DPRK and Korean Security Dilemmas” , *North Korean Review*, Vol.11-2:7-24

Alfred Gerstl, Belinda Helmke. 2014 “The Association of Southeast Asian Nations (ASEAN) and Climate Change: A Threat to National, Regime, and Human Security” *Human Security: Securing East Asia’s Future*. Benny Teh Cheng Guan (ed.), pp.135-56, Springer,

Gisela M. Reiterer. 2007 “Austro-Filipino Youth: Cosmopolitan Austrians or Hyphenated Filipinos?”, *Jugend Zugehörigkeit und Migration. Subjektpositionierung im Kontext von Jugendkultur, Ethnizitäts- und Geschlechterkonstruktionen*. Geisen, Thomas, Riegel, Christine(eds.) pp. 147-62, Wiesbaden VS Verlag.

Manzenreiter, Wolfram. 2015 “Sport Sociology: on culture and political economy” , *International Review for the Sociology of Sport* 39-2: 524-529.

アレクサンダー・スラヴィック (住谷一彦、ヨーゼフ・クライナー訳). 1984『日本文化の古層』未来社

John F. Embree. 1939 *Suye mura: a Japanese village*. University of Chicago Press. [=ジョン・F・エンブリー. (植村元覚訳) 1978『日本の村—須恵村』日本経済評論社。]

Robert J. Smith and Ella Lury Wiswell. 1982 *The Women of Sue-Mura*. University of Chicago Press. [ロバート・J・スミス、エラ・ルーリィ・ウイスウェル (河村 望・斎藤 尚文訳) 1987『須恵村の女たち——暮しの民俗誌』御茶の水書房。]

Robert J. Smith and Richard K. Beardsley (eds.). 1962 *Japanese Culture: Its Development and Characteristics*. Wenner-Gren Foundation for Anthropological

Research.

ヨーゼフ・クライナー. 2005 『阿蘇に見た日本—ヨーロッパの日本研究とヴィーン大学阿蘇調査（自然と文化阿蘇選書—阿蘇一の宮町史（12））』 一の宮町。

Sepp Linhart. 1976 Arbeit, Freizeit und Familie in Japan. Eine Untersuchung der Lebensweise von Arbeitern und Angestellten in Großbetrieben. Harrassowitz, Wiesbaden.  
(訳『日本における仕事、レジャー、家族—大企業就業者の生活に関する考察』)

## ○ フィリピン首都圏主要大学における韓国研究動向に関する調査

永田貴聖

### 【目的と概要】

2000年代後半以降、フィリピンにおいては韓国地域研究が外国語系の教育・研究機関、さらに「東アジア」および「アジア」地域研究を行っている教育・研究機関を中心として急速に進展している。本調査の目的は、フィリピンにおける韓国研究動向の最新状況をマニラ首都圏にある特に韓国研究が進んでいるアテネオ・デ・マニラ大学 (Ateneo de Manila University)、アジア太平洋大学 (University of Asia and The Pacific)、フィリピン大学ディリマン校 (University of the Philippines, Diliman) における動向を中心に理解することである。

フィリピンから韓国に韓国政府などの奨学金により留学し、学位を取得するフィリピン人若手研究者が増加している。また、韓国政府系の機関である Korea Foundation (韓国国際交流財団<sup>1</sup>) は、海外の研究機関による韓国研究に対して研究助成などを含めさまざまな連携を行っている。フィリピンにおいても、本調査で訪問したフィリピン大学ディリマン校、アテネオ・デ・マニラ大学、アジア太平洋大学は、いずれも韓国国際交流財団からの助成などを獲得し、教育・研究をすすめてきた。また、アテネオ・デ・マニラ大学、フィリピン大学では、韓国国際交流財団と関係が深いソウルにある韓国学中央研究院などで学位を取得した韓国研究の第一世代の研究者たちが教育・研究の中心的な担い手になりつつある。さらに、アジア太平洋大学は Samsung から助成を得て、さまざまな学術企画を実施している。

2011年 Korean Cultural Center, Philippines (以下 KCC、韓国文化院フィリピン<sup>2</sup>) が設置されて以降、訪問先の3つの大学の関連専攻の学生たちが KCC のスピーチコンテストや文化交流企画に積極的に関わるなど、未来の韓国研究の担い手になる層は確実に厚みを増している。

アテネオ・デ・マニラ大学では、2014年から AIKS Korean Studies Conference が、フィリピン大学では、2010年から Philippine Korean Studies Symposium が開催されている。人文社会科学におけるフィリピン・韓国の学術交流は着実に進展している。アジア太平洋大学においても海外から韓国研究の専門家を招いた企画を頻繁に開催されている。調査者が実施している韓国・フィリピン間の人の移動という視点からみても、両国間の人の移動は非常に活発であり、移住に関する研究は両国の学術交流を注視する必要がある。

### 【期間】

---

<sup>1</sup> 日本の国際交流基金に相当する韓国学術研究の普及を目指す政府機関である。

<sup>2</sup> 韓国国際交流財団と同様に日本の国際交流基金に相当する機能を備えている。こちらは海外における韓国の文化や言語の普及に重点が置かれている。

・3月14日から3月24日までの10日間

#### 【訪問した大学機関】

##### ① アテネオ・デ・マニラ大学 (Ateneo de Manila University)

現在、アテネオ・デ・マニラ大学では、人文学部 (School of Humanities) 内にある近代言語学科 (Modern Languages) の一つとして、韓国語専攻がある。それに加えて、2012年 Ateneo Initiative for Korean Studies (以下 AIKS) というプログラムが開設され、近代言語学科の韓国語専攻を基盤として、文学、歴史学、現代文化、社会学、政治経済学などそれぞれの人文社会科学分野に所属する学部・大学院レベルの学生が韓国研究を包括的に学べる学部学科横断的なプログラムとなっている。教員は7名おり、訪問した Sarah J. D. Lipura 助教 (AIKS 副コーディネーター※事実上の責任者、外交ソフトパワーとしてのフィリピンにおける韓流を研究)、韓国語を担当する韓国人教員とフィリピン人教員が韓国語専攻の所属である。他の教員は、韓流のファンサークルの社会関係について研究している Alona GUEVARRA 講師、朝鮮戦争におけるフィリピンの関わりについて研究している歴史学者 Neville MANAOIS<sup>3</sup>教授などがそれぞれの専門の専攻と AIKS を担当している。

副コーディネーターである Lipura 助教は韓国国際交流財団の奨学金を得て、韓国学中央研究院において修士号を取得し、博士課程はフィリピン大学ディリマン校で終えている。それ以外の教員はフィリピンにおいて学位を取得している。

現在、毎年、学部レベルで韓国政府の奨学金を得て、1年間派遣留学する学生が数名必ずおり、修士、博士レベルで韓国国際交流財団の奨学金を得て学位取得のために留学生する学生も輩出している。

#### (AIKS Korean Studies Conference)

2014年から始まった AIKS Korean Studies Conference では教員レベルから、若手の博士レベルまで報告を行っている。2014年は“The Hallyu Mosaic in the Philippines: Framing Perceptions and Praxis”を、2015年は、“Investigating Transnational Spaces in Philippines-Korea Relations”をテーマに開催された。AIKSだけではなく、アテネオ・デ・マニラ大学アジア研究センター、韓国学中央研究院が共催している。

中でも、2015年の会議に Dohye Kim (イリノイ州立大学文化人類学 Ph.D. 候補生、現在・フィリピン大学アジアセンター Research Affiliate) は“Labor Beyond Retirement: Korean Retiree Migrants in the Philippines”のタイトルで報告した。Kim の論文は最新の Philippine Studies (Ateneo de Manila University Press) に掲載され、97年アジア通貨危機以降の急増する韓国人の早期リタイヤ移民に注目し、韓国人がフィリピンにノスタルジックな風景や安価な物価などを求めて移住すること、移住後現地のフィリピン人とは対等

---

<sup>3</sup> Manaois, Neville Jay C. 2008 “The Philippine Expeditionary Forces to Korea: The Fighting Tenth”, Loyola Schools Review (Social Sciences) 7:123-148.

な関係ではなく、経済的格差などを背景にフィリピン人を下位に扱うことなどをまとめた<sup>4</sup>。

(他の東アジア地域研究との関係)

アテネオ・デ・マニラ大学は、1966年に東南アジアで最も早く日本研究プログラム (Japan Studies Program) が創設された。その後に創設された中国研究プログラムとともに社会科学部 (School of Social Sciences) に設置されている。現在、東アジア地域研究の中で、AIKS だけが社会科学部に置かれていない。訪問した日本研究者である Karl Cheng Chua 准教授 (日本における戦中のマンガ研究) によると、他の地域系の研究プログラム (中国、ヨーロッパ) が社会科学部内に置かれていることを考えると AIKS は、いずれ社会科学部内に移るだろうということであった。また、アテネオ・デ・マニラ大学の日本研究プログラムが長年、国際交流基金と連携を行い、国際交流基金の日本文化理解イベント (スピーチコンテスト、公開講座、学術シンポジウムなど) を合同で企画する蓄積が韓国研究プログラムと韓国国際交流財団、韓国学中央研究院との連携に活用されている。

② アジア太平洋大学 (University of Asia and The Pacific)

アジア太平洋大学は、人文科学部 (College of Arts and Sciences) において、Samsung Korean Studies Program (SKSP) が 2011 年以降開講されている。訪問した Arnel Joven 准教授<sup>5</sup> (歴史学科所属、歴史医療人類学) はこのプログラムを運営している委員会の議長を担っている。2010 年、このプログラムはアジア太平洋学科 (Department of Asia Pacific Studies) 内にあるコースのひとつとして始まった。ほかには中国、日本、北アメリカ、東南アジアなどの地域教育研究がある。このプログラムを総括するのは、Kim Djun Kil 教授である<sup>6</sup>。教授は研究者ではなく、韓国の元外交官であったが、アジア太平洋大学の着任とともに、これまでの人脈を活かし、韓国研究プログラムの準備をすすめた。特に、2013 年から 2016 年にかけては、韓国学中央研究院の協力によって、Korea and the Philippines Exploring Comparative and Transnational Perspective プロジェクトのもと、アジア太平洋大学の教員たちのよる複数回の公開レクチャー、海外での研究報告、カンファレンスなどが行われている。

文化人類学・民族学に関連する分野では、2014 年には、Arnel Joven 准教授が、” Comparing

---

<sup>4</sup> Kim, Dohye 2016 “Geographycal Imagination and Intra-Asian Hierarchy between Filipinos and South Korean Retirees in the Phillipines. *Philippine Studies* 64-2: 237-64.

<sup>5</sup> Arnel Joven. 2012 “Colonial Adaptations in Tropical Asia: Spanish Medicine in the Philippines in the Seventeenth and Eighteenth Centuries” *Asian Cultural Studies* 38: 171-186. がある

<sup>6</sup> Djun Kil Kim 2005. *The History of Korea (The Greenwood Histories of the Modern Nations)*. Greenwood. などがある。この著書は英語の朝鮮半島現代史の中でも理解しやすいという点で評価を得ている。

Philippines Indigenous Medicine and Korean Oriental Medicine: Understanding Parallels and Trajectories in Medical Anthropology and Historiography” をテーマに公開レクチャーを行った。

調査時にも、韓国における戦後の経済発展の過程と宗教、特にキリスト教、の関わりについて詳しい歴史学者である Donald Baker 教授(カナダ・ブリティッシュコロンビア大学)を招き、“Christianity, Capitalism, and the Emergence of Democracy in South Korea”の講演が実施された<sup>7</sup>。

だが、教育研究活動は、経済的中間層の韓国研究理解を深める点では一定の効果があるものの、学術研究の側面では、修士課程までしかなく、また、韓国研究を担当する教員たちも博士論文までは日本研究を行い、その後に韓国研究に転向したことが多い。さらなる発展を実現するには、アテネオ・デ・マニラ大学やフィリピン大学(次に説明)のように、韓国で学位を取得した若手教員が必要となるだろう。

### ③ フィリピン大学ディリマン校 (University of the Philippines, Diliman)

本調査では、College of Social Sciences and Philosophy (社会科学哲学部) Department of Linguistics (言語学科)にある韓国語課程を中心に、調査を実施した。主に学科長の Aldrin P. Lee 准教授<sup>8</sup>、Ronel Laranjo 講師、Bae Kyungmin 講師を訪問した。現在、韓国語課程は、言語学科におけるプランC(東アジア言語群)<sup>9</sup>に置かれており、その中でも2005年頃から韓国語を選択する学生が最も多くなっている<sup>10</sup>。また、フィリピン大学言語学科では、すべてのコースでフィリピン語を必須であり、大学院相当になると、フィリピン語を教授するスキルが求められる仕組みになっている。

また、こちらの学科も韓国国際交流財団との関係が深く、2005年以降、連携が行われ、2013年まで韓国語専任講師を派遣していた<sup>11</sup>。現在では、Aldrin P. Lee 准教授<sup>12</sup>、Bae Kyungmin 講師を含め5名の講師、1名のKOICA(韓国国際協力事業団)からの派遣講師の合計6名による運営されている。また、フィリピン大学には、Aldrin P. Lee 准教授、歴史学科に所属する1890年代から1930年代までの韓国のメディアにおけるフィリピン表象を研究しているRaymund Arthur G. Abejo 講師などが、韓国学中央研究院で博士号を取得した第一世代の研究者として在籍している。また、アテネオ・デ・マニラ大学 AIKS 副コーディネーターのLipura 助教もフィリピン大学言語学科を卒業した後に韓国学中央研究院に留学している。現在でも引き続き、言語学科から、韓国国際交流基金や韓国政府の奨

<sup>7</sup> Donald Baker. 2008. *Korean Spirituality*. University of Hawaii Press. などがある。

<sup>8</sup> Aldrin P. Lee. 2010 "The Filipino Monolingual Dictionaries and the Development of Filipino Lexicography", *Philippine Social Science Review* 62-2:369-401. がある。

<sup>9</sup> プランAは言語学のみ、プランBはインドネシア・マレーシア語課程

<sup>10</sup> 韓国語の次は、日本語、中国語の順である。

<sup>11</sup> 2014年からフィリピン大学が直接雇用する制度に変更した。

<sup>12</sup> Aldrin P. Lee. 2010 "The Filipino Monolingual Dictionaries and the Development of Filipino Lexicography", *Philippine Social Science Review* 62-2:369-401. がある。

学金を獲得し、修士および博士課程に留学している。

韓国で学位を取得した若手研究者の一人が、本調査で訪問した Ronel Laranjo 講師である。Laranjo 講師は高麗大学でフィリピン語の外国人向けの教授法の分野で言語学修士を取得し、フィリピン大学に戻った。2016年3月には、フィリピン語専攻が開設された釜山外国語大学から初級用のフィリピン語教科書が編著で刊行された<sup>13</sup>。

2014年に韓国国際交流財団の派遣専任講師から専任講師に転籍した Bae Kyungmin 講師によると、フィリピン大学、アテネオ・デ・マニラ大学、アジア太平洋大学はともに引き続き韓国国際交流財団と連携し、助成を受ける予定である。

(Philippine Korean Studies Symposium)

2012年から開催されている。フィリピン大学が主催し、韓国国際交流財団、KCC フィリピンが協賛している。第1回は報告者の大半が、韓国から招聘された研究者の報告が大半を占めた。第2回はフィリピン大学の日本や他地域の研究者たちが、韓国地域研究を部分的に実施し、報告するものも目立った。しかし、2015年の第4回(テーマ:Philippines-Korea in the Changing Asia:Drawing Connection.)では、本調査で訪問した韓国で学位を取得した第一世代の研究者たちに加え、フィリピン以外の東南アジアに所属する若い世代の研究者たちが報告するようになった<sup>14</sup>。

2016年9月28～30日には、2年に一度の国際カンファレンス第7回韓国研究カンファレンス(7th Biennial Conference on Korean Studies)がフィリピン大学において開催される予定です。この会議では、現代韓国と東南アジア社会の関係と影響が主なテーマとなっている。

(UP Philippines-Korea Research Center)

2016年4月28日に開設された。今後、包括的なフィリピンと韓国の相互学術交流の拠点となる可能性が高い。韓国国際交流財団、韓国学中央研究院、KCCとも深く関係している。

#### ④韓国文化院フィリピン (Korean Cultural Center, Philippines)

図書館、語学クラス、文化理解講座、映画上映会などが行われている。また、Korean Cultural Caravan という企画では、今回訪問した大学・専攻などで企画活動を実施していることにより学生が韓国研究に向かう要因になっている。

---

<sup>13</sup> J.M. Pergrino, Kim Dong Yeob, A. Enriquez, R. Laranjo “Pnimulang Pag-Aaral ng Wikang Filipino 필리핀어(초급)“ Busan University of Foreign Studies.

<sup>14</sup>例えば、Amelia Burhan (University of Indonesia) ”Korean Women Abroad Looking for Identity: Korean Housewives in Jakarta”などである。



## 【展望】

これまでフィリピンにおける韓国地域研究は、日本研究者が補完的に韓国研究を行うという側面があったことは否めない。ただ、ここ数年で急速に、韓国において学位を取得した研究者たちが登場しつつある。また国際会議などには、東南アジアの他の国で韓国研究を行う研究者が報告するようになった。2016年9月韓国国際カンファレンスがフィリピン大学で開催されるのを機に、東南アジアにおける韓国研究の拠点的な役割を担う可能性もある。その他、アテネオ・デ・マニラ大学ではこれまで日本研究プログラムにおいて蓄積した現代文化やマンガなどの表象研究と韓国現代文化研究を融合させた研究を実現することが可能である。今後も動向に注目したい。

# ○ スペインにおけるラテンアメリカ地域に関する人類学的研究の動向調査報告

八木百合子

## 1 はじめに

### (1) 背景・目的

スペインにおけるラテンアメリカ研究の歴史は古く、いわゆる植民地学として、歴史学を中心に宗教や文化に関する多くの研究蓄積がある。一方、19世紀に登場し、20世紀後半に学問として確立されたスペインの人類学において、ラテンアメリカは調査対象として重要な地域の一つである。

近年、スペインでは、ラテンアメリカに関する新たな学会や研究集会（ヨーロッパ・アメリカ学会、イベロアメリカ人類学者ネットワーク研究集会等）が相次いで発足・開催されるなど、新たな動きが確認され、研究の更なる活性化の兆候がみられる。

こうした状況を踏まえ、本調査ではスペインにおける近年の人類学研究の動向を把握しつつ、なかでもラテンアメリカ地域について、現在どのような関心が寄せられ、いかなるテーマが重視されているのか各研究機関の現在の取り組みから明らかにすることを目的とする。

### (2) 調査期間・方法

2015年11月19日から12月3日までスペインの3都市（マドリード、バルセロナ、セビリア）を訪問し、人類学およびラテンアメリカ研究に関わる主要大学、研究機関、博物館において、関係者と面会し上記テーマに関するインタビューを行った。

なお、今回の調査にあたっては、民博の外国人客員教員に在籍していたギジェルモ・ウイルデ氏（アルゼンチン、国立サンマルティン大学）とブライ・グアルネ氏（スペイン、バルセロナ自治大学）に関係者をご紹介いただいた。

以下では、調査の結果得られた情報として、(1) スペインにおける人類学研究の概況について記したうえで、(2) 各研究機関で行われている研究プロジェクトを中心にラテンアメリカ地域に関する研究動向について報告する。

## 2 スペインにおける人類学研究の概況

### (1) 人類学研究の歴史的流れ

スペインでは、欧州の中でも比較的早い19世紀後半から人類学研究が始まり、旧植民地であったラテンアメリカやアフリカを対象とする研究に加えて、自国をフィールドとする研究が早い時期から盛んに行われてきた。

しかし20世紀に入ると、1939年から約40年にわたって続いたフランコ独裁政権下、人類学をはじめとする人文社会科学的研究は停滞。とくにカタルーニャやバスクなどでは、文

化的な弾圧が先鋭化した。この間、知識人の多くが国外に流出したが、その後、英国や米国など諸外国で学んだ人類学者が帰国し、1960年代末頃から各地で教鞭をとるようになった。1970年代後半以降、国内の大学で新たな学部・学科の創設が進むと、1980年代にはマドリード、バルセロナ、セビリアの3都市の大学で人類学の学科が開設された。

首都のマドリード・コンプルテンセ大学 (Universidad Complutense de Madrid) では英国式の社会人類学が、バルセロナ大学 (Universidad de Barcelona) とセビリア大学 (Universidad de Sevilla) ではメキシコから帰国した人類学者によりアメリカ式の人類学が導入された。現在14の大学で人類学の講座が開かれているが、上記3大学は国内の人類学研究の拠点になっている。

## (2) 人類学界の状況

スペインには、全国の人類学者が参加する「スペイン人類学会」のような統一的な学会は存在せず、各地方(州)を中心に人類学の学術協会が組織されている。現在、地方を単位とした人類学系の学術協会はカタルーニャ、マドリード、アラゴン、カナリア、カスティーリャ・イ・レオン、アンダルシア、ガルシア、バスク、ムルシアの9件にのぼる。



(図1：スペイン州区分図)

この背景には、スペインの地方主義と各州を中心とした行政や予算編成などがある。地方により異なる言語や文化的特徴を持つスペインでは、地方主義が強く（例えば、北部のバスク地方や東部のカタルーニャ州を中心とする地域などでは分離独立を求める動きも活発）政治面でも州毎の自治行政が行われてきた。

特に 1975 年に始まる民主化・地方分権化以降は、大学における研究プロジェクトの多くが、各州の予算に基づき実施されてきたため、共同研究の主体は同じ州の大学の研究者に限られる傾向があった。これが異なる州の大学に所属する研究者のプロジェクト参加を困難にし、閉鎖的な研究状況を生み出してきたという。

しかし、こうした状況に対して、近年、国内の人類学系の協会を統合し、全国レベルの学会の組織化を目指す動きも見られる。その第一歩として誕生した、スペイン人類学協会連盟 (FAAEE) は、各地の人類学系の学術協会を総括する組織であり、各協会およびメンバー間の交流の促進と研究の進展を目標に掲げ、2 年毎に研究大会を開催している。政治的には一部の地域で分離独立の動きが強まっているのに対して、学術面ではこれまで地域的・断片的であった研究組織が統合化に向かっている点は興味深い傾向と言える。

### (3) 研究の特徴と傾向

スペインの人類学者の多くが自国を調査研究対象としているほか、スペイン以外ではラテンアメリカとアフリカの二つの地域に研究が集中しているのが特徴である。

バルセロナ自治大学の研究者が行った統計調査によれば、人類学者全体の実に 7 割が国内をフィールド（特にカタルーニャ、バスク、ガリシア）の一つとしており、これと合わせて主としてラテンアメリカまたはアフリカの国々を調査対象にしている。後者については、単にかつて植民地支配にあった国々というだけでなく、今日においては両地域から押し寄せる移民の問題など、相互の関係の深さや身近な他者に対する関心が指摘できる。

一方、とりわけ自国をフィールドとする研究が多い背景の一つには、スペインの人類学が古くは 19 世紀に始まる民俗学を吸収して成立したことが挙げられるが、それ以上に、上述の流れを経て確立した 20 世紀後半の人類学は、独裁政権下で抑圧された地方の個別文化やアイデンティティを模索する動きと相まって醸成されたことが大きな要因でもある。例えば、後述するようにセビリア大学では、1980 年代に人類学科の教員により「アンダルシアの社会文化的アイデンティティに関する研究グループ」が結成された。そこでは、アンダルシア地方を舞台に描いたピット＝リバーズの民族誌『シエラの人びと』に批判的な見解を投げかけつつ、アンダルシア文化の多様性やネイティブの側から自国の文化をいかに描くかという議論が盛んに行われてきた。

また、研究テーマについては、バルセロナ自治大学の研究者が 1978 年から 2006 年までに国内で提出された人類学の博士論文 (285 本) をもとに行った調査によれば、メイントピックとしては、歴史 (36%)、親族 (23.7%)、アイデンティティ (19%)、ジェンダー (11.15%)、

エスニシティ (9.3%)のほか、移民、教育などが主として取り上げられている。

しかし、今回の調査からはむしろ最近では、移民や教育のほか、文化遺産や観光といったテーマに関心が集まっていることが伺えた。その一側面として、スペインの場合、各大学の大学院とくに修士課程のコースに重点研究課題や特色が現れている。学部では一般的な人類学の教育が行われるため、大学間でそれほどカリキュラムの中身に大差はないものの、修士課程のプログラムでは各大学で差異が見られ、個々の大学がある特定の研究に重点を置いたコースを設定しカリキュラムを組んでいるという。例えば、バルセロナ大学には、文化遺産・博物館学、医療人類学・グローバルヘルス、観光の3つのマスターコースが設定されているほか、バルセロナ自治大学には、現代移民の研究コースが設けられている。

### 3 各機関における研究動向

#### (1) マドリード・コンプルテンセ大学

スペインで最も権威のある大学であり、人類学ならびにラテンアメリカ研究の歴史も古い。人類学科は政治科学・社会学部に設置されている一方、ラテンアメリカ地域を専門とする人類学者の大半は地理・歴史学部にも所属している。地理・歴史学部には、アメリカ史Ⅰ科（歴史学、エスノヒストリー）とアメリカ史Ⅱ科（人類学・考古学）があり、人類学者は後者に在籍している。

同大学はラテンアメリカ研究のなかでも特にメソアメリカ、とりわけ考古学研究が有名である。メキシコやグアテマラでは同大学の教員が主導する大規模な発掘プロジェクトが行われている。また、同学科には付属の考古学・民族学博物館があるのも特徴で、主として発掘資料の分析や学生の実習に利用されている。

民族学的な研究では、アンデス地域の関心も高く、1970年～80年代には集中的な民族学調査研究プロジェクトが実施され、ペルーのクスコなどの先住民社会の社会組織に関する研究が盛んに行われてきた。

これまでに多くの人類学者を輩出してきた同大学では、同大学出身の研究者による共同研究が継続的に行われている。共同研究を長年率いてきた同学科のマヌエル・グティエレス教授によると、近年の共同研究で取り扱われた研究課題は、ラテンアメリカ先住民の身体論、先住民の世界観、ラテンアメリカ先住民と近代化をテーマにした研究が行われており、常に先住民社会に対する関心が強い。

一方、博士論文や各教員の個別の研究テーマのなかでは、神話、儀礼・祭礼、宗教を扱ったオーソドックスな研究がある一方で、ここ20年くらいでは特にジェンダーや移民に関する研究が目立ってきているという。移民については、かつてはスペイン国内の地域間での移民を対象にしていたが、最近ではスペインへ移住してきたラテンアメリカやアフリカからの移民が研究対象となっている。とくに、マドリードは市内南部を中心にラテン系の移民が暮らす地域があり、それらの居住地域を対象にした調査研究が行われてきた。

## (2) バルセロナ大学

地理・歴史学部に社会人類学・アメリカおよびアフリカ史学科が設置されており、現在 40 名の人類学者が在籍している。

同大学で行われている最も組織的かつ大規模なラテンアメリカの研究プロジェクトが、ジェンマ・オロビッチ教授が代表を務める「ラテンアメリカの先住民およびアフリカ系アメリカ人の文化に関する研究グループ (CINAF)」である。CINAF は 2005 年に組織され、現在教授からポスドクまでの若手研究者がメンバーとして参加している。その数は 45 名にのぼり、多くは同大学の研究者であるが、国内の他大学、欧州の大学、ラテンアメリカのメキシコ、コロンビア、ベネズエラ、ペルー、ブラジルなどの大学の研究者も加わっており、国際的な共同研究プロジェクトである。

オロビッチ教授によると、研究の関心の中心は、ラテンアメリカの民族的マイノリティに向けられており、その文化的、歴史的なダイナミズムを扱うことに主眼を置いている。また、それぞれの国により異なる先住民の社会・文化的な状況の比較も視野に入れ、さまざまな地域を専門とする研究者を組み入れているという。

CINAF には複数の課題研究プロジェクトがあり、オロビッチ教授や他のメンバーが代表となり、ラテンアメリカ先住民に関連する調査研究が実施されている。これまでに扱った研究課題は、先住民女性を調査対象とした「ジェンダーの視点からみた先住民の近代化と社会革新」、「先住民とラテンアメリカにおける近代」、先住民の社会運動を扱った「先住民とアフロ系アメリカ人の文化：アイデンティティと市民性」など、現代の先住民が直面する諸問題に人類学的・歴史的なアプローチを試みている。これらは 2~3 年の期間で行われており、グループメンバーにより常に何等かの研究課題で実施されている状況が続いている。それぞれが異なる外部資金を獲得しており、これがグループ全体の研究の継続と発展につながっている。

また同プロジェクト以外に関心を集めている研究テーマとして、先住民の土地問題や文化遺産とアイデンティティを扱った研究のほか、先住民社会におけるメディアの普及とその影響を扱った研究などがあげられる。

## (3) バルセロナ自治大学

1968 年に創立された比較的新しい大学であるが、先述の 3 大学と並ぶ現在のスペイン人類学の研究拠点の一つである。大学付属の図書館にはカタルーニャ人類学協会を通じて寄贈された蔵書の一部として、著名なアンデスの生態人類学者ジョン・ムーラのコレクション (およそ 1600 冊) が所蔵されている。また、同大学の翻訳・通訳学部の東アジア研究科には、スペインでは数少ない日本や中国など東アジア地域を研究対象とする人類学者が在籍しているのも特色である (民博の客員教員であったブライ先生もここに所属している)。

哲学・文学部には社会・文化人類学科が設置されており、現在 29 名の教員が在籍してい

る。うち約半数がラテンアメリカ地域（ベネズエラ、エクアドル、ブラジル、キューバ、メキシコ）を研究対象にしている。

同学科では、学内外の研究者による共同研究が活発に行われているが、そのうち特に力を入れている課題の一つが教育と移民に関する研究である。この共同研究では、教育人類学の観点から、特に移民のほかマイノリティの教育問題を取り上げている。また、ジェンダー、文化的多様性、社会的格差、人種、労働市場などのサブテーマを設定し、人類学のみならず、法、経済、社会、政治など専門の異なる研究者も参加することで、移民と教育に関する様々な問題に学際的に取り組んでいる。このプロジェクトは同大学の移民研究センターとも連携し研究を進められている。

このほか人類学に関する近年の関心の傾向としては、特に都市や環境、開発の問題をテーマにした研究が際立っている。

#### （４）セビリア大学

セビリアでは「インディアス文書館」を中心に古くから植民地研究が盛んに行われてきた歴史がある。セビリア大学の歴史・地理学部には設置されているアメリカ史学科には、先スペイン史とアメリカ人類学の二専攻があり、かつては後者でアメリカ人類学のゼミナールが行われていた。現在、アメリカ史学科は史料に基づく研究を行っている歴史研究者のみで、人類学の研究は社会・人類学科のみで行われている。

1985年に開設された社会・人類学科は、ラテンアメリカとアンダルシアの二つのフィールドに基づく調査研究を特徴としており、ほぼ全ての教員が海外（主にラテンアメリカ）と国内（アンダルシア）の二つのフィールドの研究にあっている。

研究体制としては、1980年に「アンダルシアの社会・文化的アイデンティティに関する研究」をテーマにした研究グループが立ち上げられ、学科の教員の大半が所属している。アンダルシア文化の研究については、ジュリアン・ピット＝リバーズの『シエラの人びと』で取り上げられたアンダルシアの民俗文化の単一的な見方に対するアンダルシア人（ネイティブの側）からの批判と見直しが行われたことがきっかけであるという。この研究グループでは、外国人の研究者からスペイン人がどのように見られてきたのかを検討すると同時に、ネイティブの側からどのように研究するかが模索されてきた。

他方、ラテンアメリカに関する研究では、同学科の創設者の一人で最初に教授に就任したインドロ・モレノ教授が中心となり6年前にラテンアメリカ研究所が設立された。初代所長も務めたモレノ教授によれば、同研究所は、従来各研究分野で個別に行われてきた様々な研究プロジェクトを多様な分野の研究者がサポートしていくことを目的としており、人類学のみならず、教育、歴史、環境、経済など他学科のラテンアメリカ研究者と連携した学際的研究を実施している。

同研究所が中心となり取り組んでいる最近の重点研究テーマは、ラテンアメリカの先住民社会におけるグローバル化とローカル化の問題で、近年のラテンアメリカ諸国の社会運

動やナショナリスト的な運動やこれらに関わる諸現象が住民のアイデンティティの再活性化にいかなる影響を与えているかについて調査研究が行われている。この研究課題に沿って、同研究所では、年に数回研究会や成果公開の講演会を開催している。また、国内外の他のラテンアメリカ研究機関との連携やネットワーク構築にも努めているという。

この他、同学科の教員によるラテンアメリカに関する研究テーマとしては、かつては宗教や儀礼に関する研究が盛んであったが、現在は先住民の権利、多文化主義、移民の問題等が中心となっている。移民については15年ほど前から急速に増えており、とくに南米やアフリカからアンダルシア地方へ入ってきた移民を対象にした研究を行っている。

#### (5) スペイン高等科学研究院

スペインを代表する国立の高等研究機関。大きく8つの研究分野に分かれており、その一つにあたる人文学研究所には人類学の部門があり、アンデスとメソアメリカをフィールドとする2名の研究者が在籍しているほか、歴史学の部門にもマヤ研究者が1名在籍している。人類学の部門は、かつてはスペイン・アメリカ人類学という名称で、スペインと南米を専門とする人類学者が中心であったが、最近ではアフリカの専門家が増えてきたこともあり名称を変更している。

近年のラテンアメリカ関連の研究については、数年前までコロンブスのアメリカ大陸発見500年を期して、スペインではさまざまなイベントや国家的な行事も行われたことから、この周年行事の前後に、関連するラテンアメリカの文化や歴史に関する研究が同研究所を拠点に重点的に行われていた。ただ、これをピークに以後は、大型の研究プロジェクトは行われていないのが現状である。しかし、同研究所のラテンアメリカ研究者のビジャリア氏は、近年の国内の研究動向として、スペイン帝国期に関する研究が盛んに行われており、これに関連して、当時のスペインの知識人が見たアメリカ大陸、彼らによる先スペイン期の文化や異文化の理解についてなど、再びラテンアメリカについても関心が集まる可能性がある点を指摘していた。

#### (6) アメリカ博物館

アメリカ大陸の考古・民族学資料を収蔵する国立博物館。収蔵品の多くは18世紀に収集されたもので、このほかに植民地時代に国王に献上されたもの、19世紀以降に個人の収集家から寄贈されたコレクションがある。中米、アンデスとアマゾン地域を中心とする南米地域のほか、北米の北西海岸の先住民のコレクションも展示されている。

展示場は、大きくアメリカ大陸の歴史を辿るセクションと、テーマ毎のセクションの二つに分かれている。前者では、新大陸への西洋人の到着から植民地時代を経て、現在の生活文化に至る流れになっている。後者では社会、宗教、伝達（コミュニケーション）という展示室が設けられ、アメリカ大陸の異なる地域の文化の比較展示を行っている。常設展示は、リニューアル等が検討されているが、ここ数年のスペインの財政難影響により停滞



している。

一方、特別展示では、2015 年はメキシコに関する展示が行われており、調査当時はメキシコの「死者の日」をテーマにした展示のほか、「マヤの織物」展が開催されていた。後者では、実際にメキシコから先住民女性が来訪し、来館者を前に実演を行うなど、興味深いイベントが行われていた。

#### (7) 国立人類学博物館

世界の民族資料を展示する国内で唯一の国立博物館である。展示の構成については、スペインの人類学者の研究対象と同様の地域的な偏りが見られた。3 階建ての展示場は、全世界の地域がくまなく展示されているのではなく、アジア、アフリカ、アメリカの 3 つの地域のみ割り振られており、ヨーロッパやオセアニアについては（スペースの都合として）展示されていない状況である。アメリカ地域の収蔵品は、南米が中心で、中米・カリブ地域が 3 割、北米は 1 割程度に留まっている。特に 19 世紀に収集されたアマゾン地域のものが多いのが特徴で、アメリカ地域の全コレクションのうち 4 割がアマゾン関連である。

同博物館では、2015 年から 2016 年にかけて南米に関連した企画展示を連続開催しており、ラテンアメリカへの関心が伺える。ただ、この背景には、数年前に同博物館の人類学者がラテンアメリカの専門家になったことも関係している。連続企画のテーマは、(1) ペルーを中心に活躍したスペイン人の写真家マルティン・チャンビの写真展、(2) エクアドル・ティグアの民衆絵画展、(3) アンデスのカーニバルの写真展である。

企画展を担当した同館スタッフのアロンソ氏（エクアドルの専門家）によれば、これらの企画展の実現にあたってはマドリード・コンプルテンセ大学の教員の協力を得るなど、地域の専門家や研究機関との連携を行ったという。また、ティグア展については、現地のコミュニティの協力も重要で、博物館側は展示される当該社会の人々がどのような展示を望んでいるのかなどの点を重視しつつ、数年間双方で協議しながら企画を練り上げてきたという。展示にあたっては、現地社会の人々が制作した作品だけでなく、制作活動の様子や生活の風景を撮った写真のほか、インタビュー映像も放映するといった工夫が施されていた。

また同博物館も政府の財政難の影響を受け、人員削減などの問題を抱えていたが、大学の研究者と有機的に連携することで、人員や情報資源の不足を補い、新たな企画に着手している状況が確認された。

## 4 総括

- (1) スペインでは経済危機に直面した 2012 年以降、人類学をはじめ学術界でも、政府の財政難の影響により研究費等が縮小され、新たなプロジェクトや試みを行うには厳しい状況にある。そうしたなか、各大学では従来のように地方（州）を主体とする、国内の研究者のみの共同研究ではなく、地域横断型の研究プロジェクトや他国とく

に欧州の大学との連携や協力により新たな取り組みに着手していることが今回の調査から明らかになった。国内では政治的には一部の州で分離独立の動きは強まってはいるが、学術面においては全国レベルの学会が組織されつつあるなどこれまで地域的・断片的であった研究組織が、統合化に向かっており、興味深い傾向であると言える。

- (2) ラテンアメリカの人類学研究についても、イベロアメリカ人類学者ネットワーク (AIBR) と呼ばれる組織が 2002 年に発足し、ラテンアメリカの人類学研究の普及と促進の中心となっている。同組織はここ 3、4 年で急速に組織を拡大しており、従来は情報共有と研究誌の出版が中心であったが、2015 年に第 1 回目の研究大会がマドリッドで開催された。同大会には 100 件以上のセッションが組織され、約 800 名が参加したことが報告されている。AIBR には現在、スペインはもちろん、ヨーロッパとアメリカの両大陸の人類学者がメンバーに加わり、その規模を拡大している。今後は毎年研究大会を開催する計画であり、国内のラテンアメリカに関する人類学研究の基盤が固められつつあることが確認できた。現在スペインでは学術面だけでなく、資金面でも地域を超えた連携の必要性が高まっている。その意味で、今後も従来の枠組みを超えた新たなメカニズムが更なる広がり的重要性を持って展開していくことが予想される。
- (3) スペインの研究者の間で、ラテンアメリカはフィールドとしての重要性は変わらず、関心も高い。その要因としては、単に旧植民地であったことだけでなく、現在もラテンアメリカからの移民など、相互に人の往来がある両地域間の関係の近さが指摘された。
- (4) 近年の研究対象として、ラテンアメリカの先住民社会への関心は依然として高いが、スペイン国内におけるラテンアメリカの移民の問題も注目が集まっている研究テーマの一つである。こうした研究の傾向は、国や社会全体の関心とも呼応していることが伺える。

#### 【参考文献・資料】

Hugo Valenzuela García and José Luis Molina González

2010 'Beyond the Pyrenees' : Social Anthropology in Spain.

Mónica Martínez and Gemma Orobitg

2015 Etnografía contemporáneas de América Latina: Breve genealogía intelectual de la antropología americanista en el Estado español.

ピット=リバーズ, J. (野村雅一訳)

1980 『シエラの人びと : スペイン・アンダルシア民俗誌』, 弘文堂.

## 資料2 RAによる研究動向調査報告書

### ○ 先住民による稀少な自然資源の利用の環境人類学」についての調査結果

地域文化学専攻 高木仁

#### 1. はじめに

本稿では、東ニカラグア、ミスキート（又はミスキート・インディアン）のアオウミガメ漁撈を例にして課題「先住民による稀少な自然資源の利用の環境人類学」についての研究動向の調査結果（1）を報告する。

稀少な海の生物資源の利用の倫理について環境人類学においても研究がすすめられている。そこでは極北地帯に暮らすイヌイトによる捕鯨の利用や保護を視野にいたした総合研究（岸上 2003, 2012a, 2012b, Kishigami 2013）やシベリアに暮らすチュクチ族を例にして鯨類の先住民による利用と生物保護の相剋の問題が議論されている（池谷 2007）。ウミガメ類もおなじく稀少な海の生物資源とかぞえられてきたが、それが災いしてどういった摩擦が起きているのか、その持続可能な利用や保護についてどういった研究がなされているのかはよくわかっていない\*1。

ウミガメが熱帯・亜熱帯地域をはじめ、ひろく諸民族の暮らしに影響をおよぼしてきたことは度々指摘されているのだが、現在では稀少生物種の一つにあげられるほど、その数も減少したと考えられている。古くは日本でも南西諸島や本州の各地で信仰の対象となってきたともいわれているが、日本の市街地に暮らしているとアカウミガメやアオウミガメを捕えたり、食したりするなどで争いごとがおきているという話はあまり耳にしないので、それをめぐる争いごとについて知る機会はめったにないのだが、日本からはるか東の新大陸の中央部に位置するカリブの海では、この海の生き物をめぐって小競り合いや争いがつづいている場所がいくつもあるということである。本稿ではまず、カリブ海域でアオウミガメの開発や文化的な利用が問題視されている地域について調べ、その分布域を報告することとした（結果 1）。また、持続可能な利用について特に著名な 3 つの論考について詳しく調べ、その主張をまとめた（結果 2）。

カリブ海域および一部熱帯・亜熱帯海域のアオウミガメの文化的な利用については断片的な記載が数おおくのこっており、研究の対象とできたのはその一部でしかない。結果 1)の研究方法は、調査した文献の中で、主に 1990 年代以降に発表された文献をもちいてカリブ海でアオウミガメの文化的な利用が問題となっている地域とそこでの争いの一部事例を記載した。結果 2)では特に引用される各論考をまとめた。それぞれ①ジョルダーノ（2003）の回遊型動物の複数領域での共有への批判的見解として、カリブ海の複数国家域でのアオウミガメの保護方法を提示したキャンベルの論考（Campbell 2007）、②アオウミガメの開発や消費についてのインド洋周辺海域での事例をあつめ、ウミガメ類の文化的な利用の史的発展を一般化したフレイザーの論文（Frazier 1980, 1997）、③ウミガメ類をふくむオセ

アニアの民族の伝統的な保護方法とあたらしい共同体基盤型の受容についてのヨハネス研究 (Johannes 2002) が主である。考察では結果をもとに課題「先住民による稀少な自然資源の利用の環境人類学」の研究余地をかんがえることにした。

結果にはいるまえにまず、カリブ海のアオウミガメの生態と保全について若干の補足説明をする。Bjorndal (1981)による編集本は、生態学の専門家による豊富な情報量をふくみ、とくに各論考で参照にされているようであったので、本稿でも参考にすることとした。カリブ海域ではウミガメ類全7種のうち、6種が生息しているが、ウミガメ類でも種類ごとに産卵地、餌場、回遊路、生息数にかなり差異があるとのことである。カリブ海では6種のうち特にアオウミガメ、タイマイ、オサガメの3種の産卵地が広範囲で確認されており、ウミガメの研究は実に多岐にわたる。中米、コスタリカのカリブ海沿岸に位置するトルトゥゲーロ国立公園の一連の研究を一瞥した限りでも、アオウミガメの生態一般、アオウミガメの消化機能や胃の内容物、産卵地の個体数、DNAを用いた研究、近年では産卵後のウミガメの回遊の動きの把握にむけてリモートセンシング技術をつかった研究がさかんにおこなわれている。

## 2. 結果

### 1) カリブ海のウミガメをめぐる摩擦

ここではカリブ海でウミガメ類をめぐる問題が浮上している地域についてしらべた結果を報告する。国連や所関連国際機関へ提出された詳しい報告書といくつかの類似する研究があるので、それを軸にして調べた結果を報告する (Bräutigam and Eckert 2006)。

Bräutigam and Eckert (2006) は特にカリブ海に特化しているので簡便であった。なかでも大小28の国や島々のウミガメ類をめぐる法律、開発、国際取引、管理、法の効力についての比較結果が報告されていたので実に便利である。各地の研究者たちの協力を仰いだとのことで、各28地域や国についての記載も総535頁の大半を占めていてなかなか詳しい。カリブ海の北東部にあたり島数もおおいリーワード諸島の仏や英、米の海外領土比較は便利である (右図)。報告書の大部分 (51~518 ページ) は各国の法律、開発、国際取引、管理、法の強制力についての記載である。その前半の17~51 ページにカリブ海のウミガメ類についての上記5項目の全体像が描かれている。全体像をつかむため、その法律と管理にのこる表記や調査結果に着目し

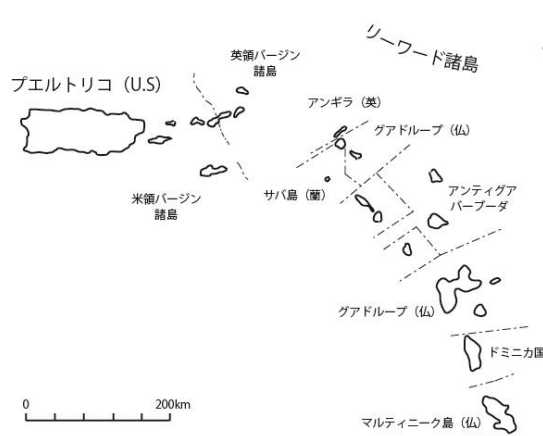


図1. リーワード諸島海域

た。

報告書の 20 ページの表 1 には、大小 28 のカリブ海の各地域、国の法制度がまとめられている。情報量のおおい表なので転載はしない。表には各国々といくつかの島々に漁が禁止となっているのか否か、そうでないとするなら禁漁時期はいつからいつまでなのかや捕獲頭数の制限はあるのか、ライセンスの有無があるのかなどがまとめられている。例外はあるもののサバ島（蘭）、グドループ（仏）、マルティニーク（仏）、中央アメリカ各国、コロンビアとベネズエラといった 28 の国、島々のうち 16 の場所で捕獲は禁止され、ウミガメは保護下にあるとある。一方で、36 ページの表 3 はおなじ大小 28 のカリブ海の各地域、国を対象にその管理上の問題が密漁、逮捕、国際取引、法を順守する意思などの有無があるかを表にしたものである。おおまかな記載であるのだが、これだけの国と地域を比較してみるためにはとても簡便である。この表からそれぞれ国内での密漁は 28 の国や島のうち、ほぼ全域の 27 カ所に相当する場所で確認され、違法な国際取引が 18 カ所で確認されるという。いくつかの場所では法の存在をしりながらも、逮捕されるケースにまで発展するほどになることも記録されている。これらの表を照らし合わせると、表面上、国の法制度の枠組みが整っているが、管理問題の内実では、規模の大小はわからないが密漁、国際取引、逮捕などがカリブ海の各国や各島々で確認されているということである。

各地での報告についても注目してみたい。Bräutigam and Eckert (2006) の報告書の中でも小アンティール諸島部は研究の蓄積が比較のみられるようであるのだが、Melyan (1983) は特に引用がめだつ。Melyan (1983) は小アンティール諸島のなかでも特にウミガメ類が最も豊富だといわれているアンギラでの 80 年代の踏査記録である (Carr, A. et al. 1982, Melyan 1983)。Melyan はウミガメの生態の専門家であるが、踏査してみるとアンギラはウミガメの産卵地で広範囲にみつかった。ウミガメも食されていたが、おなじくしてロブスターや巻貝などを採る潜水漁たちに海中で使うスピアガンが普及し、ウミガメの捕獲が増加していることに警鐘を鳴らしている。アンギラにはウミガメ肉が流通する国内市場があり、恒常的な捕獲量が増加していることを危惧していた。現代でもそうした最近のアンギラのウミガメの開発や文化的な利用はつづいているようで、最近では地元漁師にアンケート調査をおこなうなどしてそれに接近する試みがみられている (Godley et al. 2004)。こうした状況は海外領土のおおいリーワード諸島の島嶼部から西にあたる大アンティール諸島の国々（ドミニカ共和国）などでも問題視されているようであった (Flemming 2001, Reuter and Allan 2006 を引用して Revuelta 2012)。

大アンティール諸島から南西に位置するコスタリカはエコツーリズムや自然保護に力をいれている国として一般に知られているのだが、こうした自然保護先進国でもウミガメ類の開発や文化的な利用は問題視されているという研究もある (Taft 1999)。それら研究によるとカリブ海側の中心都市のリモンでは、地元漁師によるアオウミガメの捕獲がおこなわれてきたのだが 1990 年代後期になるとその漁が問題視され、裁判にまで発展し、違法判決により禁止となったということである。ウミガメをめぐる摩擦は自然保護先進国でもみら



図2. パナマーコロンビアーベネズエラのカリブ海岸

れる。

コスタリカから南下して、パナマのカリブ海岸や中南米の経済大国として知られるコロンビアやベネズエラの海でもウミガメをめぐる摩擦はおきているようである。パナマのカリブ海岸というのは一般的にはあまりよく知られているところではない

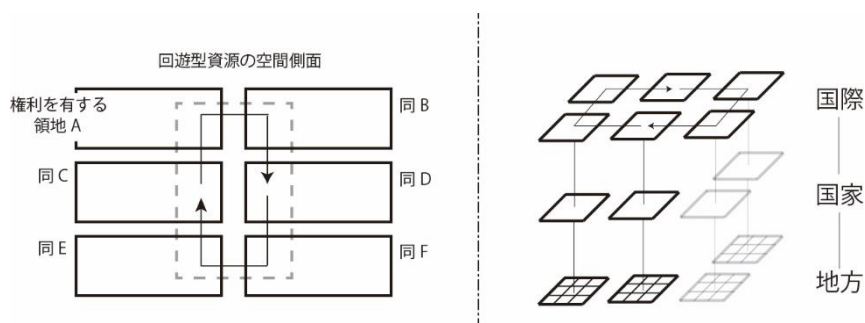
が、Bräutigam and Eckert (2006) の報告書には北西海岸のボカス・デル・トーロ列島(Boca Del Toro)、Ngäbe-Buglé の自治区、中部都市の Colón, 東部カリブ海岸に位置するクナ族の民族自治区 (Comarca de Kuna Yala) やザパティージャ海岸やチリキ海岸の村々といった広範囲での消費が問題視されている (上図2)。パナマから南に海岸線をおなじくするコロンビア領内でもグアビジャ半島、その州都リオハカ市、サンアンドレス列島、ロザリオ半島 (カルタヘナ)、モロスキージョ湾などでの漁があって捕獲数がおおきく、問題視されているとのことであった。グアビジャ半島での漁は特に盛んで地元漁師や Wayúu 族による捕獲も問題視されているらしい。コロンビアではウミガメの消費地は海岸部だけでなく内陸にも及ぶ。解体されたウミガメ肉は内陸のマグダレナやボゴタ地区へと流通する。グアビジャ半島で国境をおなじくするベネズエラでも東側のベネズエラ湾やパラグアナ半島での捕獲が問題視されているようであった。

## 2). ウミガメの持続可能な利用へむけての幾つか論考

では次にウミガメの持続可能な利用へむけてどのような研究がなされているのか、以下に3つの研究について調べた結果をまとめた。

### ① 回遊型動物の複領域での共有 (Giordano 2003) とウミガメへの応用 (Campbell 2007)

ジョルダーノ (Giordano 2003) 回遊型動物にたいする複数権利者による共有論にたいし、キャンベル (Campbell 2007) は、みずからのカリブ海のウミガメ類についての調査・論考をもちいて批判的な検討をおこなっている。次ページの図3の左は批判対象となったジョルダーノの共有論である。回遊型動物にたいし、その空間を占める権利者同士での共有という点が特徴である。図でしめされているのは、国家や島嶼の領域をこえて回遊する動物の動き (矢印) とそれにまたがるように国家や島嶼の領域、複数の権利帰属者や機関がその共有にかかわるということである。この複数権利者での共有や保護のとりくみが、ウミ



出典:左は Giordano(2003)より。右は Campbell(2007)より

図 3. ウミガメを含む回遊動物の持続可能な資源化案の比較

ガメに限らず回遊型動物一般の持続可能な利用にとって重要になるという主張である。これにたいしてキャンベル (2007) はこれまでの

いくつかの論考や現地調査をもとにそのウミガメ類への適用の可能性について議論している。キャンベルは一般化されたジョルダノの研究を高く評価するもののジョルダノのすこし平面的で一元的すぎる複数地域の権利者、決定機関による共有ではなく、より垂直的に地方-国家-国際というような見方を提唱している\*2。

## ② 小規模社会のウミガメ利用の発展様式とウミガメの保護 (Frazier 1980, 1997)

小規模社会のウミガメ利用の発展様式は、インド洋を中心にウミガメの利用について研究成果をのこしてきたフレイザーの 80 年代の主張である (Frazier 1980)。フレイザーはウミガメの開発や文化的な利用よりも生態学的な業績がおおいが、ほぼ一貫してウミガメ類の利用や生態に焦点をあてている。カリブ海の研究に与える影響も少なくない。少し古い研究だが興味深いので引用することにした。フレイザー (Frazier 1980) は、広くタンザニアやケニア、ソマリアなどの海岸沿いやイエメン、インド海岸、シラキースなどの島嶼にいたるまでのウミガメ類の利用や生態について調べあげた結果を報告したものである。ぼうだいな情報量が集められたことはその論考にも記録されているが、こうして収集された事例資料をもとに、人類のウミガメ類の開発や文化的な利用の発展様式の図式化がこころみられた。次ページの図 4 はそれを引用してしめたものである。収集された事例資料でしめされるのは、開発の強度によって、ウミガメの漁撈者の行動とその即時的な利益が異なり、複数の事例をこの様式にあてはめることで理解をこころみてはどうかという主張がなされる。例えば閉じた狭い社会で開発強度が弱い時は、漁撈者のみあるいはその家族、子供たちのみがその即自的な利益をこころむる。市場経済化がすすみ、ウミガメの開発の強度が強くなると、ウミガメは売られてその利益はお金になるという図式である。

## ③ ウミガメを含むオセアニアの伝統的な海の慣習の変革 (Johannes 2002)

ヨハネスの伝統的な海の慣習的な管理 (1978) は著名だが、2002 年にもウミガメ類の開発や文化的な利用もからむ興味深い論考を残していたので調べた。オセアニアのウミガメ

の分布や産卵地については Maison(2010)がくわしいのであわせて引用した。ヨハネス (2002) は前掲 (1978) で伝統的な海の慣習があることが主張されていることが前提となつての論述である。ヨハネス (2002) の主張は前掲 (1978) での在地の人々の伝統的な海の保護や管理、規制といった慣習が、あたらしいオセアニア型の共同体管理方式へと変革しているという主張である。ヨハネスはその変化の大きさをルネサンスともじって表現したのである。主張はバヌアツ、サモア、クック諸島、フィジー、パラオなど各島々の記載から裏付けられる。自身によるものといくつかの研究者の現地の記録をもとにこうした島々で、伝統的な海の慣習的な管理がいかに在地なりに国際的な基準をとりいれてオセアニア流の共同体管理になっているのかの具体例がしめされている。なかでもバヌアツの例はくわしい。

バヌアツでは 1990 年代から 2000 年初頭にかけて行政の漁業部門の助言をうけて、伝統的な海の慣習的な管理に国際的な共同体管理のやり方を一部とりいれた村落が倍増したようで、ウミガメ漁も調査した 21 村落のうち、11 村落で禁止にしたり過去数年のあいだはなんらかの捕獲制限をしたりしたようである。論考ではこうした事例をもとに伝統的な海の慣習の変革が主張される。

### 3. 考察

以上が今回調べた結果である。まずは調査結果をまとめてみる。結果 1) では、アオウミガメの産卵地や生息域付近となるリーワード諸島やコスタリカ、パナマ、コロンビアをはじめカリブ海広域でアオウミガメをめぐる、大小さまざまな小競り合いや争いがおきていることがわかった。結果 2) では、それぞれ①すでに回遊型の動物 (ウミガメ類) にたいする複数の国や諸島領海をふくんだ超域コモンズのような案の構築が試みられていること (Giordano 2003, Campbell 2007)、カリブ海だけでなくインド洋やオセアニア海域でも②ウミガメの開発や文化的な利用を段階的な発展様式で一般化するような試みがなされていること (Frazier 1980, 1997)、③ウミガメを含むセアニアの伝統的な海の慣習の変革について研究 (Johannes 2002) が試行されていることがそれぞれにわかり、ウミガメの持続可能な利用へむけて、多角的な研究がすすめられていることがあきらかになった。

これをうけて研究余地について考える。カリブ海での広範囲のウミガメをめぐる争いとそうした争いごとを解決しようとするような持続可能な利用についての施策があることは



出典:Frazier(1980)より

図 4. ウミガメ開発の発展図式



わかってきた。一方、現地での詳しいウミガメの開発や文化的な利用についての研究がどれほどすすんでいるのかについては疑問が残った。それは分野を問わずこうした論文がカリブ海のウミガメの開発や文化的な利用については古典的なパーソンズ（1962）やニーチマン（1972, 1973）の研究を引用したものがおおいことからもうかがえる。これら研究の引用はカリブ海だけでなくそのほかの熱帯・亜熱帯海域でも散見されるようである。このアメリカ地理学バークレー学派にかぞえられる2人の主義主張への批判的な見解がないわけでは決してないのだが、それは必ずしも類似するような研究対象や方法でもってつよく批判されているとはいえない。課題「先住民による稀少な自然資源の利用の環境人類学」の研究余地を探するため、次は頻出するパーソンズ（1962）とニーチマン（1973）の視座についての研究が必要だと考えた。

\*1別稿にてニカラグア、ミスキート諸島での網でのアオウミガメ漁を報告した（高木 2012）

\*2 提示した図は結果2で参考にした各論考 Giordano（2003）と Frazier（1980）にのこる図表を引用させていただいた。また Campbell（2007）での主張は、Giordano（2003）と比較するために簡略化した形（図3右）で提示させていただいた。

## 文献

- 池谷和信 2007 「人類の生態と地球環境問題－ポスト社会主義下におけるクジラの利用と保護－」． 煎本孝・山岸俊男編『現代文化人類学の課題：北方研究からみる』 pp 100-125. 世界思想社.
- 岸上伸啓 2003 「カナダ極北圏ヌナヴィク地域におけるシロイルカ資源の共同管理について」． 岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（民博調査報告 46）． pp 101-129. 国立民族学博物館。
- 2012a 「米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について」． 国立民族学博物館研究報告 36 (2) pp 147-179. 国立民族学博物館。
- 2012b 「アメリカ・アラスカにおける先住民生存捕鯨について」． 岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』 64-82. 成山堂書店。
- 高木仁 2012 カリブ海沿岸での先住民によるウミガメ捕獲－ニカラグアにおけるミスキートの網漁の事例． *Biostory* 18. pp 93-99.
- Bjorndal, K. 1981 *Biology and Conservation of Sea Turtles*. Smithsonian Institution Press, Washington, DC.
- Bräutigam, A. and Eckert, K. 2006 *Turning the Tide: Exploitation, Trade and Management of Marine Turtles in the Lesser Antilles, Central America, Colombia and Venezuela*. TRAFFIC international, Cambridge. UK.
- Campbell L. 2002 Science and sustainable use: Views of conservation experts. *Ecological Applications* 12 (4): pp1229-46.
- 2007 Local Conservation Practice and Global Discourse: A Political Ecology of Sea Turtle Conservation. *Annals of the Association of American Geographers* 97 (2). pp313-334.
- Carr, A. et. al. 1982. Surveys of sea turtle populations and habitats in the Western Atlantic. NOAA Technical Memorandum. NMFS-SEFC-91. US Department of Commerce.
- Fleming, E. 2001. *Swimming Against the Tide: Recent Surveys of Exploitation, Trade, and Management of Marine Turtles in the Northern Caribbean*. TRAFFIC North America, Washington, DC, USA.
- Frazier J. 1980 Exploitation of Marine Turtles in the Indian Ocean. *Human Ecology* 8 (4). pp229-370.
- 1997 Sustainable development: modern elixir or sack dress?. *Environmental Conservation* 24 (2): pp182-193.
- Giordano, M. 2003. The Geography of the commons: The role of scale and space. *Annals of the Association of American Geographers* 93 (2): pp365-75.
- Godley, B. et al. 2004 An Assessment of the status and exploitation of marine turtles in Anguilla. pp 39-77. *Assessment of the status and Exploitation of Marine Turtles in the UK oversea territories in the Wider Caribbean*.
- Johannes, R 1978 Traditional marine conservation methods in Oceania and their demise. *Annual Review of Ecology and Systematics* 9 pp349-364.
- 2002 The Renaissance of Community-Based Marine Resource Management in Oceania. *Annual Review of*

- Ecology and Systematics*, 33 pp317-340.
- Kishigami N. 2013 Aboriginal subsistence whaling in Barrow, Alaska. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J.M.Savelle(eds.) *Anthropological Studies of Whaling (Senri Ethnological Studies 84)*, pp101-120. Osaka:National Museum of Ethnology.
- Nietschmann, B. 1972 Hunting and fishing focus among the Miskito Indians, Eastern Nicaragua. *Human Ecology* 1 (1) pp41-67.
- 1973 *Between Land and Water; The subsistence ecology of Miskito Indians, Eastern Nicaragua*. Seminar Press.
- 1979 Ecological Change, Inflation, and migration in the far western Caribbean. *The Geographical Review* 69 (1): pp1-24.
- Maison, K. Green Turtle Nesting Sites and Sea Turtle Legislation throughout Oceania. *NOAA Technical Memorandum NMFS/SPO-110*. USA.
- Meylan, A. 1983 Marine turtles of the Leeward Islands, Lesser Antilles. *Atoll Research Bulletin* 278, pp 1-24.
- Parsons, J. 1962 *The Green turtle and man*. University of Florida Press.
- Reuter, A. and Allan, C. 2006. *Tourtists, Turtles and Trinkets: A Look at the Trade in Marine Turtle Products in the Dominican Republic and Colombia*. TRAFFIC North America, Washington, DC, USA.
- Revuelta, O. et al. 2012 Protected areas host important remnants of marine turtle nesting stocks in the dominican republic. *Oryx* 46 (3), pp 348-358.
- Taft, C. 1999. Lawsuit bans sea turtle killing in Costa Rica. *Velador* Spring 2.

## ○ カナダにおける博物館とソースコミュニティの連携に関する研究の動向調査

比較文化学専攻 呂怡屏

### 一、はじめに

本調査の目的は、カナダにおける博物館とその収蔵品を生み出した元のコミュニティすなわちソースコミュニティ (source community) の連携に関する博物館人類学の研究動向を明らかにすることである。

博物館とソースコミュニティとの関係については、1980年代から盛んに議論されてきた。中でも「博物館の民主化」という課題 (Ames 1986: 59)、および「接触領域としてのミュージアム」(Clifford 1997: 191-194) という概念を中心に議論が展開された。その後の研究者たちは、この議論を踏まえて、博物館に内在する不均衡な権力関係や、展示の文化表象の政治性に注目して、論じてきた。

このような博物館とソースコミュニティに関する研究は、社会的背景と深い関わりがある。岸上 (2009:134) によれば、「1960年代から、アメリカにおける黒人の公民権運動の影響を受けて、入植社会 (settler society) 国家で、先住民としての権利獲得の運動が展開されてきた」という。それ以降、先住民に関する国家政策、教育方針、民族認定、自決権、資源と開発の問題がより重視されるようになった。また、先住民の知識の権利と保護、博物館における先住民の表象とその際の先住民との連携、文化復興と自己主張など先住民問題について、様々な展開が見られるようになった。

そこで本調査では、カナダの先住民に関する資料の収集の歴史を振り返り、1988年以降のカナダの先住民の文化遺産保護に関する制度を構築するプロセス、博物館における先住民の収蔵品の活用、およびソースコミュニティの反応に関する調査をおこなうことにした。

### 二、カナダにおける民族学資料収集の始まりと検討

アメリカ先住民の物質文化に関する収集の歴史的経緯を振り返ると、カナダとアメリカの人類学者の間では、先住民への視点が異なることが分かる。具体的には、アメリカでは先住民に関する収集が、国家アイデンティティの構築と結び付けられ、大量のアメリカ先住民のモノが収集されてきた。一方で、カナダはイギリスと同じように、植民地政策が最優先され、19世紀におけるカナダの学術研究機関は、カナダ先住民に関するモノの収集活動に強く力を入れてこなかったという (Willmott 2006: 213-225)。

カナダでは、1900年代になってようやく研究者や収集家により先住民の資料を博物館に寄贈する動きが始まった。1930年代から1960年代の間に、カナダ政府が先住民による工芸を、独自の芸術表現として、国家のアイデンティティを構築する要素として認める動きが生まれた。博物館側も、先住民文化の衰退を危惧し、1950年代からトーテムポール

を博物館に収蔵する活動を始めた。その結果、カナダにおける北西海岸先住民の木彫や儀礼用具の多くが、博物館によって収蔵されるようになった (Jonaitis 2006: 235-240)。

しかし、20 世紀後半になると、博物館学と人類学の研究において、このような植民地時代の収集・展示のあり方に対する反省的な視点があらわれてきた。それにより、植民地主義の文脈における博物館の収蔵の歴史と、収蔵のイデオロギーが検討され始めた。具体的には、コンテキストから切り離したモノを保存することで文化の保存ができるのか、また、博物館の収蔵品を分類することによって、モノの再文脈化がいかに進められるのかなどの課題を中心に議論が展開された (Vergo 1989; Hooper-Greenhill 1992: 5; Nicks 2003:20; Pearce 1995: 20-21)。

### 三、先住民運動と博物館の反応

1983 年の International Council of Museums (ICOM) の会議において、博物館の役割をどのように活性化するかという問題が議論された。それを受けて、博物館が展示・教育活動をする際に、様々なコミュニティの参加を仰いだり、収蔵品を取り扱う際にソースコミュニティと連携したりする動きが強まった。博物館のアクセシビリティ (accessibility) が拡大するようになっていったと言ってよい (Ames 1986: 59)。

その中、カナダの博物館と先住民との対話が注目されたきっかけは、1988 年のカルガリーでの冬季オリンピックの開催の際に、オリンピック記念事業として開かれた「The Spirit Sings: Artistic Traditions of Canada's First Peoples」展である。先住民はこの展示を、自分たちの土地所有権の要請を無視するものと強く批判した。この展示をきっかけに、先住民の自文化を解釈する権利、および協賛者が博物館に与える影響の検討もされるようになった (Harrison and Trigger 1988; Jones 1993; Bell and Napoleon 2008)。また、この展覧会により、「展示する権利の所在、展示する側と展示される側の関係性、博物館の社会的責任など、博物館に潜在していた問題が浮かび上がってきた」(吉田 2013b: 117)。

この展示によって引き起こった論争に対して、国際民族学博物館委員会 (ICOEM) は、先住民に関する活動を起こす際に、できるだけその民族集団に属するメンバーをコンサルタントに就任させ、当該文化を尊重することを、各博物館に要求した (Harrison and Trigger 1988)。その後、1992 年に「Turning the page: Forging New Partnerships between Museums and First Peoples」が作成された。その中では、収蔵品の重要性とアクセシビリティ、博物館とソースコミュニティとのパートナーシップの構築、および先住民の意見を展示・収蔵の仕事に反映させることが強調された (Assembly of First Nations and the Canadian Museums Association 1992:12-20)。この「Turning the page」により、各博物館における先住民に関する収蔵の運用政策を再評価・再体系化する動きにつながった (Black 2013: 787)。

しかし、「Turning the page」は法律的な制約力がなく、博物館とソースコミュニティ

の連携のあり方は、博物館側が決めるものになってしまう可能性も指摘された (Wilson, Erasmus and Penney 1992:6-11)。一方で、博物館とソースコミュニティ両方の価値観を対等に捉え、双方の意見の衝突に関する交渉の過程にも注目が集まるようになった (Herle 1994:44-45)。

#### 四、博物館とソースコミュニティの連携

民族学の収蔵品は博物館では標本資料と見なされてきたが、ソースコミュニティにとって、その収蔵品は彼らの生活の一部であり、当該民族のアイデンティティを形成する際に不可欠な要素である (Clavir 2002: 72-73; Watson 2007: 273)。近年、先住民の人々は文化を復興するため、博物館の収蔵品を活用しようとする考え方が多くなった。

このような動きの中で、博物館とソースコミュニティの相互関係に関する研究にはテーマが二つある。一つは、植民地主義の文脈において政治手段として用いられる博物館という装置に対する批判的研究である (Nicks 1992:87)。もう一つは博物館と先住民との連携や、そのあり方——パートナーシップ、チームワーク、リエゾン——についての研究が挙げられる。

さらに、議論の要点は二つに分けられる。一つは博物館における収蔵品の活用・展示に関する連携、取り組む際の課題を解明することである。博物館と先住民の展示による共同作業によって、先住民が自分の文化を解釈する権利を得るといったような動きも、近年の研究から報告されている (Conaty 2003)。

一方、博物館から見て、連携の成果を展示で公開する際に、どのような手法を用いれば、正確に先住民の考え方を伝えるかも課題となる (Phillips 2003: 166)。また、連携の成果を展示で公開できない場合もある。それは、先住民がもつ知識権利を尊重する場合や、博物館の運営の判断によるものである (Black 2013:791)。

#### 五、博物館収蔵品の返還

博物館とソースコミュニティの連携に関わるもう一つの動きに、収蔵品の返還の要求がある。先住民の収蔵品に関する所有権は、いくつかの主体に関わっているために、複雑な問題となる。アメリカを中心に、1990年にNative American Graves Protection and Repatriation Act (NAGPRA) が制定された。博物館は、19世紀から研究のために、収集された人骨や該当民族集団にとって伝統文化の実践や民族的アイデンティティを形成するために必要なモノを返還 (repatriation) することになった (Nicks 2003: 23)。カナダの場合、1992年に公表した「Turning the page: Forging New Partnerships between Museums and First Peoples」の他に、先住民族関係の収蔵品と文化遺産の所有権、保護と管理に関する事業が、国・州・先住民の三つの行政レベルにおける法律システムと博物館政策に組み込まれている (Bell and Paterson 2009)。

この一連の動きの中でも、カナダにおける先導的な例が、先住民のクワクワカワクのコミュニティに対する、博物館の収蔵品の返還の事例である。文化遺産の返還を通して、モ

ノの所有権を先住民が取り戻し、文化センターや地域博物館の運営を通じて、文化遺産を解釈する権利、文化の伝承が先住民自身でできるようになったのである（吉田 2011: 213-217; Bell and Napoleon 2008）。また、博物館人類学における接触領域 (contact zone) という概念を援用し、ハイダ族の収蔵品の返還と互恵的な活用を進めた例を特筆される。（Krpmotich and Peers; with the Haida Repatriation Committee and staff of the Pitt Rivers Museum and British Museum 2013; Shelton and Houtman 2009）。

ただ、実際に収蔵品を返還する際に、西洋的概念を中心として定められた法律に、先住民の考え方、権利や利益を的確に反映することは簡単ではない。たとえば、「所有権」 (ownership)、「神聖性」 (sacred)、「法律」 (law) などの人々の慣習を適切な言葉で表現し、先住民の概念として捉えるのは非常に難しいという指摘がある（Bell and Paterson 2009:3-4）。

## 六、まとめ

近年、博物館は単にモノを収蔵する場所あるいは一方的な表象装置ではなく、博物館はキュレーターと収蔵・展示される側の双・多方交流の装置であると認識する見方が、研究者の間で共通となってきている（吉田 2013a）。Shelton（2009）も「各文化の間のコミュニケーションを通じて、ステレオタイプを変えさせる」ことができると批判的博物館学の方法論を強調している。

本調査は、カナダの博物館とソースコミュニティの連携の動向を考察してきた。この中で明らかになったのは、次の二点である。

一つ目は博物館に収蔵されたカナダ先住民族の資料の活用である。20世紀後半から、先住民族の人たちは経済、政治の独立および自分の文化遺産の解釈・使用の権利に対する意識を高めてきた。そのため、先住民族の人たちは博物館を訪ねて、自らの歴史、文化、価値観に関わっているモノを探した（Nicks 1992: 87）。一方で、博物館人類学の研究者は、植民地時代にモノを収集する際の不均衡な権力関係について批判し始めた。その上で、現代の博物館の脱植民地化の方途を探究するなかで、接触領域としての博物館のソースコミュニティとの連携の役割を重要視してきた。ソースコミュニティの人々も連携により、コミュニティの発展、土地の所有権や資源の利用権の主張を始めた（Black 2013:794-795）。今回の調査で、博物館とソースコミュニティの連携は、ソースコミュニティの文化伝承に影響を与えられるだけでなく、政治的な動きの一環となることも分かってきた。今後は、Phillips（2006: 77）が提出した二つの連携のパラダイム「多元的な声を反映できる、そして先住民を動きの主體にする」という考えに基づいて、連携のモデルを構築することを研究の視野に入れて分析したいと考えている。

また、博物館とソースコミュニティの連携を通じて、博物館における先住民族の収蔵品に関する解釈の権利、所有権、使い方（聖なるものや儀礼用具）、管理などの事項に関して双方向的な交流も生じるようになってきている。これから、先住民がさらなる文化的権利を

得るために、法律の保障も重要であると考えられる。しかし、現在の法律には、文化の多様性と各民族集団の権利の並立などいくつかの概念がまだ含まれていないため、さまざまな問題が生起している。

とりわけ、各文化のモノに対する取扱い方が違うため、国の法律用語と学術用語が各文化の用語に適切に対応することができない場合も多い。たとえば、先住民族の言語に、「所有権」(ownership)、「有形・無形」(tangible, intangible)、「遺産」(heritage)や「財産」(property)などの分類や単語がないことも決して少なくない(Nobel 2008:297-305)。今後、先住民の文化と歴史に関わる博物館資料の活用・帰還の権利に関して、法律の改善に向けて積極的に発言することと、各文化の所有権に関する概念を翻訳する可能性を探究することが、今後博物館人類学に求められるものと思われる。

## 参考文献

### 【日本語】

岸上伸啓

2009 「北アメリカにおけるもうひとつの先住民問題——アメリカとカナダの非公認先住民族」 窪田幸子、野林厚志編『「先住民」とはだれか?』 pp. 134-154

吉田憲司

2013a 「フォーラムとしてのミュージアム、その後」『民博通信』140: 2-7.

2013b 『文化の「肖像」——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』東京：岩波書店。

吉田憲司編著

2011 「文化遺産と博物館」『博物館概論』東京：放送大学。 pp. 209-223

### 【英語】

Ames, Michael M.

1986. *Museums, the public and anthropology : a study in the anthropology of anthropology*. Vancouver : University of British Columbia Press.

Assembly of First Nations, The Canadian Museums Association

1992. Task Force Report on Museums and First Peoples. *Museum Anthropology* 16(2): 12-20.

Bell, Catherine & Napoleon, Val (eds.)

2008. *First Nations cultural heritage and law : case studies, voices, and perspectives*. Vancouver : UBC Press.

Bell, Catherine & Paterson, Robert K.

2009. Introduction. in Bell, Catherine and Paterson, Robert K. (eds.) *Protection of First Nations cultural heritage*. Vancouver : UBC Press. pp. 3-12.

Black, Martha

2013. Collaborations: A History Perspective. in Townsend-Gault , Charlotte and

- Kramer, Jennifer and K̄i-k̄e-in (eds.) *Native Art of the Northwest Coast : a history of changing ideas*. Vancouver : UBC Press. pp.785-827.
- Clifford, James  
 1997. *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Harvard University Press. (ジェイムズ・クリフォード 2002『ルーツ』毛利嘉孝ほか訳 月曜社。)
- Clavir, Miriam  
 2002. *Preserving what is valued : museums, conservation, and First Nations*. Vancouver : UBC Press
- Conaty, G. T.  
 2003 Glenbow' s Blackfoot Gallery: working towards co-existence, L. Peers and A. Brown (eds.) *Museums and Communities: a Routledge Reader*. London: Routledge. pp. 227-241.
- Harrison, Julia D. & Trigger, Bruce  
 1988. 'The Spirit Sings ' and the Future of Anthropology. *Anthropology Today* 6(4): 6-10.
- Herle, Anita  
 1994. Museums and First Peoples in Canada. *Journal of Museum Ethnography*. 6: 39-66.
- Hooper-Greenhill, Eilean,  
 1992. *Museum and the shaping of knowledge*. London: Routledge.
- Jonaitis, Aldona  
 2006. *Art of the Northwest Coast*. University of Washington Press.
- Jones, Anna L.  
 1993. Exploding Canons: The Anthropology of Museums. *Annual Review of Anthropology* 22: 201-220.
- Krmpotich, Cara & Peers, Laura; with the Haida Repatriation Committee and staff of the Pitt Rivers Museum and British Museum  
 2013. *This is our life : Haida material heritage and changing museum practice*. Vancouver, B.C. : UBC Press.
- Nicks, Trudy  
 1992. Partnerships in Developing Cultural Resources: Lessons From the Task Force on Museums and First Peoples. *CULTURE* 12(1):87-94.  
 2003. Introduction. Peers, Laura & Brown, Alison K. (eds) in *Museums and source communities : a Routledge reader*. London : Routledge. pp.19-27.
- Nobel, Brian; in consultation with Reg Crowshoe and in discussion with the Kunt-sum-atak Society



2008. Poomaksin: Skinnipiikani-Nitsiitapii Law, Transfer, and Making Relatives Practices and Principles for Cultural Protection, Repatriation, Redress, and Heritage Law Making with Canada. Bell , Catherine & Napoleon, Val (eds.) *First Nations cultural heritage and law : case studies, voices, and perspectives*. Vancouver : UBC Press. pp.258-311.
- Pearce, Susan M.  
1995. *On Collecting: An investigation into collecting in the European tradition*. London: Routledge.
- Phillips, Ruth B.  
2003. Introduction to Part 3: " Community Collaborations in Exhibitions: Toward a Dialogic Paradigm." , Peers, Laura & Brown, Alison K. (eds). In *Museums and Source Communities: A Routledge Reader*. London : Routledge. pp.153-170  
2006. "Disrupting Past Paradigms: The National Museum of the American Indian and the First Peoples Hall at the Canadian Museum of Civilization. *Public Historian* 28(2): 75-80.
- Shelton, Anthony  
2009. Director' s Foreword. Mayer, Carol E. & Shelton, Anthony (eds.) *The Museum of Anthropology at the University of British Columbia*. Vancouver.
- Shelton, Anthony and Houtman, Gustaaf  
2009. Negotiating new visions: An interview with Anthony Shelton by Gustaaf Houtman. *Anthropology Today*25(6): 7-13.
- Vergo, Peter (ed.)  
1989. *The New Museology*. London: Reaktion Book.
- Watson, Sheila  
2007. *Museums and their communities*. London : Routledge.
- Willmott, Cory  
2006. The Historical Praxis of Museum Anthropology: A Canada/ US Comparison. Harrison, Julia D. & Darnell, Regna (eds.) *Historicizing Canadian anthropology*. Vancouver: UBC Press. pp. 212-225.
- Wilson, Thomas H. & Erasmus, Georges & Penney, David W.  
1992. Museums and First Peoples. *Museum anthropology*16(2): 6-11.

## ○ 中国の食を対象とする研究動向—1949年以降の大陸を中心とする—

比較文化学専攻 劉 征宇

### 1. はじめに

本調査は、食を対象とする先行研究の流れを整理し、その研究動向を把握することを目的とする。

「食」という言葉について、日本語では主に「たべる。たべるもの」などと定義されている。それとあわせて、中国語では「飲食」の「食」であり、英語では「food」及び「eating」などの言葉に相当する。そのため、本調査で考察する「食」を対象とする先行研究は、「お茶」、「お酒」及び「ソフトドリンク」などの飲料品を除き、「食べる」という行為や「食事」及びそれと関連する「料理・食材」（英文で food、eating や cuisine・ingredient/foodstuff など）を対象とする。その範囲において、世界の研究者が行った食に関する研究は、19世紀末期に行われ始め、1960年代から盛んになってきたとされる（Messer 1984、Mintz & De Bois 2002）。それとともに、中国食に関するものも次第に増えてきた（陳・孫 2005、彭・肖 2011 及び張 2008 など）。それらの中国食に関する先行研究は、主に清代以前の王朝時代及び民国時期<sup>1</sup>を対象とする歴史学・中国学的ものを中心として行われている（Sabban 2014、徐・姚 2000、姚・羅 2015、趙・何 2010 など）。一方、中華人民共和国の成立以降（1949年～）を対象とする考察は多くなく、また、それらに対するレビューの論文も殆ど見られない。しかし、社会主義国家（1949年～）となる中国大陆には一連の政治的、経済的及び社会的変化が起こってきた。それらとあわせて、食とかかわる変容は多様化し、関連する研究者の注目を引き寄せてきた。特に、この20年間の中国大陆には、「伝統的な料理と食品産業が社会的食生産や民衆の食生活に浸透するとともに、関連する研究が『調理—飲食—食学』といった学術理論の傾向に発展してきた」と考えられている（趙 2015：42）。したがって、1949年以降＝現代中国の大陸食を対象とする研究の流れを整理することは、今後の研究動向だけでなく、大陸食の現在と未来に対する理解にとって、重要な意義があると認められている。

そのため、本調査では、現代中国大陆の食を対象とする研究について、主に国立民族学博物館の図書館及びインターネットで食に関する学術的な資料<sup>2</sup>を活用し、先行研究の流れと動向の把握を試みた。それによって、現代中国大陆の食に対する研究の現状を明らかにしたうえで、その不足点を踏まえながら今後の研究の方向性を提示する。

---

<sup>1</sup> 民国時期は、中華民国が中国大陆を支配していた37年間（1912-1949年）の時期である。

<sup>2</sup> 本調査で査閲した資料は、主に人類学、歴史学、社会学及びその隣接分野による研究成果であり、日本語、英語や中国語で出版される書籍及び学術的雑誌・学会誌の論文である。例えば、雑誌は、*Annual Review of Anthropology*、*Food & Foodways*、*Food & History*、*Vesta* 及び『飲食文化研究』、『中国飲食文化』などである。また、学会論文については、台湾の「中国飲食文化学術研討会」や大陸の「亜洲食学論壇」などの学会誌に参照した。

## 2. 先行研究の流れのまとめ

続いて、現代中国大陸の社会変化をいくつかの時代に分けて説明しながら、それらを対象とする先行研究の流れをまとめていきたい。

### 1) 社会主義期 (1949-1978 年) :

50年代から実施された計画経済<sup>3</sup>のもと、大陸内部の食に関わる物資の流通、分配や消費は、国家の政策計画やイデオロギーによりコントロールされてきた。この時代の大陸では、民衆や研究者による「料理・美食」への提唱、追求及びそれと関わる公開的な討論が制限されてきた (陸 1983)。また、海外からの訪問者が訪問可能な区域も制限されていた。それゆえ、この時代の関連の研究成果は、経済的・社会的な統計データが中心であり、僅かな現地調査の報告がある程度であった。しかし、その後、関連の研究が若干増え、いくつかの研究成果が出版されるようになった。その主要なテーマは以下の三つである。

#### ① 計画経済による配給制度、食糧流通などの研究

計画経済による配給制度は、食の物資の流通や分配を国家計画に含めて定量的に制約してきた。関連する研究者はそれに注目し、いくつかの考察を行った。その全体的な考察として、高橋 (2011) は 1950 年代における中国の流通政策に基づいて、中央集権的流通体制の生成と展開について考察を行い、当時の物資流通と管理の実態を明らかにした。また、Croll (1983) の考察は、北京と上海 (それらの農村部も含む) にある世帯に対する統計調査を通して、約 30 年間 (1949-1980 年) における各地域 (農村部と都市部) の住民の家計状況の変化と特徴を比較分析した。それに対して、池上 (1994) と内田 (1990) のそれぞれの考察は農村部と都市部を中心として行われた。池上は、50 年代以降の変遷過程を整理しながら、農村部の食糧生産、流通や販売の歴史と特徴を明らかにしたうえで、国营食糧部門に焦点を当てて食糧管理制度改革の動向を分析した。内田は 50 年代から 80 年代初頭の都市部の戸籍管理と配給制度を考察し、当時の都市住民の生活状態を明らかにした。

従来、配給制度下での食生活に関する研究は、戦争時代の欧米での事例を中心として行われているが (eg. Bentley 1998, Theien 2009)、戦後の社会主義国家体制の中国に関する考察事例は殆ど見られない。そのため、先に挙げた考察は主に経済学的なものである。これらの研究は食の配給制 (food rationing) に対する研究において、参考となるものであると考えられる。

#### ② 大躍進政策<sup>4</sup>による公共食堂と飢饉に関する研究

---

<sup>3</sup> 計画経済 (planned economy) とは、経済の資源分配を市場の価格調整メカニズムに任せるのではなく、国家の物財バランスに基づいた計画によって分配される体制とさす。1953 年から、中国大陸の共産党政府はソ連の社会主義的建設を学び、「第一次五ヵ年計画 (1953-1957 年)」を実施しはじめた。56 年に予定より早く完成によって、大陸社会は社会主義的な計画経済へ転換した。

<sup>4</sup> 大躍進政策 (Great Leap Forward) とは、毛沢東が数年間で経済的にアメリカ合衆国・イギ

50年代後半から、大躍進政策の実施とともに、公共食堂は農村部（人民公社）と都市部（町内、学校及び役所など）に広がり、周辺の住民たちに食糧と惣菜を供給していた。しかし、偏った政策を長期間で行ったため、50年代末期から大陸は食糧不足の状態に陥っており、多くの地域で飢饉が起こった。それについて、同時代の海外の研究者は、大陸出身のインフォーマントに対して、10年間（1965-1975年）におよぶインタビューを通し、当時の飢饉の状態を明らかにした（London & London 1976）。80年代から、飢饉に関する詳しい情報が海外に伝えられるとともに、いくつかの研究成果が出版された（eg. Bernstein 1984, Kane 1988, Diktter 2010）。一方、大陸の研究者は政治的な要因により調査を制限されるため、それに関する専門的な研究は僅かである。主に大躍進政策による食糧生産、流通と消費の問題、または、公共食堂に関する研究がある（李 2001、2004）。

### ③当時の食生活に関する記憶などの研究

国家・社会レベルの視点から食糧などの物資の生産や流通、分配、消費を対象とする多くの考察と比べて、住民たちの日常生活、特に食生活に関する考察事例はすくない。その中では、賈（賈・石毛 2000）は、彼女自身の経験のもとに、大躍進・文化大革命時代における北京地域の社会的（公共食堂など）・家庭的な食生活の全体像をある程度明らかにした。Swislocki（2009）は清末から現代までの上海料理の形成、発展と再構造の歴史に対する考察の一章として、毛時代（Mao era・1949-1976年）の上海における料理店・レストランの経営方針などの特徴と変化を分析し、その時代の上海地域の料理の変化と再構成の過程を明らかにした（Swislocki 2009：176-218）。また、家庭食について、李（1981）は1957年に北京近郊の家庭生活（食生活も含む）を対象として、現地調査で入手した資料を1927年で調査した資料と比較分析し、「新旧社会（社会主義期と中華民国期の中国社会）」の間における生活の変化を明らかにした。さらに、金（2009）の研究は、文化大革命時期（1966-1976年）における上海市内の豚肉供給の数量と方法に関する資料と記憶を対象として、当時の政府統計データと政策（「豚肉は配給制ではなかったが、十分であった」）を、現代のマスコミによる人々の記憶（「豚肉は配給制であったが、不足していた」）と比較分析し、その「歴史現実」と「集合的記憶」（collective memory）の偏差の原因を分析した。さらに、金は上海事例の考察から、配給制度における北京、天津などの他地域の事例に対する学術的な考察の重要性を最後に提示した。しかし、目下の出版物は、主に配給券や購入証などのコレクションをまとめて出版するものであり、特に有名人などの個人的記憶や語りなどを記録し、当時のコレクションをあわせて編集したものが多い。

---

リスを追い越すと目指すことによって、1958年から1961年までの間に中華人民共和国が施行した農業・工業の大増産政策である。その運動によって、人民公社（people's commune）は農村地域に設置され、該当地域の経済活動と文化教育の末端行政機関になってきた。さらに、村民の食生活を管理するために、公共食堂（public canteen）は人民公社で設けられ、彼らに食を供給していた。そのあとで、公共食堂は農村地域から都市部に普及させ、町内、工場や学校などの場所に設置され、都市住民に食を供給してきた。

したがって、こうした簡単な編集作品にとどまらず、人類学、歴史学や社会学などの理論・方法による考察が今後必要とされる（この点に関しては、後で論じる）。

## 2) ポスト社会主義期 (1978 年以降) :

社会主義期 (socialist period・1949-1978 年) に行われた計画経済と異なり、78 年から共産党政府は市場経済及び対外開放の政策 (Chinese economic reform、「改革開放=Reform and Opening-up」と言い換える) を実施し始めた。国家経済の建設が速まるにつれ、人々の食生活の条件は著しく改善され、さらに「食、料理や美味」などに対する公開的な追及と討論の制限が緩和になってきた。したがって、この時期から、伝統的な食文化を紹介し、研究する書籍と文章が中国大陸で相次いで公表され、人々は食に関する文化的・社会的な部分を重視し始めた。一方、対外開放地域が広がるとともに、大陸中国の食に関する海外研究者の調査事例も増えてきた。さらに、20 世紀後半から食を対象とする人類学的な研究が盛んになり、関連する研究理論と分析方法も発展してきた。具体的には :

### ①構造主義のアプローチ

70 年代末期から、関連する研究者は中国食の再認識に焦点を当てて、全体像の把握と整理、文化的特徴の分析及び他地域・国の比較などに注目して関連する考察を行った。

欧米と日本での関連する研究には、主に歴史的な考察であり、中国大陸の食の歴史に関するものがある。特に、清時代以前の王朝時代での食物 (農業、農作物の交流など)、食生活 (作法、民俗、食器や調理法など) や食品科学 (発酵食など) などをテーマとする時代史または通史を考察するものが多い (Sabban 1985、Pirazzoli-t'Serstevens 1985、Anderson 1988、Huang 2000、Wilkinson 2001 や篠田 1978、田中 1987、など)。一方、いくつかの人類学者は中国大陸の食に注目し、関連する研究成果を出版してきた。考古学者の Chang (1977) の編集した著作はこうした研究の幕を開いた。その研究は通史的な著作として歴史的な記述を半分以上占めているが、中国食の研究にとって問題提起となる研究である (Chang ed. 1977、また関連する研究は Anderson 1988、Simoons 1991 である)。さらに、Chang の考察は、ご飯などの「主食」(中国語には「飯・fan」) とおかずの「副食」(中国語には「菜・tsai」) で構成される食事パターン及びそれとあわせる食事作法を提示し、中国食文化の特徴を明らかにした (Chang 1977 : 7)。また、Goody の研究は、ある地域の料理・食文化が該当地域の政治・経済や社会と深く繋がるだけでなく、同時代の国際的環境とも関係性を強く持っていることを明らかにした。特に、その研究には中国王朝時代の料理を一つの事例として、「高級的な料理 (haute/high cuisine)」の形成と国家の政治経済や社会構造の関係性を明らかにした (Goody 1982 : 97-153、または Goody 2005 に参照)。

それらの研究の発想から、Cooper (1986) は香港の広東式の外食・ダイニングなどの高級的な宴会の作法に対する考察を通して、中国の食事作法、食文化の特徴と文化的なコー

ド (code) を分析した。そして、Waston (1987) は香港にある広東村の村民 (Cantonese villagers) が年中行事や冠婚葬祭で行う宴会の料理の形 (common pot) を対象とし、高級的な料理 (high cuisine) と異なる庶民料理 (low cuisine) の宴会作法を分析し、「同じ皿で一緒に食べることが参加者に日常生活での身分差異を短時間で否定させ、社会平等という錯覚に陥らせるようになる」(Waston 1987:410) とした。他方、石毛をはじめとする日本の研究者は、食を文化として捉えて関連する研究を行い、いくつかの研究者は中国食文化に注目し、現地調査などの資料を活用しながら、中国大陸の各地域・民族の食文化及びそれとあわせる作法と儀礼の特徴を明らかにした (木村編 1988、周 1989 や西澤 1990 など)。そのうえで、石毛は Chang の「主食・副食の二元構造」の見方を発展させ、米文化を中心とする日本や韓国、中国、ベトナムなどの各国・地域の食事パターン及びそれとあわせる作法を比較分析し (石毛 2009 (1981 ; 1989 ; 1990))、関連する論文を編集した (石毛編 1981、1985)。また、石毛は米=ご飯を中心とする東アジア・東南アジアの食事パターンと小麦粉=パンを中心とする西洋の食事パターンを比較し、食に関する「文化」と「文明」の見方を提示した (石毛 2009 (1982 ; 1994))。それらの研究成果は、中国語版の翻訳作品 (石毛 1992) によって中国大陸に紹介されるとともに、それからの研究動向に強く影響を与えてきた (Cwierka & Chen 2012)。

## ② グローバリゼーションからのアプローチ

80年代後半、Goody (1982) と Mintz (1985) の研究を端緒とし、「食の人類学 (Food Anthropology)」という新しい分野が切り開かれた (陳・孫 2005、張 2008 など)。関連する理論と方法を活用する研究事例は海外で多く出版されるとともに、大陸での研究者にも影響を与えてきた。90年代以降、国内外の学際的な研究交流が頻繁になるとともに、大陸での研究状況はある程度好転してきた。

Mintz (1985) の研究は砂糖の生産、流通や消費に対する分析を通して、近代以降の世界貿易によってある食材が各国・各地域にどのような影響をあたえるかを考察したものである。その研究からの影響によって、食に関する研究の内容は従来の単一の国や地域の食 (またはその文化、生産や消費など) を対象とするものを超えて、グローバルなフードシステム (global food system) 及びその影響と変化へと発展してきた。Mazumdar

(1998、1999) は、砂糖やアメリカ大陸産の農産物が中国大陸にどのような影響を与えるかを考察し、グローバル化の歴史において食物の交流やそれによる食文化と経済の変化を分析した。一方、90年代以降の中国大陸の食に関する研究では、食に関する世界中での流通、消費及び関連する食品産業の発展や政策など、多様な考察が行われてきた。例えば、人類学者の Waston (1997) は、北京、香港、台湾、韓国及び日本でのフィールドワークを通して、マクドナルドがいかにして東アジアの食文化に適応したかについて考察し、消費文化のグローバル化にともない、マクドナルドが地元においてどのように受容され、変遷してきたのかを分析し、グローバルとローカルの「文化接合」の過程を明らかにした。

そのなかで、北京の事例について、経済発展と一人っ子政策によって北京の都市家庭では消費力が向上し、子供への関心が強くなるという社会背景をふまえて、マクドナルドの経営方針の転換と特徴を分析した (Yan 1997) <sup>5</sup>。そのあとの Jing (2000) は、大陸の子供の食習慣を対象とし、1980 年代後半から大陸での経済システムの転換とグローバルな経済システムの影響という社会背景をふまえて、子供をターゲットとした食品の生産と消費の変化を分析し、それらが家族に及ぼす影響を考察した。

一方、グローバリゼーションに関する研究では、ローカルな研究者は自文化の独自性 (identity) に焦点を当てて、それが世界に対してどのような影響を与えるかを考察する研究も増えてきた (eg. Wu & Chee 2001、Wu & Cheung 2002、Cheung & Tan 2007)。さらに、外部からの研究者もそれに注目し、関連する研究を行ってきた。それらの研究視野は、中国の食を単一対象として考察するものから (eg. Goody 1998、Roberts 2002)、東アジアあるいは東南アジアの食を対象とし、それらの文化的な特徴と影響に対する分析までに広げてきた (Cwiertka & Walraven 2002)。それらのようなグローバルなシステムにおいてある国・地域食に対する考察 (food studies) はグローバリゼーション研究 (studies of globalization) の歴史的過程と全体的な視野を補うとともに (Nuetzenadel & Trentman 2008)、両者が統合し発展してきた<sup>6</sup>。

### ③料理、文化表象、社会的アイデンティティの関連性

地域食に対する研究は、従来の作法や礼儀を中心とする考察から、食・料理 (food/cuisine)、文化表象 (representation) や社会的アイデンティティ (social identity) の間の関連性を対象とするものへ発展してきた。最初の 80 年代末期から、研究者は近代における国家的料理 (national cuisine) の形成及びそれに関する言説 (discourse/writing) の関係性に注目し、いくつかの研究成果を出版した<sup>7</sup>。そのあとで、研究者の関心は「国家料理の形成」から細分化し、地域料理の形成に注目してきた。例えば、Klein (2006、2007) は 90 年代以降の広州料理及びその料理店を対象とし、マスコミや民衆たちのそれに関する言説 (culinary discourse/food writing) を考察し、広州料理の再構成の過程を明らかにした。また、Swislocki (2009) は上海料理とそのレストランを対象とし、清代末期から現代までの社会変化、地元住民から上海料理に対する認識と言説及び上海料理の発展と再構成の間の関係性を分析した。それらの地域料理の近現代の変

---

<sup>5</sup> そのような都市部の食をめぐる消費観念の変化に関する研究は Veeck (2000)、Yan (2000) などに参照。

<sup>6</sup> 関連する研究事例は Phillips (2006) のレビュー論文に参照。

<sup>7</sup> 関連する考察事例は、インド料理の形成と調理本/food writing (Appadurai 1988)、日本米とアイデンティティ (Ohnuki-Tierney 1993)、フランス料理の形成と料理に関する言説/culinary discourse (Ferguson 1998) 及び日本料理と国家アイデンティティ/national identity (Cwiertka 2006) などがある。

化と再構成に対する考察によって、研究者は大陸料理（mainland cuisine）の文化的な表象と社会的アイデンティティを明らかにした<sup>8</sup>。

### ③ 中国大陸における影響

海外の研究動向と異なり、中国大陸での研究は「調理文化」を中心として行われ始めた。飲食産業の発展及び食生活の条件の改善とともに、「料理・美味」に注目した人々は増えてきた。したがって、食に関する研究は、中国料理と調理の特徴に関する分析、『菜系』（大陸料理をいくつかに分ける地域料理）に関する研究や名物とする料理と調理法の編集などのテーマを中心とし、主に伝統的な調理や調理文化に対する考察を行っていた。特に、哲学者である張の研究（1979）は、伝統的な文化の視点から、中国の調理の歴史と現状を分析しながら、その文化的な特徴を明らかにした。そのあとの80年に入ると、少数の研究者は、食を文化の視点として捉えて、民俗学（楊 1983）や文化史（林 1989、趙 1986）などの研究領域において考察を行ってきた。しかし、この時期の大陸での研究状態は「欧米や日本など海外の研究より遅れていた」（趙 2015：40）とされている。

そして、80年代末期から、大陸での研究は、従来の「調理文化」の考え方から、「食の文化・食文化」の新たな視野へ転換してきた。それらの内容は主に歴史学の「通史・時代史・地方史」などの研究視点から大陸の王朝時代（清代まで）における食と関わる「農作物」や「調理法」、「道具」、「民俗」、「制度」、「礼儀」などを対象として、文献整理及び文化史的な考察などである（徐編 1999 など）。そのあとで、中国大陸の食文化研究には従来の大陸食の全体像を総括的に描く考察と異なり、それぞれの地域的な独自性を強調しながら、ある地域（都市部、農村地域など）・集団（少数民族、コミュニティなど）の食に対する事例的な考察が増えてきた。そのうち、同時代の大陸食に関する考察事例は、ある地域（都市部、農村地域など）の住民の食習慣・現状に対する考察（蔡 2007、蘇 2005 など）や少数民族の食文化に対する整理（李 2000、李 2002、または姚・羅 2015 のレビュー論文に参照）などがある。

一方、90年代末期から、食に関する人類的な理論や研究事例が大陸に紹介され、関連する研究成果が増えてきた（陳・孫 2005、彭・肖 2011、彭 2013 など）。そのなかで、食に関する人類学的な研究は、海外で行われた食に関する人類学的な研究の翻訳・紹介から始まり（葉 2001a、2001b など）、人類学の理論方法から中国大陸食の研究に対する理論的な整理、そして具体的なケーススタディーへと発展させてきた。例えば、瞿は、構造主義

---

<sup>8</sup> また、いくつかの研究者はほかの理論から、その時代の中国の大陸食を考察した。例えば、医療人類学者の Farquhar（2002）は、ポスト社会主義期における「食と性」をめぐる社会的なセンス（sense）と経験（experience）を分析し、現代中国人の「欲望」の変化及びそれと政治、経済などの社会変化の関連性を考察した。また、中国学の有名な研究者の Höllmann（2013）は、長時間での考察と研究に基づいて、同時代の資料を利用しながら、中国大陸の食文化の特徴を抽出し、先史時代から現代までにおいて通時的に分析した。そして、日本の研究者は中国食事作法の変化（西澤 2001、2009）、東アジアの食とこころ（国学院大学日本文化研究所編 2004）などのテーマについて考察を行った。



や象徴人類学などの理論から、従来の調理文化を中心とする見方と区別し、中国の「食文化の象徴性」に関する一連の考察を行った（瞿 1995、1996、1997 や 1999）。荘は北京市内にある「新疆街」でのイスラム料理、チベット料理や毛家料理（湖南料理）のレストラン及びそのメニューを対象とし、インフォーマントの語りと歴史資料をあわせながら、各料理店の経営方針を考察し、その街の歴史空間の変遷や再構造の過程を明らかにした（荘 2000）。また、劉（2004）はチベットのある農村地域での現地調査を通して、「エスニック集団（ethnic group）と境界（boundary）」の理論を参考しながら、現代化・漢族文化と交流による村民の食習慣と文化の変容を考察し、伝統文化と現代化の関係性を分析した<sup>9</sup>。また、許は、Yan のようなマクドナルドのグローカル（glocal）化に関する研究事例を参考し、西洋式ファーストフードのローカル化の発展方向を考察した（許 2006）。

### 3. 最新動向のまとめ

2010 年以降、海外で行われた研究は、かつての視野と理論を引き続きながら、他分野の研究者の視点と見方から影響を受けて発展してきた。

#### 1) 西欧中心のグローバル・フードシステムへの反省

従来の食生産・消費のグローバリゼーションに対する考え方は、主にヨーロッパの殖民時代＝大航海時代からアメリカの世界中での支配までの時間帯において、ヨーロッパ＝大西洋を中心として捉えながら、「単一の世界システム」と見なしていた。しかし、90 年代後半から、多くの社会学や歴史学の研究者はそのような単一の中心論の欠点を指摘し、グローバリゼーションの多様化及び（東）アジアによるグローバル化した食システムの形成という見方を提示してきた<sup>10</sup>。したがって、先に紹介したアジア食のグローバル化に関する研究は、補足事例としてその「新たな」見方を普及させ、そして、さらに多くの研究者のアジア食に対する関心を引き寄せてきた<sup>11</sup>。Farrer (2015) はそのような視点及び「transnational food/food transformation」の考え方をふまえて、東アジアを主な調査地として、「traveling cuisines」の考え方を提示しながら、いくつかの研究者の調査報告を編集した。そのなかに、Wank (2015) は、山西料理の「刀削麺」(knife-shaved noodles) を対象とし、それが地域料理及び国家料理の代表的な名物となる形成過程を分析し、地域政府の宣伝戦略による地域料理店の開店や他地域・海外への広がり考察した（または Wank 2010 に参照）。また、Cheung (2015a) は大陸に人気がある地域料理とする「麻辣小竜蝦 (spicy little lobster)」を対象とし、その食材とする北アメリカ原産の

<sup>9</sup> さらに「食、エスニック集団や境界」に関する討論は徐・王（2005）に参照

<sup>10</sup> そのような理論の転換については Nuetzenadel & Trentman (2008) や Farrer (2010) などの論考に参照。

<sup>11</sup> 2000 年代後半から、日本の上智大学の研究者はアジア＝太平洋を中心として関連する調査を行い、関連する調査報告を編集した（Farrer 2010、2015 など、さらに上智大学はそのような研究の一拠点である）。

ザリガニがどのように中国料理を形成され、そして、その料理がどのように大陸の他地域に伝えられるかを考察し、食材、調味料や人の移動によって地域料理の形成と普及の過程を明らかにした。また、Farrer (2015) は「contact zone」に関する人類学的な見方 (田中 2007) を発展し、上海での西洋料理のレストランに対する現地調査を通して、「culinary contact zones」という視点を提示した。

## 2) 食の文化遺産に関する研究：エスニック料理の真正性 (authenticity)

また、食・料理、文化表象と社会的アイデンティティに関する研究には、エスニック料理 (ethnic cuisine) の真正性 (authenticity) に関する議論が増えてきた<sup>12</sup>。近年、食のグローバル化及び食の文化遺産に関する研究が盛んになるとともに、国家・地域・エスニック料理の真正性を反省する考察が増えてきた<sup>13</sup>。そのなかに、Eng-Wong (2013) は、1945年にアメリカで出版され、「authentic」と見なされる中華料理の料理本を対象として、それに関する翻訳や編集、出版、普及などの歴史を考察しながら、中華料理が口伝された知識を具象化する (embody) 本質的な過程を提示し、さらに、食文化の「authentic」の意味が何か、または「食の文化遺産」をどのように定義するかについて検討した。

## 3) 食に関する「リスクと健康」の観念

ポスト社会主義期における、中国大陸では食の安全に関わる事件が相次いで発生したため、研究者はそれに注目していくつかの研究を行ってきた。そのなかに、Yan (2012, 2015) は、「リスク社会」の理論をふまえて、建国以降の食品安全事件の統計と分類によって、現代中国で起こった食品事件の特徴を分析しながら、食品安全事件によって国民が政府・企業への信頼感を弱らせてきたと提示している。また、Klein (2015) の研究は雲南省の昆明市での「有機食物」の消費に対する考察を通して、都市住民の「健康食に関する意識と実践」に関する変化を分析しながら、中国大陸の都市部の食生活の変化を考察している。

## 4) 大陸での最新動向：多様性の考察事例と一学問への発展

2010年代から大陸での研究は主に海外・国内の既存の理論と方法の軸にそのままに沿いながら、考察事例の多様化に発展してきた。そのなかにおいては二つの発展方向が見られる。まずは、海外での人類学、社会学などの理論による考察事例が増えてきた。それらは主に大陸の少数民族の食 (食慣習、食民俗や食生活など) を対象として考察することであ

---

<sup>12</sup> 例えば、アメリカの中華料理店とエスニック真正性に関する考察 (Lu & Fine 1995) などがある。

<sup>13</sup> 例えば、台湾料理の事例 (Chuang 2009, 2012)、外国語資料での日本料理の真正性の再構成 (Suzuki 2012) などの考察がある。

る。秦（2014）は「中国の食文化の象徴的意義」に関する考察（瞿 2011）を引き継ぎ、彝族の結婚式で行う「跳菜」（*carrying dishes*）という儀式的な舞を分析し、それが彝族食の娯楽文化を象徴する意義を明らかにした。また、「現代化による少数民族の生活の変化」に関する考察について、温（2013）は雲南省の怒族村を対象とし、社会変化・市場経済による村民の伝統的な生計モデル（農業、牧畜及び狩猟採集）の変化を分析し、人、環境や生計の間の関係性を明らかにした。一方、総括的な考察について、彭（2013）は「飲食人類学」のテーマとして、関連する理論と研究事例を紹介しながら、中国大陸食に関するテーマやそれとあわせる理論と方法を提示した（または李 2011 に参照）。

さらに、もう一つの方向は、食を対象とする「学問領域」の形成である。長年で「飲食文化」研究を行っている趙は、2000年代後半から食に関する研究を一つの学問と見なし、「食学（*foodology*）」という学問分野を提唱してきた。具体的に、食学は「各時期・文化背景における人々の食に関する事象や行動、思想、規則などを対象とする一つの総合的な学問」である（趙 2015）。そのあとで、多くの研究者・関心者はそのような新たなディシプリンの提案に注目し、それをめぐる論争文章を公表した（姚・羅 2015 に参照）。そのなかで、楊（2015）は「食学」という見方の歴史発展の整理及び先行研究の比較を行いながら、趙の提案の妥当性を肯定する一方、「非現実的な、大規模な構造」などの問題点を指摘した。また、張（2013）は「食の人類学的研究」と「文化多様性の理論」などの見方を紹介しながら、それらが「食学」の今後の発展に対する重要な役割を提示した。

#### 4. おわりに

このように、国内外の研究動向を整理すると、現代における大陸食に対する考察は 60年代から始まったことが分かる。最初の研究内容は、主に清代以前の王朝時代及び民国時期に関する歴史学的考察である一方、同時代で行われた現地調査の報告も多少はあった。その後、70年代末期から人類学で理論的な発展がなされるにつれ、海外の研究者は、現地調査から大陸食を考察してきた。しかし、それらは欧米での考察事例と比べると、全体的に事例不足であるといえる。海外での研究と異なり、70年代末期から始まった大陸での研究について、少数民族の食を対象とする事例研究と「中国食文化研究」に対する全般的に考察で構成される内容を除いて、そのほかの多くの考察事例は、理論引用の曖昧さや分析内容の漠然性などの欠点があり、学術的や実際的な研究意義も見えない。

それらの不足と欠点を補う一方法として、筆者は自分の研究から「社会主義期の大陸食」に対する考察の重要性を提示し、研究していきたいと考えている。「社会主義期」は、ポスト社会主義（*post-socialist*）に対して、改革開放以前の時代であり、または「毛時代（*Mao era*・1949-1976）」と言い換えている。その時代における、計画経済によるすべての物資を配給制にするとともに、人々の食に関する実践は長時間で国家の政策計画及びイデオロギーにコントロールされてきた。その影響によって生み出されてきた当時の人々の食と関わる習慣、観念や意識はそのあとの社会変化の時代での食生活に強く守られるだけでなく、家

族内部の次世代に浸透されてきた。すなわち、社会主義期に定着した人々の食生活や食観念は、ポスト社会主義期（1978年～）の食生活にも大きな影響を与えていると考えられている<sup>14</sup>。しかし、そのような重要な時期を対象とする研究は前掲の通り、まだ不十分な状態にあるといえる。その原因として、まず、その時期は、従来の食の歴史的研究者にとって現在と繋がる「古くない」時期である一方、現時点の食と関わる変容に注目する人類学などの研究者にとって「古い」時期であったことが挙げられる。すなわち、双方の研究視点での「グレーゾーン」となっていたため、研究者の関心を呼び寄せにくい。さらに、多くの制限からそれに対する調査は難しい。国内の研究者にとって政治的な制限が多少あるため、簡単な資料編集などに留まりがちである。また、関連する研究は大躍進や文化大革命時代に限定され、30年間を通した通時的な考察が見えない。一方、海外の研究者にとって、公表した言説と異なったり、日常生活とつながる食生活に対する現地調査は行いにくいいため、関連する考察事例は僅かである。そのため、その重要な時期に対する考察は十分行われていない。さらに、ポスト社会主義期の食生活を対象とする多くの考察は、80年代末期以降のグローバル化などの外部の政治経済的变化による影響を議論の中心としている。他方で、社会主義期の食習慣・観念が現代の食生活に与えた影響についての論考はまだ不十分である。そのため、社会主義期での食生活及びそれと現時点の変容の関係性に関する考察は、現代中国大陸食に対する今後の研究と理解にとって、重要な学術的・現実的な意義があると考えている。

---

<sup>14</sup> 関連する事例考察は「欲望に対する観念とその具象化の特徴」(Farquhar 2002)、「贈り物と人間関係」(楊 2005)などがあり、または東欧のポスト社会主義期での事例考察 (Caldwell ed. 2009) 及び Horltzman (2006) のレビュー論文に参照。

## 文献リスト

### 【中文文献】

蔡寧偉

- 2007 「中国北方沿海都市居民的飲食習慣与飲食文化現狀—以遼寧省大連市為例」『飲食文化研究』2007(1):38-46。

陳運飄、孫簫韻

- 2005 「中国飲食人類学初論」『广西民俗研究』2005(3):47-53。

石毛直道

- 1992 『飲食文明論』(趙榮光訳)、哈爾濱：黑龍江科学技術出版社。

金大陸

- 2009 「關於『票証時代』的集体記憶」『社会科学』2009(8): 127-191。

李炳澤

- 2000 『多味的餐桌：中国少数民族飲食文化』、北京：北京出版社。

李景漢

- 1981 『北京郊区鄉村家庭生活調查札記』、北京：生活・讀書・新知三聯書店。

李静璋

- 2011 「人類学視角下的中国食俗研究」『当代教育理論与实践』2011(1): 165-167。

李若建

- 2001 「大躍進与困難時期中国糧食產量、消費与流通」『中山大学學報』2001(6):123-132。

- 2004 「權力与人性：大躍進時期公共食堂研究」『開放時代』2004(1):76-90。

李自然

- 2002 『生態文化与人：滿族傳統飲食文化研究』、北京：民族出版社。

林乃粲

- 1989 『中国飲食文化』、上海：上海人民出版社。

陸文夫

- 1983 『美食家』、成都：四川人民出版社。

劉志揚

- 2004 「飲食、文化伝承与流变—一個藏族農村社区的人類学調查」『開放時代』2004(2):108-119。

彭兆榮

- 2013 『飲食人類学』、北京：北京大学出版社。

彭兆榮、肖坤冰

- 2011 「飲食人類学研究述評」『世界民族』2011(3)：48-56。

秦莹

- 2014 「南潤彝族婚礼『跳菜』的飲食象徵」『西南边疆民族研究』2014(2): 6-12。

瞿明安

- 1995 「中国飲食文化的象徵符号—飲食象徵文化的表層結構研究」『史学理論研究』1995(04):45-52。
- 1996 「中国飲食象徵文化的多義性」『民間文化旅遊研究』1996(3):53-56。
- 1997 「中国飲食象徵文化的深層結構」『史学理論研究』1997(3):120-128。
- 1999 「中国飲食象徵文化的思維方式」『中華文化論壇』1999(1):63-66。
- 2011 『隱藏民族靈魂的符号：中国飲食象徵文化論』、昆明：雲南大学出版社。

Sabban, Françoise

- 2014 「近百年中国飲食史研究綜述（1911-2011）」（董子雲訳）、『健康与文明：第三屆亞洲食学論壇（2013 紹興）論文集』、杭州：浙江古籍出版社、2014、pp.1-13。  
*Histoire de l'alimentation chinoise: bilan bibliographique (1911-2011), Food & History*10-2(2012) : 103-129。

蘇全有

- 2005 「論改革開放以来我国農村的飲食文化」『飲食文化研究』2005(1):84-89。

温士賢

- 2013 『家計与市場—滇西北怒族社会的生存選抉』、北京：社会科学文献出版社。

許伝静

- 2006 「人類学視野下的西式快餐本土化趨勢研究」『飲食文化研究』2006(4):68-72。

徐海荣（編）

- 1999 『中国飲食史』（六冊）、北京：華夏出版社。

徐吉軍、姚偉鈞

- 2000 「二十世紀中国飲食史研究概述」『中国史研究動態』2000(8):12-18。

徐新建、王明珂等

- 2005 「飲食文化与族群边界—關於飲食人類学的對話」『廣西民族大学學報：哲学社会科学版』2005(6):83-89。

楊杰宏

- 2015 「食学的概念內涵及学科属性」『楚雄師範学院學報』30（11）:14-20。

楊美惠

- 2005（1994）『礼物、關係学与国家：中国人際關係与主体建構』（趙旭東、孫珉訳）、台北：南天書局。

楊文騏

- 1983 『中国飲食民俗学』、北京：中国展望出版社。

姚偉鈞、羅秋雨

- 2015 「二十一世紀中国飲食文化史研究的新發展」『浙江學刊』2015(01):216-224。

葉舒憲

- 2001a 「飲食人類学：求解人与文化之謎的新途径」『廣西民族大学學報：哲学社会科学版』

学版』2001(2):2-4。

2001b 「聖牛之謎—飲食人類学的個案研究」『広西民族大学学报：哲学社会科学版』  
2001(2):5-12。

張景明

2013 「飲食人類学的实践与文化多样性理論对食学研究的支撑」『楚雄師範学院学报』  
28(1):20-26。

張起鈞

1979 『烹調原理』、台北：新天地書局。

2008 「飲食人類学」、招子明等編：『人類学』、北京：中国人民大学出版社。

趙榮光

1986 「中国飲食文化研究概論」『商業研究』1986(9):21-23。

2015 「20 世紀 80 年代以来中国大陆食学研究歷程」、立命館大学社会システム研究所  
編『社会システム研究 特集号』、2015、pp.39-47。

趙煒、何宏

2010 「国外对中国飲食文化的研究」『揚州大学烹飪学报』2010(4):1-8。

莊孔韶

2000 「北京『新疆街』食品文化的時空過程」『社会学研究』2000(6):92-104。

### 【和文文献】

池上彰英

1994 「中国における食糧システムの転換」『農業総合研究』48(2):1-52。

石毛直道

1982 『食事文明論』、東京：中央公論社。

2009 (1981) 「東アジアの食の文化」『石毛直道 食の文化を語る』、東京：ドメス出版、  
2009、pp.58-87。

2009 (1989) 「東アジアの家庭と食卓」『石毛直道 食の文化を語る』、東京：ドメス出  
版、2009、pp.114-139。

2009 (1990) 「食事作法と食事様式」『石毛直道 食の文化を語る』、東京：ドメス出版、  
2009、pp.323-341。

2009 (1994) 「食文化変容の文明論」『石毛直道 食の文化を語る』、東京：ドメス出版、  
2009、pp.267-284。

石毛直道 (編)

1981 『東アジアの食の文化』、東京：平凡社。

1985 『東アジアの食事文化』、東京：平凡社。

内田知行

1990 「戸籍管理・配給制度からみた中国社会—建国—一九八〇年代初頭」毛里和

- 子編『毛沢東時代の中国』、東京：日本国際問題研究所、1990、pp.258-290。
- 賈蕙萱、石毛直道  
 2000 『食をもって天となす：現代中国の食』、東京：平凡社。
- 木村春子（編）  
 1988 『中国食文化事典』（中山時子監修）、東京：角川書店。
- 国学院大学日本文化研究所（編）  
 2004 『東アジアにみる食とこころー中国・台湾・モンゴル・韓国・日本ー』、東京：東京印書館。
- 周達生  
 1989 『中国の食文化』、東京：創元社。
- 篠田統  
 1978 『中国食物史の研究』、東京：八坂書房。
- 高橋宏幸  
 2011 「1950年代の中国流通体制に関する一考察」 KIER Discussion Paper No.1110, Institute of Economic Research, Kyoto University。
- 田中静一  
 1987 『一衣帯水：中国料理伝来史』、東京：柴田書店。
- 田中雅一  
 2007 「コンタクト・ゾーンの文化人類学誌へ：『帝国のまさざし』を読む」『コンタクト・ゾーン=Contact zone』 1:31-43。
- 西澤治彦  
 1990 「中国の食事作法とその思想」井上忠司、石毛直道編『食事作法の思想』、東京：ドメス出版、1990、pp.39-55。  
 2001 「食卓の政治学：中国における宴席の儀礼とその変遷」『武蔵大学人文学会雑誌』 33(1):1-74。  
 2009 『中国食事文化の研究：食をめぐる家族と社会の歴史人類学』、第一章「序論」の「先行研究の概要」、東京：風響社、2009、pp.19-37。

#### 【英文文献】

- Anderson, E.N.  
 1988 *The Food of China*. New Haven: Yale University Press.
- Appadurai, Arjun  
 1988 How to Make a National Cuisine: Cookbooks in Contemporary India. *Comparative Studies in Society and History* 30(1): pp.3-24.
- Bentley, Army  
 1998 *Eating for Victory: Food Rationing and the Politics of Domesticity*. Urbana



- [u.a.]: Univ. of Illinois Press.
- Bernstein, Thomas P.  
 1984 Stalinism, Famine, and Chinese Peasants: Grain Procurements During the Great Leap Forward. *Theory and Society* 13(3): 339-377.
- Caldwell, Melissa L. (ed.)  
 2009 Food & Everyday Life in the Post-socialist World. Bloomington, Ind.: Indiana University Press
- Chang, K. C.  
 1977 Introduction. In K. C. Chang (ed.) 1977:1-21.
- Chang, K. C. (ed.)  
 1977 *Food in Chinese Culture: Anthropological and Historical Perspectives*. New Haven: Yale University Press.
- Cheung, Sidney C. H.  
 2015a From Cajun Crayfish to Spicy Little Lobster: A Tale of Local Culinary Politics in a Third-Tier City in China. In Farrer (ed.) 2015:209-228.
- Cheung, Sidney C. H. and Chau, Hing-wah (ed.)  
 2013 *International Conference on Foodways and Heritage: A Perspective of Safeguarding the Intangible Cultural Heritage*. Conference Proceedings.
- Cheung, Sidney C. H. and Tan, C. B. (ed.)  
 2007 *Food and Foodways in Asia: Resource, Tradition and Cooking*. London and New York: Routledge.
- Chuang, Hui-Tun  
 2009 The Rise of Culinary Tourism and Its Transformation of Food Cultures: The National Cuisine of Taiwan. *The Copenhagen Journal of Asian Studies* 27(2): 84-108.  
 2012 *Fabricating Authentic National Cuisine Identity and Culinary Practice in Taiwan*. Ann Arbor, Mich.: Umi Dissertation Publishing.
- Cooper, Eugene  
 1986 Chinese Table Manners: You Are How You Eat. *Human Organization* 45(2): 179-184.
- Croll, Elisabeth  
 1983 *The Family Rice Bowl: Food and Domestic Economy in China*. Geneva, Switzerland: United Nations Research Institute for Social Development.
- Cwiertka, Kazarzyna  
 2006 *Modern Japanese Cuisine: Food, Power and National identity*. London: Reaktion.

- Cwiertka, K. and Walraven, B. (ed.)  
 2002 *Asian Food: The Global and the Local*. London: Routledge.
- Cwiertka, K. and Chen, Yujen.  
 2012 The Shadow of Shinoda Osamu: Food Research in East Asia. In *Writing Food History: A Global Perspective*, edited by Kyri W. Claflin and Peter Scholliers, Oxford: Berg Publishers, 2012, pp.181-196.
- Diktter, Frank  
 2010 *Mao's Great Famine: The History of China's Most Devastating Catastrophe, 1958-62*. NY: Walker & Co.
- Eng-Wong, John  
 2013 Touch and Taste to Talk and Text: Translating Chinese Food Heritage. In Cheung & Chau (ed.) 2013:34-56.
- Farrer, James  
 2010 Introduction: Food Studies and Global Studies in the Asia Pacific. In Farrer (ed.) 2010:1-13.  
 2015 Shanghai's Western Restaurants as Culinary Contact Zones in a Transnational Culinary Field. In Farrer (ed.) 2015:103-124.
- Farrer, James (ed.)  
 2010 *Globalization, Food and Social Identities in the Asia Pacific Region*. Tokyo: Sophia University Institute of Comparative Culture.  
 2015 *The Globalization of Asian Cuisines : Transnational Networks And Culinary Contact Zones*. NY: Palgrave Macmillan.
- Farquhar, Judith  
 2002 *Appetites: Food and Sex in Post-socialist China*. Durham: Duke University Press.
- Ferguson, Priscilla Parkhurst  
 1998 A Cultural Field in the Making: Gastronomy in 19th-Century France. *American Journal of Sociology* 104(3): 597-641.
- Goody, Jack  
 1982 *Cooking, Cuisine and Class: A Study in Comparative Sociology*. New York: Cambridge University Press.  
 1998 The Globalisation of Chinese Food. In *Food and Love: A Cultural History of East and West*, London: Verso, 1998, pp.161-171.  
 2005 The High and the Low: Culinary Culture in Asia and Europe. In *The Taste Culture Reader: Experiencing Food and Drink*, edited by Carolyn Korsmeyer, Oxford: Berg, 2005, pp.57-71.

- Höllmann, Thomas O.  
 2013 *The Land of the Five Flavors: A Cultural History of Chinese Cuisine.*  
 Translated by Karen Margolis. NY: Columbia University Press.
- Holtzman, Jon D.  
 2006 Food and Memory. *Annual Review of Anthropology* 35: 361-378.
- Huang, H.T.  
 2000 *Fermentations and Food science.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Jing, Jun (ed.)  
 2000 *Feeding China's little emperors: food, children, and social change.*  
 Stanford, Ca.: Stanford University Press.
- Kane, Penny  
 1988 *Famine in China, 1959-61: Demographic and Social Implications.* London:  
 The Macmillan Press Ltd.
- Klein, Jakob  
 2006 Changing Tastes in Guangzhou: Restaurant Writings in the Late 1990s. In  
*Consuming China: Approaches to Cultural Change in Contemporary China,*  
 edited by Kevin Latham, Stuart Thompson and Jakob Klein, London:  
 Routledge, 2006, pp.104-120.  
 2007 Redefining Cantonese Cuisine in Post-Mao Guangzhou. *Bulletin of the*  
*School of Oriental and African Studies* 70 (3): 511-537.  
 2015 Eating Green: Ecological Food Consumption in Urban China. In Kim (ed.)  
 2015: 238-262.
- London, Miriam and London, Ivan D.  
 1976 The Other China Hunger: Part I The Three Red Flags of Death. *Worldview*  
 May: 4-11.
- Lu, Shun and Fine, G. Alan  
 1995 The Presentation of Ethnic Authenticity: Chinese Food as a Social  
 Accomplishment. *The Sociological Quarterly* 36(3):535-553.
- Mazumdar, Sucheta  
 1998 *Sugar and Society in China: Peasants, Technology and the World Market.*  
 Cambridge, Mass.: Harvard University Asia Center.  
 1999 The Impact of New World Food Crops on the Diet and Economy of China  
 and India, 1600-1900. In *Food in Global History,* edited by Raymond Grew,  
 Boulder, CO.: Westview Press, 1999, pp.58-78.
- Messer, Ellen  
 1984 Anthropological Perspectives on Diet. *Annual Review of Anthropology* 13:

205-249.

Mintz, Sidney W.

1985 Sweetness and Power: The Place of Sugar in Modern History. New York: Viking, 1985.

Mintz, Sidney W. and Du Bois, Christine M.

2002 The Anthropology of Food and Eating. *Annual Review of Anthropology* 31: 99-119.

Nuetzenadel, A. and Trentman, Frank

2008 Introduction: Mapping Food and Globalization. In *Food and Globalization: Consumption, Markets and Politics in the Modern World*, edited by Alexander Nuetzenadel and Frank Trentman, Oxford: Berg Publishers, 2008, pp.1-18.

Ohnuki-Tierney, Emiko

1993 *Rice as Self: Japanese Identities through Time*. Princeton, N.J. : Princeton University Press.

Phillips, Lynne

2006 Food and globalization. *Annual Review of Anthropology* 35: 37-57.

Pirazzoli - t'Serstevens, Michèle

1985 A Second-century Chinese Kitchen Scene. *Food and Foodways* 1(1-2): 95-103. Published online: 30 Apr 2010.

Roberts, J.A.G.

2002 *China to Chinatown: Chinese Food in the West*. London: Reaktion Books.

Sabban, Françoise

1985 Court Cuisine in Fourteenth-century Imperial China: Some Culinary Aspects of Hu Sihui's *Yinshan Zhengyao*. *Food and Foodways* 1(1-2):161-196. Published online: 30 Apr 2010.

Simoons, Frederick J.

1991 *Food in China: A Cultural and Historical Inquiry*. Boca Raton: CRC Press, 1991.

Suzuki, Ayako

2012 The Reconstruction of Authentic Japanese Food in a Foreign Context. お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報(8):187-192.

Swislocki, Mark

2009 *Culinary Nostalgia: Regional Food Culture and the Urban Experience in Shanghai*. Stanford: Stanford University Press.

Theien, Iselin

- 2009 Food Rationing during World War Two: A Special Case of Sustainable Consumption? *Anthropology of Food [Online]* S5 (2009). URL: <http://aof.revues.org/6383>
- Veeck, Ann
- 2000 The Revitalization of the Marketplace: Food Markets of Nanjing. In *The Consumer Revolution in Urban China*, edited by Deborah S. Davis, Berkeley: University of California Press, 2000, pp.107-123.
- Wank, David L.
- 2010 Culinary Nostalgia and Chinese Neo-Liberalism: Local Dish Restaurants in Shanxi Province. In *Globalization, Food and Social Identities in the Asia Pacific Region*, edited by James Farrer. Tokyo: Sophia University Institute of Comparative Culture.
- 2015 Knife-Shaved Noodles Go Global: Provincial Culinary Politics and the Improbable Rise of a Minor Chinese Cuisine. In Farrer (ed.) 2015: 187-208.
- Watson, James L.
- 1987 From the Common Pot Feasting with Equals in Chinese Society. *Anthropos* 82: 389-410.
- Waston, James L. (ed.).
- 1997 *Golden Arches East: McDonald's in East Asia*. Calif.: Stanford University Press.
- Wilkinson, Endymion Porter
- 2001 Chinese Culinary History. *China Review International* 8(2):285-304.
- Wu, David Y. H. and Chee, Beng Tan (ed.)
- 2001 *Changing Chinese Foodways in Asia*. Hongkong: Chinese University Press.
- Wu, David Y. H. and Cheung, Sindey (ed.)
- 2002 *The Globalization of Chinese Food*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Yan, Yunxiang
- 1997 McDonald's in Beijing: The Localization of Americana. In Waston (ed.) 1997: 39-76.
- 2000 Of Hamburger and Social Space: Consuming McDonald's in Beijing. In *The Consumer Revolution in Urban China*, edited by Deborah S. Davis, Berkeley: University of California Press, 2000, pp.201-225.
- 2012 Food Safety and Social Risk in Contemporary China. *The Journal of Asian Studies* 71(3): 705-729.
- 2015 From Food Poisoning to Poisonous Food: The Spectrum of Food-Safety

Problems in Contemporary China, pp. 206-286. In Kim, K.O. (ed.) *Re-Orienting Cuisine: East Asian Foodways in the Twenty-First Century*. New York: Berghahn Books.

**【その他の資料】**

『飲食文化研究』（雑誌）、

2004-2007、済南：東方美食出版社（香港）有限公司。

『中国飲食文化』（雑誌）、

2005～、台北：中国飲食文化基金会。

「中国飲食文化学術研討会」（学会・財団法人中華飲食文化基金会、1989年から2年1回）

「亜洲食学論壇」（学会・浙江工商大学主催、2011年から1年1回）

# チャイナタウン (Chinatown) の再開発をめぐる研究動向調査 日本と欧米における再開発を中心に

比較文化学専攻 辺清音

## 1. はじめに

本調査の目的は、チャイナタウン(中華街)の再開発に関する先行研究を踏まえた上で、その最新の動向を明らかにすることである。これまで、「チャイナタウン」の研究は華僑が生活・商売・仕事する場所として、主に華僑研究の枠組を中心として多く研究されてきた。それにもかかわらず、チャイナタウンに関する研究動向をまとめたレビュー論文は管見の限りにおいて存在しない。

そのため、筆者は「チャイナタウンの再開発」に関する日本と欧米<sup>1</sup>におけるチャイナタウンの先行研究を整理し、レビュー論文の作成を目指して調査を行う。

### 1-1 チャイナタウンの定義について

チャイナタウンというと、中国大陸、台湾、香港とマカオ以外の地域の都市に、華僑・華人<sup>2</sup>が集中し、中国の民間信仰や、道教および仏教の寺院、同郷や同族の会館<sup>3</sup>、中文学校などを設立、居住や仕事を行う生活空間に想定するのが普通であろう。また、中華料理、中華風の建物や装飾が集中している観光地のようなイメージも考えられる。

「チャイナタウン」という場所とその形成は、様々な人々に注目されてきた。例えば、アメリカや日本の映画と新聞記事<sup>4</sup>の中では、チャイナタウンが異国情緒あふれる、神秘的な「エスニック・タウン」として描き出されてきた。研究者の中にも、「人種隔離ゲート (Peach 1996)、防御の飛び地 (Waller 1985)、新興の寄港地 (Lai 1988)、商業的區域 (民族経済的集結地) (Zhou 1992)、文化的コミュニティ (Ling 2004)、海外のチャイナ (E. Luk 2007)」<sup>5</sup>、エスニック文化資源を用いる様々な人々が出合うコンタクト・ゾーンや社会空間 (王 2013 b, 2014) などのチャイナタウンの定義が提起されてきた。これらの定義は華僑・華人を中心として、彼らの居住空間、仕事場及び、エスニックな象徴として、チャイナタウンが取り上げられてきたことを示す。

一方で、近年の研究においては、華僑・華人以外の多様な主体が如何にチャイナタウンの再開発に参加しているのかが論じられるようになってきた。すなわち、華僑・華人のみに注目するのではなく、チャイナタウンと呼ばれる地理的範囲の再開発をめぐる様々な人々の実践に焦点を当てた研究が増加している。これらの研究においては、必ずしも華

<sup>1</sup> 筆者は博士課程において、日本の中華街を調査地として、研究を進めている。そこで、日本における中華街の再開発に関する先行研究の整理を本調査で行う、加えて、日本における事例との比較のため、欧米における同様の研究をまとめる。本報告書にいう「欧米」とはヨーロッパ諸国、カナダ、アメリカを指す。本調査はアジアの他地域、南アメリカやオセアニアなどの地域のを調査対象に含まないが、今後、整理する予定である。

<sup>2</sup> 中華人民共和国の共産党の定義によると、華僑は中国大陸、台湾、香港とマカオ以外の国家・地域に移住しながらも、中国の国籍を持つ漢民族を指す呼称である。それに対して、華人は移住先の国籍を取得した中国系住民を指す。多くの研究者は「華僑」「華人」という政治性を帯びた定義とは別に、「華僑・華人」を一括する。本調査においても、それらの政治性を特に問題にしているわけではないので、「華僑・華人」という呼称を使用する。

また、本報告書において、1960年代以前に海外へ移住した華僑・華人を「老華僑」と呼び、1960年代後に海外へ移住した華僑・華人を「新移民」と呼ぶ。

<sup>3</sup> 「中国国内や海外の都市にあって、同郷者が相互扶助、情報交換、親睦のために組織する任意加入団体。(中略) 同業者の連絡・会合のための組織、すなわちギルド的な組織や解除を意味することが多いが、宗親会の名称にも使用される場合がある。」可児・斯波・游 (2002) p89 を参照。

<sup>4</sup> 王 (2015)、Li and Li (2013)、Rast (2007)、Ealham (2005) を参照。

<sup>5</sup> 王 (2013b) P103 を参照。

僑・華人が中心的な主体になるとは限らないことを出張している。むしろ多様な主体がある地理的な範囲に「中華的な」記号を付与し、チャイナタウンとして再開発している点に焦点を当てている。ここで言及される多様な主体には、先行研究で頻繁に取り上げられてきた華僑・華人だけでなく、都市エリート、地域住民、他の移民コミュニティ、地域行政、ホスト国の政府や中国政府などが含まれている。

このような流れにおいて、本調査はチャイナタウンの再開発を論じる先行研究をまとめる。本調査において、チャイナタウンを、中国大陸、台湾、香港とマカオ以外の地域の都市に①華僑が集中して生活・商売・仕事をしている場所、及び、②華僑や中国に関するイメージ、価値観、イデオロギーが付与されている都市空間として捉える。すなわち、その地理的な範囲に焦点を当てる。

## 1-2調査方法と本報告の構成

調査の方法は、主に国立民族博物館付属図書室における文献およびデータベースを用いて先行研究を渉猟し、欧米社会と日本社会におけるチャイナタウンに関する先行研究を中心に、研究動向の把握を行うことである。渉猟する先行研究は文化・社会人類学とその隣接分野、社会学、歴史学と人文地理学において、日本語、英語と中国語で書かれたチャイナタウンに関する単著、論文集と学会誌の論文である。

本調査の報告書において、チャイナタウンの再開発をめぐる先行研究を、「新移民によるチャイナタウンの再開発」と「多様な主体によるチャイナタウンの再開発」に分けて整理する。

新移民の到着によって、チャイナタウンの範囲、その経済的な状況などが大きく変化し、新移民と老華僑の相互関係にも多くの問題が生じてきている。そうした社会状況の中で、新移民によるチャイナタウンの再開発が、研究者によって注目されてきた。本稿報告書の第2章は「新移民によるチャイナタウンの再開発」を議論する先行研究をまとめる。具体的な研究内容を紹介する上で、その中の研究パラダイムを分析する。

また、近年において、新移民だけではなく、ホスト社会の様々な人々がチャイナタウンの再開発に参加する現象が増加している。それとともに、「多様な主体によるチャイナタウンの再開発」を論じる研究も増えてきた。これらの研究を本報告書の第3章にまとめ、その研究パラダイムの転換を抽出する。

最後のまとめにおいて、チャイナタウンの再開発に関する研究について、今後の展望を論じる。

## 2. 華僑・華人によるチャイナタウンの再開発

### 2-1 チャイナタウンの形成とその機能について

19世紀から、金鉱開発や鉄道の建設のために、広東省や福建省から多くの男性出稼ぎ労働者が海外へ移住した。それを背景に欧米社会でチャイナタウンが形成された。一方、日本では、鎖国期に福建や広東から来た商人が長崎に移住し、唐人屋敷に住んだ。これが日本の最初の中華街として認識されている。1859年の開国に伴い、神戸や横浜でも中華街が形成され始めた。前述したように、こうしたチャイナタウンを対象に、そこで生活・商売・仕事している「華僑・華人」について研究がなされてきた。

Yuan (1963) は19世紀後半に起こった華僑・華人を蔑視する時期におけるバンクーバーのチャイナタウンを事例に、その形成過程を論じた。Yuanによれば、華僑・華人はホスト社会からうけた被害から身を守り、自分たちの生活を保障するため、中国の文化的なメカニズムを利用して互いに助け合いながら、同じ場所で暮らすようになったという。



つまり、チャイナタウンは彼らが自ら望んだ隔離の結果であると指摘したのである。

それに対して、Anderson (1987, 1988, 1991) は、同じバンクーバーのチャイナタウンを事例とながら、その形成は華僑・華人の望んだ隔離ではなく、ホスト社会のイデオロギーの影響の結果であると指摘した。19世紀末期から20世紀初期にかけて、マスメディアの宣伝、政府の政策により、中国人が劣等であるという人種主義的認識や、彼らの住む場所が危険・不道德・不衛生・無法のステレオタイプの認識がホスト社会に普及された。このように、マスメディアの宣伝や政府の政策によって、西洋社会のイデオロギーが都市空間の一部に投影し、その地理範囲に境界をつけられることで、チャイナタウンが生産されてきたと議論した。

ホスト社会から隔離されてきたチャイナタウンに、華僑・華人が集中している。彼らは中国から持ち込んできた文化を生かして、華僑・華人社会を作り出してきた。これまでに行われた多くの研究はその内部の社会組織の機能と構造を論じてきた。例えば Lai (1988) は、19世紀に形成されてきたチャイナタウンは華僑・華人コミュニティの居住、商業と組織化の需要を満足させる自給自足の町であると指摘した。実際に、チャイナタウンに関する研究の中では、商業組織、新聞会社の組織、宗親会、宗教組織や学校などのエスニックな組織が多く言及されてきた (Lai 1988, Lee 1967, Wickberg 1980, 1982, Willmott 1964)。そのほか、チャイナタウンのエリートは、通常商人であり、如何に地縁関係に基づいてチャイナタウンを管理し、その発展を左右しながら、他の華僑・華人に仕事の機会などを提供してきたのが論じられてきた (Crissman 1967, Wong 1982)。また、中華街の変化を通して華僑・華人コミュニティの生活様式を検討する研究もある (山下 1979, 1991)。

チャイナタウンの経済的機能も多くの研究者に注目されてきた。例えば、チャイナタウンの形成期において、華僑・華人が経営していたレストランや洗濯屋が、コミュニティの自給自足に重要な役割を果たしたと論じられている (Wong 1982, Zhou 1992, Li and Li 2013)。なぜなら、最初にアメリカやカナダへ出稼ぎにきたのは男性の方が多いため、レストランと洗濯屋は彼らの基本的な生活の需要を満足させ、また就労の機会も提供したためである。

それに対して、Kwong (1979, 1992) は、華僑・華人社会内部の不平等や搾取などに注目し、中華料理のレストラン、労働者を搾取する裁縫工場 (sweat shop/factory 中国語：血汗工場) がその代表的なものとして捉えられた。チャイナタウンの貧困化が指摘されている。

一方、チャイナタウンにおけるエスニックな経済の積極的な機能も論じられてきた。その中では、チャイナタウンは中国からの移民がホスト社会へ溶け込むために経済的、文化的な踏み台の機能をもつことが強調されてきた (Zhou 1992)。

小田 (2011) は日本の横浜中華街の地図と写真に基づき、「居留地としての時代」、「港湾の後背地としての時代」、「観光地としての時代」に分けて、中華街の店舗構成を整理し、居留地が中華街に変貌するプロセスを考察した。この研究において、華僑・華人の店舗の数がチャイナタウンであるかどうかの評判基準になっている。また、池田は横浜中華街と神戸南京町の歴史と現状を対照しながら整理して、両中華街の特徴を抽出しようとした (池田 2002)。彼女は横浜中華街と神戸南京町を華僑・華人社会の一部として取り上げ、両地域の華僑・華人社会に違いがあるため、それぞれが異なる特徴を形成していると指摘した。

このような経済的な機能は、20世紀末期から生じた新たな中国移民ブーム (東南アジア華僑・華人の再移民を含む) によって拡張され、レストランや「血汗工場」だけでなく、不動産や貿易業、さらに観光業も興隆してきた。このようにして、チャイナタウンは新移

民によって再開発されるようになっていったのである。

## 2-2 新移民によるチャイナタウンの再開発

新たな移民（新移民）の到着はチャイナタウンに人的資源、資本、需要をもたらしてきた。その例として、バンクーバーのチャイナタウンは華僑・華人のコミュニティの変化により、再開発されつつある（Li and Li 2013）。バンクーバーのチャイナタウンの歴史は19世紀末期から1920年代初期まで、1920年代初期から1970年代まで、1970年代以降という3つの時期に分けられる。第1期において、蔑視されてきた華僑・華人は、ホスト社会から隔離された結果、華僑・華人同士の相互扶助の中からチャイナタウンを形成してきた。第2期において、華僑・華人は自らのイメージを改善するため、チャイナタウンを中国の伝統文化を提供する観光地として発展させてきた。この時期、チャイナタウンはまだ華僑・華人の居住や商売を行う場所であった。第3期に、中国大陸、台湾、香港からの新移民、あるいは東南アジアなどの地域からの華僑・華人の二次移民によって、バンクーバーのチャイナタウンは大きく変化した。不動産と商業が大幅に発展し、チャイナタウンは華僑・華人の生活空間から仕事場へ転換されたのである。これらの新移民は老華僑により、経済的に豊かであり、個々人の教育レベルが高かったことが、チャイナタウンの変化が促進された理由であると指摘されている。すなわち、新移民は経済的な資本とより広い業種の従事能力を持っているため、中華料理店や小商売に限定されていないのである。現在、彼らの仕事や投資により、チャイナタウンが再開発されている。著者の観点から見れば、華僑・華人コミュニティの変化はチャイナタウンの再開発をもたらしてきたといえる<sup>6</sup>。

新移民によるチャイナタウンの再開発の具体的な状況について、Guest（2013）はニューヨークのマンハッタンのチャイナタウンを事例に、議論を展開した。著者は1980年代に、中国の福建省からの新移民がもたらした新たな変化及び、マンハッタンの周囲に新しいベッドタウンが形成されることに注目した。移民ネットワークを通して、マンハッタンに到着した福建系の移民は、おもに中華料理店で働いている。英語ができない新移民に中華料理などを配達させるように、仕事の仲介により英語の地名などに対応するコードが発明され、中華料理店のオーナーにより専用の交通システムも実施されている。家賃が高くなりつつあるチャイナタウンに住めなくなったことにより、新移民はその周りにベッドタウンを形成した。このベッドタウンの発展により、マンハッタンのチャイナタウンは引き続き新移民を受け入れることが可能となり、エスニックな飛び地の機能を発揮している。

新移民の到着がもたらしてきたチャイナタウンの変化は、老華僑と新移民の間の相互関係にも影響を与えてきた。日本の場合、中華街の再開発は、1970年代から観光化を目指して成立された、それぞれの中華街商店街の組合によって行われてきた。それぞれの組合には日本人と老華僑がいる。各組合は中華風の牌楼を建て、道路や店の飾りを整備し、中華的な雰囲気があふれる環境を作ってきた。また、観光客をより多く惹きつけるため、地域社会の状況に応じて、中国の祝日の意味、象徴と名称を借りて様々な祭とイベントを打ち出してきた。1980年代から新移民が益々多くなるにつれて、中華街における新華僑と

---

<sup>6</sup> 同じ視点で新移民によるチャイナタウンの再開発を論じているのは Inglis（2013）である。1880年代から形成されてきたシドニーのチャイナタウンが華僑華人コミュニティの変化を探求する窓として論じられた。このチャイナタウンは、華僑・華人の世代交替により一時衰退したが、新移民の到来により再開発された。そのため、シドニーのチャイナタウンは、民族のシンボル、エスニック文化の観光地、高級住宅地という三つの性格を併せ持つようになった。チャイナタウンの再開発と復興の理由としては、華僑・華人コミュニティにおける社会的・経済的地位や教育水準の向上などの要素が挙げられた。

老華僑の関係も注目を集めるようになってきている。

齋藤と市川、山下（2011）は横浜居留地の歴史を継承してきた地理的範囲として横浜中華街を捉え、その歴史的変容をまとめた<sup>7</sup>。その中で1980年代から横浜中華街における新移民の進出、中華料理店でアルバイトする留学生の増加に言及し、彼らが横浜中華街に新たな資本と人的資源を注入していることを示した。浅野と百武（2007）は日本に住む中国人のエスニシティについて調べるため、神戸南京町の成り立ちと運営について調査した。そしてその報告では、新移民が南京町で店舗を経営しているが、振興組合に加入している人がまだ少ないという問題点に言及した<sup>8</sup>。

一方、Ling（2013）は1つのチャイナタウンの内部の老華僑と新移民の関係ではなく、シカゴの3つのチャイナタウンの相互関係を論じた。シカゴには南と北にわかれたチャイナタウンと中産階層の新華僑が住んでいる郊外地域がある。19世紀の中国からの出稼ぎ労働者が集中して生活する場所は、現在の南のチャイナタウンである。南のチャイナタウンは1950-1960年代の香港や台湾からの新移民により再開発され、シカゴの有名な観光地になっている。また、1970年代に東南アジアから来た華僑の二次移民によって、シカゴの北のチャイナタウンが形成された。そこは現在でも東南アジアからの華僑・華人二次移民の居住地と、彼らが小商売を営む場所になっている。さらに、1980年代に中国大陆と台湾から移住した中産階層は、おもにシカゴの郊外に住むことに選んだ。彼らはシカゴ市内に通勤する医者、弁護士、教授など専門技術を持つ人々である。郊外に住んでいる中産階層は、南のチャイナタウンを自らのエスニックなシンボルとして認知し、南のチャイナタウンの再開発のため、華僑・華人を扶助するボランティア活動を行っている。例えば、南のチャイナタウンで英語の授業、法律の援助などのボランティア活動である。さらに、彼らは南のチャイナタウンを拠点として、ホスト社会にいろいろな権利を求めている。

以上のように、新移民によるチャイナタウンの再開発に関する研究では、華僑・華人内部の変化だけではなく、華僑・華人と地域社会の関係性が論じられてきた。例えば、山下（2010）、Yamashita（2013）と王（2015）は1980年代に中国大陆からやってきた多くの新移民によって形成された袋の「チャイナタウン」に注目した。新移民の移住に伴い、池袋ではある程度の中華料理店や中華関係の小商売と不動産会社は池袋に集中するようになっている。2000年以降、中華料理店を営む新移民は池袋を「東京チャイナタウン」という観光地として再開発する計画を打ち出した。この計画はメディアや東京都に注目されたが、地元の商店街に反対されてしまう。山下と王は、この新移民の集中地域が、地域社会と協力せず、互いに良好な関係も持たない状況で、「チャイナタウン」として再開発

<sup>7</sup> また、山下（2000）は世界各地のチャイナタウンの歴史的変容を紹介している。

<sup>8</sup> 日本の中華街における新移民と老華僑の関係は重要になってきているが、まだ十分に研究されていない。今後、それに焦点を当てる研究が増えるだろう。一方で、他の地域において、関連する先行研究が見られる。例えば、Lausent-Herrera（2013）はペルーのチャイナタウンの事例を取り上げ、チャイナタウンの再開発のプロセスにおいて、新華僑と老華僑の競合を論じた。このチャイナタウンは、19世紀中期以降の労働力補充のため、中国の広東省と福建省から来た出稼ぎ労働者により形成され、彼らの生活や仕事を満足させるエスニック・エンクレーブであった。彼らと現地の人々の間でできた子女であるハーフによって構成されていた。ハーフの移出により、チャイナタウンが衰退してしまったが、1980年代に福建省からの新移民により、中華的な雰囲気が取り戻され、経済的な復興が始まった。一方で、そのころ、老華僑の子孫がチャイナタウンに戻り、自分たちの有するホスト社会との繋がりを用いて、彼らは、チャイナタウンのリーダーシップをめぐる新移民と競合してきた。現在、リマのチャイナタウンは中国移民にたいして仕事や生活の便宜を提供し、老華僑と新移民が協力し、競争する場所になっている。

されるのは難しいことであると指摘した。

### 2-3 シカゴ学派のアプローチ

新移民によるチャイナタウンの再開発に関する先行研究は、華僑・華人の居住・生活・商売・仕事の場所としてチャイナタウンを捉えている。チャイナタウンは、理念モデルとして、1つの居住空間であり、その中に華僑・華人ばかりが生活し、経済的・社会的・文化的な活動を共有していることがこれらの研究によって提示された。さらにチャイナタウンの再開発は、新移民が到着してもたらしてきた影響によって生じた現象として考えられており、華僑・華人コミュニティの新たな変化と、その内部のサブグループの関係が論じられている。その中では、居住空間でなくなり、商業空間や観光地になりつつあるチャイナタウンにおいて、華僑・華人の実践が少なからず注目されてきた。華僑・華人が持ち込んだ「中華文化」を如何に活かしながら生活するのか、如何にチャイナタウンのさらなる発展を求めているかが焦点となる。

こうした研究の背後には、華僑ばかりが集住する共同体＝チャイナタウンというシカゴ学派の人間生態学的アプローチがあると考えられる。このアプローチによれば、まず移民が都市の一部の地域に集中し、隔離（Segregation）が発生する。そして、移民の集中するエリアはエスニックなエンクレーブとなる。そのエスニックなエンクレーブは、移民集団の変化により変化を強いられる。このアプローチをチャイナタウンに当てはめた場合、それは華僑・華人の密集によって、ホスト社会の都市の一部に隔離され、異なる社会構造や文化現象が生じることで、自然的に発生する場所と考えられる。また、華僑・華人の変化、特に新移民の到着により、再開発が進行されるというプロセスになる。すなわち、チャイナタウン＝華僑ばかりが集中する共同体として、シカゴ学派の人間生態学のアプローチが存在していると思われる。

しかしながら、ホスト社会の文脈の変化により、チャイナタウンは大きく変わってきた。なぜなら、今までチャイナタウンとして認識されてきた場所は、華僑・華人の居住空間でなくなり、商業空間や観光地になったり、多様な主体が日常的な生活や仕事を行ったりする場所になる現象が生じているためである。一方、新たに形成している華僑・華人の居住空間や商業空間は、チャイナタウンとして認識されていない、あるいはチャイナタウンとしての呼称に抵抗がみられる。日本の現状はその典型的な事例である。今現在、日本で中華街（チャイナタウン）として認識されている場所は1970年代から観光地として再開発されてきた横浜中華街、神戸南京町と長崎新地中華街である。それらは中華料理店、中華雑貨屋が密集し、中華的な雰囲気があふれて、中華風なイベントや祭りが充実する観光地である。その中で店舗を営んでいる人々は、華僑・華人とは限らないうえ、観光客は主に日本人である。一方、中国からの新移民が集住し、商売や仕事をしている東京の池袋は、いまだに中華街として認識されていないのである。

このような状況の中、誰が何を「中華的」な記号として、どうやって都市の中の一定の範囲に付与し、そこに明確な境界をつけてチャイナタウンとして作り上げてきたのかは重要になってくる。中華街の再開発に参加してきた多様な主体の実践に焦点を当てる必要があり、そうした研究が盛んに行われてきた。それらの研究では、チャイナタウンをめぐる多様な主体が協力し合う面と競合し合う面が論じられてきた。つまり、チャイナタウンは様々な人々の力関係により作られており、またその力関係の相互作用の場となっているのだ。チャイナタウンが自然発生的なエスニック・エンクレーブであるとするシカゴ学派の人間生態学的アプローチからのパラダイム転換であるといえる。

### 3. 多様な主体によるチャイナタウンの再開発

上記のような研究とは異なり、チャイナタウンを華僑・華人の集住地として捉えず、多様な主体が「中華的な」記号を付与する空間として注目した研究群がある。ここで言及される主体には、先行研究で頻繁に取り上げられてきた華僑・華人だけでなく、都市エリート、地域住民、他の移民、地域行政、ホスト国の政府や中国政府などが含まれている。そうした記号の付与を考察することにより、①華僑・華人コミュニティが再編され、②多様な主体の相互関係が論じられてきた。

#### 3-1 華僑・華人のコミュニティの再編について

チャイナタウン再開発のプロセスの中で、華僑・華人や中国を代表する文化的な記号が構築され、華僑・華人コミュニティのアイデンティティに重大な影響をもたらしてきた。

大橋（1997、2000）は神戸の変動する在日華僑・華人社会を代表として取り上げ、華僑・華人のエスニック文化復興に焦点を当て、華僑・華人のネットワークこそが南京町の復興の根本であると指摘した。また、再開発された南京町はそのネットワークの磁場になったことを明らかにした。すなわち、神戸南京町の観光地化は華僑・華人のネットワークにより実現され、観光地化された南京町は逆に華僑・華人ネットワークを強化している。

張（2007）は南京町の観光地化を通して、より多くの観光客を誘致するため、華僑・華人が中国文化を選択・復興・創造していることを明らかにした。つまり、観光客の「他者」のまなざしを通して、華僑・華人としてのエスニック・アイデンティティが構築される過程を描き出したのだ。

王（1997、1998a、1998b、2000a、2000b、2001）は中華街を華僑・華人社会の一部分として取り上げ、3つの中華街の再開発による伝統芸能の再編と華僑・華人エスニシティの強化とを関連させて論じた<sup>9</sup>。中華街の再開発と共に華僑・華人の伝統芸能の伝承と披露の舞台が再構築され、伝統芸能を再習得、出演などのプロセスにおいて、華僑・華人社会の繋がりや華僑・華人のエスニシティが強化されたという。また、中華街の活性化は経済的な効果をもたらし、日本人を含む中華街コミュニティの結束、さらには中華街を取り巻く地域社会の繋がりをも強化している<sup>10</sup>。

#### 3-2 多様な主体の相互関係の構築について

長友（2009）は横浜中華街内部の店舗構成の歴史と現状を明らかにし、各店舗経営者の経営戦略を分析した。また、宋（2015）は中華街の再開発で主役を担う組合の経営戦略に注目し、南京町の重要なイベントである春節祭を例に、南京町振興組合のweb上の経営戦略を分析した。これによって長友と宋は、エスニック文化を利用する組合とそれを受容す

<sup>9</sup> 神戸華僑の芸能、特に獅子舞について、張（2008）も論じている。

<sup>10</sup> 華僑・華人のコミュニティの再編を論じる先行研究において、常にホスト社会と中国の関係を大きな背景として捉える。例えば、1970年代に日本と中国の国交正常化は、日本の中華街の再開発の重要な社会背景である。また、キューバのハバナにおけるチャイナタウンの変容は、社会背景の変化において華僑・華人エスニシティの再編と関係づけて論じられている（Hearn 2013）。このチャイナタウンは、19世紀末に広東省や福建省から出稼ぎ労働者としてきた中国人により形成された。その後一部の労働者は中華料理店や八百屋のオーナーになり、チャイナタウンを発展させてきた。その過程で、彼らは徐々にキューバの野菜の運輸と販売に関する業種を把握するようになっていった。その後、キューバの白人と黒人の民衆、さらに政府は、華僑・華人エスニシティからその野菜の運輸と販売をコントロールする権利を奪おうとした。このように、華僑・華人はチャイナタウンの範囲内に小売や中華料理店などの経営しかできなくなった。その後、キューバと中国の国交正常化により、チャイナタウンがキューバ政府にとって、中国との貿易のための重要な仲介者となっていた。華僑・華人はそうした社会の変化を活かし、自らの権利をアピールしながらチャイナタウンを商業空間として再開発しようとした。

る消費者によって中華街が構築しつつあることを指摘した。中華街は単純に華僑・華人コミュニティの象徴だけではなく、多様な主体の認識の中に、構築されていく。

高橋と于 (1996) は、若い女性に人気のある神戸南京町の形成と変容をまちづくりの観点から考察し、女子学生のアンケート調査から南京町の魅力と問題点について明らかにした。この論文においては、新たに新華僑・華人による南京町の屋台の出現の理由と経営戦略が分析された。それによると、チャイナタウンの魅力や、その新たな変化は、経営側と観光客の相互行為の中で動的にとらえられるという。

他方、Tsu (2008) は華僑・華人社会内部のダイナミズムだけではなく、神戸開港から現在まで神戸市行政と日本政府の態度、政策と参与の程度が南京町に与えた影響に焦点を当てた。これは、神戸市行政と日本政府が1つのエスニック集団を利用して社会を統合させようとした結果、南京町の再開発が実現されたことをと議論するものであった (Tsu2008)。

廖と王 (2004) はローカル・イニシアティブ<sup>11</sup>の概念を用い、「長崎ランタンフェスティバル」の創出を東アジアの歴史文脈において分析した。彼らは、まず、長崎の華僑・華人社会の歴史を述べたうえで、長崎のアジア化としての経済発展の可能性を提示した。また、長崎中華街を再開発する主体は華僑・華人と日本人を含む地域の発展に立脚するローカル・コミュニティであると指摘した。長崎新地中華街の再開発に伴い、町の活性化のため、中国の旧正月 (春節) を祝う行事「春節祭」が創出された。長崎市行政の経済的な援助、組織的及び計画的参与によって、春節祭は地域社会の代表的な祭りである長崎フェスティバルとして位置づけられるようになった。このプロセスを通して、華僑・華人だけではなく、地域の人々が自ら持っているネットワークを活かし、チャイナタウンの再開発に関わっていることがわかる。長崎の歴史と社会状況はローカル・コミュニティの形成と長崎フェスティバルの創出の条件であったわけだ。そして、長崎フェスティバル自身も華僑・華人のエスニシティと地域社会の特徴のシンボルになったといえる。しかし、華僑・華人にとって、新たなエスニシティの再編という意味を有する春節祭は、市行政が求めた単純な観光イベントとはことなるため、地域社会の深層において、アイデンティティと市場ネットワークのずれがあると指摘した。

この研究はグローバル化がローカルの増大によって進められている視点にたち日本の町おこしの一環としての長崎ランタンフェスティバルの生成過程を通して、東アジアにおける長崎の独特な地域性を検討した。さらに、そこから西洋を中心とする単一方向のグローバリゼーションではなく、東アジアから発信するもう1つのグローバリゼーションの存在を明らかにした

王は、同じ長崎ランタンフェスティバルに地域行政の参与に注目し、グローバルな観光化の下で華僑・華人文化が日本の地域社会において、受け容れられるプロセスを考察した (Wang 2010)。彼女は、長崎の地域社会において、華僑・華人と日本人の融合、更に華僑・華人文化と地域文化の融合に焦点を当てた。それによって華僑・華人、チャイナタウンを有する地域の日本人、さらに長崎市行政の参与によって、ランタンフェスティバルは長崎市の欠かすことができない重要な観光資源となったことを示した。また、王は長崎フェスティバルが長崎中華街の地理範囲を越え、イベントの舞台が長崎市の広範囲に拡張されていることを強調した。

<sup>11</sup> 日本では、1960年代後半から、町おこしは地域コミュニティにおける草の根の運動としてスタートし、1980年代以降、各自治体は、グローバルの挑戦を受けて地方分権を主張し、地方の国際化を地域発展における重要な戦力として打ち出し。こうした動きは、国家を相対化し、地方をコアに国境を超えた新たな歴史・文化・生活・政治空間を生み出すことを意味している。このような「ローカルが主体となって、新しい生活空間を創造しようという運動を『ローカル・イニシアティブ』と呼ぶ。(廖・王 2004 : 308)

Chen (2010) は横浜中華街発展会協同組合内部の多様な主体の間の繋がりに注目し、グローバル時代のローカルな主体性を検討した。彼女は、横浜中華街を中華的なテーマパークとして位置づけ、振興組合がエスニックな特徴こそ地域の経済利益の源としたうえで、エスニック文化を利用して中華街の再開発を行ったことを強調した。振興組合のメンバーである大陸出身の華僑・華人、台湾出身の華僑・華人、日本人はそれぞれの立場があるが、彼らは関帝廟を再建し<sup>12</sup>、エスニック文化を再編して、中華街を再開発してきた。陳は、振興組合の人々がそれぞれの出身や政治的な立場より、地域社会での flexible citizenship を選択して中華街の発展とともに立ち向かうことを論じた。

近年、日本と欧米におけるチャイナタウンを研究対象として比較する研究が現れてきた (王 2013a、2013b、2014)。日本の中華街 (特に長崎新地中華街) とロンドン、サンフランシスコのチャイナタウンが比較され、ローカルな文化から生まれ出た中華街の共通点と相違点を提示された。3つの地域のチャイナタウンの再開発には多様な主体が参与してきたが、①日本の中華街は華僑・華人コミュニティが自ら選択した華僑・華人文化を地域社会に融合させ、定着させてきている、②ロンドンの事例はイギリスと中国との国際関係を構築する媒介の性格が強い、③サンフランシスコの事例はアメリカの多移民の社会的文脈において新しく構築されているといったものである。

チャイナタウンの再開発をめぐる多様な主体が協力し合う面に注目する上述のような研究がある一方で、多様な主体の競合し合う面に焦点を当てる研究もある。

例えば、Rast (2007) は 19 世紀末期のサンフランシスコの都市観光業の発展を社会背景として、白人の観光ガイド、都市の小説家、新聞記者などの文化人、さらにチャイナタウンのエリート商人が如何にチャイナタウンのオーセンティシティ (authenticity) を作り上げるのかを論じた。ここでの観光ガイドはチャイナタウンを不道德、不衛生、新奇なものを求める場所として主要な観光客である白人に紹介する。彼らはチャイナタウン＝無法地帯というイメージを付与しているのだ。これに対して、チャイナタウンの商人は、組織を設立し、中国の伝統文化を観光客にアピールしながら、チャイナタウンの環境を改善している。すなわち、華僑商人はチャイナタウン＝伝統的な中国文化に溢れた場所として主張しているのだ。チャイナタウンのオーセンティシティについての説明は異なるが、どちらでもチャイナタウンをサンフランシスコの社会から隔離させ、観光客の日常生活と違う世界であると強調する。それによって、観光客を引き寄せ、経済的な目的を実現している。

この研究において、白人の文化人とチャイナタウンのエリート商人はチャイナタウンに関する空間の意味をめぐる競合していることが見える。そこから、チャイナタウンに関するイデオロギーが生まれ出され、一般社会に普及している。

このようなイデオロギーの影響は、チャイナタウンを有する都市社会だけではなく、欧米社会一般にも普及した。Ealham (2005) は、1835-1936 年に、華僑・華人が一切存在しない Raval 地区がチャイナタウンとして名付けられたプロセスを論じた。Raval 地区は工場区に近い、職人階層が集中して居住する場所である。共産主義の隆興に伴って、Raval 地区から職人階層の運動が多くなったことをきっかけに、バルセロナの資産階層の都市エリートは、チャイナタウン＝無法地帯というサンフランシスコのイメージを領有し、華僑・華人は一切存在しない労働者の居住地をチャイナタウンと名付けた。それによって、Raval 地区を改変する口実をつくり、労働者を追い出そうとした。労働者ばかりの居住地であった Raval 地区を、異種混合の都市住民が生活する場所として再開発しようとしたのだ。

<sup>12</sup> 飯田 (2011) は同じく関帝廟の再建において華僑・華人内部の関係の調和を論じた。

さらに別の研究者は、チャイナタウンの再開発前のイメージ形成にも注目した。Benmayor (2010) はサリナスのチャイナタウンの再開発計画が実施される前に、現地の博物館が企画しチャイナタウンに関する記憶の収集プロジェクトの一員として調査を行った。個の調査を通して彼は、華僑・華人だけでなく、その地域や周りに生活していた、あるいはかかわりがあった日本人やフィリピン人が持つチャイナタウンに関する記憶を整理した。それによって異なる背景の移民がチャイナタウンに関して、異なる記憶と特徴を語っていることが明らかになった。それは様々な人々が示す場所(place)に対する個々人の感情的な繋がりである。著者は最後に、これらの語りが博物館に展示されていく中で、どれが今後のチャイナタウンの表象になっていくのかという疑問を提起した。

川瀬と吉元(2013)は、新華僑の進出に焦点を当て、「池袋チャイナタウン」として学界と各種メディアに名付けられた空間の同エリアで生活をしている個々の生活者の視座から調査を行った。彼らは、「政府機関やメディア表象といった外部からの固定的・一枚岩的な空間表象に對置し、内部者の視座、個々人の経験に基づいた視点から見た様々な生活の場所に注目した池袋像を提示」した。その中で、まず、「池袋チャイナタウン」が実在するというメディア表象と学術表象の存在を提示し、それに対して、個人としての新移民やネパール人生活者のケースを紹介した。さらに、日本人の池袋に対する思いを触れながら、生活の場所としての池袋を通してみられる人々の多様な生活様式やアイデンティティを論じた。そうした上で、池袋が決して新移民ばかりが居住する場所ではなく、様々な人々が共有する生活の場所であると強調した。こうした中で、日本人と新移民が対立する状況がある一方で、様々な人々が出会う「場所」の地平において、その生活の接点も見えてくる。人々の相互影響の中に、「池袋チャイナタウン」をめぐる表象を考え直すことができるだろう。

チャイナタウンの創出をめぐる空間の価値観付与と場所の記憶やアイデンティティをめぐる議論が、リスボンでも展開されている(Santos 2013)。1920年代、農業の労働力補助としてリスボンにやってきた中国人移民は、これまでチャイナタウンを形成してこなかった。彼らは小商業者として、分散してホスト社会で商売と生活を行わってきた。近年中国の経済的な向上、特に北京オリンピックと上海エキスポの開催の影響で、中国の国際的な影響力が注目を集めてきた。リスボン市行政は地域社会における華僑華人の歴史を活かし、チャイナタウンを創出しようとしている。しかしながら、地域住民にとって、チャイナタウンは依然として19世紀のような「不法地帯」のイメージが強い。また、リスボン市行政が主導した黒人移民の住宅区はスラムになってしまったという前例があるため、もし新たにチャイナタウンを作ったら、またスラムが生まれることを危惧した。さらに、今まで分散している華僑華人は、集中して居住する経験がないため、彼らの思いやアイデンティティを象徴する場所は、リスボンには存在しない。このような状況では、チャイナタウンを作り出すことは難しい。著者は①その場所に対する華僑華人の思い、アイデンティティをいかに構築するか、②チャイナタウンに関するイデオロギーをいかに生産するかについて、戦略的に考える必要があると指摘した。

チャイナタウンをめぐる表象の生成と、さらにその表象にからめとられているチャイナタウンで商売をする人々、地域行政、国家が如何にその表象を再構築していくのかについて、ChuangとTrémon(2013)は、空間と場所の概念を用いながら、フランス、パリの例を取り上げて論じている。パリ市内のPopincourt地区における衣類の卸売店の集中は、他の業種の店舗を押しよせ、ゴミ、騒音、交通渋滞などの社会問題を引き起こし、地域住民の日常生活に悪影響を与えた。そこで、地域住民は地域行政にこれらの問題を解決することを要求し、地域行政は不法移民や「血汗工場」であるという理由で、いくつかの卸売



屋を差し押さえた。メディアも、華僑・華人に対する悪イメージを宣伝した。その一方、パリ郊外の Aubervilliers 地区では、衣類の卸売店の密集によって同じく交通渋滞が起こったが、地域行政が主導で問題解決をしようとした。地域行政は地域住民が主導する企業と連合し、卸売屋のオーナーを説得させた上、地域の環境と経済の向上を目指す組織を作った。衣類の卸売屋を排除ではなく、仕事の仕方を改善させて、騒音と交通渋滞の問題を解決したのだ。そのうえ、衣類の大手卸売店の商人を通して、中国の上海との長期的な貿易関係まで作り出し、メディアにより中国とフランスの友好関係が強調されるまでに至った。著者は Popincourt 地区の例を都市空間に対する競合であり、Aubervilliers 地区の例をそれに対する競合と共栄であると指摘した。

### 3-3 空間論のアプローチ

多様な主体によるチャイナタウンの再開発に関する先行研究は、華僑・華人のエスニシティの再編と多様な主体の相互関係の構築を論じてきた。こうした中、チャイナタウンは単純に華僑・華人の生活する場所としてだけでなく、多様な主体により「中華的」な記号が付与された都市空間として捉えられている。それを通して、チャイナタウンの地域社会における位置づけやチャイナタウンに対する多様な主体の異なる認識が明らかにされた。すなわち、チャイナタウンの再開発をめぐる、多様な主体の協力したり、競合したりする実践が論じられてきたといえる。このような議論において、チャイナタウンはただ自然的に形成された地名や物理空間ではなく、人々の間の力関係によって管理や抵抗が行われる社会空間となる。そこにはシカゴ学派の人間生態学的アプローチから空間論的アプローチへのチャイナタウンの再開発をめぐる研究のパラダイムの転換が見え隠れする。

いくつかの先行研究は、明確に「空間」「場所」の概念を用いてチャイナタウンの再開発を分析し、多様な主体の力関係を明らかにした。近年、チャイナタウンは華僑・華人コミュニティの居住空間ではなくなり、商業空間あるいは観光地になる傾向が現れている。また、華僑・華人が郊外へ移住したこともあり、どこがチャイナタウンであるかがますます不鮮明になっている。つまり、チャイナタウンとは何かという定義に関する問題が研究者に突きつけられるようになった。

こうしたなか、チャイナタウンだけではなく、より広い社会的な文脈において、マクロの視野で人々の相互作用が論じられた。それは、チャイナタウンを単純に華僑・華人の生活・商売・仕事の場所ではなく、都市空間の一部に境界を設け、「中華的」な記号を付与することでチャイナタウンが成り立つという動的な視点に立って、再開発を捉えるという研究である。チャイナタウンは華僑・華人が自らのコミュニティやエスニシティを再編することにより再開発されるのみではない。むしろ、多様な主体がチャイナタウンの再開発のプロセスにおいて、自らの政治・経済的な目的を果たすために実践が繰り返されている空間である。そうしたなか、そのようなイメージをチャイナタウンに付与するか、あるいはチャイナタウンの再開発から生じた政治・経済的な利益をいかに分配するかをめぐって権力が生まれる。このような権力の中心は必ずしも華僑・華人にあるわけではない。つまり、チャイナタウンを価値観、表象とイデオロギーが付与された「空間」として捉える動きが高まってきたのだ。脱華僑・華人中心的に、様々な人々の動きを平等的に捉える必要がある。

## 4. おわりに：今後の展望

上述のように、チャイナタウン（中華街）の形成と再開発に関する研究動向は、近年に

至る流れの中に、華僑・華人はかりに焦点を当てたものから、多様な主体の参与に注目するものへと変化してきた。華僑・華人をはじめ、地域住民、他の移民コミュニティ、地域行政、ホスト社会の政府、さらに中国政府もチャイナタウンの再開発のプロセスに参与することを明らかにされてきたのである。そのなかに、シカゴ学派人間生態学的アプローチから空間論へのパラダイム転換が見いだせる。それによって、空間論のアプローチからチャイナタウンの再開発をめぐる多様な主体の力関係がより明らかにされるようになってきた。

先行研究に登場してきた多様な主体の分類基準は通常「華僑・華人と非華僑・華人」、あるいは「華僑・華人コミュニティと地域社会」や「華僑・華人コミュニティと国家」というエスニックな枠組である。そして、その参与はチャイナタウンの再開発におけるイメージづくり、すなわちチャイナタウンの表象に焦点が当てられてきた。しかし、このような表象の生成のプロセスと、さらにその表象にからめとられている日常的な生活や商売、仕事を行う様々な人々がいかなる相互関係を持っているのか、あるいは、いかにチャイナタウンの表象を再構築していくのかという問題についてはまだ十分に研究されていない。

それ故、チャイナタウンのイメージづくりのプロセスだけではなく、そこにおける様々な人々の日常的な生活、商売や仕事にも注目する必要がある。エスニックな枠組によって分類されている多様な主体だけでなく、社会階層やジェンダーなどの要因を考えながら、個と個の関係からチャイナタウンを考察していかなければならない。すなわち、チャイナタウンにおけるエスニックな表象を考慮しながら、その枠組みから脱出し、多様な主体の経験、相互関係とそれによって新たに構築されていくチャイナタウンを考察することが求められているといえよう。言い換えれば、チャイナタウンをめぐるイデオロギーの生成(空間の意味)と日常的な生活や商売の実践(場所に対する記憶や思い)の相互影響を考察するということである。

以上のような研究の視点と方法論により、チャイナタウンの形成、再開発とその日常的な状況に関する事例の緻密的な考察ができる。こうしたなか、華僑・華人だけではなく、チャイナタウンの再開発に参与してきた個々人の間の力関係を明らかにすることができる。そのためには、チャイナタウンの形成や再開発、日常生活に関する緻密な事例を積み重ねる必要があり、それによって、表象の生成やイデオロギー付与のプロセスの変動について、あるいは、何がチャイナタウンであり、誰のチャイナタウンであるのかについて問い直すことができる。

## 参考文献

### 【和文文献】

浅野真由、百武由加里

2007 「外国人エスニシティ：神戸南京町のコミュニティに関する調査（2005 年度社会調査演習報告）」神戸大学社会研究会 『社会学雑誌』 24：177-181

飯田樹与

2011 「横浜媽祖廟建立の背景から見た中華街における役割」『メタプティヒアカ：名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室年報』 5, 103-108

池田和子

2002 「横浜中華街と神戸南京町—東西チャイナタウン比較への試み—」『地域と社会』 5：123-152

王維

1997 「在日華僑・華人の祭祀と芸能——長崎と神戸」『季刊民族学』 21：90-97

- 1998a 「長崎新地中華街振興組合と長崎ランタンフェスティバルの成立と発展」名古屋が医学情報文化学部・名古屋大学大学院人間情報学研究科『情報文化研究』8：139-160
- 1998b 「長崎華僑・華人における祭祀と芸能——その類型およびエスニシティの再編」『民族学研究』63-2：209-231
- 2000a 「日本華僑・華人における芸能伝承形態およびエスニシティ——横浜の場合」『中部大学人文学部研究論集』3：109-136
- 2000b 「日本華僑・華人における龍踊りの伝承と形態——横浜、神戸、長崎の場合」『同朋学院名古屋造形芸術大学研究紀要』6：89-10
- 2001 『日本華僑・華人社会における伝統文化の再編とエスニシティ』東京：風響社
- 2013a 「再創生された地域ブランドと観光資源——春節祭を事例として——」『香川大学経済論叢』86（2）：73-129
- 2013b 「ロンドン・チャイナタウンの文化空間——他の地域の比較の視点から——」『香川大学経済論叢』85（4）：103-150
- 大橋健一
- 1997 「エスニック・タウンとしての『神戸南京町』——地域の磁力都市エスニシティの動態」奥田道大編『都市エスニシティの社会学』ミネルヴァ書房、pp75-87
- 2000 「「神戸南京町」の再構築と観光」『立教大学観光学部紀要』2：36-40
- 可児弘明、斯波義信、游仲勲
- 2002 『華僑・華人・華人事典』東京：弘文堂
- 川瀬理由・吉元菜々子
- 2013 「仮構としての池袋チャイナタウン——池袋北西エリアをめぐる表象の諸相」伊藤眞（編）『多文化都市と新相互行為圏（NIZ）の形成：新しい「国際移動研究センター」構築に向けた研究』（平成22年度—平成24年度首都大学東京傾斜的研究費 研究成果報告書）77-95。
- 小田巻滋
- 2011 「変貌し続ける横浜中華街」『月刊地図中心』471：7-14
- 斎藤譲司、市川康夫、山下清海
- 2011 「横浜における外国人居留地及び中華街の変容」『地理空間』4-1：56-69
- 宋晨陽
- 2015 「チャイナタウンとしての南京町の戦略——南京町商店街振興組合に注目して——」『開港都市研究』10：65-82
- 高橋正明、于亚
- 1996 「神戸南京町の形成と変容」『大手前女子大学論集』30：105-128
- 張玉玲
- 2007 観光地「中華街」の形成と発展から見る日本人と華僑・華人が試みた「共生」『愛知淑徳大学論集—コミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇』7：163-176
- 2008 『華僑・華人文化の創出とアイデンティティ：中華学校・獅子舞・関帝廟・歴史博物館』名古屋：ユニテ
- 廖赤陽、王維
- 2004 「ローカル・イニシアティブにおける伝統の創造——長崎ランタン・フェスティバル（春節祭）とニュー・エスニシティ——」『東洋文化研究所紀要』146：308-286。
- 長友麻苗未

- 2009 「横浜中華街の発展とブランドイメージ」『学芸地理』64：70-82  
 山下清海  
 1979 「横浜中華街在留中国人の生活様式」『人文地理』31（4）：33-49  
 1991 「日本における中華街の形成と発展——開港から第二次世界大戦まで」山本正『首都圏の空間構造』二宮書店、211-220  
 2000 『チャイナタウン』東京：丸善  
 2010 『池袋チャイナタウン：都内最大の中華街の実像に迫る』東京：洋泉社

【欧文文献】

- Anderson, Kay J.  
 1987 *The Idea of Chinatown: The power of place and institutional practice in the making of a racial category.* *Annals of the Association of American Geographers* 77(4):580-98.  
 1988 *Cultural Hegemony and the Race Definition Process in Vancouver's Chinatown.* *Environment and Planning D: Society and Space* 6(2):127-49.  
 1991 *Vancouver's Chinatown: Racial Discourse in Canada, 1875-1980.* Montreal: McGill-Queen's University Press.
- Benmayor, Rina  
 2010 *Contested Memories of Place: Representations of Salinas' Chinatown.* *The Oral History Review*, Vol. 37, No. 2 (SUMMER/FALL), pp. 225-234.
- Chen, Tien-shi  
 2010 *Reconstruction and Localization of Ethnic Culture: The case of Yokohama Chinatown as a tourist spot,* Min HAN and Nelson GRABURN (ed) *Senri Ethnological Studies* 76: *Tourism and Glocalization: Perspectives on East Asian Societies*, pp.29-38.
- Chuang, Ya-Han and Anne-Christine Trémon  
 2013 *Problematizing "Chinatowns": Conflicts and Narratives Surrounding Chinese Quarters in and around Paris.* Bernard P. Wong and Tan Chee-Beng (ed.) *Chinatowns around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora.* Printforce, the Netherlands, pp.163-186.
- Crissman, L.  
 1967 *The Segmentary Structure of Urban Overseas Chinese Communities.* *Man*2(2):185-204.
- Ealham, Chris  
 2005 *An Imagined Geography: Ideology, Urban Space, and Protest in the Creation of Barcelona's "Chinatown", c.1835-1936.* *International Review of Social History* 03:373 -397.
- Guest, Kenneth J.  
 2013 *From Mott Street to East Broadway: Fuzhounese Immigrants and the Revitalization of New York's Chinatown,* Wong and Tan Chee-Beng (ed.) *Chinatowns around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora.* Printforce, the Netherlands, pp.35-54.
- Hearn, Adrian H.  
 2013 *Chinatown Havana: One Hundred and Sixty Years below the Surface.* Bernard

- P. Wong and Tan Chee-Beng (ed.) *Chinatowns around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora*. Printforce, the Netherlands, pp163-186.
- Inglis, Christine.  
 2013 *Chinatown Sydney: A Window on the Chinese Community*, Wong and Tan Chee-Beng (ed.) *Chinatowns around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora*. Printforce, the Netherlands, pp.95-118.
- Kwong, Peter  
 1979 *Chinatown, New York: Labor and Politics, 1930-1950*. New York: Monthly Review Press.  
 1992 *The Old Chinatown Ghettos*. Dudley L. Poston Jr. and David Yaukey (eds.), *The Population of Modern China*. New York: Plenum Press, pp149-159.
- Lai David Chuen-Yan  
 1988 *Chinatowns: Towns within Cities in Canada*. Vancouver: University of British Columbia.
- Lausent-Herrera, Isabelle  
 2013 *The Chinatown in Peru and the Changing Peruvian Chinese Community (ies)*, Wong and Tan Chee-Beng (ed.) *Chinatowns around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora*. Printforce, the Netherlands, pp. 119-162.
- Lee Tung-hai  
 1967 *Jianada Huaqiao Shi (History of Overseas Chinese in Canada)*. Vancouver: Jianada Ziyou Chubanshe (Canada Free Press).
- Li, Peter S. and Eva Xiaoling Li  
 2013 *Vancouver Chinatown in Transition*, Wong and Tan Chee-Beng (ed.) *Chinatowns around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora*. Printforce, the Netherlands, pp.19-34.
- Ling Huping  
 2004 *Chinese St. Louis: From Enclave to Cultural Community*. Philadelphia: Temple University Press.  
 2013 *The New Trends in American Chinatowns: The Case of the Chinese in Chicago*. Bernard P. Wong and Tan Chee-Beng (ed.) *Chinatowns around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora*. Printforce, the Netherlands, pp. 55-94.
- Luk, Wai-ki E.  
 2007 *Chinatown in Britain*. New York: Cambria Press.
- Peach, C.  
 1996 "Does Britain have ghettos?", *Transactions of the Institute of British Geographers* 21(2): 216-235.
- Rast, Raymond W.  
 2007 *The Cultural Politics of Tourism in San Francisco's Chinatown, 1882-1917*, *Pacific Historical Review*, 76(1):29-60.
- Santos, Paula Mota  
 2013 *Chinatown-Lisbon? Portrait of a Globalizing Present over a National Background*. Bernard P. Wong and Tan Chee-Beng (ed.) *Chinatowns around the*

- World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora*. Printforce, the Netherlands, pp.215-245.
- Tsu, Yun Hui  
 2008 *From ethnic ghetto to “gourmet republic” : the changing image of Kobe’ s Chinatown and the ambiguities of being Chinese in modern Japan*, David Blake Willis and Stephen Murphy-Shigematsu (Eds), *Transcultural Japan: at the borderlands of race, gender, and identity*, pp135-158.
- Waller, P. J  
 1985 *The Chinese*, *History Today*(35)9:8-15
- Wang, Wei  
 2010 *Localized Culture and Japan’ s Tourism: A Case Study of Alien Culture and Traditional Culture*. Min HAN and Nelson GRABURN (edt) *Senri Ethnological Studies 76: Tourism and Glocalization: Perspectives on East Asian Societies*. pp. 77-91.
- Wickberg, Edgar.  
 1980 *Chinese and Canadian Influences on Chinese Politics in Vancouver, 1900-1947*. *BC Studies* 45(Spring): 37-55.  
 1982 *From China to Canada: a History of the Chinese Communities in Canada*. Toronto: McClelland and Stewart Limited.
- Willmott, William E.  
 1964 *Chinese Clan Associations in Vancouver*, *Man* 64-65:33-37.
- Wong, Bernard  
 1982 *Chinatown: Economic Adaptation and Ethnic Identities of the Chinese*, San Francisco: Holt, Rinehart and Winston Inc.
- Wong, Bernard P. and Chee-Beng Tan(eds.)  
 2013 *Chinatowns around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora*. Printforce, the Netherlands.
- Yamashita, Kiyomi  
 2013 *Ikebukuro Chinatown in Tokyo: The First “New Chinatown” in Japan*, Bernard P. Wong and Tan Chee-Beng(ed.) *Chinatowns around the World: Gilded Ghetto, Ethnopolis, and Cultural Diaspora*. Printforce, the Netherlands, pp.247-262.
- Yuan, D. Y.  
 1963 *Voluntary Segregation: a study of new Chinatown*, *Phylon*24(3):255-265.
- Zhou, Min  
 1992 *Chinatown: The Socioeconomic Potential of an Urban Enclave*, Philadelphia: Temple University Press.

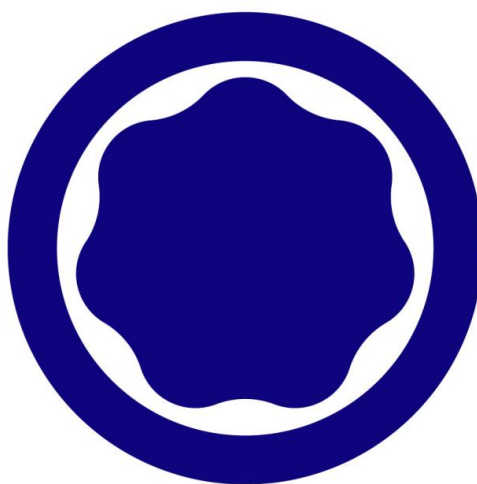
#### 【中文文献】

王维

- 2014 《华侨的社会空间与文化符号：日本中华街研究》广州：中山大学出版社  
 2015 《20 世纪 80 年代以来的日本新老“中华街”》，廖赤阳（编）《跨越疆界：留学生与新华侨》北京：社会科学文献出版社·全球与地区问题出版中心，第 151-185 页

## 平成 28 年度

大学共同利用機関法人人間文化研究機構  
国立民族学博物館共同研究募集要項



申請にあたっては、共同研究（一般）と共同研究（若手）のどちらかを選択して申請してください。重複申請することはできません。

## ■ 目次

### I. 共同研究（一般）

1. 共同研究（一般）の課題区分	3
2. 共同研究（一般）の構成	3
3. 共同研究会の開催場所	3
4. 共同研究（一般）の期間	3
5. 応募資格	4
6. 募集件数	4
7. 申請方法等	4
8. 採否	4
9. 経費	5
10. 研究成果の公開	5

### II. 共同研究（若手）

1. 共同研究（若手）の課題区分	6
2. 共同研究（若手）の構成	6
3. 共同研究会の開催場所	6
4. 共同研究（若手）の期間	6
5. 応募資格	6
6. 募集件数	6
7. 申請方法等	6
8. 採否	7
9. 経費	7
10. 研究成果の公開	7



## ■ 目的

国立民族学博物館は、創設以来今日に至るまで、大学共同利用機関として、我が国の学術研究の総合的推進を目指し、文化人類学・民族学及び関連諸科学の発展に貢献する高度なレベルの共同研究を推進してきました。

近年、本館に対して、文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む新しい研究の創出、一般社会から寄せられる期待への積極的対応が求められています。そのような多様な研究の推進をめざして共同研究を募集します。共同研究には一般と若手のふたつの区分を設けており、共同研究（若手）は、若手研究者を育成・支援することを目的としています。

### I. 共同研究（一般）

#### 1. 共同研究（一般）の課題区分

共同研究（一般）の課題区分は、次のとおりです。

課題 1. 文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む幅広い研究。基礎研究や萌芽的研究も含まれます。

課題 2. 本館の所蔵する資料（標本資料，文献資料，映像音響資料等）に関する研究

#### 2. 共同研究（一般）の構成

共同研究（一般）には、日本国内に在住する研究者（10～15名程度）が参加できます。

現在所属を有さない者（非常勤として勤務している者を除く。）及び研究職としての身分を有さない者については、略歴及び共同研究における役割についての説明書（様式任意）を添付してください。また、各共同研究構成員の共同研究への参加の可否については、申請前に申請者からあらかじめ内諾を取ってください。

研究代表者は、共同研究の推進を図り、研究計画の立案、参加者の選定、共同研究会の主宰、研究成果の取りまとめを行います。

なお、共同研究が採択されたときは、本館の専任教員もしくは機関研究員がその運営を支援します（申請時に本館の専任教員もしくは機関研究員が含まれている必要はありません。）。

特に必要があると認められた研究者については、共同研究会に特別講師として参加することができます。また、研究代表者に参加を許可された者については、特別聴講者として共同研究会に参加できます。

※特別講師には旅費が支給されますが、共同研究会を館外で開催する場合には旅費を支給できません。また特別聴講者には旅費の支給はありません。

#### 3. 共同研究会の開催場所

共同研究会は原則として本館で開催することとします。ただし、研究上必要と認められる場合は、理由書を提出し、妥当と認められれば、本館以外（国内に限る。）で開催することも可能です。ただし、本館以外での開催の回数は原則として1年度あたり1回限りとします。また、共同研究会を公開で開催される場合は館長に事前に届け出てください。

なお、従来の共同研究では、1年度あたり3～6回程度の共同研究会が開催されています。

#### 4. 共同研究（一般）の期間

研究期間は初年度を10月スタートとし、研究成果公開準備を含め3年半以内とします。延長は認められません。なお、3年半計画の場合、最終年度の研究会開催回数は3回まで、前年度実績の2分の1以内の予算規模で行っていただきます。

#### 5. 応募資格

研究代表者が、代表して応募することとします。研究代表者は、大学その他の研究機関の専任の教授、准教授、講師、助教、助手、または、これと同等の研究能力があると館長が認めた者（ただし、本館以外の人間文化研究機構内の機関に専任教員として所属する者を除く。）です。長期海外出張等により実質上共同研究会の運営ができないことが見込まれる場合は、応募できません。

申請者が過去に共同研究の代表者であった場合には、研究成果が公開されていることを、申請の条件とします。

## 6. 募集件数

当該年度につき 5～10 件程度とします。

## 7. 申請方法等（共同研究（若手）と重複申請することはできません）

### (1) 申請手続き

- ① 申請は、所定の様式による申請書を提出してください。所属を有する常勤研究者においては、所属機関の部局長の承認を得てください。
- ② 申請書の作成にあたっては、記入要領を参照してください。
- ③ 応募の際には、共同研究（一般）に参加される共同研究構成員の名簿を添えてください。

### (2) 応募書類及び申請期限と申請方法

- ① 応募書類は、次のとおりです（応募書類は、国立民族学博物館ホームページからダウンロードできます。）。

ア 平成 28 年度国立民族学博物館共同研究（一般）計画申請書（様式 1-1（公募用））または平成 28 年度共同研究（一般）申請書（様式 1-2（館内用）） 1 部

イ 研究業績書（様式 5） 1 部

ウ 現在所属を有さず（非常勤として勤務しているものを除く。）及び研究職として身分を有さない共同研究構成員の略歴及び共同研究における役割についての説明書（様式任意） 1 部

### ② 申請期限と申請方法

応募書類は、平成 28 年 4 月 15 日（金）までに必着するように、メール添付（下記電子メールアドレス）にて提出してください。また、所属機関の部局長の承認を得た承諾書（申請書 1 ページ目、原紙）は下記提出先へ郵送にて提出してください。なお、提出のあった応募書類は、原則として返却しません。

※ただし、本館の教員（客員教員及び特別客員教員を含む）及び本館の機関研究員においては、応募書類の研究業績書（様式 5）及び所属機関の部局長の承認を得た承諾書（申請書 1 ページ目、原紙）は提出の必要はありません。

### (3) 提出先

住 所：565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10 番 1 号

機関名：国立民族学博物館 管理部研究協力課 共同利用係

TEL 06-6878-8361、8364

FAX 06-6878-8479

電子メール kyodo@idc.minpaku.ac.jp

ウェブページ URL

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project>

※申請書の作成にあたって不明な点がありましたら、書面または FAX により照会してください。

## 8. 採否

- (1) 採否は、本館の共同利用委員会及び運営会議を経て、館長が決定し、平成 28 年 7 月末までに、その結果を館長から申請者及び所属長宛に通知します。

なお、審査の過程におきまして、平成 28 年 6 月下旬開催予定（日程が決定次第、本館ウェブサイトに掲載します。）のプレゼンテーションへの出席を依頼する場合があります。プレゼンテーションに係る旅費は支給されません。

- (2) 採否の判定は、共同研究（一般）の審査基準（別紙）により行います。

## 9. 経費

研究代表者、共同研究員及び特別講師には、共同研究会の開催に要する交通費、日当、宿泊料が支給されます。また、必要に応じて、会場使用料（本館以外で開催の場合）を支給いたします。

※経費には、データベース化、デジタル化のための謝金及び調査のための経費は含まれておりません。

## 10. 研究成果の公開

## (1) 研究代表者の義務

研究代表者は、下記について実施する義務があります。

- ア 共同研究年次報告書（様式3）の提出（各年度末）
- イ 共同研究実績報告書（様式4）の提出及び共同研究成果報告会での発表（研究終了時）
- ウ 『民博通信』での研究内容の紹介、進捗状況の報告（原則、毎年）
- エ 研究成果を取りまとめ刊行または発表（原則として研究終了後2年以内）

※なお、公開に際しては、本館共同研究の成果であることを明示し、当該刊行物や関連資料を国立民族学博物館管理部研究協力課共同利用係へ2部送付してください。

## (2) 研究成果の内容

研究成果とは以下のものを指します。

- ア 『国立民族学博物館論集』（館外の研究代表者が編者となることも可）、あるいは Senri Ethnological Studies (SES) で刊行される論文集（本館専任教員との共編著可）
- イ 出版社等から刊行される論文集（ただし、本館からの刊行助成による外部出版については、本館専任教員の編著又は本館専任教員との共編著に限る。）
- ウ 特別展示、企画展示で刊行された論文集に相当する図録
- エ 公開のシンポジウム、フォーラム、ワークショップ、学会分科会などの研究集会で刊行された、Proceedings か論文集
- オ 代表者及びその他構成員が『国立民族学博物館研究報告』または学会誌（電子ジャーナルを含む）などに投稿した個別の論文
- カ 特許

※特別展示、企画展示、ホームページ、データベース、資料集等は、研究成果の一部として認められますが、別に最終的な論文集等の出版が求められます。また、書評等、研究について、学会や社会から評価された資料を併せて提出してください。

※研究終了後、2年を経過した段階で、研究成果の公開状況について、調査を行います。

## II. 共同研究（若手）

### 1. 共同研究（若手）の課題区分

共同研究（若手）の課題区分は、次のとおりです。

課題1. 文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む幅広い研究。基礎研究や萌芽的研究も含まれます。

課題2. 本館の所蔵する資料（標本資料、文献資料、映像音響資料等）に関する研究

### 2. 共同研究（若手）の構成

現在所属を有さない者（非常勤として勤務している者を除く。）及び研究職としての身分を有さない者については、略歴及び共同研究における役割についての説明書（様式任意）を添付してください。また、各共同研究構成員の共同研究への参加の可否については、申請前に申請者からあらかじめ内諾を取ってください。

研究代表者は、共同研究の推進を図り、研究計画の立案、共同研究構成員の選定、共同研究会の主宰、研究成果の取りまとめを行います。

特に必要があると認められた日本国内に在住する研究者については、共同研究会に特別講師として参加することができます。また研究代表者に参加を許可された者については、特別聴講者として共同研究会に参加できます。

※特別講師には旅費が支給されますが、特別聴講者には旅費の支給はありません。

### 3. 共同研究会の開催場所

共同研究会は本館で開催することとし、館外での開催は認められません。また、共同研究会を公開で開催される場合は館長に事前に届け出てください。

### 4. 共同研究（若手）の期間

研究期間は初年度を10月スタートとし、研究成果公開準備を含め2年半以内とします。延長は認められません。

## 5. 応募資格

研究代表者が、代表して応募することとします。研究代表者は、申請時 39 歳以下の研究者で、共同研究を滞りなく遂行する能力をもつものとします。研究代表者以外の共同研究構成員の条件については、特に定めませんが、その趣旨に添い、基本的には研究代表者と同様の年齢層の若手研究者等で構成されるものとします。長期海外出張等により実質上共同研究会の運営ができないことが見込まれる場合は、応募できません。また、本館以外の人間文化研究機構内の機関に専任教員として所属する者は応募することはできません。

一度、本館の共同研究（若手）に採択され実施した者は、再度、共同研究（若手）では応募できません。

## 6. 募集件数

当該年度につき 3 件程度とし、1 件について年額 70 万円を上限規模とします（ただし、初年度は、年額の半分程度とします。）。

## 7. 申請方法等（共同研究（一般）と重複申請することはできません）

### (1) 申請手続き

- ① 申請は、所定の様式による申請書を提出してください。所属を有する常勤研究者においては、所属機関の部局長の承認を得てください。
- ② 申請書の作成にあたっては、記入要領を参照してください。
- ③ 応募の際には、共同研究（若手）に参加される研究者の名簿を添えてください。

### (2) 応募書類及び申請期限と申請方法

- ① 応募書類は、次のとおりです（応募書類は、国立民族学博物館ホームページからダウンロードできます。）。

ア 平成 28 年度国立民族学博物館共同研究（若手）計画申請書（様式 1 - 3） 1 部

イ 研究業績書（様式 5） 1 部

ウ 現在所属を有さず（非常勤として勤務しているものを除く。）及び研究職として身分を有さない共同研究構成員の略歴及び研究会における役割についての説明書（様式任意） 1 部

- ② 申請期限と申請方法

応募書類は、平成 28 年 4 月 15 日（金）までに必着するようにメール添付（下記電子メールアドレス）にて提出してください。また、所属機関の部局長の承認を得た承諾書（申請書 1 ページ目、原紙）は下記提出先へ郵送にて提出してください。なお、提出のあった応募書類は、原則として返却しません。

※ただし、本館の教員（客員教員及び特別客員教員を含む）及び本館の機関研究員においては、応募書類の研究業績書（様式 5）及び所属機関の部局長の承認を得た承諾書（申請書 1 ページ目、原紙）は提出の必要はありません。

### (3) 提出先

住 所：565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10 番 1 号

機関名：国立民族学博物館 管理部研究協力課 共同利用係

TEL 06-6878-8361、8364

FAX 06-6878-8479

電子メール kyodo@idc.minpaku.ac.jp

ウェブページ URL

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project>

※申請書の作成にあたって不明な点がございましたら、書面または FAX により照会してください。

## 8. 採否

- (1) 採否は、本館の共同利用委員会及び運営会議を経て、館長が決定し、平成 28 年 7 月末までに、その結果を館長から申請者及び所属長宛に通知します。

なお、審査の過程におきまして、平成 28 年 6 月下旬開催予定（日程が決定次第、本館ウェブサイトに掲載します。）のプレゼンテーションへの出席を依頼する場合があります。プレゼンテーションに係る旅費は支給されません。

(2) 採否の判定は、共同研究（若手）の審査基準（別紙）により行います。

## 9. 経費

研究代表者、共同研究員及び特別講師には、共同研究会の開催に要する交通費、日当、宿泊料が支給されます。

※経費には、データベース化、デジタル化のための謝金及び調査のための経費は含まれておりません。

## 10. 研究成果の公開

研究代表者は、下記について実施する義務があります。

ア 共同研究年次報告書（様式3）の提出（各年度末）

イ 共同研究実績報告書（様式4）の提出及び共同研究成果報告会での発表（研究終了時）

ウ 『民博通信』での研究内容の紹介、進捗状況の報告（原則、毎年）

エ 『国立民族学博物館研究報告』へ論文または研究ノートとして投稿（共同研究終了後2年以内）

※共同研究成果を論文集などで公開する予定がある場合には、『国立民族学博物館論集』、その他の媒体による研究成果の公開については、共同研究（一般）に準じます。

※研究成果を公開した場合は、本館共同研究会の成果であることを明示し、当該刊行物や関連資料を国立民族学博物館管理部研究協力課共同利用係へ2部送付してください。

## 共同研究（一般）の審査基準

### (1) 研究課題の学術的重要性

これまでの研究経緯や目的などに関する記載から、学術的重要性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (2) 研究組織の妥当性

メンバー構成や各自の役割分担などに関する記載から、研究組織の妥当性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (3) 研究計画の妥当性

開催日程や開催方法（公開、非公開等）などに関する記載から、研究計画の妥当性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (4) 研究課題の独創性

期待される成果などに関する記載から、研究課題の独創性や革新性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (5) 研究課題の発展性

期待される成果などに関する記載から、研究課題の発展性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

## 共同研究（若手）の審査基準

### (1) 研究の目的や内容等

若手主体の挑戦的な研究であり、個人研究の範囲をこえて共同で行う必要性が明らかな研究であること。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (6) 研究組織の妥当性

プロジェクトの趣旨に沿い、若手研究者を主体として組織されていること、メンバー構成や各自の役割分担などに関する記載から、研究組織の妥当性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (7) 研究計画の妥当性

研究テーマ、共同研究構成員の役割分担、開催日程などに関する記載から、研究計画の妥当性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (8) 研究課題の独創性

期待される成果などに関する記載から、研究課題の独創性や革新性を判断する。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

### (9) 研究課題の発展性、成果アウトプットへの期待

期待される成果などに関する記載から、研究課題の発展性を判断する。本共同研究に応募した課題を発展させて、共同研究構成員が新たなプロジェクト等への申請につなげていく意欲があるものが望ましい。

#### 評価区分

4. 優れている    3. 良好である    2. やや劣っている    1. 劣っている

## 平成 28 年度国立民族学博物館共同研究（一般）計画申請書記入要領（公募用）

**共同研究（一般）を申請する者が共同研究（若手）に重複して申請することはできません。**

### 【研究課題】

- ・研究期間が 3 年半以内であることを踏まえて記入してください。

### 【共同研究構成員】

- ・大学院博士後期課程に在籍する学生も参加できます。
- ・本館の客員教員、特別客員教員および総研大・文化科学研究科の地域文化学専攻・比較文化学専攻在  
学生は本館の教員に、本館外来研究員および総研大の上記以外の専攻在學生は本館以外の研究者に  
区別してください。
- ・本館の共同研究に参加できる数は、館外の研究者（本館外来研究員を含む。）は 2 つ以内、館内の教  
員（本館客員教員及び特別客員教員、機関研究員を含む。）は 5 つ以内です。

### 【開催回数】

- ・初年度は 10 月スタートであることを考慮してください。

### 【承諾書】

- ・所属を有する常勤研究者においては、所属機関の部局長の承認を得たうえ申請してください。  
機関に所属されていない方は、承諾書欄の記入は不要です。
- ・所属機関の部局長の承認を得た承諾書（原紙）は期日までに郵送にて提出してください。

### 【研究組織】

- ・共同研究に参加される本館以外の研究者については、平成 28 年 5 月 1 日現在の所属機関・学部等  
名、職名および共同研究への参画の意思を本人に確認のうえ記入してください。所属等の変更予定  
のある場合は、（〇〇年〇月異動予定）と付記してください。
- ・専任の所属機関住所の記入がある場合は、自宅住所の記入は任意とします。



## 平成 28 年度国立民族学博物館共同研究（若手）計画申請書記入要領

共同研究（若手）を申請する者が共同研究（一般）に重複して申請することはできません。一度、本館の共同研究（若手）に採択され実施した者は、再度、共同研究（若手）では応募できません。

### 【研究課題】

研究期間が 2 年半以内であることを踏まえて記入してください。

### 【共同研究構成員】

- ・本館の客員教員、特別客員教員および総研大・文化科学研究科の地域文化学専攻・比較文化学専攻在学学生は本館の教員に、本館外来研究員および総研大の上記以外の専攻在学学生は本館以外の研究者に区別してください。
- ・大学院博士後期課程に在籍する学生も参加できます。
- ・本館の共同研究に参加できる数は、館外の研究者（本館外来研究員を含む。）は 2 つ以内、館内の教員（本館客員教員及び特別客員教員、機関研究員を含む。）は 5 つ以内です。

### 【開催回数】

- ・初年度は 10 月スタートであることを考慮してください。
- ・年額 70 万円が上限ですので共同研究構成員数を考慮してください。（ただし初年度は半分程度とします。）

### 【承諾書】

- ・所属を有する常勤研究者においては、所属機関の部局長の承認を得たうえ申請してください。本館の機関研究員および機関に所属されていない方は、承諾書欄の記入は不要です。
- ・所属機関の部局長の承認を得た承諾書（原紙）は期日までに郵送にて提出してください。

### 【研究組織】

- ・共同研究に参加される本館以外の研究者については、平成 28 年 5 月 1 日現在の所属機関・学部等名、職名および共同研究への参画の意思を本人に確認のうえ記入してください。所属等の変更予定のある場合は、（〇〇年〇月異動予定）と付記してください。
- ・専任の所属機関住所の記入がある場合は、自宅住所の記入は任意とします。
- ・共同研究構成員の年齢も審査において考慮しますので、必ず記入してください。

平成 28 年度国立民族学博物館共同研究 (一般) 計画申請書

平成 年 月 日

国立民族学博物館長 殿

1. 申請者	ふりがな		
	氏名	印	
	専攻分野		
	研究テーマ		
	所属機関・職名		
	所属機関の住所	〒 TEL ( ) FAX ( )	
2. 研究課題区分 (該当する課題番号 1 つに○をつけてください。)	課題 1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究 課題 2 本館の所蔵する資料 (標本資料, 文献資料, 映像音響資料等) に関する研究		
3. 研究課題	(和文)		
	(キーワード) ( ) ( ) ( )		
	(英文)		
(Keyword) ( ) ( ) ( )			
4. 研究計画	共同研究の目的、意義等について、研究計画に記入してください。		
5. 共同研究 構成員	計 人	内 訳	本館以外の研究者 人 本館の教員 人
			参加される研究者の氏名、所属機関、職名等を研究組織表に記入してください。
6. 共同研究会 開催回数	平成 28 年度	回 (予定)	平成 29 年度 回 (予定)
	平成 30 年度	回 (予定)	平成 31 年度 回 (予定)
<b>承 諾 書</b>			
上記申請者 (研究代表者) が、国立民族学博物館共同研究に申請することを承諾します。 平成 年 月 日			
所属長 (部局長) 職名 氏名			公 印

※承諾書は、所属機関を有する常勤研究者による申請の場合のみ必要です。

# 略 歴 書

ふりがな		生年月日	昭和 年 月 日 生
氏 名		電話番号	(自宅) ( )
		FAX 番号	(自宅) ( )
		メールアドレス	
ふりがな			
自宅住所	〒		
<b>学 歴</b> (大学から記入してください。)			
大 学 名 ・ 学 部 等 名		就 学 期 間	卒・修了・退学の別及び学位
		昭和 年 月 ~ 昭和 年 月 平成	
		昭和 年 月 ~ 昭和 年 月 平成	
		昭和 年 月 ~ 昭和 年 月 平成	
		昭和 年 月 ~ 昭和 年 月 平成	
<b>職 歴</b>			
自 年 月	至 年 月	履 歴 事 項 (所属機関・職名を具体的に記入してください。)	
昭和 年 月 平成	昭和 年 月 平成		
昭和 年 月 平成	昭和 年 月 平成		
昭和 年 月 平成	昭和 年 月 平成		
昭和 年 月 平成	昭和 年 月 平成		
昭和 年 月 平成	昭和 年 月 平成		
所属学会および 受賞等			
<b>本館の客員教員・特別客員教員・委員会委員の委嘱および共同研究会への参加状況</b>			
自 年 月	至 年 月	共同研究の課題名、その他事項	研究代表者名・備考
昭和 年 月 平成	昭和 年 月 平成		
昭和 年 月 平成	昭和 年 月 平成		
昭和 年 月 平成	昭和 年 月 平成		

# 研 究 計 画

申請者氏名 \_\_\_\_\_

1. 共同研究の課題区分（下記の課題番号1つに○をつけてください。）

課題1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2 本館の所蔵する資料（標本資料，文献資料，映像音響資料等）に関する研究

2. 研究課題

（和文）

\_\_\_\_\_

(キーワード) ( ) ( ) ( )

（英文）

\_\_\_\_\_

(Keyword) ( ) ( ) ( )

3. 研究の目的（400字程度）

4. 研究の意義（400字程度）

5. 期待される成果（400字程度）

6. 研究の実施計画（800字程度）

7. 研究成果の公開計画（200字程度）

8. 関連プロジェクト（本共同研究と関連するプロジェクトの実施、あるいは計画がある場合は、その正式名称（含代表者名）等を明記してください。）

9. 経費（平成28年度計画分のみ記入）

研究会開催予定	参加人数 (人)	所要額 (円)	開催場所	特別講師	備考
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
計					

- ※ 開催場所に関しては募集要項 3. 共同研究会の開催場所 を参照してください。
- ※ 本館以外で開催する場合は、以下に開催理由を明記してください。
- ※ 特別講師を招聘する場合、備考に所属機関または自宅の所在する都道府県名をご記入ください。

館外開催理由

月 日（開催場所： ）  
理由：

研 究 組 織

申請者氏名

ふりがな		年 齢	共同研究内での役割分担	
氏 名		才		
所属機関名	学部名			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での役割分担	
氏 名		才		
所属機関名	学部名			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での役割分担	
氏 名		才		
所属機関名	学部名			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での役割分担	
氏 名		才		
所属機関名	学部名			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail

※備考欄

外国人研究者		性別	
人数	国籍	男性	女性
名		名	名

## 平成28年度 共同研究 (一般) 申請書

※共同研究(若手)は若手用申請書にて申請してください。

1. 共同研究の課題区分(下記の課題番号から1つ選択して○をつけてください。)

課題1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2 本館の所蔵する資料(標本資料, 文献資料, 映像音響資料等)に関する研究

2. 研究代表者

代表者(氏名) (所属・職名)

3. 研究課題

(和文)

---

(キーワード) ( ) ( ) ( )

(英文)

---

(Keyword) ( ) ( ) ( )

4. 研究期間(下記の研究期間から1つを選択して○をつけてください。)

ア 1年半                      イ 2年半                      ウ 3年半

5. 研究の概要

5-1. 研究の目的(400字程度)

5-2. 研究の意義(400字程度)

5－3. 期待される成果（400字程度）

5－4. 研究の実施計画（800字程度）

6. 研究成果の公開計画（200字程度）

7. 関連プロジェクト（本研究と関連するプロジェクトの実施、あるいは計画がある場合は、その正式名称（含代表者名）等を明記してください。）

8. 研究代表者が過去5年間に実施した共同研究の実績

（1）研究課題

研究期間

研究成果（共同研究としてまとまった形で公表した成果のみ）



(2) 研究課題

研究期間

研究成果（共同研究としてまとまった形で公表した成果のみ）

9. 経費（平成28年度計画分のみ記入）

研究会開催予定	参加人数 (人)	所要額 (円)	開催場所	特別講師	備考
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			<input type="checkbox"/> 民博 <input type="checkbox"/> 館外	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
計					

※ 開催場所に関しては募集要項 3. 共同研究会の開催場所 を参照してください。

※ 本館以外で開催する場合は、以下に開催理由を明記してください。

※ 特別講師を招聘する場合、備考に所属機関または自宅の所在する都道府県名をご記入ください。

館外開催理由

月 日（開催場所： ）  
理由：

研 究 組 織

申請者氏名 \_\_\_\_\_

ふりがな		年 齢	共同研究内での 役 割 分 担	
氏 名		才		
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での 役 割 分 担	
氏 名		才		
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での 役 割 分 担	
氏 名		才		
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での 役 割 分 担	
氏 名		才		
所属機関名	学部名等			職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail

※備考欄

外国人研究者		性別	
人数	国籍	男性	女性
名		名	名

平成 28 年度国立民族学博物館共同研究（若手）計画申請書

平成 年 月 日

国立民族学博物館長 殿

1. 申請者	ふりがな		
	氏名	印	
	専攻分野		
	研究テーマ		
	所属機関・職名		
	所属機関の住所	〒 TEL ( ) FAX ( )	
2. 研究課題区分 (該当する課題番号 1 つに○をつけてください。)	課題 1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究 課題 2 本館の所蔵する資料（標本資料，文献資料，映像音響資料等）に関する研究		
3. 研究課題	(和文)		
	(キーワード) ( ) ( ) ( )		
	(英文)		
(Keyword) ( ) ( ) ( )			
4. 研究計画	共同研究の目的、意義等について、研究計画に記入してください。		
5. 共同研究 構成員	計 人	内 訳	本館以外の研究者 人 本館の教員 人
			参加される研究者の氏名、所属機関、職名等を研究組織表に記入してください。
6. 共同研究会 開催回数	平成 28 年度	回 (予定)	平成 29 年度
	平成 30 年度	回 (予定)	
<b>承 諾 書</b>			
上記申請者（研究代表者）が、国立民族学博物館共同研究に申請することを承諾します。 平成 年 月 日			
所属長（部局長） 職 名 氏 名			

※承諾書は、所属機関を有する常勤研究者による申請の場合のみ必要です。

# 略 歴 書

ふりがな				生年月日	昭和	年	月	日生		
氏 名				電話番号	(自宅)	( )				
				FAX 番号	(自宅)	( )				
				メールアドレス						
ふりがな										
自宅住所	〒									
<b>学 歴</b> (大学から記入してください。)										
大 学 名 ・ 学 部 等 名				就 学 期 間				卒・修了・退学の別及び学位		
				昭和	年	月	～	昭和	年	月
				平成				平成		
				昭和	年	月	～	昭和	年	月
				平成				平成		
				昭和	年	月	～	昭和	年	月
				平成				平成		
				昭和	年	月	～	昭和	年	月
				平成				平成		
<b>職 歴</b>										
自	年	月	至	年	月	履 歴 事 項 (所属機関・職名を具体的に記入してください。)				
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
所属学会および 受賞等										
<b>本館の客員教員・特別客員教員・委員会委員の委嘱および共同研究会への参加状況</b>										
自	年	月	至	年	月	共同研究の課題名、その他事項		研究代表者名・備考		
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							
昭和	年	月	昭和	年	月					
平成			平成							

# 研 究 計 画

申請者氏名 \_\_\_\_\_

1. 共同研究の課題区分（下記の課題番号1つに○をつけてください。）

課題1 文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2 本館の所蔵する資料（標本資料，文献資料，映像音響資料等）に関する研究

2. 研究課題

（和文）

\_\_\_\_\_

(キーワード) ( ) ( ) ( ) ( )

（英文）

\_\_\_\_\_

(Keyword) ( ) ( ) ( ) ( )

3. 研究の目的（400字程度）

4. 研究の意義（400字程度）

5. 期待される成果（400字程度）

6. 研究の実施計画（800字程度）

7. 研究成果の公開計画（200字程度）

8. 関連プロジェクト（本共同研究と関連するプロジェクトの実施、あるいは計画がある場合は、その正式名称（含代表者名）等を明記してください。）

9. 経費（平成28年度計画分のみ記入）

研究会開催予定	参加人数 (人)	所要額 (円)	開催場所	特別講師	備考
月 日～ 月 日			民博	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			民博	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			民博	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
月 日～ 月 日			民博	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし	
計					

※ 共同研究（若手）の共同研究会は館内開催に限られる。

※ 特別講師を招聘する場合、備考に所属機関または自宅の所在する都道府県名をご記入ください。

研 究 組 織

申請者氏名

ふりがな		年 齢	共同研究内での役割分担	
氏 名		才		
所属機関名		学部名		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での役割分担	
氏 名		才		
所属機関名		学部名		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での役割分担	
氏 名		才		
所属機関名		学部名		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail
ふりがな		年 齢	共同研究内での役割分担	
氏 名		才		
所属機関名		学部名		職名
所属機関住所	住所			
	〒	Tel		e-mail
自 宅 住 所	住所			
	〒	Tel		e-mail

※備考欄

外国人研究者		性別	
人数	国籍	男性	女性
名		名	名

国立民族学博物館共同研究年次報告書（ 年半計画の 年度目）

1. 研究課題

(和文)

(キーワード) ( ) ( ) ( ) ( )

(英文)

(Key word) ( ) ( ) ( ) ( )

2. 研究代表者

氏 名 所 属 機 関 職 名

3. 研究期間

平成 年 月 から 平成 年 月 まで

4. 研究組織（共同研究員として参加された方）

氏 名 所 属 機 関 職 名

5. 研究目的（400字程度）

6. 本年度の研究実施状況

7. 研究成果の概要（400字程度）

8. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）

※事務記入欄

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	合計
出席数							
割合(%)							
執行額							
割合(%)							



国立民族学博物館共同研究実績報告書

1. 研究課題

(和文)

(キーワード) ( ) ( ) ( ) ( )

(英文)

(Key word) ( ) ( ) ( ) ( )

2. 研究代表者

氏 名 所 属 機 関 職 名

3. 研究期間

平成 年 月 から 平成 年 月 まで

4. 研究組織 (共同研究員として参加された方)

氏 名 所 属 機 関 職 名

5. 研究目的 (400 字程度)

6. 研究成果の概要 (800 字程度)

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

※事務記入欄

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	合計
出席数							
割合(%)							
執行額							
割合(%)							

研 究 業 績 書

共同研究代表者： \_\_\_\_\_

専門分野	
------	--

<b>【著書】</b> （著者名編者・刊行年次・書名・出版地および出版社）	
1.	○○○○○○
2.	○○○○○○
3.	○○○○○○
<b>【論文】</b> （著者・刊行年次・論文の標題・収録雑誌等巻号・収録ページ・雑誌等の出版地および出版社）	
1.	○○○○○○
2.	○○○○○○
3.	○○○○○○
<b>【その他】</b> （映像作品など）	
1.	○○○○○○
2.	○○○○○○
3.	○○○○○○

※提案したプロジェクトに関連した研究業績を記載すること（合計10点以内）

※直近のものから順次記載すること

館外開催理由書

共同研究代表者： \_\_\_\_\_

A 館外開催に関する事項

日 程	平成 年 月 日 ( ) ~ 平成 年 月 日 ( )
開催場所	<input type="checkbox"/> 研究代表者本務校
	<input type="checkbox"/> 共同研究員本務校 (共同研究員名： _____ )
	<input type="checkbox"/> その他 (具体的に記載すること)
理由	【館外開催を希望する理由】…例：「〇〇大学所有の〇〇資料を閲覧しながら研究会を実施したい」等、館外開催をすることの必然性を明示して下さい。
会場使用料	<input type="checkbox"/> 不要
	<input type="checkbox"/> 必要 ※B 表に詳細を記入し、料金表など根拠資料を添付すること。

B 会場使用に関する事項

会場使用 予定日時	平成 年 月 日 ( ) : ~ :	平成 年 月 日 ( ) : ~ :
	( 準備 : ~ : ) ( 研究会 : ~ : ) ( 片付け : ~ : )	( 準備 : ~ : ) ( 研究会 : ~ : ) ( 片付け : ~ : )
会場使用料	【料金内訳】	
	内 容	単 価・数 量
	※必要に応じて 加除修正ください	[記入例] 〇〇 : 〇〇 ~ 〇〇 : 〇〇 ¥ ¥ / 時間 × 〇時間 学内者による割引 (50%) など
	会場費	小 計 (円)
	冷暖房使用料	税抜き表記の場合は、(税込)を 取消線で消してください
	附帯設備料	(税込)
その他	(税込)	
	総 額	(税込)

※会場使用料が発生する場合は、会場費等の料金の内訳を示す見積書が必要となります。



平成27年 11月11日【水】～12日【木】の2日間  
 国立民族学博物館 第6セミナー室(2階)

# みんぱく 若手研究者 奨励セミナー 募集要項

## 「伝承と身体をめぐる文化人類学」

本年度の若手セミナーでは、本館の機関研究「マテリアリティの人間学」の一環として、文化人類学的視点から伝承と身体に関わりを追求する研究を幅広く募集します。

ここでいう伝承とは、あるコミュニティや集団を特徴づけているモノ、技術、技能、知識、感性などの人から人への継承を広く指し示しています。個人から見れば、伝承とはあるモノ、技術、技能、知識、感性などの身体化の過程に他なりません。伝承の過程で、伝承の中味、あるいは身体そのものは、どのように作り直されていくのでしょうか。またこのことが、伝承を支える制度や仕組み、さらにはコミュニティや集団そのものを、どのように再生産し変化させていくのでしょうか。コミュニケーション・ツールの多様化が飛躍的に進み、直接対面によるコミュニケーションの頻度が相対的に低下しつつある現代社会における、モノとしての身体と伝承の関わりを、さまざまなフィールドの事例から考えます。



## ■セミナーの内容

- ①本館の共同利用制度の紹介(共同研究(若手)など)
- ②施設案内(図書室、展示場、収蔵庫など)
- ③本館教員による発表(各50分)
  - i) 広瀬 浩二郎「見えない世界をみる身体知  
—平家物語から贅女唄へ」
  - ii) 福岡 正太「越境する身体知  
—ガムランの伝承を例に」
- ④参加者による研究発表  
50分(発表30分、質疑応答20分)の持ち時間のなかで研究発表をおこない、質問・コメントを受ける。

## ■表彰制度

- ①優秀発表者の選定: 優秀発表者を選定し「みんなく若手セミナー賞」を授与する。受賞者はホームページ等で公表する。
- ②セミナー終了後、参加者の発表要旨はホームページ等で公表する。また、参加者は全員『国立民族学博物館研究報告』(査読有)への投稿資格を得る。

## ■応募資格

日本国内の大学院博士後期課程の大学院生あるいはPD、または左記に相当する研究歴を有し、積極的に参加する意志を持つ者。

\*ただしフィールドワークに基づく研究発表をおこなうことが望ましい。

## ■募集人数

約8名

## ■参加費

無料(参加者には人間文化研究機構の規定にもとづき旅費・宿泊費を支給)

## ■応募方法

以下の書類を応募先に郵送する。

- ①履歴書(所定の様式をホームページよりダウンロード)  
【URL】 <http://www.minpaku.ac.jp/offer>
- ②発表要旨(1200字程度で発表内容を記載、様式自由)
- ③その他の要望 \*特別な補助等が必要な場合には、その旨明記すること。

## ■応募/お問い合わせ先

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
国立民族学博物館 研究協力課共同利用係 宛  
kyodok@idc.minpaku.ac.jp  
06-6878-8347 (ダイヤルイン)  
【URL】 <http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/youngseminar>

## ■応募締切

平成27年9月18日 [金] 必着

## ■参加者の決定

応募書類にもとづき本館研究戦略センターにおいて選考の上、10月上旬に通知する。

## ■その他

- ①セミナー開催期間中の宿泊場所は、各参加者が手配すること。
- ②参加者はセミナーの全日程に参加すること。
- ③応募書類は返却しない。



写真提供: 樫永真佐夫、広瀬浩二郎、福岡正太、前川佐知



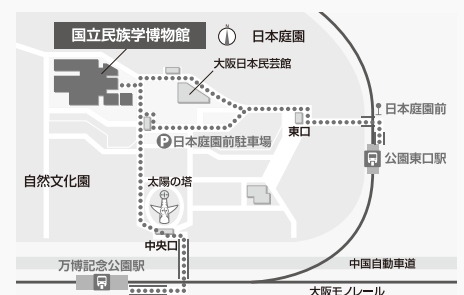
## 国立民族学博物館

### 交通のご案内

- 大阪モノレール…「万博記念公園駅」または「公園東口駅」徒歩約15分
- バス……………[近鉄バス] (阪大本部前行き) 阪急茨木市駅から約20分、JR茨木駅から約10分「日本庭園前」下車徒歩約13分
- 乗用車……………万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分  
\*「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通ください。

みんなく 🔍 クリック

[大阪・万博記念公園]  
〒565-8511  
大阪府吹田市千里万博公園10番1号  
Tel: 06-6876-2151 (代)  
<http://www.minpaku.ac.jp/>



## 平成 27 年度 若手研究者奨励セミナー プログラム

### 11 月 11 日(水)

9:30~10:00 挨拶・趣旨説明 司会：樫永 真佐夫

9:30~9:45 開会挨拶：須藤 健一（国立民族学博物館館長）

9:45~10:00 趣旨説明：樫永 真佐夫（国立民族学博物館研究戦略センター准教授）

10:00~10:45 教員発表①福岡 正太（国立民族学博物館文化資源研究センター准教授）  
「越境する身体知-ガムランの伝承を例に」

10:45~11:30 教員発表②広瀬 浩二郎（国立民族学博物館民族文化研究部准教授）  
「見えない世界をみる身体知 -平家物語から瞽女唄へ」

11:30~12:00 共同利用制度の紹介

施設全体説明：樫永 真佐夫

若手共同利用説明：河合 洋尚（国立民族学博物館研究戦略センター助教）

12:00~13:00 昼食

13:00~15:15 セッション 1 司会：八木百合子（国立民族学博物館研究戦略センター機  
関研究員）

①柴田 香奈子（筑波大学大学院人文科学研究科博士課程）「厳律シトー修道会にお  
ける修道院手話<手まね>の伝承」

②岩瀬 裕子（首都大学東京大学院人文科学研究科博士課程）『身体化としての伝承』  
と『真正性の水準』に関する一考察-スペイン・カタルーニャ州における『人間の塔』を  
事例に」

③宇津木 安来（東京藝術大学大学院音楽研究科博士課程）「日本舞踊の身体技法として  
の<体幹部>を捉える」

15:15~15:40 コーヒーブレイク

15:40~17:10 セッション 2 司会：永田貴聖（国立民族学博物館先端人類学研究部機関研  
究員）

④ケイトリン・コーカー（京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程）「異質の身体に  
おける普遍的なもの-舞踏伝承の始まりと現在」

⑤平田 晶子（日本学術振興会特別研究院 PD）「東北タイ・モーラム芸能集団の伝承の  
変容-携帯電話とオンライン・コミュニティーを駆使した芸能活動の一考察」

### 11 月 12 日(木)

9:40~10:25 セッション 3 司会：浜田明範（国立民族学博物館先端人類学研究部機関研  
究員）

⑥紺屋 あかり（京都大学東南アジア研究所連携研究員）「西太平洋パラオの詠唱をめぐ

る伝承と身体」

10:30～12:00 カムイノミ見学

12:00～13:00 昼食

13:00～14:30 セッション4 司会：永田貴聖

⑦井上 航（京都市立芸術大学大学院音楽研究科博士課程）「Participation 概念の再考-北東カンボジア山地民クルンの音響的身体から」

⑧谷岡 優子（関西学院大学大学院社会学研究科博士後期課程）「現代の地方花柳界にみる〈芸〉の再生産-秋田県川反の花柳界、愛媛県松山市の花柳界を事例に」

14:30～14:45 コーヒーブレイク

14:45～15:30 総合討論

15:30～17:00 施設見学

15:30～16:10 収蔵庫見学

16:10～17:00 図書室および4階研究部案内

17:00～17:20 アンケート記入

17:20～17:40 講評・表彰・閉会

講評

表彰 須藤 健一（国立民族学博物館館長）

閉会挨拶 樫永 真佐夫

17:45～19:45 懇親会

## 国立民族学博物館の共同利用制度に関するアンケート

国立民族学博物館（みんぱく）は大学共同利用機関であると同時に、博物館をもつ研究所でもあります。さらに総合研究大学院大学文化科学研究科の2専攻がおかれ、教育機関としての機能も果たしています。こうした多様な側面をもつみんぱくの共同利用制度を改善するために、セミナーに参加された皆様からご意見をいただきたいと思ひます。みんぱくがもつ研究資源へのアクセスに関する制度的な問題やメリットなどについて、忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。皆様からのご意見は、みんぱくの内部資料としてとりまとめ、今後の事業運営の参考にさせていただきます。

### I 大学共同利用機関としてのユーザビリティ

みんぱくには、特別利用共同研究員・外来研究員などの若手研究者の受け入れ制度や、1) 本館展示・特別展示などの展示物、2) 民族学アーカイブズ・HRAF・文献資料などの図書室の資料、3) 映像音響資料・標本資料、4) みんぱくデータベースといった各種資料の共同利用制度、また共同研究・ワークショップ・シンポジウムなどがあります。本日の説明を参考とし、以下の該当する項目を選んで、質問にお答えください。

- ① みんぱくを利用した経験のある方は、これまでどのようなかたちで共同利用制度利用したか、また、どのような点を改善する必要があると感じたかお書きください。  
利用した経験はありません。
- ② みんぱくを利用した経験のない方は、今後どのようなかたちで共同利用制度を利用していききたいか、お書きください。

### 回答

- ・これからは、図書をお探ししているときに、京都大学の図書館期間にない場合は利用させて頂きます。
- ・これまで利用したことがありませんでした。今回の若手セミナーを通して、「身体と伝承」という共通した研究テーマを持つ若手研究者と出会うことが出来ましたので、今後継続して「身体と伝承」について論じる共同研究を立ち上げたいと思ひましたし、自身の研究に関してもみんぱくのデータベースを利用したいと思ひます。
- ・共同研究勉強会のようなものを今回のセミナーのメンバーで作ろうと話していたので、勉強会、ワークショップ、シンポジウムなどへの参加を今後していきたい。
- ・土方アーカイブの閲覧と、所蔵庫内のオセアニア展示閲覧
- ・指導教官の共同研究に随行して利用した経験あり。しかし、研究発表のみで館内の案内は聞けなかった。一般の人向けでも良いので館内ツアーがあると良いと思ひました。
- .....



## II 大学院生、ポスト・ドクターの支援制度

大学院生またはポストドク研究者が、みんぱくで研究活動が続けるための受け入れ制度として、特別共同利用研究員、外来研究員、機関研究員を設けています。また、若手研究者の共同研究を支援する制度として、共同研究（若手）も公募もしています。本日の説明を参考とし、これら現行の若手研究者支援制度への感想、または今後の改善点について教えてください。また、現行の制度以外に、どのような支援制度があれば望ましいか教えてください。

### 回答

- ・若手研究者の支援制度はとても魅力的に聞こえました。もし可能なら、若手研究者を受け入れてくださっている教授とその服歴について聞かせていただけたら、参考になると思います。
- ・若手研究員の支援制度についての知識がほとんどありませんでしたので、回答を控えたと思います。
- ・民俗学の勉強をしたい場合に、夢の国のような場所だなと思った。今の制度はとてもいいと思う。
- ・今回のメンバー・セミナーテーマでの共同研究の実施に関心を持ちました。
- ・研究資源を活用できる身分について、門戸がひらかれていてよいと思います。
- ・制度自体を知らなかった。利用したい気持ち、チャレンジしたい気持ちは非常に強い。ただ、関東圏にいるため、経済的負担を考慮すると現実的には難しいと感じた。関西圏への偏重（があるとすれば、それ）を解消する方策はないものか。  
.....

## III 今回の「みんぱく若手奨励セミナー」の感想

### 1. セミナーの開催をどのように知ったかをお答えください。

- ・指導教員からの紹介（2名）。
- ・みんぱく web ページ（2名）
- ・チラシ（2名）
- ・FB（1名）
- ・日本文化人類学会の ML（1名）
- ・所属学内 ML（1名）

### 2. 応募するにいたった経緯・動機についてお答えください。

- ・自分の研究を共有し、他の研究者の意見を聴きたく、その上に他の若手研究者はどのような研究をなさっているのか知りたくて、応募しました。
- ・自身の研究テーマが、今回のテーマである「伝承と身体をめぐる文化人類学」と一致し

ていると考えたから。

- ・ある学会に参加した際に、みんなく先生と知り合い、みんなく存在を以て興味を持ったため。
- ・“伝承と身体をめぐる”という題から自分の現在している研究内容を整理して捉えてみようという重い、応募しました。また、チラシに書かれていたセミナーの内容に大変魅力を感じ、参加してみたいという重い、応募しました。
- ・テーマに関心があった
- ・いつか応募しようと思っていました。
- ・研究対象の特性および所属大学の先輩からの勧め
- ・現在取り組んでいる研究が、グローバル状況下の芸能集団の伝承やコミュニティにみる変容であったため、今回のセミナーのテーマに適しているとおもったことがきっかけとなった。しかし、実際の理由としては、投稿論文を執筆しているなかで、フィールドで収集してきた独自の事例と理論への接合について検討してみる場をもちたいと考えていたことにもよる。

### **3. プログラムの内容や時間、議論・討論は適切でしたか。**

- ・適切でした。意欲を言えば、初日の朝に行われた、先生たちの発表の後に質疑口頭があればよかったですと思いました。
- ・一人ひとりの研究テーマについて論じる時間がもう少しあれば良かったと思いますが、発表時間とプログラムの内容は適切であると思います。
- ・適切だったと思います。
- ・適切だったと思います。最後の討論の時間は短かったかもしれないと感じた。
- ・とても有意義でした。最終討論にもう少し長い時間がほしかった。
- ・適切でした。総合討論がすこし短かったと思いました。
- ・議論する時間がもう少し短かった。先生方からの指導をもっと受けたかった。
- ・最後の総合討論の時間以外は適切だったとおもう。全体の討論時間をもう少し多く設けていただきたかった。

### **4. セミナーの開催時期（11月の平日に2日間開催）は適切でしたか。**

- ・適切だった。（6名）
- ・みんなく内の企画と同じ日程で開催されているので、みんなくについて知るうえで、大変適切であると考えます。
- ・昨年は2泊3日で開催されたようだが、プログラム自体に、遊び（時間的、精神的ゆとり）が欲しいと感じた。参加者が親しくなった頃に解散となる。もう1日あるといい。
- ・3日間は長すぎると思う。（院生もスタッフも疲れると思う。）今回の2日間でちょうどよかったです。

## 5. 「みんぱく若手セミナー賞」について、どのように思いますか。

- ・「みんぱく若手セミナー賞」について何も知らなくて、研究をシェアして議論しあうために来ましたので、賞について何も思いません。
- ・励みになるので良いことだと思います（2名）。
- ・面白いと思います。
- ・なくてもよいと思う。
- ・セミナー賞は、これから／これまで文化人類学について研究してきた学徒をエンカレッジする意味をもつので、授賞式を設けることは良いことだと思います。

## 6. 次回のセミナーではどのようなテーマがふさわしいと思いますか。

- ・特に意見はありません。
- ・伝承の社会的システムに焦点をあてたようなものも面白いのかなと思いました。
- ・宇宙人類学など、時代に応じた未開拓分野
- ・いま思い浮かびませんが、斬新なテーマを期待しています。
- ・デジタル人類学、グローバル・メディア

## 7. セミナー全体についての感想をお答えください。

- ・他の大学や期間に所属している研究者のご発表を聴けて、たくさんの刺激をいただきました。同様なテーマにおいても、そこへの切り口は様々で、伝承と視座をめぐる研究の視座の多様性に目が開かれました。また、みんぱくの制度について教えていただき、非常に参考になりました。本当にありがとうございました。
- ・大変興味深いセミナーに参加させていただき、誠にありがとうございました。今後の研究生活において大変有意義なものを得ることができたと思います。
- ・異分野の方々が一つのテーマの下に発表をしたので、特定分野の学会とは違って、多角的視点での研究に触れることができました。想像以上に大変貴重な経験となり、自身の研究の励みになったと思っています。先生方からも有意義なアドバイスやご意見を頂けて本当に良かったです。
- ・とてもよい経験になりました。ありがとうございました。とても楽しいセミナーでした。
- ・とても勉強になり大変よい経験になりました。なかなか身体と伝承を取り上げる研究会がないので貴重な機会でありました。また、予想していた議論展開とはよい意味での広がりがあり、個人的には今後研究を展開させるうえでの課題を発見することができました。オーディエンスからのコメントについても、屈託なくどしどしご意見ご批判いただけたのでありがたかったです。学内においては普段会う機会のない研究者らと交流できたこと、そして彼らの研究と自身の研究とがテーマを通じて化学反応のようなものを起こして、たくさんの知見を得ることができました。参加の機会をいただき、ほんとうにありがとうございました。

ございました。

- 和気藹々としてよいと思いました。
- 非常に刺激的で、今後、このメンバーで共同研究を行い、本を出そうという話も出ていた。有益。
- 機関研究員のスタッフの方々が、発表後のコメントやアドバイス、また館内の案内などをはじめ、非常に丁寧に優しく指導して下さったことが印象的でした。またいつも丁寧に面倒を見て下さり、安心しました。人数も3名と適切だったとおもいます。ありがとうございました。

資料 5 文献図書資料整備状況

平成27年度 図書室統計

**[受入部門]**  
年間受入冊数

資料種別		日本語	外国語	計	(冊)
図書	購入	1,133	1,346	2,479	
	寄贈	866	1,533	2,399	
	館内刊行物	21	4	25	
図書 (小計)		2,020	2,883	4,903	
マイクロ資料		0	0	0	
AV資料		75	25	100	
図書+マイクロ+AV (小計)		2,095	2,908	5,003	
製本雑誌		186	506	692	
合計		2,281	3,414	5,695	

\* 上記資料冊数は、備品にかぎる。

蔵書冊数

資料種別		日本語	外国語	計	(冊)
蔵書総冊数	図書	235,115	334,519	569,634	
	製本雑誌	33,423	62,373	95,796	
合計		268,538	396,892	665,430	

\* 上記資料冊数は、備品にかぎる。

雑誌購入タイトル数

日本語	外国語	計	(タイトル)
154	332	486	

\* 電子オンリー契約タイトルは含まない。

雑誌所蔵タイトル数

日本語	外国語	計	(タイトル)
10,141	6,874	17,015	

電子ジャーナル タイトル数

パッケージ名称	タイトル数
BioOne	209
Cambridge Journals	365
Cell Press	28
ProQuest Research Library	3,083
ProjectMUSE	368
ScienceDirect	164
SpringerLINK	1,745
Wiley-Blackwell	1,651
GeoScience	56
その他	21
合計	7,690

\* 3/31 現在でE-Journal Portal で閲覧可能なタイトル数。

電子ブック タイトル数

購読	(タイトル)
53,414	

電子ジャーナル・データベース 年間アクセス統計

単位:件

形式	名称	2012年	2013年	2014年	2015年	導入時期
電子ジャーナル	BioOne	-	-	-	-	2006.5
	Cambridge Journals	222	230	141	154	2008.1
	JSTOR	-	-	-	-	2002
	Project MUSE	438	734	159	150	2006.1
	Science Direct	258	183	217	317	
	SpringerLINK	337	1,868	251	405	
	Wiley-Blackwell	-	-	-	-	
データベース	Anthropological Index Online	-	-	-	-	
	Anthropology Online	332	105	60	72	2012.4
	CNKI	306	618	722	519	2011.1
	Hapi Online	7	15	14	2	2004
	Index Islamicus	224	157	184	44	2006.1
	KISS	144	62	763	814	2011.1
	ProQuest Dissertation & Theses	273	163	170	1,781	2008.1
	ProQuest Research Library	235	181	187	1,265	2010.1
	RILM	212	156	193	112	2009.8
	Scopus	-	-	-	-	2005.4
辞典類	Encyclopaedia Britannica Online	1,978	3,399	4,188	12,394	2006.1
外部情報検索	Dialog	0	1	18	0	
	G-Search	0	60	0	0	
	日経テレコン2 1	7,480	7,785	5,641	2,319	

資料6 民族学研究アーカイブズ構築作業の進捗状況

1) 既存アーカイブ

	アーカイブ名		H17既存実態調査票 紙資料	H17既存実態調査票 映像音響資料	H17既存実態調査票 標本資料	平成25年度	平成26年度	平成27年度	現状と課題	公開リスト内容	紙資料のデジタル化	映像音響資料の有無(H27.5確認)	映像音響資料の受入手続き状態	媒体・点数
1	アオキブンキョウ 青木文教		約880点	静止画あり						(紙資料)889件		無	-	-
2	アサヤマシンイチ 朝山新一	(1908-1978)							(紙資料)昭和58年12月の図書委員会にて受入の報告あり。分野は性科学Sexology。梅棹氏のゆかりで民博に来たと思われる。京都精華大学の斎藤教授がH21年度、H25年度に資料を見てみたいと来られたが、未整理を理由にお断りしている。民族学史資料室に未整理の段ボール60箱があり。アンケート回答等も含まれており、まず整理方針を立てる必要がある。(映像音響資料)映像音響資料として受入済み。今後、アーカイブ資料と合わせて権利処理等が必要。		有	済	フィルム 7004点	
3	イズミセイイチ 泉靖一	(1915-1970)	18箱	べた焼きファイル、アルバム48冊、防湿ケース4箱(35mm)、カラスライド930コマ、4×5シートフィルム:43枚(CD2枚)		権利処理(継続)	権利処理完了。一部劣化資料デジタル化完了。	リスト公開。追加資料について再度覚書締結予定。	(映像音響資料)アーカイブのリストに入っていない資料が数十点ほどあり。今後、アーカイブズに組み込む形で著作権処理が必要。	(紙資料)1,126件	H26劣化資料10点(図書係保管)	有	未	要確認 (近日中に調査)
4	イワノキミオ 岩本公夫		書籍「北京の門(石+敦)」4冊、撮影日誌7冊	ネガファイル7冊、CD-R(デジカメ画像)1枚		写真資料のデジタル化	写真資料のデジタル化完了	リスト公開完了。リストを収録したフロッピーディスク(データは移行済)を廃棄し、本人に返却。覚書に返却確認書の別紙を付けた。資料点数変更のため再度覚書締結予定。	完了	(写真データ)6,236件		有	済	要確認
5	ウツシカワネノブ 移川子之蔵	(1884-1947)	ダンボール箱1箱						著作権は消滅しているが著作権者人格権に関連する遺族の了承が必要。文化庁Q&A <a href="http://chosakuken.bunka.go.jp/naruhodo/answer.asp?Q_ID=0000332">http://chosakuken.bunka.go.jp/naruhodo/answer.asp?Q_ID=0000332</a>			無	-	-
6	ウメサオタダオ 梅棹忠夫	(1920-2010)				リスト作成	リスト公開	権利処理完了見込み				有	済	要確認
7	カハラヨシノスケ 桂米之助	(1928-1999)	和装本、号外、新聞、チラシ等ダンボール箱2箱		算盤2点、竿秤1点					(紙資料) 号外(明治・大正)601件、号外(昭和)53件、新聞の附録類242件、その他140件	H18号外のデジタル化?	無	-	-
8	カノタダオ 鹿野忠雄	(1906-1945)								(紙資料) I.既存分 II.紙資料(標本資料) II.標本(映像資料) II.映像	H20劣化写真資料デジタル化完了	有	済	要確認
9	キノウチノブ 木内信敬	(1917-1997)	段ボール1箱(新聞切り抜き、演劇・コンサート等のパンフレット、ジブシー世界大会の資料、各種ジブシーのミニコミ紙、名刺類、ポストカード他)							H24年度に整理が完了、あとは権利処理を残すのみ。		無	-	-
10	キクサツネオ 菊沢季生	(1900-1985)	日記(1921~1985)74冊、ローマ字日記9冊、研究ノート約500冊他	写真及びネガあり						(紙資料)日記 ノート 論文抜刷 研究資料メモ		無	-	-
11	クノタダオ 栗田靖之	(1939-)	保存箱2箱						(紙資料)要リスト作成、権利処理 (映像音響資料)資料あり。今後、資料整理および受入手続きが必要。			有	未	要確認
12	シノダオサム 篠田 統	(1899-1978)	69箱+59棚	1棚						データベースにて提供、補遺はリスト		有	済	要確認
13	スギウラケンイチ 杉浦健一	(1905-1954)	13箱				一部劣化資料のデジタル化完了			(紙資料)ノート類 アンケート	H26劣化資料47点(図書係保管)	無	-	-

資料6 民族学研究アーカイブズ構築作業の進捗状況

1) 既存アーカイブ

	アーカイブ名		H17既存実態調査票 紙資料	H17既存実態調査票 映像音響資料	H17既存実態調査票 標本資料	平成25年度	平成26年度	平成27年度	現状と課題	公開リスト内容	紙資料のデジタル 化	映像音響資料の有無 (H27.5確認)	映像音響資料の受入 手続き状態	媒体・点数
14	瀬川 孝吉	(1906-1998)	保存箱2箱	スクラップブック2冊 に貼付					(紙資料)H18年度に整理が完了、あとは権利処理を残すのみ。 (映像音響資料)資料あり。映像音響資料として受入済みだが、追加で寄贈された資料の受入手続きは済んでいない。			有	済&未	要確認
15	土方 久功	(1900-1977)	日記118冊、フィールド ノート39冊、原稿ほ か全275件	日記の中に挟み込 み資料としてあり						(紙資料)288件	H20日記、H24 フィールドノート	無	-	-
16	別府 春海	(1930-)	保存箱5箱						リストあり。内容は調査の回答票で、権利処理をして公開することができるのかどうか疑問。			無	-	-
17	馬淵 東一	(1900-1988)	フィールドノート107 冊、抜刷、原稿等131 件	段ボール1箱			映像資料の包材の収納完了 発見資料の権利処理完了		(紙資料)発見資料は既存資料とは由来も異なるため、あらためて権利処理が必要。→平成26年第5回部会にて同一資料扱いで可と判断。 (映像音響資料)資料あり。アーカイブ資料として受入済み。	(紙資料)131件	H19-22フィール ドノート琉球編、 フィールドノート 台湾編、写真	有	済	要確認
18	守屋 毅	(1943-1991)							(紙資料)H18年度にリスト作成中(アルバイト雇用)となっているが？書架6連39段分を民族学史資料室の壁面棚に配置。 (映像音響資料)資料あり。今後、資料整理および受入手続きが必要。			有	未	要確認
19	吉田 集而	(1944-2004)						(紙資料)リスト作成開始	(紙資料)保存箱84箱を民族学史資料室にて保管中。平成27年3月に整理用資料(紙ファイル)を久保部会長より受領。RAによるリスト作成開始。 (映像音響資料)資料あり。今後、資料整理および受入手続きが必要。			有	未	要確認
20	「日本文化の地域類型 研究会」	(1960年代)												
21	石毛 直道	(1937-)				(資料発見)			(紙資料)H25年度発見。石毛先生に資料について確認した後整理を進めることが可能？ (映像音響資料)資料あり。今後、資料整理および受入手続きが必要。			有	未	要確認

2) 新規アーカイブ

	アーカイブ名					平成25年度	平成26年度	平成27年度	現状と課題	公開リスト内容	紙資料のデジタル 化	映像音響資料の有無 (H27.5確認)	映像音響資料の受入 手続き状態
1	大内 青琥	(1939-2005)											
2	江口 久	(1942-2008)				事前精査プロジェクト実施(継続)		仮リスト作成完了	池野さんによる仮リストは完成したので、受入提案、権利処理を進める予定。言語テープについては他機関で受入予定。			有	今後受入予定
3	欧米博物館所蔵アイヌ 資料調査記録					資料確認作業中			佐々木史郎先生の退職に伴い、アイヌ文化博物館(仮称)への譲渡を予定。			有	今後受入予定
4	1958年西北ネパール学 術調査隊データカード					リスト作成中			(紙資料)リストは一応完成。チェックが済んだら受入提案と権利処理へ。平成27年3月現物及びリストを民族学史資料室へ移動。 (映像音響資料)アーカイブのリストに入っていない資料あり。映像音響資料として受入、公開済み。			有	済
5	北村甫旧蔵資料アーカ イブ(仮称)	(1923-2004)					権利処理完了		仮受入のみ済。→平成26年第5回部会にて権利処理完了と判断。			無	-
6	沖守弘・インド民族文化 資料	(1929-)				受入、権利処理完了		(紙資料)リスト作成完了し、公開予定。 (映像音響資料)写真資料デジタル化完了。公開予定。	受入、権利処理済。			有	済



学問と社会のつながりを考える



公共社会学

公共人類学

2016年2月13日 [土]

国立民族学博物館第4セミナー室

一般公開

事前申し込みあり

講演1

山下晋司(帝京平成大学教授/東京大学名誉教授)  
「公共人類学——人類学の社会貢献について」

講演2

盛山和夫(関西学院大学教授/東京大学名誉教授)  
「なぜ公共社会学か」



近年、人文・社会科学では公共社会学、公共考古学、公共民俗学など、「公共」の二文字を冠する新たな学術領域が生まれています。この潮流は、視点や方法の違いこそあれ、議論を学問領域に閉じることなく、市民、NGO、企業、学校、メディアなどの公共空間に開いて、学問と社会の双方にとって有益な関係を構築することを目指しています。本サロンでは、そのうち民博との関わりが深い人類学と社会学に着目し、「公共人類学」と「公共社会学」をめぐる学術潮流の紹介と議論をおこなうことを目的としています。公共〇〇学についての学術潮流に関心をもつ研究者から、「人類学って何の役に立つの?」「社会学って社会とどうつながっているの?」などの疑問を持っておられる一般市民の方まで、幅広い層を対象として開催いたします。

## プログラム

### 講演会(第4セミナー)

総合司会:永田 貴聖・八木 百合子(国立民族学博物館機関研究員)

14:00~14:05 **館長挨拶** 須藤 健一(国立民族学博物館館長)

14:05~14:20 **趣旨説明** 河合 洋尚(国立民族学博物館助教)

14:20~15:10 **講演** 山下 晋司(帝京平成大学教授/東京大学名誉教授)

#### 「公共人類学——人類学の社会貢献について」

15:20~16:10 **講演** 盛山 和夫(関西学院大学教授/東京大学名誉教授)

#### 「なぜ公共社会学か」

16:10~16:50 **総合討論** 司会:河合 洋尚

**閉会の辞** 鈴木 七美(国立民族学博物館教授・研究戦略センター長)

### 山下 晋司 (Shinji YAMASHITA)

東京大学教養学部卒業。東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学。文学博士。広島大学助教授、東京大学教授を経て現職。専門は文化人類学、とくに観光や移民などグローバル化に伴う人の移動を研究。著書に『儀礼の政治学——インドネシア・トラジャの動態的民族誌』(弘文堂、1988年)、『ハリ——観光人類学のレッスン』(東京大学出版会、1999年)、『観光人類学の挑戦——「新しい地球」の生き方』(講談社、2009年)、編著書に『移動の民族誌』(岩波書店、1996年)、『文化人類学入門——古典と現代をつなぐ20のモデル』(弘文堂、2005年)、『観光文化学』(新曜社、2007年)、『資源化する文化』(弘文堂、2007年)、『公共人類学』(東京大学出版会、2014年)など。

### 盛山 和夫 (Kazuo SEIYAMA)

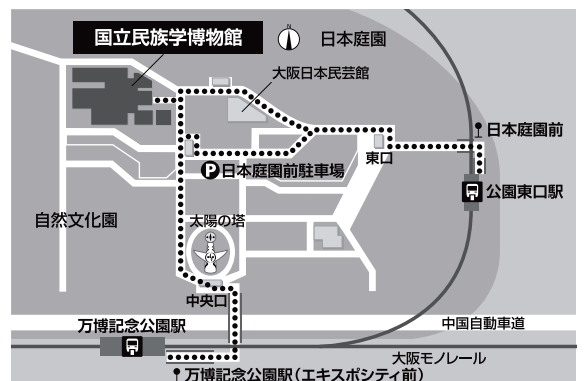
東京大学大学院社会学研究科博士課程退学。北海道大学文学部助教授、東京大学教授を経て現職。専門は数理社会学。博士(社会学)。主要著書に、『制度論の構図』(創文社、1995年)、『権力』(東京大学出版会、2000年)、『社会調査法入門』(有斐閣、2004年)、『リベラリズムとは何か——ロールズと正義の論理』(勁草書房、2006年)、『年金問題の正しい考え方——福祉国家は持続可能か』(中公新書、2007年)、『社会学とは何か——意味世界への探求』(ミネルヴァ書房、2011年)、『経済成長は不可能なのか——少子化と財政難を克服する条件』(中公新書、2011年)ほか。共編著に『公共社会学①——リスク・市民社会、公共性』(東京大学出版会、2012年)など。

### ご利用案内

- 開館時間 …… 10:00 ~ 17:00(入館は 16:30 まで)
- 休館日 …… 水曜日(水曜日が祝日の場合は、翌日が休館)
- 観覧料 …… 一般 420 円/高校・大学生 250 円/小中学生 110 円  
\*観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

### 交通のご案内

- 大阪モノレール…「万博記念公園駅」徒歩約 15 分  
\*自然文化園窓口で、当館の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。  
「公園東口駅」徒歩約 15 分  
\*自然文化園(有料区域)を通行せずに来館できます。
- バス …… 阪急茨木市駅・JR 茨木駅から「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」・「日本庭園前」下車徒歩約 13 分
- 乗用車 …… 万博記念公園の駐車場(有料)をご利用ください。最寄りの「日本庭園前駐車場」から徒歩約 5 分  
\*「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。



## 資料 8 人間文化研究機構連携研究一覧

### ■人間文化研究連携共同推進事業 小型連携研究

#### カテゴリー I

民博	驚異と怪異の現象ー比較研究の試み	山中 由里子
----	------------------	--------

#### 連携研究活動一覧

### ■小型連携研究：研究集会・シンポジウム関係

#### カテゴリー I

班	日時	場所	内容
山中班	11月1日	学習院女子大学	国際シンポジウム
	1月24日	筑波大学東京キャンパス	ワークショップ
	2月13日	国際日本文化研究センター	シンポジウム

## 資料 9 平成 27 年度科学研究費助成事業課題一覧 (H28. 1. 29現在)

(単位: 千円)

研究種目	審査区分	所属	職	氏名	計	
新学術領域研究 (研究領域提案型)	新学術領域	民族文化研究部	准教授	鈴木 紀	6,370	植民地時代から現代の中南米の先住民文化
	1件				6,370	
基盤研究 (S)		民族社会研究部	教授	關 雄二	35,620	権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築
	1件				35,620	
基盤研究 (A)	一般	民族社会研究部	教授	西尾 哲夫	9,620	アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイトーエジプト系伝承形成の謎を解く
	一般	民族文化研究部	教授	竹沢 尚一郎	10,010	世界の中のアフリカ史の再構築
	海外		名誉教授	山本 紀夫	6,890	熱帯高地における環境開発の地域間比較研究ー「高地文明」の発見に向けて
	海外	民族文化研究部	教授	池谷 和信	7,800	熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究
	一般		館長	須藤 健一	6,240	ネットワーク型博物館学の創成
	一般	文化資源研究センター	教授	吉田 憲司	8,840	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究
	一般	先端人類科学研究部	教授	齋藤 晃	13,520	アンデスにおける植民地的近代一副王トレドの総集住化の総合的研究
	海外	研究戦略センター	教授	塚田 誠之	9,490	中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究
	海外	研究戦略センター	教授	岸上 伸啓	7,670	グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究ー伝統継承と反捕鯨運動の相克
	9件				80,080	
基盤研究 (B)	海外	民族文化研究部	教授	杉本 良男	5,460	経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究
	一般	先端人類科学研究部	准教授	丸川 雄三	5,460	ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合
	海外	文化資源研究センター	助教	寺村 裕史	4,680	墳墓からみたインダス文明期の社会景観
	海外	文化資源研究センター	教授	野林 厚志	4,030	台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究
	海外	先端人類科学研究部	教授	佐々木 史郎	5,330	北方寒冷地域における織布技術と布の機能
	特設分野研究	研究戦略センター	教授	鈴木 七美	3,640	多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究
	一般	文化資源研究センター	教授	園田 直子	7,670	セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への応用
	一般	文化資源研究センター	准教授	日高 真吾	6,890	東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究
	一般		名誉教授	大森 康宏	8,320	映像人類学とアーカイブズ実践ー活用と保存の新展開
	海外	民族文化研究部	教授	森 明子	5,980	ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究
	10件 (うち転入1件)				57,460	
基盤研究 (C)	一般	研究戦略センター	教授	平井 京之介	910	水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究
	一般	研究戦略センター	准教授	丹羽 典生	1,300	トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学: オセアニア大国の移民を事例に
	一般	先端人類科学研究部	准教授	飯田 卓	650	バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容
	一般	研究戦略センター	教授	鈴木 七美	1,690	スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究
	一般	民族社会研究部	外来研究員	金谷 美和	1,040	インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義
	一般	文化資源研究センター	准教授	上羽 陽子	1,430	現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究
	一般	民族社会研究部	准教授	宇田川 妙子	1,170	現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究
	一般	研究戦略センター	助教	菅瀬 晶子	1,300	ガリラヤ地方とレバノンのキリスト教徒によるアラブ・ナショナリズムの再考
	一般	民族文化研究部	教授	笹原 亮二	1,040	本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究
	9件				10,530	
若手研究 (A)		研究戦略センター	助教	伊藤 敦規	3,900	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究
		民族社会研究部	助教	吉岡 乾	1,820	北パキスタン諸言語の記述言語学的研究
		先端人類科学研究部	機関研究員	浜田 明範	1,950	西アフリカにおける感染症対策と生権力の複数性に関する人類学的研究
3件				7,670		
若手研究 (B)		民族社会研究部	外来研究員	相島 葉月	650	現代エジプトのオルタナティブ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究
		民族社会研究部	外来研究員	鈴木 博之	910	言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究
		研究戦略センター	助教	河合 洋尚	650	漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編ー中・越隣接エリアの調査研究
		文化資源研究センター	助教	川瀬 慈	520	アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用
		民族社会研究部	外来研究員	加賀谷 真梨	1,170	高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究
		先端人類科学研究部	准教授	卯田 宗平	780	中国大興安嶺における生業環境の変化とトナカイ飼養民の適応形態: 1940-2010
		民族社会研究部	准教授	太田 心平	1,040	博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明
		民族社会研究部	外来研究員	宮本 万里	780	現代ブータンの多元的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究
		民族社会研究部	外来研究員	岡本 尚子	1,170	『千一夜物語』仏訳訳者マルドリウス再考ー〈遺贈コレクション〉の分析を中心に
		民族社会研究部	外来研究員	栗田 梨津子	1,170	オーストラリア多文化主義下の先住民とスーダン難民の緊張関係をめぐる人類学的研究
		民族社会研究部	外来研究員	森田 剛光	650	滞日ネパール人の生活実践と労働動態の研究
		文化資源研究センター	機関研究員	呉屋 淳子	1,300	境界領域における民俗芸能の教授・創生に関する研究: 奄美諸島の高等学校を中心に
		現代インド地域研究研究拠点	拠点研究員	豊山 亜希	1,300	植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究
		文化資源研究センター	機関研究員	金田 純平	910	笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較
		民族社会研究部	外来研究員	上田 知亮	1,430	インドの自治構想と第一次世界大戦: 〈帝國的相互作用〉と〈植民地間運動〉の視点から
		民族社会研究部	外来研究員	近藤 宏	1,040	パナマ東部先住民エンベラにおける「共同体企業」の実践に関する人類学的研究
		民族社会研究部	外来研究員	中村 真里絵	1,430	世界文化遺産パンチェン遺跡と地域社会: 住民の生活史の視点から
	文化資源研究センター	機関研究員	戸田 美佳子	1,170	アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究	
17件 (うち転出3件、転入3件)				18,070		
挑戦的萌芽研究		民族社会研究部	外来研究員	岩谷 洋史	1,170	人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求
		民族文化研究部	教授	出口 正之	1,560	法・会計・文化融合型の公共政策国際比較研究 チャリティ制度を事例に
		民族社会研究部	外来研究員	中野 聡子	2,080	コミュニティ通訳者を対象とした学術手話通訳者養成プログラムの開発
3件 (うち転入1件)				4,810		
研究活動スタート支援		文化資源研究センター	機関研究員	末森 薫	1,300	中国石窟芸術技法・材料の解明による美術史観再考ー麦積山石窟を事例としてー
		民族社会研究部	外来研究員	神本 秀爾	780	ジャマイカ、スキン・プリーチングが刷新する黒人性に関する文化人類学的研究
		研究戦略センター	機関研究員	八木 百合子	780	モノを通してみる現代ペルーにおける聖人信仰の形成と発展に関する人類学的研究
2件 (うち転出1件)				2,860		
研究成果公開促進費	学術図書	民族社会研究部	外来研究員	大場 千景	1,900	Oral Chronicles of the Boorana in Southern Ethiopia
	学術図書	民族社会研究部	外来研究員	吉田 ゆか子	1,600	バリ島仮面舞踏劇の人類学
	学術図書	民族社会研究部	外来研究員	窪田 暁	1,000	「野球移民」を生みだす人びと
	学術図書	民族社会研究部	外来研究員	奈良 雅史	1,500	現代中国の〈イスラーム運動〉
	データベース		名誉教授	久保 正敏	5,100	梅津忠夫資料のデジタルアーカイブ
	データベース	民族社会研究部	外来研究員	高橋 晴子	5,500	服装・身装文化デジタルアーカイブ
6件 (うち転出1件、転入1件)				16,600		
特別研究員奨励費			PD	市川 彰	1,560	紀元後5世紀イロバゴ火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究
			PD	比嘉 夏子	1,430	社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究: ポリネシアにおける贈与の全体性
			PD	田中 鉄也	1,560	近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義ー商業集団マールワリーを事例として
			PD	松嶋 健	1,300	社会的なるものの生態学ーイタリアの社会協同組合を軸とした統治と連帯の人類学的研究
			PD	奈良 雅史	1,430	宗教と公共性をめぐる人類学的研究ー現代中国におけるイスラーム復興運動の事例からー
			PD	松田 有紀子	910	花街の担い手コミュニティの日常実践に関する歴史人類学的研究
			PD	吉田 ゆか子	1,820	バリ島の「障害」のある役者たちの演劇実践ー遊戯性・あいだ性・日常との連続性
			PD	松平 勇二	1,430	シヨナ音楽文化と憑依儀礼の政治・宗教人類学的研究
			RPD	藤原 潤子	910	現代ロシアにおける新興教主義: 歴史認識、マイノリティ性、地位向上運動に注目して
9件 (うち転出2件)				12,350		
総 計				252,420		

## 資料10

## 平成27年度館長リーダーシップ経費「研究成果公開プログラム」

事業の名称 ◎「研究成果公開プログラム」		申請者名	備考
1	国際学会での研究発表:2nd Kashmir International Conference on Linguistics	民族社会研究部 吉岡 乾 助教	国際研究集会への派遣
2	国際伝統音楽評議会 (ICTM) 第43回世界大会における民博製作映画上映と研究発表	先端人類科学研究部 寺田 吉孝 教授	国際研究集会への派遣
3	国際民族学・民俗学会 (SIEF) 2015年研究大会「Utopias, Realities, Heritages: Ethnographies for the 21st Century」での論文発表	民族社会研究部 太田 心平 准教授	国際研究集会への派遣
4	国際研究集会the 7th International Conference of the European Research Netwok On Philanthropyでの発表	民族文化研究部 出口 正之 教授	国際研究集会への派遣
5	東南アジア考古学ヨーロッパ会合第15回国際会議「東南アジアにおける動植物の初期の歴史への学際的アプローチ」	民族社会研究部 ピーター・マシウス 教授	国際研究集会への派遣
6	国際シンポジウム「生物医療はアフリカに何を作り出しているのか」の開催	先端人類科学研究部 浜田 明範 機関研究員 (松尾 瑞穂 准教授)	館のシンポジウム
7	第8回ヨーロッパ・イラン学会 (Societas Iranologica Europaea) 大会での研究発表	民族文化研究部 山中由里子 准教授	国際研究集会への派遣
8	公開シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開－展示・教育から観光・まちづくりまで」	民族文化研究部 廣瀬浩二郎 准教授	館のシンポジウム
9	第11回国際狩猟採集社会会議での研究報告	民族文化研究部 池谷 和信 教授	国際研究集会への派遣

## 平成 27 年度 館 長 リーダー シ ッ プ 経 費 報 告 書

No. \_\_\_\_\_

申請者	所属		職名		氏名	
	民族社会研究部		助教		吉岡 乾	
共同提案者(※)	所属		職名		氏名	
(※) 共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。				実績額		248千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※		事業・調査経費	外国調査研究旅費		
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム		②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣		
1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。						
申請件名		国際学会での研究発表: 2nd Kashmir International Conference on Linguistics				
研究課題名		北パキスタン諸言語の記述言語学的研究				
渡航先		パキスタン、アーザード・ジャンムー・カシミール州ムザッファラバード				
1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。						
実施計画		平成 27 年 5 月 1 日 ~ 平成 27 年 5 月 7 日				
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。						
成果の概要						
平成27年5月4日～5日にパキスタンのAzad Jammu and Kashmir大学 (Azad Jammu and Kashmir州 Muzaffarabad市) で開催されたThe 2nd Kashmir International Conference on Linguisticsで研究発表をした。発表テーマは“北パキスタン諸言語のコピュラについて (On the Copulae of Languages in Northern Pakistan) ”。申請者がこれまでに現地調査を行って来た8言語 (カティ語、カラーシャ語、コワール語、シナー語、ギルギット方言、ドマーキ語、ブルシャスキー語、フンザ方言、ナゲル方言、ヤスィン方言) を対照し、それぞれの言語でのコピュラ (be動詞) の体系の特徴を調べ、地域的な特徴や系統特徴を明らかにすることを目的とした発表である。 発表では結論として、次の2点を示唆した。i) カラーシャ語・コワール語に地域特徴として、日本語の「いる」/「ある」のような、有生性に関するコピュラ語幹の使い分けがある。ii) コワール語・シナー語・ドマーキ語に見られる否定形における文法範疇の中和は、基層言語、或いは傍層言語としてのブルシャスキー語からの影響によるものであろうと考えられる。 海外からの参加者が、査証の発行事情もあって多くはなかった大会であったが、申請者の発表に関しては、ほとんどの海外参加者が聴きにきていた。質疑応答では特に、カラコルムとヒンドゥークシとを結んだ地域の言語の共通特徴を研究しているスウェーデンのHenrik Liljegren氏や、インド側カシミール人でカシミール語研究の大家であるOmkar N. Koul氏から貴重なコメントも得られた。氏らや、ウルドゥー語研究の大家であるTariq Rahman氏といった研究者との親睦を深められたことも、大会への参加が非常に有意義であった点の1つである。						
1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。						

## 実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者			
協力者			

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

担当部長・施設長・センター長名

西尾 哲夫

印

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

**出版計画** (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

成果は論文(日本語)の形にして公開する。  
論文はPDF形式で出版される予定の記述言語学研究会(京都大学)の論集へと投稿した。採用は決定しており、出版は2015年秋頃予定とのことである。

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

**成果の公開** (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

特になし。論集がPDF形式で公開されるはずであるため。

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

**外部資金での実施内訳**

なし

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

## 実績額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)	吉岡 乾	パキスタン、アーザード・ジャンムー・カシミール大学	第2回カシミール国際言語学会議発表	5/1～5/7	248千円
合 計					248千円
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円



諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費			千円
合 計			千円
総 合 計			248千円

平成27年度館長リーダーシップ経費報告書

No. \_\_\_\_\_

申請者	所属	職名	氏名
	先端人類科学研究部	教授	寺田 吉孝
共同提案者(※)	所属	職名	氏名

(※) 共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。

実績額	428千円
-----	-------

区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣

1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。

申請件名	Screening of two Minpaku-produced films and research presentation at the 43rd World Conference of the Interracial Council for Traditional Music (ICTM)
研究課題名	国際伝統音楽評議会(ICTM) 第43回世界大会における民博製作映画上映と研究発表
渡航先	カザフスタン カザフ国立芸術大学

1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。  
 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。  
 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。  
 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。

実施計画	平成27年7月13日 ~ 平成27年7月24日
------	-------------------------

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。  
 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。  
 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。

**成果の概要**

2015年7月16-22日にカザフスタン共和国の首都アスタナ市で開催された国際伝統音楽評議会の第43回世界会議に参加し、民博制作映画の上映と討論を行った。同評議会は世界最大規模の音楽芸能学会であり、隔年で世界会議を開催している。今大会の参加者は約600名で、約400件の研究発表が行われた。報告者は、民博で制作したフィリピン音楽に関する映像番組2本 (Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern PhilippinesおよびMusic in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines) を上映し、番組における文字情報(ナレーション、字幕)の位置づけ・役割に関して問題提起を行った。その後の討論では、現地とのラポール、現地上映会での反応などについて活発な質疑応答があった。また、民族音楽学における映像音響メディアの活用を議論する研究グループ (Study Group on Audiovisual Ethnomusicology) を同学会内に設立することが正式に承認されたことを受け、世界会議の開催期間中に第一回の総会が開催された。報告者も発起人の一人として参加し、グループの運営や研究方針、シンポジウム開催の日程などについての議論に参加した。会期中、映像音響資料の活用に関心のある多数の研究者と意見交換、交流を深めることができたのは大きな収穫だった。また、報告者は同学会の理事を務めており、大会前後に3日間開かれた理事会(7月14-15日と23日)にも合わせて出席した。

1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。  
 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。

## 実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	寺田吉孝	先端人類科学研究部	上映会開催、研究発表
協力者			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。			

担当部長・施設長・センター長名

吉田 憲司

印

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

**出版計画** (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

今回の上映会・発表は、2014年度にフィリピンで開いた計6回の上映会における議論に基づいている。これに今回の発表時の議論を加味した論文を学会誌 Yearbook for Traditional Music に投稿する予定である。

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

**成果の公開** (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

なし。

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

**外部資金での実施内訳**

理事会が開かれた3日間の宿泊費は、主催校のカザフスタン芸術大学が負担。

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

## 申請額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)	寺田吉孝	カザフスタン	The 43rd ICTM参加	12日間	410千円
合 計					410千円
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費	大会参加費(120ユーロ)		18千円
合 計			18千円
総 合 計			428千円

## 平成27年度館長リーダーシップ経費報告書

No. \_\_\_\_\_

申請者	所属		職名	氏名
	民族社会研究部		准教授	太田心平
共同提案者(※)	所属		職名	氏名
(※) 共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			実績額	194千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費	
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣	
1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。				
申請件名	国際民族学・民俗学会(SIEF)2015年研究大会「Utopias, Realities, Heritages: Ethnographies for the 21st century」での論文発表			
研究課題名				
渡航先				
1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。				
実施計画	平成27年 6月20日 ~ 平成27年 6月26日			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。				
<b>成果の概要</b> ザグレブ大学で開催された国際民族学・民俗学会(SIEF)の2015年研究大会「Utopias, Realities, Heritages: Ethnographies for the 21st century」に参加し、特にパネルセッション「Imagineries of migration: expectations and places」(Mig002)で、論文「The Utopist Genealogy of South Korean Immigrants in New York in 21st Century」を発表した。 この発表は、申請者が2010年以降におこなってきた研究の成果報告であり、公刊しようとしている論文をその内容とする。研究大会では、発表に対して多くのコメントが寄せられた。これをもとに論文をリライトし、その結果をもって、同じパネルの参加者とともに、発表の成果を公刊するための打ち合わせをおこなうことが出来た。 また、このパネルの総合討論においても、申請者の発表がパネル全体を整理し、各論文を結びつける鍵としてあつかわれたため、パネル全体に対しても寄与できた。				
1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。				

## 実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者			
協力者			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。			

担当部長・施設長・センター長名

西尾 哲夫

印

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

**出版計画** (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

外部の英文国際学術誌に論文として投稿する予定である。

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

**成果の公開** (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

## 外部資金での実施内訳

科学研究費補助金(若手研究(B))にて、6月26日から7月3日まで、発表した論文をすみやかに公刊するためのパネル参加者との共同作業、およびクロアチア国内の自然史博物館における展示実践の調査研究をおこなった。この期間の滞在費および復路の旅費を、この経費によりまかかった。

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

## 実績額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)	太田心平	ザグレブ大学	学会発表	7日間	159千円
合 計					159千円
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円



諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費	参加費(€260)	1	35千円
合 計			35千円
総 合 計			194千円

## 平成 27 年度 館長リーダーシップ経費報告書

No. \_\_\_\_\_

申請者	所属		職名	氏名
	民族文化研究部		教授	出口正之
共同提案者(※)	所属		職名	氏名
(※) 共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			実績額	302千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費	
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣	
1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。				
申請件名 研究課題名 渡航先	国際研究集会the 7th International Conference of the European Research Network On Philanthropyへの派遣。 (論文“Policy change making the biggest Corporate Philanthropy in Japan”の発表) ESSEC Business School, Cergy Campus (フランス・パリ)			
1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。				
実施計画	平成27年7月8日—12日			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。				
成果の概要	European Research Network On Philanthropy (ERNOP) はヨーロッパの大学のフィランソロピー研究所のネットワーク組織で、学会と同様の大会を今回行った。120名程度の小規模の研究集会であったが、申請者は、政策人類学的観点から、今般の公益法人制度改革及び税制改革によって、日本の一企業の税引き前利益の40%相当額142億円が東北大震災後の復興のための寄附として使用されたこと。また、この142億円の寄附が、全て税制上、非課税とされたことを報告。この間の、公益認定等委員会委員長、Yホールディングス社長、Y福祉財団理事長の役割を明らかにした。聴衆からは、①大陸法の伝統をひく日本に慣習法の英国制度が入り込んだことへの反応、②欧米では決して見られない事例に対する驚き、③shareholder philanthropy研究からの研究上の意義の指摘等があった。従来日本のフィランソロピー研究が米国を中心に見ていた反省から、今回の発表に至ったが、公益認定制度という欧州(イギリス)発の制度を日本に導入したことによる研究上の領域が広がっていることが明らかになった。			

**実施組織**the European Research Network On Philanthropy(ERNOP)

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	Theo Schuyt	VU University Amsterdam - Netherlands	
協力者			

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

<b>担当部長・施設長・センター長名</b>	池谷 和信	印
------------------------	-------	---

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

<b>出版計画</b> (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)
本会議を特集するVoluntary Sector Review, published by the Policy Pressを第一に計画している。
1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

<b>成果の公開</b> (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)
既に、 <a href="http://ernop.eu/ernop-conference-2015/ernop-conference-papers/">http://ernop.eu/ernop-conference-2015/ernop-conference-papers/</a> に、アップロード済
1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

<b>外部資金での実施内訳</b>
特になし
1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

## 実績額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)	出口正之	フランス (パリ)	学会発表	7月8-12日	247千円
合 計					247千円
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費	大会参加費 451.50ユーロ		55千円
合 計			55千円
総 合 計			302千円

## 平成27年度館長リーダーシップ経費報告書

No. \_\_\_\_\_

申請者	所属		職名	氏名
	民族社会研究部		教授	ピーター・マシウス
共同提案者(※)	所属		職名	氏名
(※) 共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			実績額	378千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費	
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣	
1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。				
申請件名 研究課題名 渡航先	東南アジア考古学ヨーロッパ会合第15回国際会議『東南アジアにおける動植物の初期の歴史への学際的アプローチ』での研究発表  Université Paris Ouest Nanterre la Défens (フランス/パリ)			
1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。				
実施計画	平成27年 7月4日 ~ 平成27年7月13日			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。				
成果の概要				
7月6日から10日、Universite Paris Ouest, Nanterre la Defense (パリ) で開催された東南アジア考古学ヨーロッパ会合第15回国際会議に参加し、9日に『ベトナム北部におけるColocasia esculenta(サトイモ)とその野生近縁種の同所性(Sympatry of Colocasia (taro) and its wild relatives in nothern Vietnam)』と題する論文を発表した。この論文は、かつて指導教員であった Ibrar Ahmad博士 (Quaid-i-Azam University, パキスタン) と東南アジアの共同研究者との共著である。会議開催中には、インド、フランス、オーストラリア、ニュージーランド、イギリスなどから参加していた多くの研究者と会い、東南アジアの先史時代に関するさまざまな地域での最先端の研究を知ることができた。とくに、インドの考古学のセッションで知り合ったNagaland Universityの研究スタッフとは、将来的な共同野外調査の可能性について話し合うことができた。				
1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。				

## 実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者			
協力者			

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

担当部長・施設長・センター長名

西尾哲夫

印

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

**出版計画** (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

今回発表した論文は、学術誌 (Springerにより出版されている『the journal Genetic Resources and Crop Evolution』など) で近く出版する予定である。

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

**成果の公開** (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

**外部資金での実施内訳**

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

## 実績額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)	ピーター・マシウス	Université Paris Ouest Nanterre la Défens(フランス/パリ)	国際会議での発表	7/4-13	378千円
合 計					378千円
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円



諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費			千円
合 計			千円

総 合 計			378千円
-------	--	--	-------

## 平成27年度館長リーダーシップ経費報告書

No. \_\_\_\_\_

申請者	所属		職名	氏名
	先端人類科学研究部		機関研究員	浜田 明範
共同提案者(※)	所属		職名	氏名
	先端人類科学研究部		准教授	松尾 瑞穂
(※) 共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			実績額	274千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費	
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣	
1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。				
申請件名	(原題) How Biomedicines Shape Life, Sociality and Landscape in Africa.			
研究課題名	(和題) 生物医療はアフリカに何を作り出しているのか			
渡航先				
1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。				
実施計画	平成27年9月25日 ～ 平成27年9月27日			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。				
成果の概要	<p>近年、英語圏を中心にアフリカ地域の人びとの生活に生物医療がどのような影響を与えているのかを問う研究が増加している。特に2000年代後半以降は研究量が著しく増加しており、2008年から2015年までの間に少なくとも6冊の英語の論文集が出版されている。本シンポジウムでは、この分野を世界的に主導しているオスロ大学のウェンゼル・ガイスラー教授とルース・プリンス准教授を招聘し、また、日本国内で活動する10名のアフリカ研究者と合わせて12本の研究発表を行った。本シンポジウムには、これに、6名の文化人類学者・医療人類学者をコメンテーターや司会として招聘することで、活発な議論を行った。</p> <p>これにより、日本で活動する多くの研究者にアフリカ地域を対象とする医療人類学の最先端の研究に直に触れる機会を提供するとともに、日本の医療人類学者による成果を世界的に発信する足がかりを築くことができた。また、シンポジウムの発表者8名のうち3名が30代であることや、当初予定していなかった大学院生向けのワークショップを25日に実施することによって、特に若手の研究者の育成に資するものとなった。</p>			
1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。				

## 実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	浜田 明範	国立民族学博物館・先端人類科学研究部・機関研究員	研究総括・趣旨説明・ガーナの結核
協力者	松尾 瑞穂	国立民族学博物館・先端人類科学研究部・准教授	研究総括補佐
	P. Wenzel Geissler	Professor, Department of Anthropology, University of Oslo	ケニアの生命科学
	Ruth J. Prince	Associate Professor, Department of Community Medicine, University of Oslo	ケニアのHIV/AIDSプロジェクト
	近藤 英俊	関西外国語大学・外国語学部・准教授	ナイジェリアの出産施設における生物医学と文化
	西 真如	京都大学・グローバル生存学大学院連携ユニット・准教授	エチオピアにおけるHIV/AIDSプロジェクト
	中村 香子	京都大学・アフリカ地域研究資料センター・研究員	ケニアにおける女子割礼と医療
	春日 直樹	一橋大学・社会学研究科・教授	コメンテーター
	岡崎 彰	一橋大学・社会学研究科・元教授	コメンテーター
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。			

担当部長・施設長・センター長名

寺田 吉孝

印

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

**出版計画** (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

本シンポジウムの研究成果は、英語による論文集の出版(本館のSES)を予定している。

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

**成果の公開** (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

本シンポジウムの内容は、日本文化人類学会課題研究懇談会「医療人類学教育の検討」のwebページに掲載する予定である。

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

## 外部資金での実施内訳

本シンポジウムの必要経費のうち、オスロ大学より招聘した二人の研究者の外国人招聘帰国旅費(570,580円)に関しては、申請者が代表を務める日本学術振興会科学研究費助成事業(若手研究(A))「西アフリカにおける感染症対策と生権力の複数性に関する人類学的研究」より支出した。

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

## 実績額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費	東京⇄大阪	シンポジウムへの参加	2泊3日	3人×1回	127千円
	秋田⇄大阪	シンポジウムへの参加	2泊3日	1人×1回	69千円
	京都より日帰り	シンポジウムへの参加		2人×2回	30千円
	大阪より日帰り	シンポジウムへの参加		3人×2回	21千円
合 計					247千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)					千円
合 計					千円
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費	アルバイト謝金(7600円×のべ3日半)		27千円
合 計			27千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費			千円
合 計			千円

総 合 計			274千円
-------	--	--	-------

## 平成 27 年度 館 長 リーダー シ ッ プ 経 費 報 告 書

No. \_\_\_\_\_

申請者	所属		職名	氏名
	民族文化研究部		准教授	山中由里子
共同提案者(※)	所属		職名	氏名
(※) 共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			実績額	450千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費	
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣	
1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。				
申請件名	第8回ヨーロッパ・イラン学会 (Societas Iranologica Europaea)大会での研究発表			
研究課題名	サンクト・ペテルスブルグ(ロシア)			
渡航先				
1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。				
実施計画	平成 27年 9月 13日 ~ 平成 27年 9月 21日			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。				
<b>成果の概要</b> <p>ヨーロッパ・イラン学会大会は4年ごとに開催されるイラン学の国際的な学術会議で、ヨーロッパのみならず、イラン、北米、日本からも最先端の研究を発表するために歴史・文学・人類学・美術など様々な分野の研究者が一堂に会す重要な会議である。申請者は初日の文学のセッションにおいて、ムハンマド・トゥースィーの『被創造物の驚異』という12世紀のペルシア語百科全書に含まれる、アレクサンドロスに関する驚異譚について(“Alexander and the Wonders of the World in Ṭūsī’s ‘Ajā’ib al-makhlūqāt”)発表した。発表後も、活発に質問があり、評価が得られたという手ごたえがあった。</p> <p>エルミターージュ美術館では、イブン・バットゥータという14世紀のアラブの大旅行家の展覧会が開催されており、ロシア科学アカデミーの東洋写本研究所や国立図書館においても、ペルシア写本の展示が学会に合わせて開催されていた。これらの展示と、さらにクンストカメラ(ピョートル大帝人類学・民族学博物館)などへの研修エクスカージョンも企画されており、今後の研究にとって重要なコレクションを訪れる貴重な機会でもあった。</p>				
1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。				

## 実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者			
協力者			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。			

担当部長・施設長・センター長名

印

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

**出版計画** (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

Middle East StudiesまたはJerusalem Studies in Arabic and Islamに寄稿予定

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

**成果の公開** (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

ヨーロッパイラン学会ホームページへの掲載

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

**外部資金での実施内訳**

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

## 実績額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)	山中由里子	サンクト・ペテルスブルグ	国際学会発表	9日	430千円
合 計					430千円
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円



諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費	大会登録料 (150ユーロ、現金支払、9月14日レート)	1	20千円
			千円
合 計			20千円
総 合 計			450千円

## 平成27年度館長リーダーシップ経費報告書

No. \_\_\_\_\_

申請者	所属		職名	氏名
	民族文化研究部		准教授	広瀬 浩二郎
共同提案者(※)	所属		職名	氏名
(※)共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。			実績額	1,704千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※	事業・調査経費	外国調査研究旅費	
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム	②研究フォーラム	③国際研究集会への派遣	
1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。				
申請件名	公開シンポジウム			
研究課題名	「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開—展示・教育から観光・まちづくりまで」 A New Development of the Theory of “Universal Museum”: From Exhibition & Education to Tourism & Town Planning			
渡航先				
1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。				
実施計画	平成 27年 11月 28日 ～ 平成 27年 11月 29日			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。				
成果の概要				
本シンポジウムは、共同研究「触文化に関する人類学的研究」の成果を公開する事を目的として実施した。2日間に渡って研究者、学芸員、アーティストなどが集い、「深める」と「伸ばす」をキーワードとして、ユニバーサル・ミュージアム（誰もが楽しめる博物館）の可能性について、多角的に考えた。1日目は、各地の美術館・博物館で試みられている展示、教育プログラムの事例を報告した。単なる視覚障害者支援にとどまらず、ミュージアムそのもの、ひいては社会を改変していく触文化の実践的研究を推進するのが、1日目の発表者を貫く基本スタンスといえる。これまで、触察による鑑賞は主に三次元の立体物を対象としてきたが、本シンポジウムでは視覚障害者が二次元の絵画作品を触学・触楽するさまざまな手法を提示し、ユニバーサル・ミュージアム論の深化を確認・検証した。2日目は、博物館の枠にこだわらず、自由な発想で企画される触発型ワークショップの諸相、および五感を駆使して「誰もが楽しめる」観光・まちづくりをめざす先進的な取り組みを紹介した。触文化・“手学問”概念を他分野に応用して、その普遍性を明らかにするのが2日目の狙いだった。本シンポジウムを通じて、触文化・“手学問”理論の各方面への伸展は、「感覚の多様性」が尊重されるミュージアムの未来像、障害/健常という二分法を乗り越える新たな人間観の提案につながることを確信した。その手応えを参加者が共有できたのは有意義だった。				
1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。				

## 実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者	広瀬 浩二郎	国立民族学博物館 民族文化研究部	日本宗教史・触文化論
協力者	小山 修三	国立民族学博物館名誉教授	考古学・博物館経営論
	相良 啓子	国立民族学博物館プロジェクト研究員	手話言語学・コミュニケーション論

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。

担当部長・施設長・センター長名

池谷 和信

印

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

**出版計画** (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

本シンポジウム成果報告書は、青弓社から出版される。(2016年6月刊行予定)

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

**成果の公開** (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

## 外部資金での実施内訳

青弓社が報告書の商業出版費用(編集・印刷費・その他)を負担する。

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

## 実績額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務元-用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費	北海道-大阪	シンポジウム出席・発表	3泊4日	1人×1	100千円
	茨城-大阪	シンポジウム出席・発表	1泊2日	1人×1	41千円
	東京-大阪	シンポジウム出席・発表	1泊2日	4人×1	168千円
	千葉他-大阪	シンポジウム出席・発表	1泊2日	2人×1	45千円
	神奈川-大阪	シンポジウム出席・発表	1泊2日	1人×1	44千円
	岐阜-大阪	シンポジウム出席・発表	1泊2日	1人×1	31千円
	愛知-大阪	シンポジウム出席・発表	1泊2日	2人×1	89千円
	岡山-大阪	シンポジウム出席・発表	1泊2日	1人×1	28千円
	三重-大阪	シンポジウム出席・発表	1泊2日	1人×1	19千円
	滋賀-大阪	シンポジウム出席・発表	日帰り	2人×1	19千円
	京都1-大阪	シンポジウム出席・発表	日帰り	2人×1	6千円
	京都2-大阪	シンポジウム出席・発表	日帰り	1人×1	3千円
	兵庫-大阪	シンポジウム出席・発表	日帰り	2人×1	5千円
	奈良-大阪	シンポジウム出席・発表	日帰り	1人×1	7千円
	大阪府内	シンポジウム出席・発表	日帰り	2人×1	7千円
合 計					612千円

海外旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※					千円
合 計					千円

外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名（国名）	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円

諸 謝 金	事 項	数量	金額
※アルバイトや講師に係る経費	謝金アルバイト(書類作成、準備業務、当日業務、実施後のアンケート整理等)	34日	258千円
合 計			258千円

物 件 費	品 名・事 項	数量	金額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費	シンポジウムちらし、点字印刷 A4判/エンボス@10	4000	43千円
	パンフレットA4(表4色・裏1色@10.5)	4000	87千円
	看板(太陽門、5セミ)	2	56千円
	手話通訳	合計7人	378千円
	テープ越し	11時間 20分	262千円
	A-1マルチカード/スタンダードカラーペーパー		8千円
合 計			834千円
総 合 計			1,704千円

平成27年度館長リーダーシップ経費報告書

No. \_\_\_\_\_

申請者	所属	職名	氏名
	民族文化	教授	池谷和信
共同提案者(※)	所属	職名	氏名

(※) 共同提案者の欄は、申請者が(特別)研究員や館外の共同研究代表者などである場合に、館内の専任研究教員及び特任教員を共同提案者として、必ず記載すること。

実績額	423千円
区分 (該当事項に○)	研究成果公開プログラム※
種別 (該当事項に○)	①館におけるシンポジウム
	②研究フォーラム
	③国際研究集会への派遣

1) 研究成果公開プログラムは、種別のうち、該当事項に○をつけてください。

申請件名	第11回国際狩猟採集社会会議での研究報告 ウィーン(オーストリア)
研究課題名	
渡航先	

1) 研究成果公開プログラムは、研究課題名の(原題)、(和題)、(英題)を記載すること。  
 2) 研究成果公開プログラムのうち、③国際研究集会への派遣の場合は、参加する研究集会名・セッション名等を記載すること。  
 3) 事業・調査旅費は、申請件名を記載すること。  
 4) 外国調査研究旅費は、渡航先を記載すること。

実施計画	平成27年9月5日 ~ 平成27年9月13日
------	------------------------

1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施期間を記載すること。  
 2) 事業・調査旅費は、実施期間を記載すること。  
 3) 外国調査研究旅費は、渡航期間を記載すること。

成果の概要

国際狩猟採集社会会議(CHAGS)は、世界の狩猟採集民研究者が一堂に集まる会議である。そこでは世界最先端の研究が報告されると同時に、最新の調査内容などの情報交換が行なわれる。このため、申請者がこの会議で研究報告することによって、世界のなかでの自分の研究の位置を確認することができる。

今回の第11回目の会議では、申請者は「現在のカラハリ狩猟採集民の研究と活動」というセッションでの報告を行った。このセッションは、この分野の世界的な第一人者リチャード・リー教授ほかによって組織されており、欧米、アフリカ、日本などの研究者による報告がなされた。申請者の研究は、過去20年間におけるある村の社会変容を報告したが、その村が先住民運動の研究者に近年注目されている点、村の事例は従来のカラハリモデルに当てはまらないことなどから、新たな理論的枠組みを提示できるものと確信することができた。

以上のように、世界の研究のなかで自らの研究を深めること、世界のなかで日本からの国際競争力の高さを示すことができたと考えている。

1) 研究成果公開プログラムは、研究目的・研究の実施状況を記載したうえで、800字程度で記載すること。  
 2) 事業・調査旅費、外国調査研究旅費は、事業の成果、及び今後の課題や展望などについて、400字程度で記載すること。

## 実施組織

	氏名	機関・所属	研究分担
代表者			
協力者			
1) 研究成果公開プログラムのうち、①館におけるシンポジウム、②研究フォーラムは、実施組織を必ず記載すること。			

担当部長・施設長・センター長名

副館長 吉田憲司

印

※1 各事項については、簡潔に記載すること。

※2 経費の内訳について裏面に記載すること。

**出版計画** (研究報告、SESなど、あるいは関係学会誌等において、成果を論文等で公開する予定を記載してください。)

今回の研究報告は加筆修正を加えたあとに、英語論文として学術雑誌に投稿の予定である。

1) 研究成果公開プログラム・外国調査旅費を申請する場合は、必ず記載すること。

**成果の公開** (出版計画以外にホームページなどへ掲載するなど、公開する予定があれば、記載してください。)

1) 研究成果公開プログラムは、必ず記載すること。

**外部資金での実施内訳**

1) 科学研究費補助金や外部機関などの助成金や受託研究により併せて実施した内容について、内訳及び金額などを具体的に記載してください。

## 実績額の内訳

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※本館職員が日本国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

国内旅費	用務先	用務内容	日程	回数	金額
※国内の館外者を本館へ招へいするとき若しくは国内を出張するときの交通費、日当、宿泊費					千円
合 計					千円

外国旅費	出張者	用務先	用務内容	日程	金額
※本館職員が海外へ出張するときの旅費と滞在費)	池谷和信	ウィーン (オーストリア)	国際学会参加・発表	9/5-9/13 7泊9日	423千円
合 計					423千円
外国人招へい帰国旅費	招へい者	都市名 (国名)	用務内容	日程	金額
※海外から本館へ館外者を招へいするときの旅費と滞在費					千円
合 計					千円



諸 謝 金	事 項	数 量	金 額
※アルバイトや講師に係る経費			千円
合 計			千円

物 件 費	品 名・事 項	数 量	金 額
※備品・消耗品等の購入、印刷や看板制作など役務の提供に係る経費			千円
合 計			千円

総 合 計			423千円
-------	--	--	-------

# 育児の人類学、 介護の民俗学

—フィールドワークによる再発見



【日時】2015年11月13日【金】 18:30～20:40 (17:30開場)  
【場所】日経ホール (東京都千代田区大手町1-3-7 日本経済新聞社ビル3階)  
【定員】600名 【参加費】無料(要申込) 【参加証】が必要です  
\*手話通訳あり

みんぱく  
携帯  
サイト



総合司会: 丹羽 典生 (国立民族学博物館・准教授)

- 17:30 開場
- 18:30 開会 阪本 浩伸 (日本経済新聞社執行役員・大阪本社編集局長)
- 18:35 挨拶 須藤 健一 (国立民族学博物館・館長)
- 18:40 講演1 信田 敏宏 (国立民族学博物館・教授)
- 19:15 講演2 六車 由実 (デイサービス「すまいるほーむ」管理者・生活相談員)
- 19:50 休憩
- 20:05 討論

コメント: 鈴木 七美 (国立民族学博物館・教授) / 信田敏宏 / 六車由実

進行: 南 真木人 (国立民族学博物館・准教授)

20:40 終了

# 育児の 人類学、 介護の 民俗学

—フィールドワークによる再発見

## 講演1 「心に寄り添う子育てとは? —遊びと学びのすごろくワールド」

信田 敏宏 (国立民族学博物館・教授)

「心に寄り添う」「共感する」をモットーに取り組んできた我が家の子育て。ダウン症のある娘の心が清らかに成長していくプロセスを語る。人類学者として、父親として、これからの社会はどうあるべきか、心豊かで幸せな人生を送るために必要なこととは何かを問いかけたい。

## 講演2 「聞き書きで介護の世界が変わっていく —介護民俗学の実践から」

六車 由実 (デイサービス「すまいるほーむ」管理者・生活相談員、民俗学者)

民俗学の「聞き書き」の手法を介護現場で試みていくと、閉塞的だった介護の世界が少しずつ変化していった。それまで介護する／されるという非対称的な関係に固定されていた介護職員と利用者との関係が、教えられる／教えるという関係に逆転し、さらに利用者同士もそれぞれの人生に共感し、互いに思いやる関係に深まっていったのである。介護民俗学の実践を通して、人が最期まで人として生きられる、希望のある介護の在り方を探る。

ダウン症のある子どもを療育する人類学者と介護施設で働きたがらお年寄りの話を聞き書きする民俗学者。そこには障がいのある子どもの家族や認知症、介護の現場などにつきまとう否定的なイメージを払拭するばかりか、多様な人びとが暮らしやすい社会を実現する新たな可能性が見えてきます。本講演会では、育児と介護の現場におけるフィールドワークから、少子高齢化をむかえた日本社会のゆくりを探ります。

## プロフィール



信田 敏宏  
(のぶたとしひろ)

国立民族学博物館・総合研究大学院大学教授。専門は社会人類学・東南アジア研究。博士(社会人類学)。マレーシア先住民オラン・アスリの研究に従事。著書に『ドリアン王国探訪記』(臨川書店、2013)、娘の子育て経験をつづった『「ホーホー」の詩ができるまで—ダウン症児、こころ育ての10年』(出窓社、2015)など。



六車 由実  
(むぐるま ゆみ)

民俗研究者。社会福祉士。介護福祉士。介護支援専門員。博士(文学)。2009年に大学教員から介護職員に転身。現在、デイサービス「すまいるほーむ」管理者・生活相談員。聞き書きにより介護をより豊かにする試みを続けている。著書に『介護民俗学へようこそ!』(新潮社、2015)、『驚きの介護民俗学』(医学書院、2013)など。



鈴木 七美  
(すずき ななみ)

国立民族学博物館・総合研究大学院大学教授。医療人類学・エイジング研究。博士(学術)。著書に『出産の歴史人類学』(新曜社、1997)、『癒しの歴史人類学』(世界思想社、2002)、共編著に『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』(御茶の水書房、2010)など。

申込方法: 「11月13日講演会参加希望」と明記の上、ハガキ、FAX、メールにてお申し込みください。お申し込みの場  
合は、次の①～⑤を記載してください。①郵便番号、②住所、③氏名、④連絡先電話番号、⑤今後の講演会など  
のご案内送付希望の有無(次のア～ウのうち希望する記号をア～ウ。講演会を含む民博主催の研究会・催物等の  
案内を希望する/イ。講演会のみ案内を希望する/ウ。いずれの案内も希望しない)  
10月上旬より順次参加証を発送する予定です。  
※1: 応募者多数の場合は、ご参加いただけない場合もございます。  
※2: 2名様以上でお申し込みの場合は、それぞれの方について①～⑤をご記載ください。  
※3: 手話通訳をご希望される方、車椅子をご利用される方は、お席を用意いたしますので、お申し込みの際  
に必ずご記載ください。  
※4: 参加申し込みをいただいた方の個人情報は、参加証の発送、次回以降の講演会などのご案内以外には  
使用いたしません。

宛先: 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 国立民族学博物館 研究協力課 宛  
●FAX 06-6878-8479 ●メールアドレス koenkai@idc.minpaku.ac.jp

問合せ先: 国立民族学博物館 研究協力課研究協力係  
●TEL 06-6878-8209 ●URL <http://www.minpaku.ac.jp/>

注意事項: ・会場には必ず参加証をご持参ください。参加証はお一人様一枚となっております。  
・参加証がない方は会場には入れないことがありますのでご注意ください。

- 東京メトロ 千代田線「大手町駅」中央改札より徒歩約4分・丸の内線「大手町駅」鎌倉橋方面改札より徒歩約5分  
・半蔵門線「大手町駅」大手町方面改札より徒歩約5分
- 東西線「大手町駅」中央改札より徒歩約9分・東西線「竹橋駅」大手町方面改札より徒歩約3分
- 都営地下鉄 三田線「大手町駅」大手町方面改札より徒歩約6分 ※地下鉄「大手町駅」下車C2b出口直結



**国立民族学博物館公開講演会**  
**「育児の人類学、介護の民俗学—フィールドワークによる再発見」**  
**参加内訳状況及び、アンケート集計結果報告**

日時:平成27年11月13日(金)18:30～20:40(開場17:30)  
 場所:日経ホール(東京都千代田区大手町1-3-7 日経ビル3階)  
 天候:曇り

	平成27年度	平成26年度	平成25年度	平成24年度
開催日程	平成27年11月13日(金)	平成26年11月4日(火)	平成25年10月25日(金)	平成24年10月26日(金)
開催場所	日経ホール	日経ホール	日経ホール	日経ホール
募集定員 A	600名	600名	600名	600名
参加申込総数 B	508名	441名	604名	785名
申込者出席数 C	358名	297名	426名	555名
当日参加者数 D	8名	13名	1名	9名
参加者総数 E=C+D	366名	310名	427名	564名
申込者出席率 C/B	70.5%	67.3%	70.5%	70.7%
アンケート回答者数 F	244名	214名	268名	387名
アンケート回答率 F/E	66.7%	69.0%	62.8%	68.6%

(小数点第二位以下四捨五入)

過去の公開講演会テーマ

- 平成26年度 国立民族学博物館公開講演会 「無形文化遺産 選ぶ視点、選ばれる現実」
- 平成25年度 国立民族学博物館公開講演会 「ミャンマー 刻んだ歴史 未来へのまなざし」
- 平成24年度 国立民族学博物館公開講演会 「だから人類は地球を歩いた—太平洋へ アメリカへ」

(注)アンケート集計内の%は、すべて小数点第二以下を四捨五入した数値である。

## 平成27年度 公開講演会参加状況内訳

### 申込方法別参加状況

(名)

	申込者数(a)	(a)／申込者数合計	参加者数(b)	(b)／参加者数合計	出席率(b/a)
ハガキ	74	14.6%	54	14.8%	73.0%
FAX	67	13.2%	46	12.6%	68.7%
メール	359	70.7%	255	69.7%	71.0%
一般招待者	7	1.4%	2	0.5%	28.6%
電話受付	1	0.2%	1	0.3%	100.0%
当日参加	—	—	8	2.2%	—
合計	508	100%	366	100%	72.0%

(小数点第二位以下四捨五入)

### 都道府県等別参加者状況

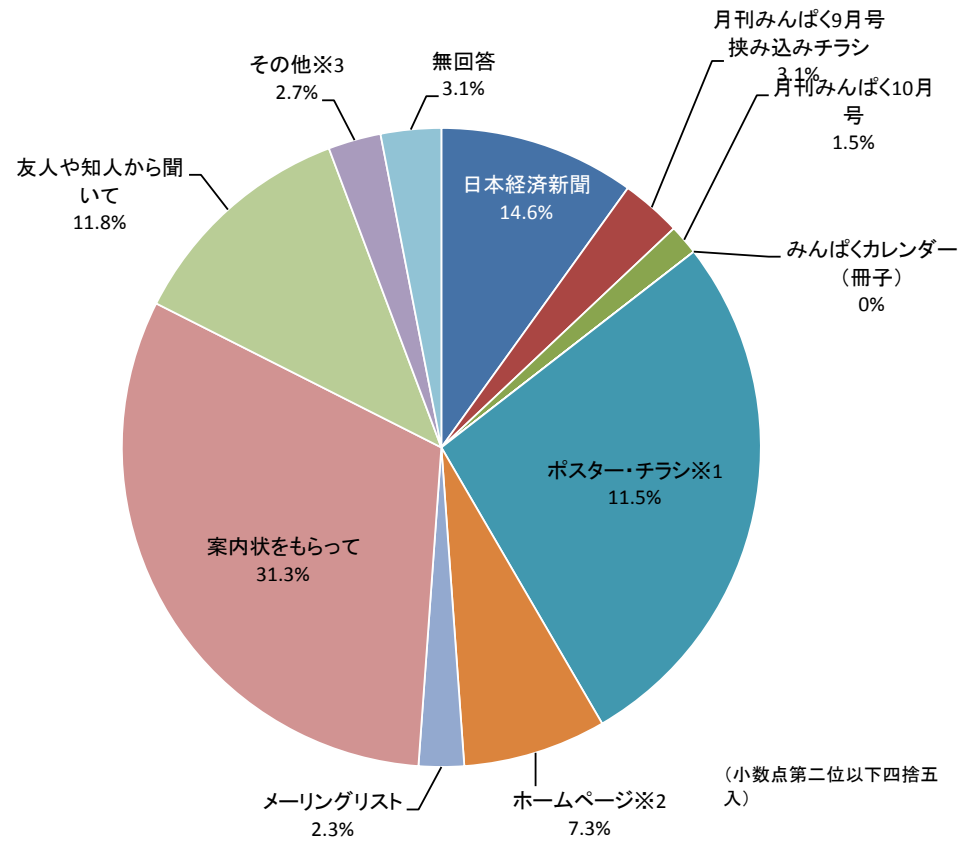
(名)

都道府県等	参加者数	備考
東京都	248	(都内23区、武蔵野市、町田市、多摩市、三鷹市、外)
神奈川県	36	(横浜市、川崎市、藤沢市、茅ヶ崎市、外)
千葉県	21	(千葉市、船橋市、市川市、松戸市、外)
埼玉県	32	(さいたま市、所沢市、北本市、外)
茨城県	5	(つくば市、つくばみらい市、土浦市、鹿嶋市、牛久市)
群馬県	2	(前橋市、高崎市)
山形県	1	(山形市)
宮城県	2	
栃木県	1	(宇都宮市)
中部地方	6	(愛知県、長野県、静岡県)
関西地方	7	(大阪府、兵庫県、奈良県)
中国地方	1	(広島県)
九州地方	2	(福岡県、佐賀県)
不明	2	
合計	366	

# アンケート集計結果報告

## 1. 公開講演会は何でお知りになりましたか(複数回答あり)。

	(名)
日本経済新聞	26
月刊みんなく9月号挟み込みチラシ	8
月刊みんなく10月号	4
みんなくカレンダー(冊子)	0
ポスター・チラシ※1	71
ホームページ※2	19
メーリングリスト	6
案内状をもらって	82
友人や知人から聞いて	31
その他※3	7
無回答	8
計	262



※1 ポスター・チラシを見た場所

みんなく	2
大学	12
公共図書館	22
役所、公立施設	2
文化センター・生涯学習施設	4
博物館・美術館	6
日経ホール	2
六車さんの講演	2
勤務先	2
病院	1
無回答	16
計	71

※2 ホームページ、Facebook

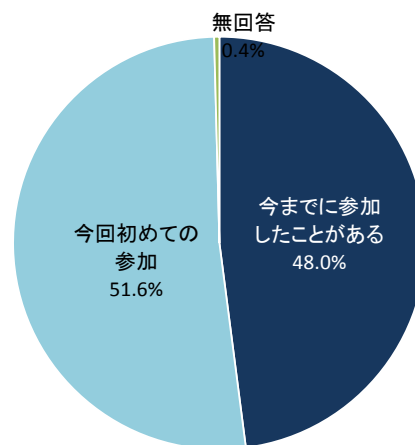
国立民族学博物館	3
六車さん	2
無記入	14
計	19

※3 その他

読売新聞	1
Web検索で	1
日経BPのイベントリスト	1
日本ダウン症協会のJDSニュース	1
無記入	3
計	7

## 2. 公開講演会の参加について

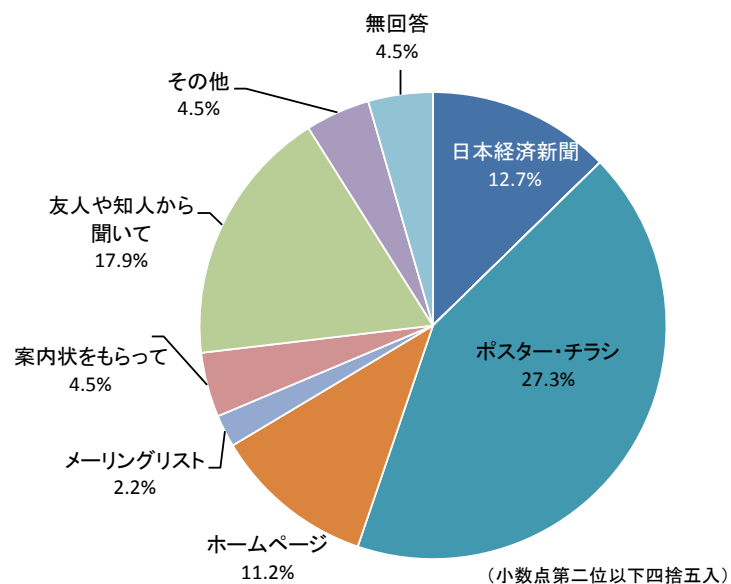
	(名)
今までに参加したことがある	117
今回初めての参加	126
無回答	1
計	244



(小数点第二位以下四捨)

### 【参考】初参加者が講演会を何で知ったか(複数回答あり)

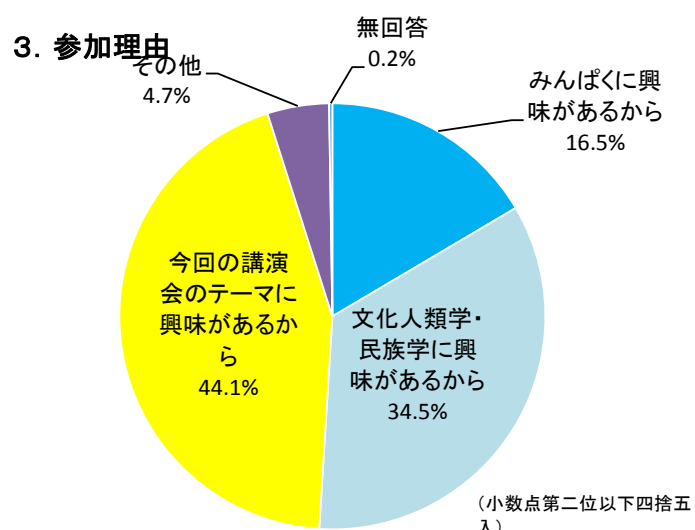
	(名)
日本経済新聞	17
月刊みんぱく9月号挟み込みチラシ	0
月刊みんぱく10月号	0
みんぱくカレンダー(冊子)	0
ポスター・チラシ	57
ホームページ	15
メーリングリスト	3
案内状をもらって	6
友人や知人から聞いて	24
その他	6
無回答	6
計	134



(小数点第二位以下四捨五入)

## 3. 今回参加された理由は(複数回答あり)

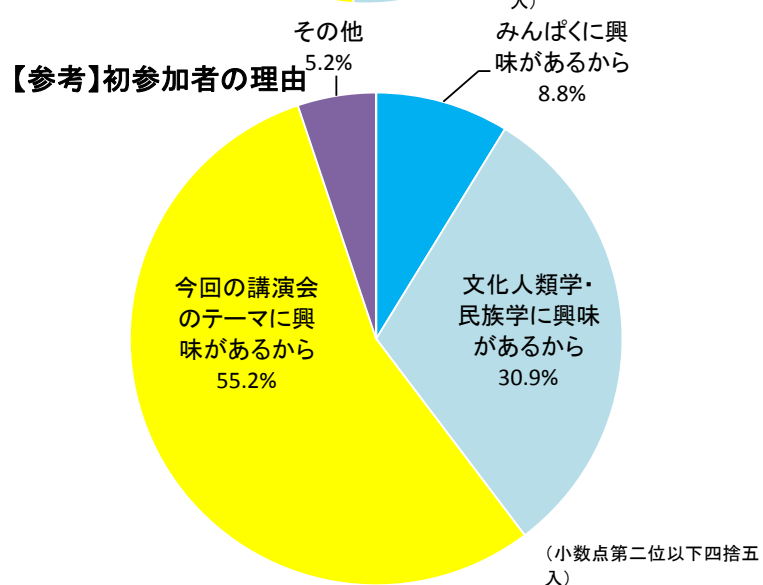
	(名)
みんぱくに興味があるから	67
文化人類学・民族学に興味があるから	140
今回の講演会のテーマに興味があるから	179
その他	19
無回答	1
計	406



(小数点第二位以下四捨五入)

### 【参考】初参加者が参加した理由は(複数回答あり)

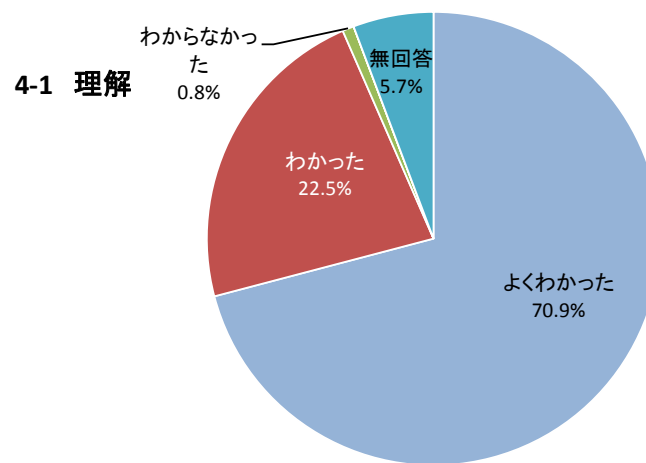
	(名)
みんぱくに興味があるから	17
文化人類学・民族学に興味があるから	60
今回の講演会のテーマに興味があるから	107
その他	10
無回答	0
計	194



(小数点第二位以下四捨五入)

4. 今回の公開講演会の内容はどうでしたか。

		(名)
①理解	よくわかった	173
	わかった	55
	わからなかった	2
	よくわからなかった	0
	無回答	14
計		244



(小数点第二位以下四捨五入)

①の理由(一部抜粋。重複意見は省略)

※感想のみの記載は質問9に移動

よくわかった、わかった理由

- 魅力的なスライドやビデオがあり わかりやすかった。
- 分かりやすい言葉 具体的な事例で大変わかりやすい内容でした。
- 興味のあるテーマだったので 一つ一つ理解が深まった。
- テーマが「深く」「濃すぎて」時間が足りなかったと思います。せめて3時間は欲しかったです。鈴木氏の発表(スライド)もしっかり聞きたかったです。
- パンフレットで大体の内容がつかめた。写真や映像で、実際のところがわかった。笑える話も合って楽しく聞けた。
- 具体的な話があり、理解しやすかった。
- 大変に感情移入しながら聞くことができた。それだけにこれから考えていくべき大きなテーマとして心に残った。
- 絵や写真を使って丁寧に説明されていたから。
- 各話師の努力の結果だと思う。
- 内容が具体的であり説得力があった。内容に深いものがあった。
- 単なるフィールドワークではない実体験・実生活を通じての報告だったので 熱も感じられ感動し、考えさせられた。
- コメンテーターの方のお話が駆け足で分かりにくかったです。もう少しゆっくりお話していただく時間があつたら良かったと思いました。3本立ての講演にするか、本当に2つの講演に対するコメントにしたら良いと思います。討論にならないのであれば、会場の質疑応答にしたらよいのではないのでしょうか。
- 難しい言葉を使わず 丁寧な講演だった。
- 専門用語を使わない上、身近な事案で想像しやすかった。
- 講師の方々の講演の内容、力量による。
- 日常的に身近なテーマで自分のことのように感じた。
- 体験に基づく具体的であった。
- 具体的にどのように接し、どのように展開していったのか、お話や写真やビデオetcによりより深く理解できた。
- 映像も多くお話もわかりやすかった。
- レジュメ、スライドショー わかりやすく見やすかったです。
- 対象が「研究対象」よりも身近なところであったため。
- 映像(動画)もあり、判りやすかった。
- 開演前に介護民俗学を買って 1/3ほど読んだがとても面白かった。興味深い本だった。講演はやはり本よりもわかりやすい。
- 具体的で映像もあり退屈しなかった。抽象的な話ではなかった。
- 本を読んで予習してきた。
- 映像と説明がマッチしていた。
- 画像、VTRによる説明が具体的な状況をよくわからせてくれる(とくに六車氏)。
- 自分のフィールド(仕事)の話であったから。
- スクリーンの文や句が分かりやすい表現だった。
- 発表者の気持ちがこもった中味にホロリとされ、ビデオが理解を深めてくれた。
- 動画 ビデオレター? など理解しやすい方法で説明してもらえた。
- プレゼンがわかりやすく、実践者ゆえのリアリティが伝わってきて人類の未来に何か繋がるヒントがあるように思う。
- 体験に基づくお話ばかりだったので言葉に気持ちがこもっていて温度が伝わった。
- 専門的な言葉をできるだけ使わずに優しく語ってくれたから。
- 具体的な生活の場を出発点としており 良く理解できました。
- 事例が身近だった。
- 普段の研究やそこから得られた知見について わかりやすく映像で紹介していただいたから。
- パワーポイントが簡潔であった。
- 共にご自身の体験から動画その他も使用してのわかりやすい話であり、未来に向かってのあり得るべき姿を示してくれたと思う。どちらの話も感動しました。
- 体験に基づいたとてもリアリティのあるお話で非常に腑に落ちた。ビデオも面白かった。
- 聞きたかった講演だったので 内容もよかった。
- 発表者の内容が整理されていて解かり易かった。
- 経験に基づく話であったから。
- コメントでお話したことが 若干わかりませんでした。

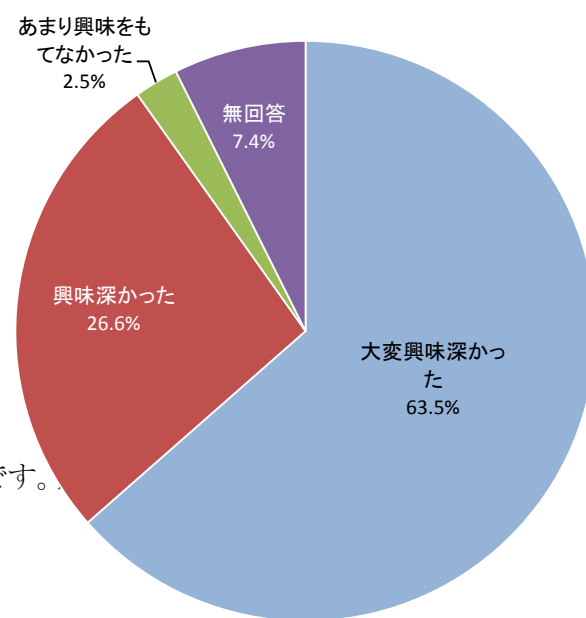
わからなかった理由

- 失礼ながら民族学の講演ではないと思う。子育ての苦労は分かるが個人としての発表。民族学博物館としての発表を願う。



②興味	大変興味深かった	155
	興味深かった	65
	あまり興味をもてなかった	6
	無回答	18
計		244

#### 4-2 興味



(小数点第二位以下四捨五入)

#### ②の理由(一部抜粋。重複意見は省略)

※感想のみの記載は質問9に移動

##### 大変興味深かった、興味深かった理由

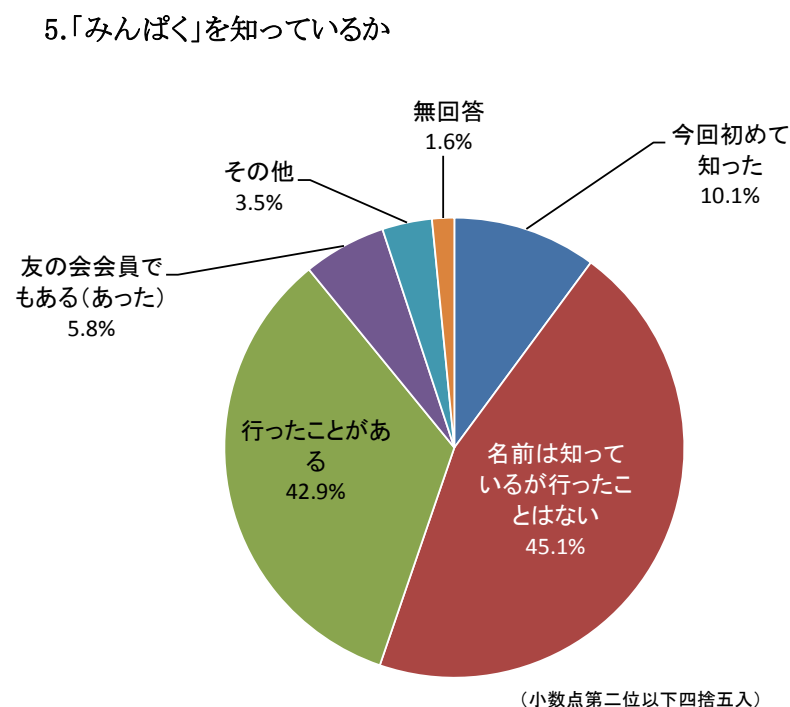
- ・かつて行政で 小児・高齢者の両者に係わったことがあったから。
- ・私自身の問題でもあるので。(孫二人の面倒を見ている75歳の「後期高齢者」です。)
- ・育児・介護は いずれ自分自身とも深く関連したテーマなので。
- ・聞き書きの実際がビデオで判ったことも良かった。
- ・育児や介護に対する新しい視点を提供してもらった。
- ・新しい試みでよかった。
- ・映像が生き生きとしていてわかりやすかった。
- ・民族学と文化人類、二人の先生方の生き方に引き込まれた。
- ・新視点を感じる。
- ・育児と介護は 今後 解決すべき課題となるので。
- ・自分のフィールド(仕事)の話であったから
- ・障害児の育児 介護と重くなりがちのテーマですが、文化人類学、民俗学に絡めた他では聞けないお話ではないかと思いました。
- ・六車さんの本を読んでいたのでそれを確認しつつリアルに知ったので。
- ・デンマークの話。
- ・老いていく父親との接し方のヒントがたくさんあった。
- ・聞き書きが開かれた場所で行われ、同時に担われている利用者本人、聞き手、周りも聞き手になるということが興味深かった。
- ・著作で「聞き書き」のメソッドに興味をもったのでお話を聞いて良かったです。
- ・もっと実態を知りたいと思った。
- ・人間にとって当たり前経験する(していた)こと事 育児・介護を取りあげ テーマ自体がとりつきやすかった。
- ・専門が 専門の中で専門を語るのではなく、現代的課題に新しい切り口や価値、見方を与えるのは刺激的でした。
- ・これからの日本社会のあり方を考える上で大変興味深かったです。
- ・日々の仕事、私生活に直接関係のある事柄であったため。
- ・普段の研究やそこから得られた知見について わかりやすく映像で紹介していただいたから。
- ・具体例は解かりやすいが人類学、民俗学という学問にまで内容が進んでいないと感じた。この先がどうなっていくのかが見えなかった。
- ・民族学を入口にして人間の生き方を学ぶ深い内容でした。
- ・タイトルに興味をわいた ⇒ きいたことがなかったから。
- ・発表者二人ともスゴロクという共通点があった。
- ・聞き書きの実際をビデオでみることができ非常に興味深い。
- ・誰もが無関係ではない話であり、興味深く感じると共に先生方が元々専門とは違う分野で道を切り開いている姿に感動したため。
- ・手を理解し自分が変わる事、してあげる関係から 相互にしろ、してあげる関係に人と人との関係性の問題が興味深かったです。

##### あまり興味が持てなかった理由

- ・驚きはなかった。

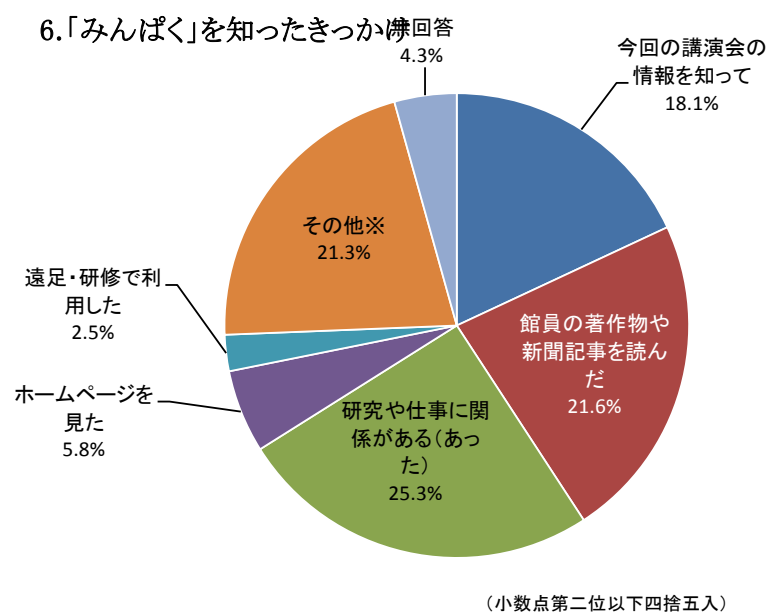
5. 国立民族学博物館(みんぱく)はご存知ですか(複数回答あり)。

	(名)
今回初めて知った	26
名前は知っているが行ったことはない	116
行ったことがある	87
友の会会員でもある(あった)	15
その他	9
無回答	4
計	257



6. みんぱくを知ったきっかけは何ですか。(複数回答あり)

	(名)
今回の講演会の情報を知って	50
館員の著作物や新聞記事を読んだ	63
研究や仕事に関係がある(あった)	70
ホームページを見た	16
遠足・研修で利用した	7
その他※	59
無回答	12
計	277



※ その他

以前の講演会・シンポジウム等に参加して	5
友人・知人からの紹介	12
梅棹忠夫	2
訪問による	6
新国立新美術館の展示会で	2
新聞	1
ちらし	1
その他	13
無記入	17
計	59

## 7. 今後とりあげるテーマにご希望があればお聞かせ下さい。

### 【世界の国々について】

- ・宗教と民族の対立、和解について (IS等)
- ・各国の変化は何をきっかけに変わるのか
- ・イスラムを信仰する人々、在日朝鮮人、北朝鮮人、砂漠や土に生活する人々の子育て(教育)
- ・イスラームと女性について
- ・中国の少数民族の問題
- ・グローバル化の流れのなかで 文化の多様性を守る仕組みについての構築

### 【世界の人々の生活】

- ・世界の人々の死のあり方について
- ・世界の葬儀の移り変わり 現況をしりたい。
- ・中国 朝鮮半島と九州との交流の新旧対比、特に風俗、習慣について
- ・他国の教育制度 「笑い」について
- ・世界の育児、介護について
- ・世界各国の民話にみる文化人類学
- ・「もの」と私たちの暮らしとの関係(かかわり) 人間の記憶 自然環境、アニミズムなどとの関連の文脈で
- ・カーストと人々の生活
- ・民族音楽関係
- ・言語の起源と展開

### 【日本について】

- ・現代日本語の漢字、表記法、流行語のみだれ、会話のパターン、本来の日本語と近代的表現等の比較論
- ・全国のこどばの人類学
- ・日本の島の民俗学 普段かかわりのない先生同士の対談など
- ・古代の日本人類の移動
- ・日本の高齢者、老人の生き方を歴史的、風土の中での研究
- ・日本の農業について民族学の視点から
- ・アイヌ民族について(伝承、儀礼など)、沖縄、日本は南北に長い国、民族的、文化的に多くの違いがある。 地方文化を知ら無すぎる。
- ・新憲法の下での権利と義務について。世代間の理解度に差があるために生じる問題点を解決するための民族学的考察を聞きたい。
- ・雅楽

### 【その他】

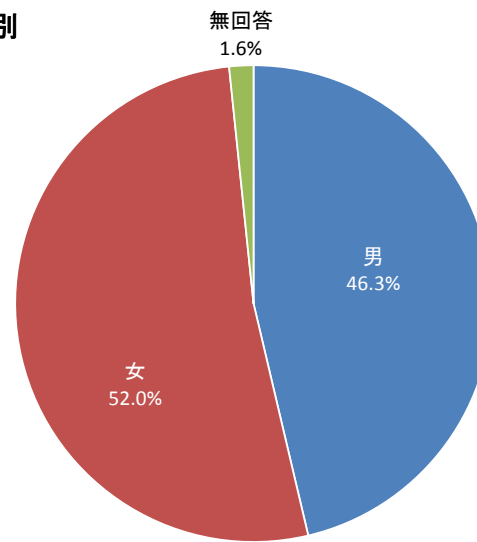
- ・機織り 編み物 衣服の作られ方 染色
- ・食物、離乳食、味、エッセンス(出汁)、料理一般など
- ・日常 朝食には何をどう食べているのかについて
- ・廣瀬浩二郎さんの研究のような『障害者』を文化人類学的な切り口で
- ・病気の人、高齢者などの弱者について
- ・育児 介護「ケア」の課題をもっと聞かせてほしい。
- ・知的障害者の性(恋愛と結婚) 性教育 性風俗やポルノについて 高齢者の性、ケガレの概念
- ・障害者・児をどう受け入れているのかについて
- ・発達障害について
- ・家族問題、父と子、母と子のあり方
- ・健康、病気のとらえ方
- ・子育て 障がい よりよく生きる よりよい社会について
- ・貧困問題について
- ・梅棹先生のテーマ
- ・誕生、妊娠～出産にまつわる「みんなく」ならでの視点で
- ・保育に関わるテーマ 結婚に関わるテーマ
- ・医療における民族学、エイジング民俗
- ・公衆衛生学について
- ・感染症(国境なき医師団とのコラボ)
- ・認知症の多様性や その心に寄り添う方法など
- ・コミュニケーション、SNS、児童心理、集団心理など
- ・情報共有のあり方(とくにコミュニティ内について)
- ・手話言語学
- ・政治と人類学
- ・「先史時代の食文化」について
- ・東田直樹さんの話(自閉症)が聞きたい。
- ・上原菜穂子さんのコラボ
- ・人身売買
- ・日本に於ける外国人の生活実態、特に 中国人、さらに性的マイノリティ問題
- ・エンドオブライフ
- ・音階(調べ)と風土
- ・裸の理解(かくしの進化と退化)
- ・人類学や人類学者がどのように社会貢献できるか。
- ・怪談 恐怖
- ・今回のように民俗学と人類学 相互にまたがるようなテーマ
- ・社会的な視点のテーマ
- ・道具、水田 畑など生活基盤 悟り
- ・皮革と人とのかかわりについて
- ・まつり(都市祭礼)
- ・社会的マイノリティと多様性を認められる社会の形成
- ・ゴミについて

8. よろしければお答え願います。

**8-1 性別** (名)

①性別	男	113
	女	127
	無回答	4
計		244

8-1 性別

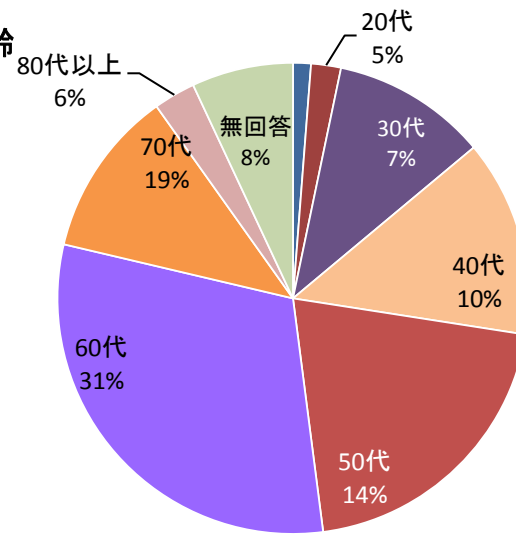


(小数点第二位以下四捨五入)

**8-2 年齢** (名)

②年齢	10代	3	3	1%
	20代前半	2	5	2%
	20代後半	3		
	30代前半	14	26	11%
	30代後半	12		
	40代前半	14	33	14%
	40代後半	19		
	50代前半	29	50	20%
	50代後半	21		
	60代前半	37	75	31%
	60代後半	38		
	70代前半	19	28	11%
	70代後半	9		
	80代以上	7	7	3%
	無回答	17	17	7%
計		244		

8-2 年齢

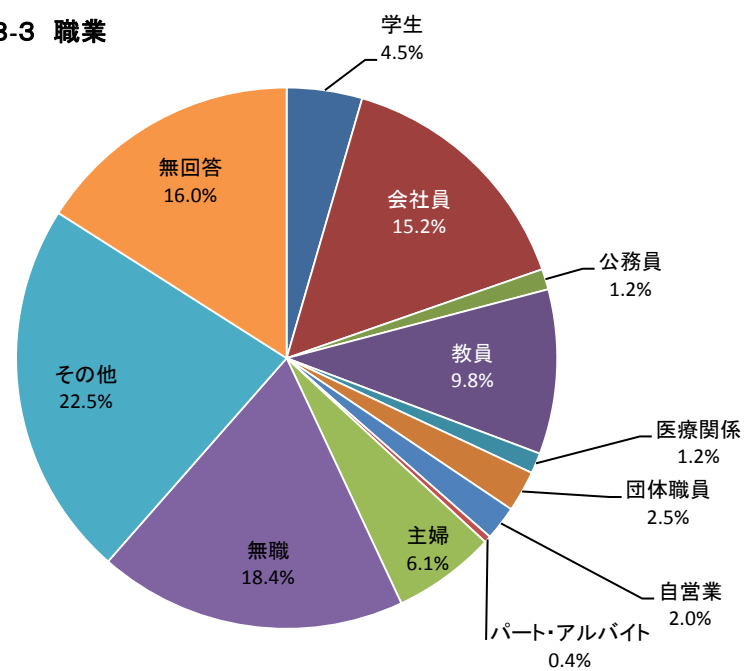


(小数点第二位以下四捨五入)

**8-3 職業** (名)

③職業	学生	11	
	会社員	37	
	公務員	3	
	教員	24	
	医療関係	3	
	団体職員	6	
	自営業	5	
	パート・アルバイト	1	
	主婦	15	
	無職	45	
	その他	55	
	無回答	39	
	計		244

8-3 職業



(小数点第二位以下四捨五入)

## 9. その他ご感想、ご意見、ご希望をお書き願います。【一部抜粋】

### 【感想】

- 一つ一つのお話が自分の中で考えていることと少しずつ繋がり、新しい視点を得られ とてもよい時間を過ごすことが出来ました。
- 素晴らしいお話でした。参考にしていきたいと思えます。
- 赤子連れでご迷惑をお掛け致しました。とても親切なご対応ありがとうございました。「包摂」という意識を強く感じました。(車いす、手話対応など完璧です。)
- 関西にすんでいれば たくさんのイベントに参加できるのに残念。東京での講演など増やしてほしい。
- 例年と違って身近なテーマであり考えさせられた。
- この夏の介護研修を受け、実習で現場の何とも言えない「貧しさ」にショックを受けました。今回の講演であの正体とは、どうすればいいのかのヒントが得られました。一緒に研修を受けた人たちを今回誘わなかったことが悔やまれます。
- 鈴木さんの話もっと詳しく聞きたかったです。
- 六車さんの本を読み、介護と民俗学の関係に大変興味をもっていました。大変有意義な講演会でした。
- 人間としての尊厳を保ちながら、行政、教育のなかみをかえることができるのか 疑問に思った。
- 共感や理解 成功体験の積み重ねが大切だと思います。自走できる人間に育てなければ、今度どうなるのか。新しい考えや研究について、事業所や上司が知らなかったり、理解を示さなかったり。もっと世の中に発信をしてほしいと思えます。
- 開演前の案内をみて 是非 訪れたいと思いました。展示方法など解かって良かったです。ありがとうございました。
- 新鮮な見方を提示していただきました。5年位前に医学や法学の方を招いたとき以来の面白さでした。もう少し異なる学問分野とクロスしても良かったかなと思います。
- 最後のスライドショー 涙なしで見られませんでした。やられた！って感じ。ズルいですよ。完全にノックダウンされました。(笑)
- みんなはもっともっと東京へ。遅れてくる方があまりにも多いですね。19時開会の方がよかったですのでは？
- 資料などを入れてあった袋がすごくかわいかったです！！ 信田氏の話はすこしきれいごと感で止まっていたような気がします。本日は素晴らしい講演ありがとうございました。
- 開演前にスクリーンで流されていた映像が面白すぎて持参した本を読めませんでした。
- 「心は決して遅れない」いい言葉で感動しました。「聞き書き」なるほど解かった！
- 有意義なお話を聞かせていただきました。心に寄り添う身近な人々との関わり方をもう一度振り返ります。
- 育児にも介護にもバラエティとフレキシビリティが必要だと。本日のご準備運営などありがとうございました。
- 鈴木さんのデンマークの話は興味深かったです。
- 誰もが人生を終えるまで 輝き続ける存在であるべき。どのように・もきっかけになりました。
- この様な機会を与えていただき、ありがとうございます。もっとたくさんの人に聞いて参加してもらいたい講演会でした。
- 討論は時間不足でしたね。
- おでんにもいろいろあるのだなとおもいました。これぞ民俗学ですね。
- 無形文化財(「まつり」だけでなく育児 障害者のある方も当然、老病の介護も含むと思っています)をもっとポピュラーに魅力的に共有したいと思っています。職業人としてのあり方は 個々様々ですが、<現に生きている-being>ことに謙虚に接し専門性のフィールドから一般社会の中に言論を広げていく可能性を見せていただきました。
- 医療に携わるものとして反省することも多かった。目からうろこでした。
- 現代の中心的課題を二つ同時に提示されたので興味深かった。
- 会場の空調がききすぎて寒かった。
- 毎年楽しみにさせていただいております。
- 討論会が少し短い気がしました。
- 日経ホールのホームページに3階には「軽食を採れるコーナーがある」と明記されているのに 入り口の係の方は「ホール内は全て飲食禁止」の対応のみ。何人もの方が食事を断られていた。夕食時に開催するのだから、軽食がとれて当たり前。お役所仕事と感じた。
- ハートネット展に行ったとき静香さんの「ふくろう」の絵がかわいいとおもっていてテレビで特集をしたときにみて心を育てる教育をしているなと思いました。介護現場で聞き書きをして一人の人間として向き合っていければよいのですが、なかなか今日の日本では、ゆとりのないシビアな部分があると思います。
- せっかくのいいイベントなのに、高齢者が多く、若者が少ないのでは。土日の午後などにはできないのでしょうか(みんなの広報であれば若手/学生の参加も多い方がいいのでは。) Q&Aの時間が欲しかったです。
- 用意してくださった資料も見やすくデザインもよく気に入りました。ありがとうございました。
- 来年も楽しみにしています。六車さんの本を読み、楽しく成りました。本当に感謝しています。信田さんの本も読みます。
- 「みんなく」「れきはく」の違いもよく判らない音痴でした。効率、利敵追求を第一とする現在の社会に風穴を開けてください。
- とても面白く希望をいだかせたものでしたが 足を引っ張る行政に頭が痛いです。
- 成長と共に！と双方向のリレーションの大切さは貴重なお話をお聞かせくださり心から感謝したい。人生を協働関係性で構築できる参考ポイントをたくさんいただいた。貴重な場の提供をありがとうございました。継続した学びの場に感謝いたします。
- 時間が短かったです。特に討論をもっと拝聴したかった。とても充実していました。
- 聞き書きをしたものかどういものなのか。読んでみたい。閉鎖的な世界から広がる世界を実感する。
- 静香さんの絵が素晴らしかったです。チューリップ、ヒヤシンス、パンジー 花も葉も生命力にあふれていますね。
- 障害 介護と民俗(民族)学との観点からみることで 表面がみえて希望が持てた。
- 心に沿っていくことが全ての基礎になっていること、それを具体的にどう実践してきたかが分かった。作品が入っていたので 感受性が豊かなこともよく判った。
- 都立小児病院でピアサポートをしています。ダウン症はもちろん、様々な病気や障がいをもつ家族と話をすることで、聞かせていただく話と重なりました。
- 障害児教育や介護実践としては 興味深いが「人類学」「民俗学」と学問を名乗ることは苦しいと思う。時間オーバーしてまで長々とビデオを見せるのはいかなものか。介護の問題についての講演ではないはずだ。

- たまたまですが 自分はすごろくをテーマにものを書いている最中でした。よりヒントになりました。ありがとうございます。すごろくって現代はすたれ気味かと心配していましたが充分現役なのですね。
- 聴覚障害の子どもがいるのだが、その子の個性に寄り添うのは同じだと思った。
- 人類学者が社会にどのように貢献できるかのヒントがあった。
- 身近な問題からの視点が面白かった。
- 興味もてたのがよかった。わがことにつながった。
- 母の介護が終り 介護職についた私にとってとても有難い講演会でした。ありがとうございました。
- 良い点とケアがよくわからなかった。良いところという押しつけはないのか？
- 障害の種類・程度はどうであれ「完璧なる」人間などいないのだ・・・と思わされた。
- 経験に基づく新しい視点からのアプローチが新鮮だった。
- 自然との共生はよく言われ理解していたが、人間の弱者との共生する社会については 理解が足りなかったと感じた。
- 六車さんのはなしがとても参考になった。親の介護の際 是非活用したい。
- お二人の立場や現場の違い、CARE/CURE⇒WE WORKには共感できた。
- 全体に駆け足に感じました。
- 子育てひろばで働いています。こども 親(利用者)についてもあてはまることのできるため 大変勉強になりました。
- 民族学との関係についてもっと学びたいと思いました。
- 人との寄り添い方(具体的実践)の個別事案を知ることができた。特に、国内研究をする上で、たくさんのサジェスチョンを頂きました。
- 現場の映像で”聞き書き”を私たちも共有させてもらえ楽しかった。
- とてもやさしい表現で 現実性を感じる親しみやすい内容でありました。
- 時間が短く感じた。もっと深く伺いたかった。
- 障がい者も介護される人の いずれも「負」ではなく人類の多様性に他ならない事を深く深く心に刻むことが出来ました。
- 日頃 小さな子供たちと接する事が多く、子供たちの様子から親の子どもへの接し方に疑問をもつ事があり、あるいはやがて行く自分の姿を見る思いでした。学ぶことがたくさんありました。ありがとうございました。
- 徐々に「民俗学」の世界に戻りたくなりました。
- 自分の直面する問題や 身近な話題なので 関心が持てました。各々 発表者の他の研究も気になりました。
- 難病患者です。発病して20年になります。いまとなつては病気が不幸とは思っていません。
- 民族学だから外国の介護かと期待。残念。
- かつて 母の介護をしましたが 施設にはあまり笑顔やつながりは なかったように思います。利用者側と介護側の両者にプラスになると思います。
- 今までの講演会の(ありきたりの)切り口とはらせん構造の異なる挑戦に感銘した。
- 育児・介護を通じて現在の社会で問題となっている根本が明らかになった。
- 育児や介護のエピソードを通して、制度や現況への評価が客観的に行えることが新鮮だった。
- 仕事柄 育児の方ばかり目に行きがちですが、介護とともにご講演いただいととても興味深く拝聴させて頂きました。
- 民俗学と介護 一見むすびつかないのではと思われたが 今回の話でとても結びついていると感じた。
- お話の内容が一般的なことに役立つような気持ちになり役立てたいと思った。
- 友の会 会員になりたいと思います。(千里文化財団に連絡済)

#### 【その他要望】

- レジューにも講演者のプロフィール、過去のテーマ一覧があるとうれしいです。
- 今回の講演が書籍(人類学には興味のない介護の現場の人たちがアクセスしやすい形で)まとめられたらよいかと。
- ごあいさつする人が多すぎる。代表者一人にして、その分を講演の方に時間を取ってほしい。
- おかいものスゴロク 世界の遺産すごろく 市販してください。
- みんなくへは数回行ったことがあります。大変広く面白いです。ただ情報量がはんばなく多いため ○○コース とか 旅行日程表(1時間コースとか 服を見るコースとか)のパンレットがあるといいと思います。楽しい分 結構疲れるのと最後の方が早送りになるんです。残念。
- 平日の夜ではなく 昼間にやってほしい。最後まで聞いていると家に帰れなくなってしまう。
- 講演時間をもう少し早くできませんか？
- 日本は単一民族ではない。そこから発する展示方法もあると思う。もっと日本を知りたい。
- 東京でも開催してください。みんなくグッズ(ポスター、チラシ、バック、クリアファイル)のデザイン性の高さに感動しています。このレベルと保ち続けることに強く期待します。
- もっと多くの人に聞いてもらえるようアピール 呼びかけの方法を土曜日の1時ごろからとか時間設定を工夫を！(時間が遅すぎる)
- 講演会の内容が今後公開されるとうれしく思います。
- 今日のスライドで公開可能な部分をサイトで公開していただきたい。
- もう少し時間を長めにしてもらえたら。一人1時間くらい。
- 鈴木さんのスライドが速すぎてついていけませんでした。資料化してほしいです。

2016年3月25日(金)  
18:30~20:45(開場17:30)

オーバルホール 大阪市北区梅田3-4-5  
毎日新聞社ビルB1

定員：480名 手話通訳あり  
参加費：無料(要事前申込/「参加証」が必要です)

講演1 佐々木 史郎(国立民族学博物館 教授)  
アイヌの衣服の素材と文様

講演2 川瀬 慈(国立民族学博物館 助教)  
職能者からアーティストへ  
—世界に羽ばたくエチオピアの楽師たち

アーティストの  
最前線

—アイヌの文様と  
エチオピアの響き



### 講演1

佐々木 史郎 国立民族学博物館 教授

## アイヌの衣服の素材と文様

### 要旨

最近の研究では、北海道に暮らすアイヌの人々の間でも江戸時代初期から絹や木綿の衣服と布地が流入して、晴着やその文様にふんだんに使われていたことがわかってきた。しかも、時代を遡るほどよい素材が使われる傾向にある。この講演では、北海道とロシアの博物館に収蔵されているアイヌの古い衣服から、その素材と文様の歴史を追う。

### 講師紹介

東京大学大学院社会学研究科博士課程中退。学術博士。国立民族学博物館助手、大阪大学助教授、国立民族学博物館助教授を経て、2003年同教授。ロシアのシベリアや極東地方の先住民族のトナカイ飼育と狩猟活動、そして同地域の近世史と近代史の研究に従事する。



### 講演2

川瀬 慈 国立民族学博物館 助教

## 職能者からアーティストへ —世界に羽ばたくエチオピアの楽師たち

### 要旨

古よりエチオピア北部の社会において音楽を担ってきた楽師アズマリは、近年ポピュラーミュージックの世界やエチオピア国外の音楽シーンにおいても活躍するようになった。地域社会の職能者から“表現者／アーティスト”まで姿を変えつつ、グローバルに活動する彼らを紹介したい。

### 講師紹介

アフリカ、主にエチオピアの音楽を対象にした人類学研究、及び映像作品の制作を行う。共編著に『アフリカン・ポップス！—文化人類学からみる魅惑の音楽世界』（明石書店、2015年）『フィールド映像術』（古今書院、2015年）等。フィルムグラフィ www.itsushikawase.com



### コメンテーター

上羽 陽子 国立民族学博物館 准教授

### 【コメンテーター紹介】

専門は民族芸術学、染織研究。インドを中心に南アジアで刺繍、染め、織りなどの手工芸調査に従事。著書に『インド、ラバーリー社会の染織と儀礼—ラクダとともに生きる人びと』（昭和堂、2006年）、『インド染織の現場—つくり手たちに学ぶ』（臨川書店、2015年）などがある。

申込方法：「3月25日講演会参加希望」と明記の上、次の①～⑤を記載し、ハガキ、FAX、又はメールにてお申し込みください。

①郵便番号、②住所、③氏名、④連絡先電話番号、⑤今後の講演会などのご案内送付希望の有無（次のア～ウのうち希望する記号をア、講演会を含む国立民族学博物館主催の研究会・催物等の案内を希望する／イ、講演会のみのご案内を希望する／ウ、いずれの案内も希望しない）

2月下旬より順次参加証を発送する予定です。

- \*1：応募者多数の場合は、ご参加いただけない場合もございます。
- \*2：2名様以上でお申し込みの場合は、それぞれの方について①～⑤をご記載ください。
- \*3：手話通訳をご希望される方、車椅子をご利用の方は、お席をご用意いたしますので、お申し込みの際に必ずご記載ください。
- \*4：参加申込をいただいた方の個人情報、参加証の発送、次回以降の講演会などのご案内以外には使用いたしません。

宛先：〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

●FAX 06-6878-8479 ●メールアドレス koenkai@idc.minpaku.ac.jp

問合せ先：国立民族学博物館 研究協力課研究協力係

●TEL 06-6878-8209

注意事項：・会場には必ず参加証をご持参ください。

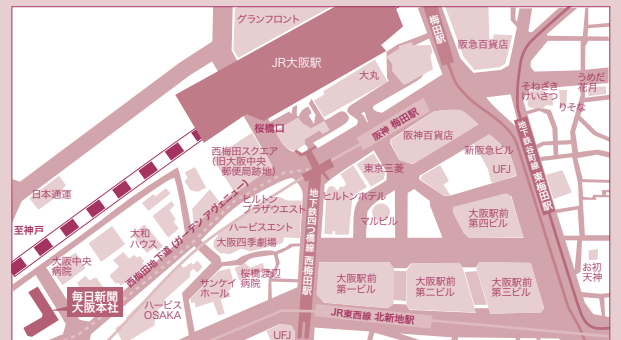
参加証はお一人様一枚必要です。

・参加証をお持ちでない方は会場に入れないことがありますのでご注意ください。

## プログラム

- 17:30-18:30 受付
- 18:30-18:35 開会 小菅 洋人(毎日新聞大阪本社 編集局長)
- 18:35-18:40 挨拶 須藤 健一(国立民族学博物館 館長)
- 18:40-19:15 **講演1** 佐々木 史郎  
アイヌの衣服の素材と文様
- 19:15-19:50 **講演2** 川瀬 慈  
職能者からアーティストへ  
—世界に羽ばたくエチオピアの楽師たち
- 19:50-20:10 休憩
- 20:10-20:45 パネル・ディスカッション  
上羽 陽子 × 佐々木 史郎 × 川瀬 慈  
進行 丹羽 典生(国立民族学博物館 准教授)  
総合司会 南 真真人(国立民族学博物館 准教授)

## 会場



- ・JR大阪駅(桜橋口)から地下道にて徒歩約8分
- ・阪神梅田駅・地下鉄西梅田駅から徒歩約8分 ※車での会場はご遠慮ください



**国立民族学博物館公開講演会**  
**ワールドアートの最前線—アイヌの文様とエチオピアの響き**  
**参加内訳状況及び、アンケート集計結果報告**

日時:平成28年3月25日(金)18:30～20:45(開場17:30)

場所:オーバルホール(大阪市北区梅田3-4-5 毎日新聞社ビル内)

天候:晴れ

	平成27年度	平成26年度	平成25年度	平成24年度
開催日程	平成28年3月25日	平成27年3月20日(金)	平成26年3月20日(木)	平成25年3月22日(金)
開催場所	オーバルホール	オーバルホール	オーバルホール	オーバルホール
募集定員 A	480 名	480 名	480 名	480 名
参加申込総数 B	363 名	423 名	395 名	430 名
申込者出席数 C	258 名	298 名	279 名	303 名
当日参加者数 D	13 名	14 名	24 名	12 名
参加者総数 E=C+D	271 名	312 名	303 名	315 名
申込者出席率※ C/B	71.1%	70.4%	70.6%	70.5%
アンケート回答者数 F	174 名	182 名	199 名	227 名
アンケート回答率※ F/E	64.2%	58.3%	65.7%	72.1%

過去の公開講演会テーマ

平成26年度 公開講演会「いやし旅のウラ?表?-現代アジアツーリズム考」

平成25年度 公開講演会「働き者と、ナマケモノ!?-『はたらきかた』文化論」

平成24年度 公開講演会「なんだ日本の文化って?-芸能からMANGAまで」

(注)アンケート集計内の%は、すべて小数点第二以下を四捨五入した数値である。

## 平成27年度 大阪公開講演会参加状況内訳

### 参加者方法別参加状況

#### ワールドアートの最前線—アイヌの文様とエチオピアの響き

	申込者数(a)	(a)／申込者数合計※	参加者数(b)	(b)／参加者数合計※	出席率(b/a)※
ハガキ	83	22.9%	50	18.5%	60%
FAX	68	18.7%	39	14.4%	57%
メール	202	55.6%	159	58.7%	79%
招待者	4	1.1%	4	1.5%	100%
来館・電話受付	6	1.7%	6	2.2%	100%
当日参加		0.0%	13	4.8%	—
合計	363	100%	271	100%	* 72.8%

※:小数点第二位以下四捨五入

### 都道府県別参加者状況

(名)

都道府県等	参加者数	備 考
大阪府(大阪市内)	96	
その他	101	
計	197	
兵庫県(神戸市)	10	
その他	29	(西宮市、川西市、芦屋市、宝塚市、伊丹市、尼崎市、他)
計	39	
京都府(京都市)	5	(左京区、右京区、西京区)
その他	0	
計	5	
奈良県	14	
滋賀県	1	
広島県	1	
沖縄県	1	
合計	258	
住所不明	13	
総合計	271	

# アンケート集計結果報告

## 1. 公開講演会は何でお知りになりましたか(複数回答あり)。

	(名)
毎日新聞	47
月刊みんぱく2月号挟み込みチラシ	9
月刊みんぱく3月号	3
ポスター・チラシ※1	35
みんぱくカレンダー	2
ホームページ・Facebook ※2	22
メールリスト	1
案内状をもらって	63
友人や知人から聞いて	8
その他	6
無回答	0
計	196

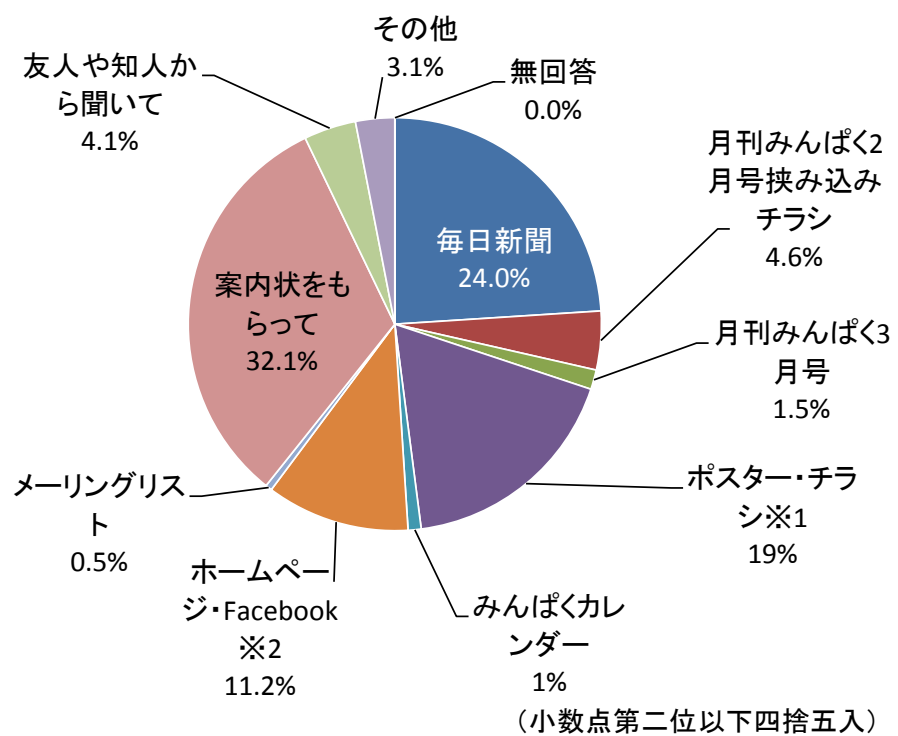
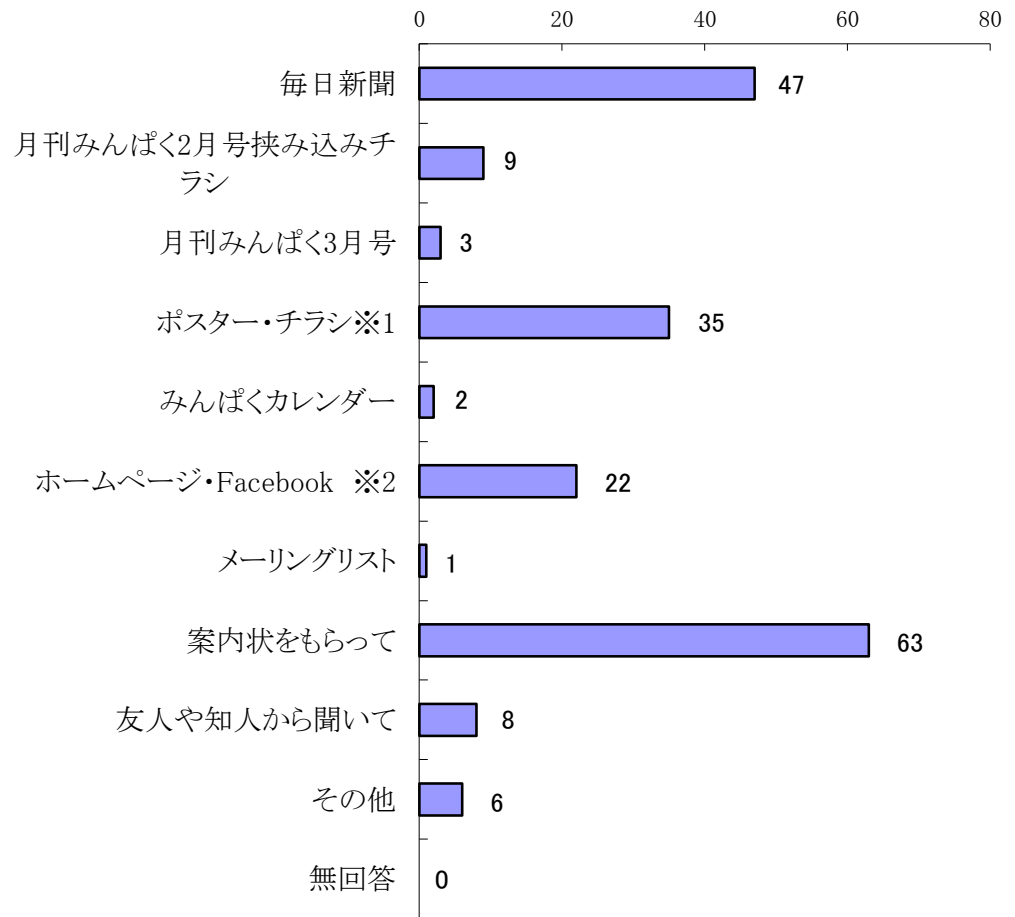
### ※1 ポスター・チラシを見た場所

みんぱく	6
大学	3
公共図書館	5
役所、公立施設	2
文化センター・生涯学習施設	4
その他	2
無記入	13
計	35

### ※2 ホームページ・Facebook

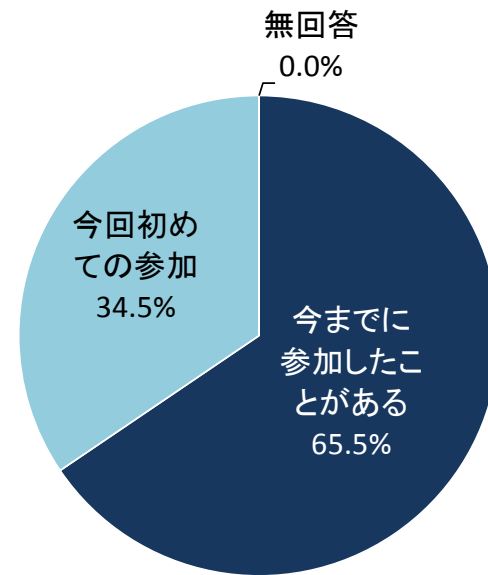
みんぱく	7
facebook	0
無記入	15
計	22

1.講演会を何で知ったか



## 2. 公開講演会の参加について

	(名)
今までに参加したことがある	114
今回初めての参加	60
無回答	0
計	174

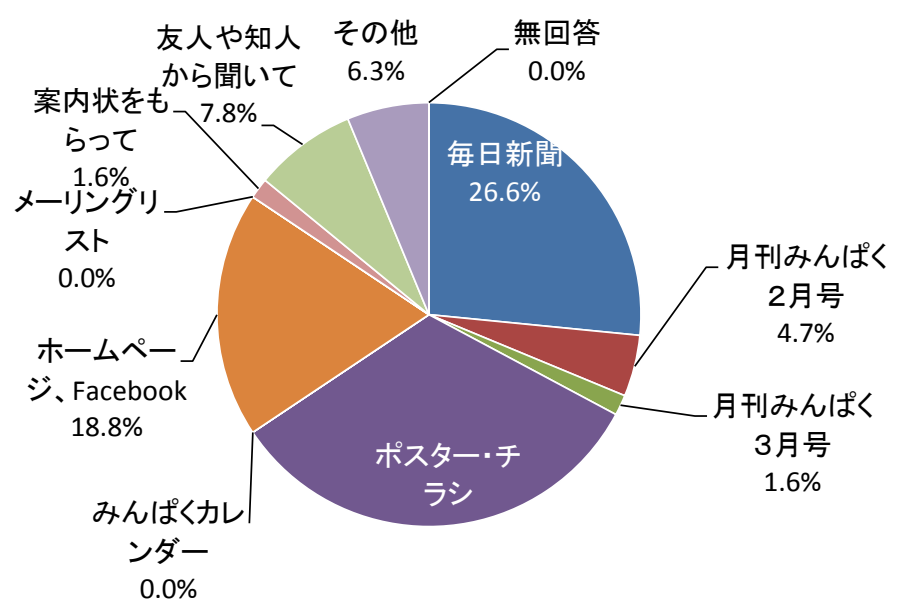
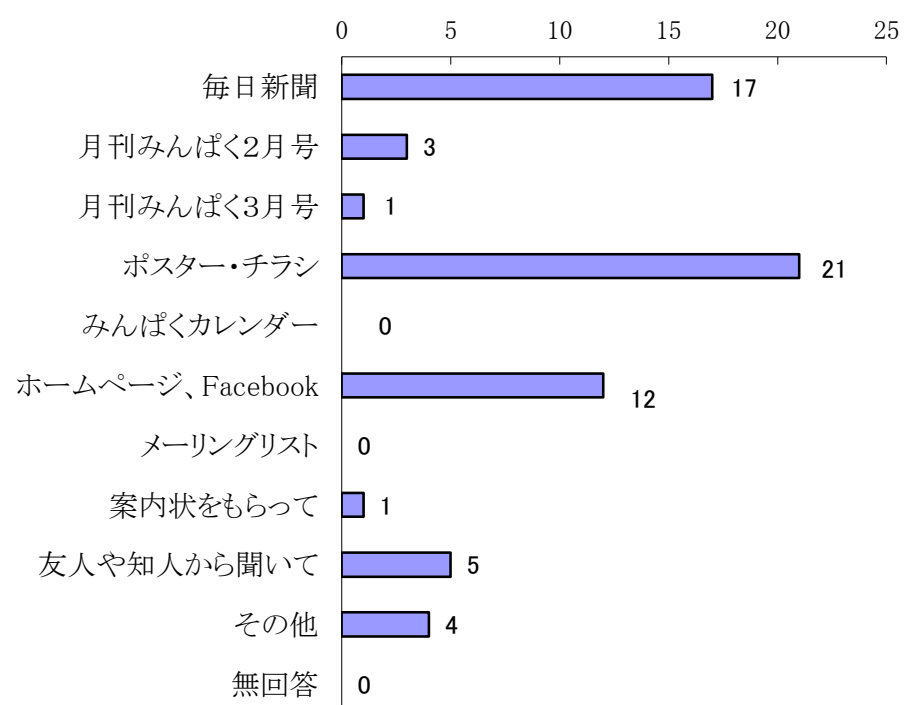


(小数点第二位以下四捨五入)

### 【参考】初参加者が講演会を何で知ったか(複数回答あり)

	(名)
毎日新聞	17
月刊みんぱく2月号	3
月刊みんぱく3月号	1
ポスター・チラシ	21
みんぱくカレンダー	0
ホームページ、Facebook	12
メールリスト	0
案内状をもらって	1
友人や知人から聞いて	5
その他	4
無回答	0
計	64

### 【参考】初参加者が講演会を何で知ったか

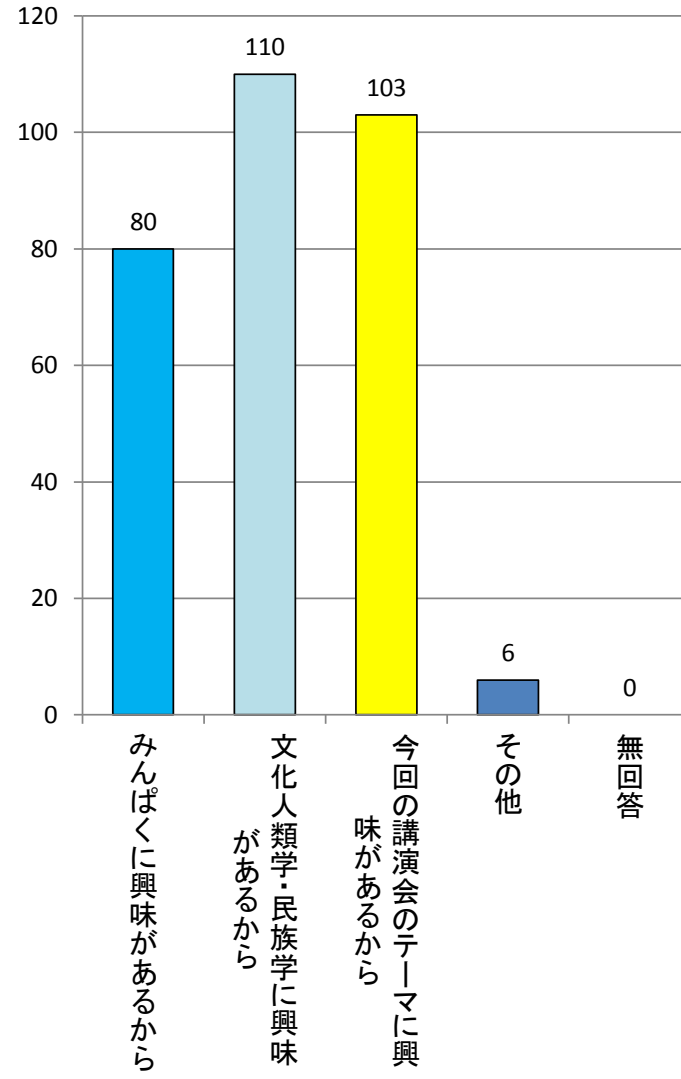


(小数点第二位以下四捨五入)

3. 今回参加された理由は(複数回答あり)

	(名)
みんなくに興味があるから	80
文化人類学・民族学に興味があるから	110
今回の講演会のテーマに興味があるから	103
その他	6
無回答	0
計	288

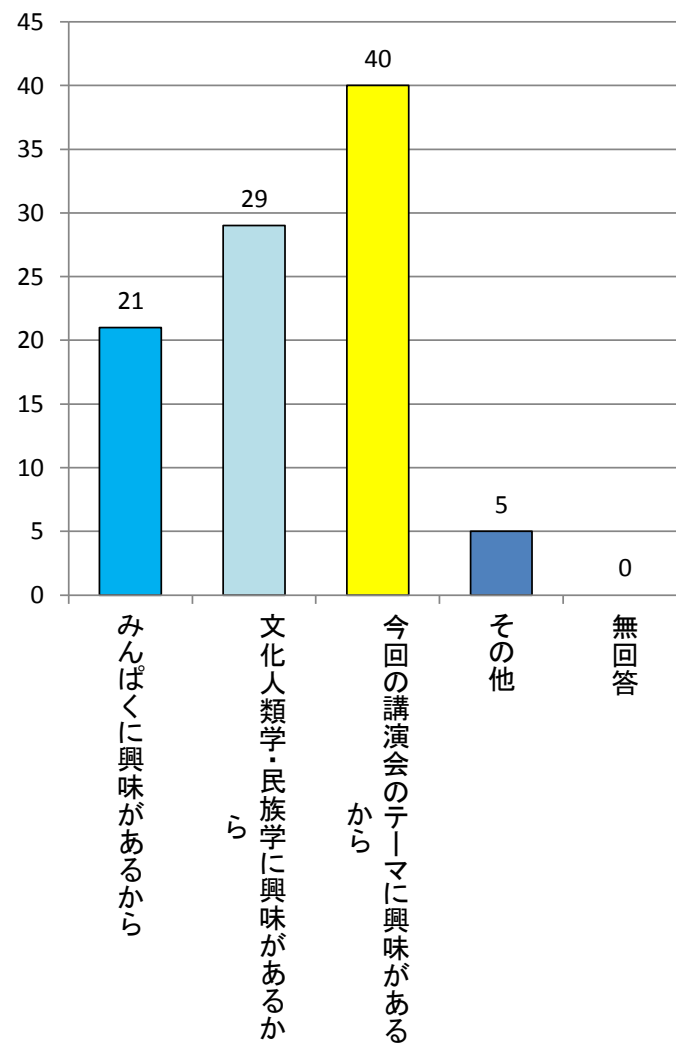
3. 参加理由



【参考】初参加者が参加した理由は(複数回答あり)

みんなくに興味があるから	21
文化人類学・民族学に興味があるから	29
今回の講演会のテーマに興味があるから	40
その他	5
無回答	0
計	95

【参考】初参加者の理由

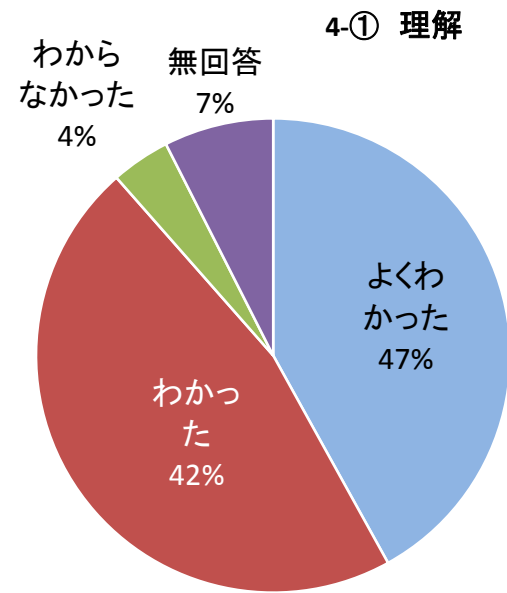


4. 今回の公開講演会の内容はどうでしたか。

(名)

①理解	よくわかった	73
	わかった	81
	わからなかった	7
	無回答	13
計		174

②興味	大変興味深かった	72
	興味深かった	86
	あまり興味をもてなかった	4
	無回答	12
計		174



(小数点第二位以下四捨五入)

①の理由(一部抜粋。重複意見は省略) ※感想のみの記載は質問9に移動

よくわかった、わかった理由

- ・地図で伝来の様子があった。
- ・ルウンベに高級な絹織物を使用したことがおもしろかった。
- ・昔の人、民族的なものが素晴らしいことを認識した。
- ・織物、糸などの素材と染文様などからその地域文化の発展度や他からの影響が読み取れる。
- ・実際の服の写真が大きくうつされよくわかった。
- ・画像と資料を見ながら話を聴くことができた。
- ・アイヌ文様の話を目的に来たので佐々木先生の話は楽しくきけた。
- ・すごく専門的な内容ではなかったので比較的分かりやすかった。
- ・講演時間が適当で知の量と集中力が無理のない分量だと思います。
- ・分かり易い言葉で丁寧に話された。
- ・写真や音楽等を入れてのお話で、よく分かった。
- ・レジュメをさっと読んだため内容がより分かりやすく頭に入った。レジュメも読みやすく先生のお話も分かりやすい。
- ・大変や分かりやすい内容で理解できた。
- ・画像を多く用いており分かりやすい。
- ・経験をふまえて説明してくださったので説得力があった。
- ・アイヌの文化への見方が広がりました。エチオピア音楽も初めて聞き面白かったです。
- ・エチオピアの音楽について知らなかったが関心を持てた。
- ・一方的な講演だけではなくコメントがあったことがよかった。

わからなかった理由

- ・音声聞き取りにくいところがあった。
- ・少し専門的な感じ。もっとレベルを下げてかみくだいてほしい。
- ・時間が短いので少し早口だった。
- ・もう少しゆっくり説明してほしい。
- ・アイヌの方はもう少し資料を多くほしかった。
- ・なんとなく分かったが、言葉が難しかった。

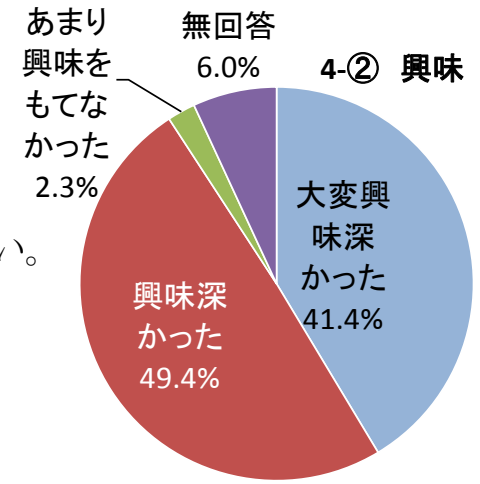
②の理由(一部抜粋。重複意見は省略) ※感想のみの記載は質問9に移動

大変興味深かった、興味深かった理由

- ・紹介もカットされ内容がしっかり聞けて充実していた。
- ・2時間以上ありパネルディスカッションもついていて満足できた。
- ・大阪駅に近く無料なので充実した週末だった。次回は若い世代を連れてきたい。
- ・今まで知ることでできない世界を聞かせていただきありがとうございました。
- ・興味ある内容でよかった。
- ・実際に体験した内容や経験が面白いと感じた。
- ・あまりなじみのないアズマリの音楽について知ることができた。
- ・アイヌの文化やアフリカ(エチオピア)の土俗的な音楽に興味があった。
- ・アズマリの動向は興味深かった。アズマリ音楽は初めて耳にした。先生の若い頃の写真はステキ!
- ・エチオピアの音楽が世界へ広がっていることが面白い。
- ・実際に音を聞いたのもイメージがわきやすかった。民族的な音楽のできる背景が興味深い。
- ・事前にみんなくHPで研究内容を拝見していたことが深まった。
- ・エチオピアという遠い国の出来事が少し分かった。
- ・書物やみんなくの展示だけでは得られない新しい知見を伝えてもらった。
- ・アズマリがアーティスト化した過程がよく分かった。
- ・ともかく面白かった。
- ・衣類や音楽を通じてそれぞれの民族に対する知識を深めたいという思いが増した。

あまり興味が持てなかった理由

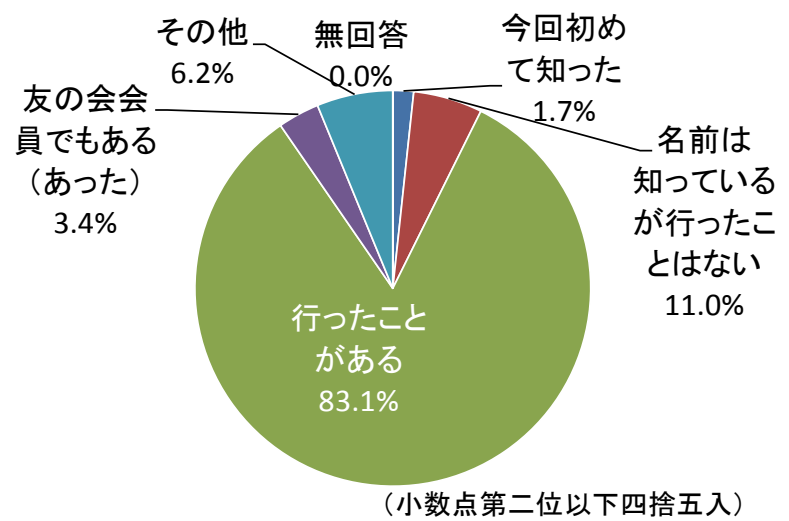
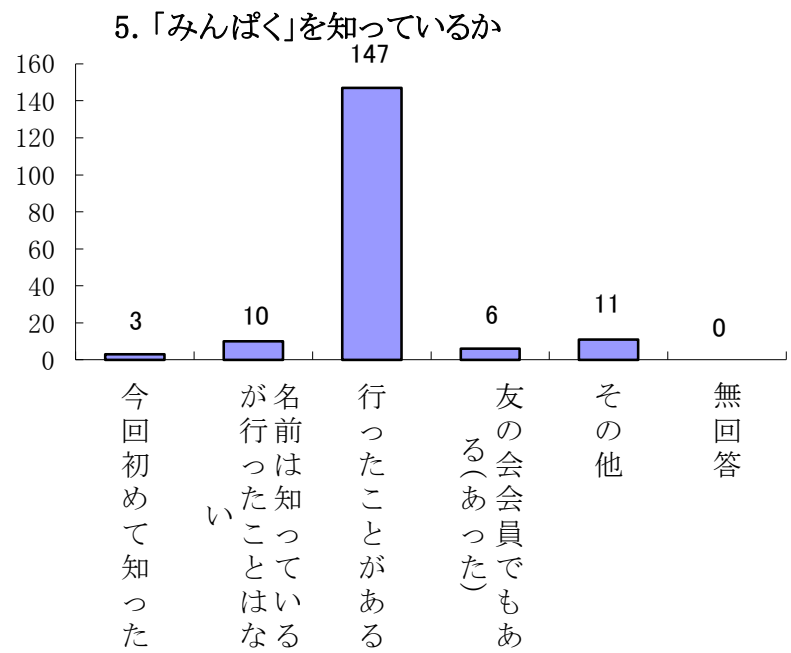
- ・映像をもう少し多くとりあげていただけたら理解しやすかった。
- ・音楽の演奏をもう少し聞きたかった。



(小数点第二位以下四捨五入)

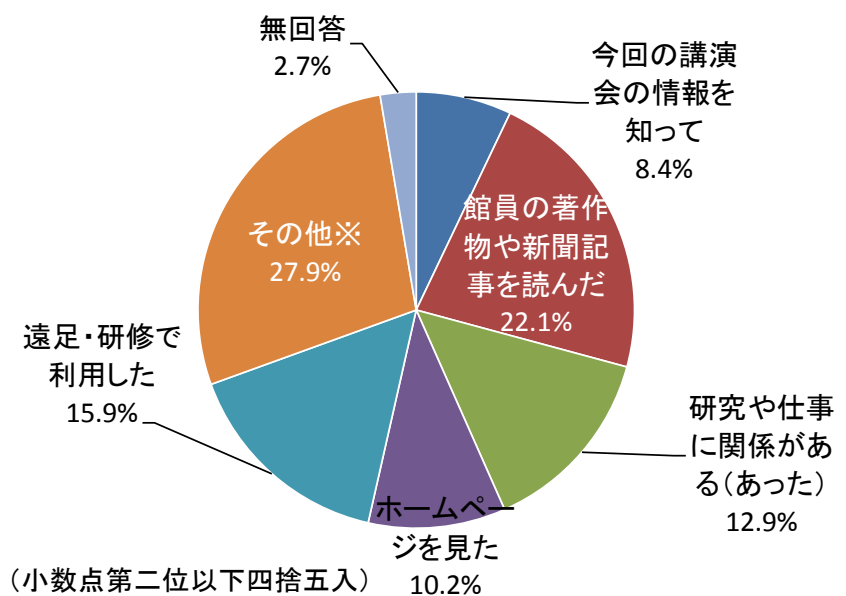
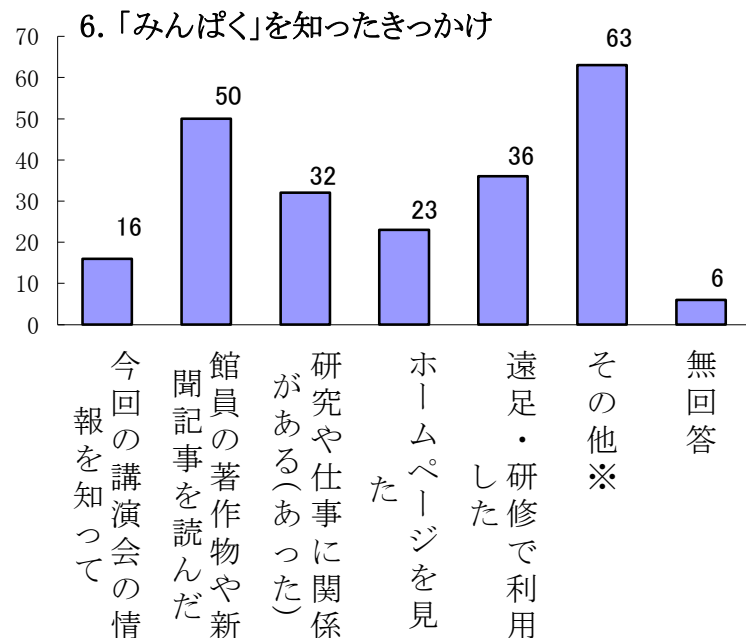
5. 国立民族学博物館(みんぱく)はご存知ですか(複数回答あり)。

	(名)
今回初めて知った	3
名前は知っているが行ったことはない	10
行ったことがある	147
友の会会員でもある(あった)	6
その他	11
無回答	0
計	177



6. みんぱくを知ったきっかけは何ですか。(複数回答あり)

	(名)
今回の講演会の情報を知って	16
館員の著作物や新聞記事を読んだ	50
研究や仕事に関係がある(あった)	32
ホームページを見た	23
遠足・研修で利用した	36
その他※	63
無回答	6
計	226



※ その他

以前の講演会・シンポジウム等に参加し	5
家族や知人からの紹介	7
訪問による	3
チラシ等	3
その他	31
無記入	19
計	63



## 7. 今後とりあげるテーマにご希望があればお聞かせ下さい。

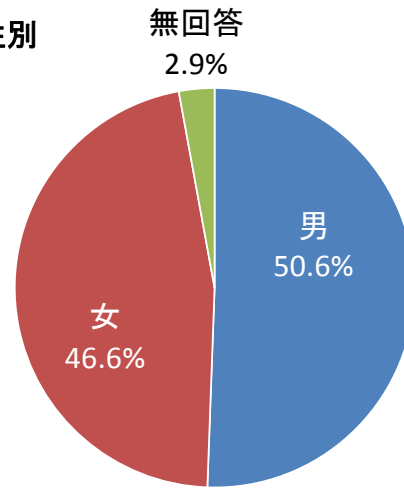
- ・子供でも興味をもてるものを
- ・食生活
- ・道具、暮らしにおける植物利用
- ・日本の祭、世界の音楽、踊り
- ・日本の民族芸能について
- ・日本と中国の関係について
- ・宗教・儀礼・風習と現代との関係
- ・ニュージーランドのマオリ族の歴史や現状、生活について知りたい。
- ・現代のポピュラーカルチャーとローカルのつながり、源流などを知れるような研究の発表があればうれしい。
- ・世界の文様(デザイン面)
- ・アラブの食生活、バルカン半島の音楽、ラオスの織物
- ・各国の少数民族の今昔
- ・民族と音楽
- ・アフリカのアニミズム
- ・テーマというよりドキュメンタリー映画の上映&トーク
- ・朝鮮半島の伝統文化
- ・インドネシアの音楽、衣服の歴史について
- ・色々な土地の話を聞きたい
- ・アフリカについて人類発祥の地という観点で歴史時代を読み解くような切り口でできないか。
- ・世界の食文化、スポーツ
- ・デザインについて
- ・民話、方言、織物
- ・インドネシアのガラムンやダンスについて、世界のマスク、能面などの研究をしている先生の話を知りたい。
- ・メキシコのアレブリアに興味があり、色々知りたい。イヌイットも気になる。
- ・アジアの中の日本の位地
- ・ワールドアートをさらに深めてほしい(器の文様、仮面、生活用具のデザイン性、呪術や祭の音楽)
- ・消費、手仕事、グローバル社会、産業、大量消費、地産知消
- ・文様や織について
- ・アンデス文明、インカ文明、照葉樹林文化
- ・宗教から芸能、シャマン、神秘主義
- ・織物と織木と色、新聞、航海術、お菓子、昆虫食
- ・言語学関係、アジア関連のテーマ
- ・アジアの食文化
- ・今まで通り、一般的に取り上げられていない地域の話が嬉しいです。
- ・IS、中近東の文化財の破壊
- ・Children and family of the world
- ・民族衣装について
- ・アイヌの世界観、古代の神の出現背景
- ・日本の縄文時代が広がって行った歴史を知りたい。
- ・薬草について
- ・プロパガンダ、アート
- ・民俗学と民族学
- ・文化の渡来と日本文化への影響
- ・山の民(日本の)
- ・各民族の言語と文化のつながり
- ・建築関連
- ・経済の世界
- ・世界の先住民の老人の生き方、考え方、認知症はあるのか、健康寿命は長い？

8. よろしければお答え願います。

8-1 性別 (名)

①性別	男	88
	女	81
	無回答	5
計		174

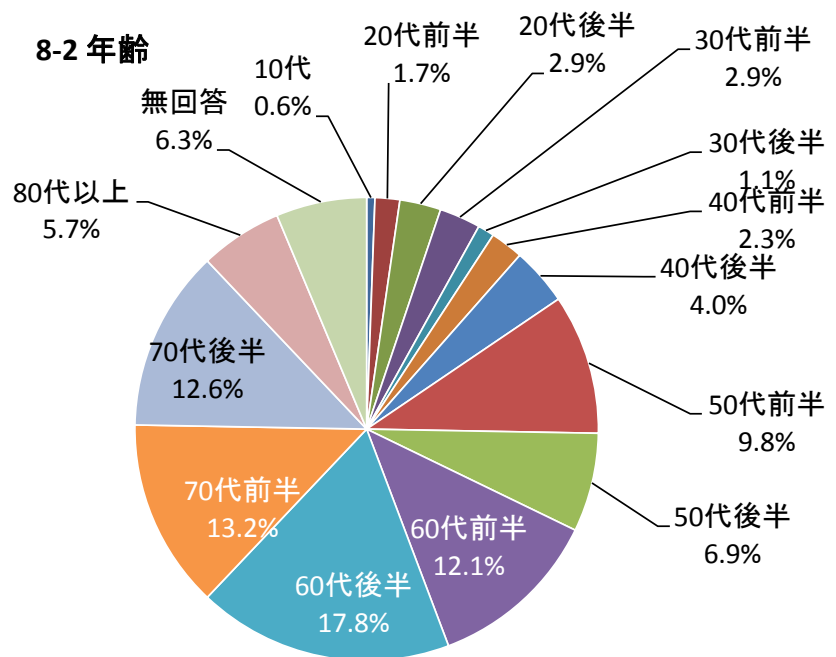
8-1 性別



(小数点第二位以下四捨五入)

8-2 年齢 (名)

②年齢	10代	1	9.2%
	20代前半	3	
	20代後半	5	
	30代前半	5	23.0%
	30代後半	2	
	40代前半	4	
	40代後半	7	61.5%
	50代前半	17	
	50代後半	12	
	60代前半	21	6.3%
	60代後半	31	
	70代前半	23	
	70代後半	22	11
	80代以上	10	
	無回答	11	6.3%
計		174	

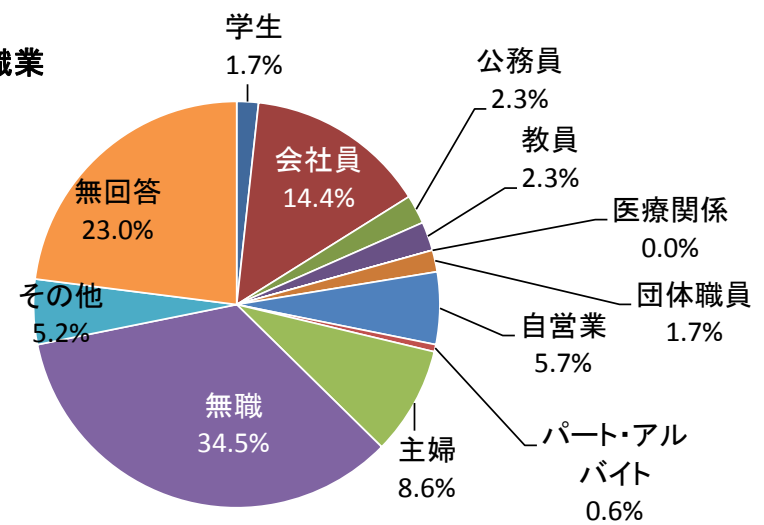


(小数点第二位以下四捨五入)

8-3 職業 (名)

③職業	学生	3	
	会社員	25	
	公務員	4	
	教員	4	
	医療関係	0	
	団体職員	3	
	自営業	10	
	パート・アルバイト	1	
	主婦	15	
	無職	60	
	その他	9	
	無回答	40	
	計		174

8-3 職業



(小数点第二位以下四捨五入)

## 9. その他ご感想、ご意見、ご希望をお書き願います。【一部抜粋】

### 【感想】

- ・紹介もカットされ内容がしっかり聞けて充実していた。2時間以上ありパネルディスカッションもついていて満足できた。
- ・大阪駅に近く無料なので充実した週末だった。次回は若い世代を連れてきたい。
- ・毎年楽しく有意義な講演で、参加して多くのことを学んでいる。
- ・ありがとうございました、次回も参加したいです。
- ・上羽さんのまとめが分かりやすく面白かった。
- ・アズマリがその社会状況において付与される意味を変容させていったのが一番興味深かった。
- ・グローバル化は経済ばかり注目されているが、文化現象もあてはまるのに感心した。ありがとうございました。
- ・久しぶりに博物館に行きたくなった。
- ・講演会の時間を早くしてほしい。
- ・上羽氏の説明が分かりやすかった。内容、かつ舌とも聞きやすい。
- ・民博にも5/10までに行きたい。ありがとうございました。
- ・ともかく面白かった。
- ・お二方の講演がいずれも力が入っていて良かったが、語り口が少し硬すぎる気がした。
- ・今回初めてでしたが、大変興味深かったです。次回も参加したいと思います。
- ・カラーのレジュメが用意されているのがありがたかった。
- ・これからもたくさんの国の文化等にふれる機会があればうれしい。アートも大好きなのでもっと知りたい。
- ・エチオピアのことももっと詳しい機会があればうれしい。
- ・手話を学んでいるので、通訳の方の手話が勉強になりました。
- ・このような企画があって感謝です。
- ・知的好奇心を刺激していただいてありがとう。近々民博に足を運びます。
- ・みんな大好きです。
- ・ありがとうございました、次回も参加したいです。

### 【その他要望】

- ・できればもっと早い時間をお願いできればと思います。
- ・もう1時間早くはじめてもらえないか。
- ・講演中の撮影は可能なのでしょうか。近くの席の方がタブレットで何度も撮影していました。もし不可であれば禁止事項の徹底(スタッフの方による見回り等)をよろしくお願い致します。
- ・発表が少し早口だったので休憩を少なくして発表をもう少し長くしてもらうとより理解が深まるように思う。
- ・土日にやってほしいです。
- ・もう少し早い時間帯希望。
- ・スクリーンの下の方が台とかぶって見えず残念。
- ・毎回のパネルディスカッションに消化不良を覚える。運営に工夫を！
- ・質問できなかったのが残念だった。

資料 12 学術情報リポジトリー

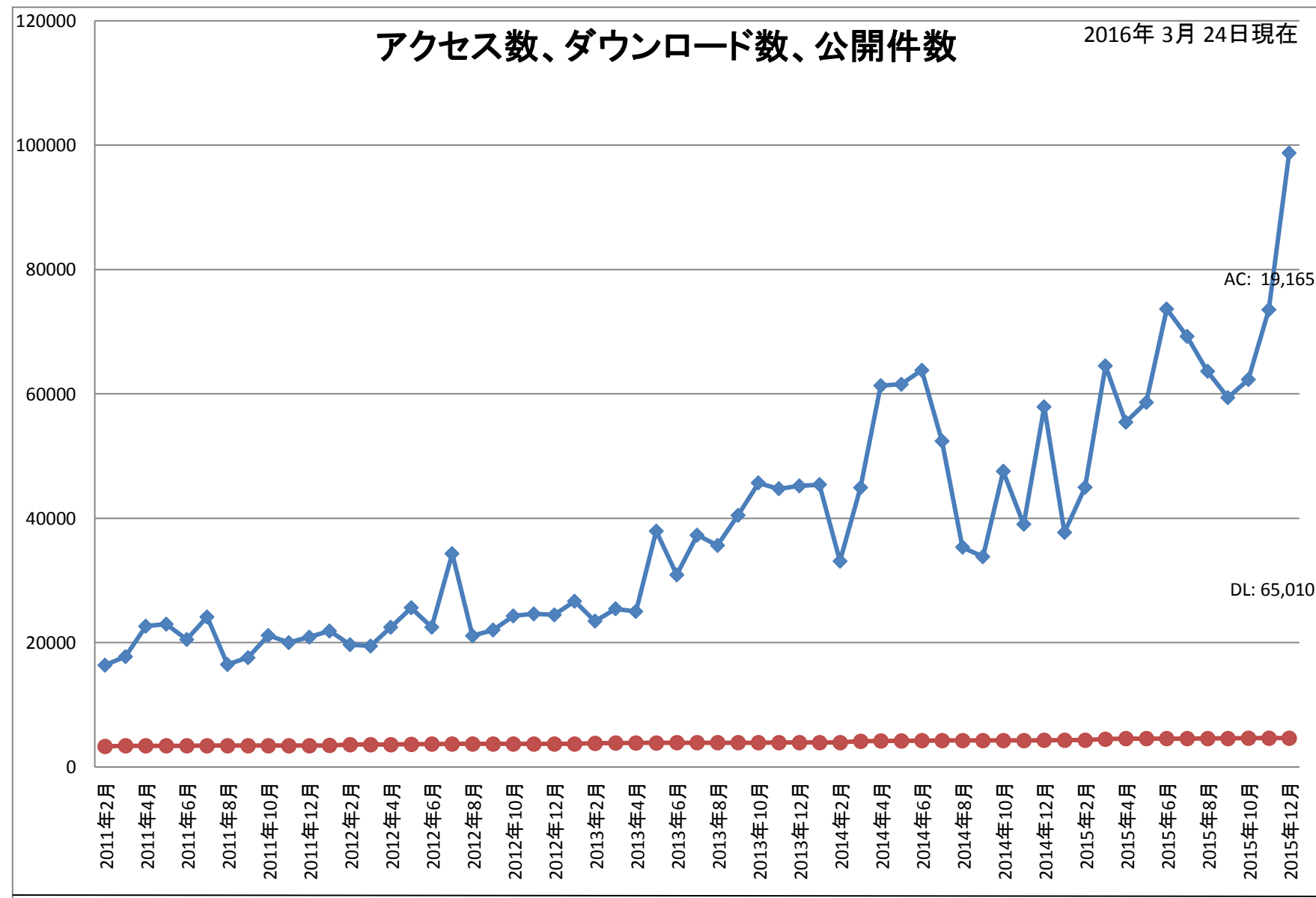
年月	AC	DL	OPEN
2016年2月	19165	65010	4655
2016年1月	16709	72568	4655
2015年12月	24151	98740	4655
2015年11月	20768	73523	4655
2015年10月	20509	62297	4655
2015年9月	18765	59400	4590
2015年8月	25099	63620	4590
2015年7月	26240	69235	4577
2015年6月	22744	73650	4568
2015年5月	20696	58623	4568
2015年4月	14955	55456	4568
2015年3月	17320	64499	4504
2015年2月	12839	44960	4318
2015年1月	13229	37730	4310
2014年12月	20353	57901	4305
2014年11月	15740	39015	4288
2014年10月	20170	47544	4287
2014年9月	14491	33829	4279
2014年8月	14901	35338	4270
2014年7月	23172	52403	4266
2014年6月	22487	63805	4251
2014年5月	15016	61546	4198
2014年4月	23120	61314	4182
2014年3月	18307	44923	4158
2014年2月	11464	33104	3940
2014年1月	14455	45402	3939
2013年12月	13726	45210	3938
2013年11月	14419	44746	3938
2013年10月	12162	45679	3918
2013年9月	11626	40499	3918
2013年8月	18983	35622	3918
2013年7月	16557	37279	3916
2013年6月	11580	30895	3915
2013年5月	16398	37966	3899
2013年4月	15888	25020	3870
2013年3月	14416	25430	3852
2013年2月	10787	23454	3851
2013年1月	14664	26668	3728
2012年12月	13965	24452	3728
2012年11月	18095	24631	3728
2012年10月	11820	24300	3724
2012年9月	10292	22012	3724
2012年8月	6085	21126	3712
2012年7月	10296	34330	3711
2012年6月	8993	22479	3697
2012年5月	9003	25598	3666
2012年4月	6397	22485	3605
2012年3月	4942	19472	3598
2012年2月	3573	19659	3592
2012年1月	4321	21889	3475
2011年12月	5750	20886	3460
2011年11月	5473	20024	3459
2011年10月	10455	21151	3459
2011年9月	8391	17598	3459
2011年8月	10339	16492	3459
2011年7月	11823	24127	3459
2011年6月	13472	20518	3420
2011年5月	16150	23001	3420
2011年4月	15152	22664	3420
2011年3月	12963	17770	3420
2011年2月	12968	16377	3330

年月	AC	DL	OPEN
2011年1月	16895	20728	3330
2010年12月	12168	18158	3270
2010年11月	13148	20784	3270
2010年10月	14444	19983	3270
2010年9月	14484	16766	3270
2010年8月	12554	15856	3270
2010年7月	10902	13084	3270
2010年6月	10471	15869	3270
2010年5月	12595	16854	3270
2010年4月	11009	14047	3270
2010年3月	11137	13646	3270
2010年2月	9416	9336	2920
2010年1月	12587	12623	1920
2009年12月	9533	7250	1650
2009年11月	9430	8039	1650
2009年10月	6380	7810	1650
2009年9月	4885	6535	1650
2009年8月	4356	5077	1650
2009年7月	4458	3628	1650
2009年6月	3267	2709	1650
2009年5月	2226	801	1650

4-12月→

2,015	193,927	614,544	4,655
2,014	212,838	599,884	4,504
2,013	175,565	466,345	4,158
2,012	134,813	296,965	3,852
2,011	109,841	247,481	3,598
2,010	154,601	206,276	3,420
2,009	77,675	77,454	3,270
年度	Access	Download	Open

1,059,260 #####



### III 平成 27 年度研究戦略センター・教員紹介

## ■平成 27 年度研究戦略センター・教員紹介

鈴木 七美 [すずき ななみ] センター長・教授

檜永 真佐夫 [かしなが まさお] 教授

岸上 伸啓 [きしがみ のぶひろ] 教授

塚田 誠之 [つかだ しげゆき] 教授

平井 京之介 [ひらい きょうのすけ] 教授

伊藤 敦規 [いとう あつのり] 准教授

丹羽 典生 [にわ のりお] 准教授

三尾 稔 [みお みのる] 准教授

南 真木人 [みなみ まきと] 准教授

河合 洋尚 [かわい ひろなお] 助教

菅瀬 晶子 [すがせ あきこ] 助教

八木 百合子 [やぎ ゆりこ] 機関研究員